

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第9巻第2号・昭和39年2月1日発行（毎月1回1日発行）

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第9巻第2号・昭和39年2月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓

裏窓

2月号

定価 250 円

IBM 1807

振替・東京10756番
(久保書店宛)

裏窓叢書 ご案内

第一集 狂異地獄肌

飯田豊吉著 中島喜美絵
400円 送料80円

第二集 黒蛇呪縛

黒木 忍著 山田彬弘絵
350円 送料80円

第三集 地底の牢獄

藤見 郁著 鬼頭 暁絵
400円 送料80円

第四集 残酷裸女絵巻

万里小路崑著 豊田みのる絵
400円 送料80円

第五集 責め肌忍法

万里小路崑著 古正英生絵
400円 送料80円

捕えられた美女群の危難につぐ危難！ 凄絶のクライマックスが連続する 息もつかせぬ迫力編！

お手頃な値段で たのしい読みものが
いっぱい！ あまとりあ社の特選出版物！

■東京都中野区松が丘2丁目21番
株式会社 あまとりあ社
振替・東京一〇七五六・久保書店宛

★耽美芸術写真・絵画・絵物語集★

目次の一部をご紹介しますと――
▼小日向一夢・島本春雄の時代戦国絵物語「戦国
餓狼記」▼落合竜二の画集「現代鳥獣戯画」▼江
淵晃夫「幸福なけものたち」▼山田彬弘「部屋を
まちがえた旅行者」▼中川彩子の「妖美術集」▼豊
田みのる・京剣児の時代絵物語「美女菊忍法」▼都
築峰子「きもの美五態」▼東桂史「女囚行列」
絵画集だけでも、この豪華執筆陣です。

書店で売り切れの場合は
直接当社へお申しこみ下さい

東京都中野区松が丘2の21
株式会社 あまとりあ社
振替・東京一〇七五六番
(久保書店宛)

かねて予告ちゅうの「増刊号」が
いよいよ発売になりました。
豪華絢爛、耽美派の粋をつくした
グラビア、オフセットページは、かな
らずご満足いただけると思います。

価 380円
送料18円

発売中！
裏窓・十二月臨時増刊号

★耽美芸術写真・絵画・絵物語集★

すでに発売いたしました六月臨時
増刊号は、書店売り切れ後も、お買
いもらしの読者から、本社にお申し
こみがつづき、在庫部数が日ごとに
すくなくなっております。
いちど売り切れになったら、もうお手に入れる
ことは非常にむずかしくなります。ますます、稀
少の価値が発揮されていくことでしょう。
いまこそ、コレクションの最後のチャンスだと思
います。
三百八十円に、送料十八円をそえて、いますぐ
当社編集部へお申しこみください。

書店で売り切れの場合は
直接当社へお申しこみ下さい

東京都中野区松が丘2の21
株式会社 あまとりあ社
振替・東京一〇七五六番
(久保書店宛)

価 380円
送料18円

売り切れ近し！
裏窓・六月臨時増刊号



裏窓・二月号・目次

表紙 モデル・柚木あぐり
カメラ・吉田 久
目次カット・中川彩子
とびらカット・落合竜二

ご隠居のたのしみ……八巻令

犬の樂園……下須畜男

瀬沼めぐみの受難……春川光彦

奢れる神への祈り・1

媚薬の夢魔……森本愛造

被縛美私見……内本達也

四作家競作同一題小説

花と悪銭

松山省一

風松英之介

井村 錠

京 剣児

私本・男色大鑑・2 恋と仇討と美名と……かびや・かずひこ

裏窓タウン

白い粉の秘密……佐藤達四郎

ああ、かぐわしいスカートのもよぎ

そのぬくみこそぼくのほうえつ……水尾究

体当たりM論・20

女忍おきやん・1 とんだ秘巻の巻……左次朗

アラビアの城・8 赤ん坊修業の弓子……北園透一朗

現代マゾヒスム文化時評②③……森下高茂

わが愛のうめきとさけび……新村満美子

(176) (196) (66) (90) (144) (166) (135) (94) (48) (40) (32) (24) (154) (158) (182) (56) (76)

●グラビア・オフセットページ●

五百羅漢…吉田久

(111)

きもの繚乱…編集部・編

(103)

戦慄のまなざし…フェニクス商会

(20)

脚立と貴婦人…北米・フェニクス

(15)

ふたりのお遊戯…西ドイツ・フェニクス

(127)

女の館…落合竜二

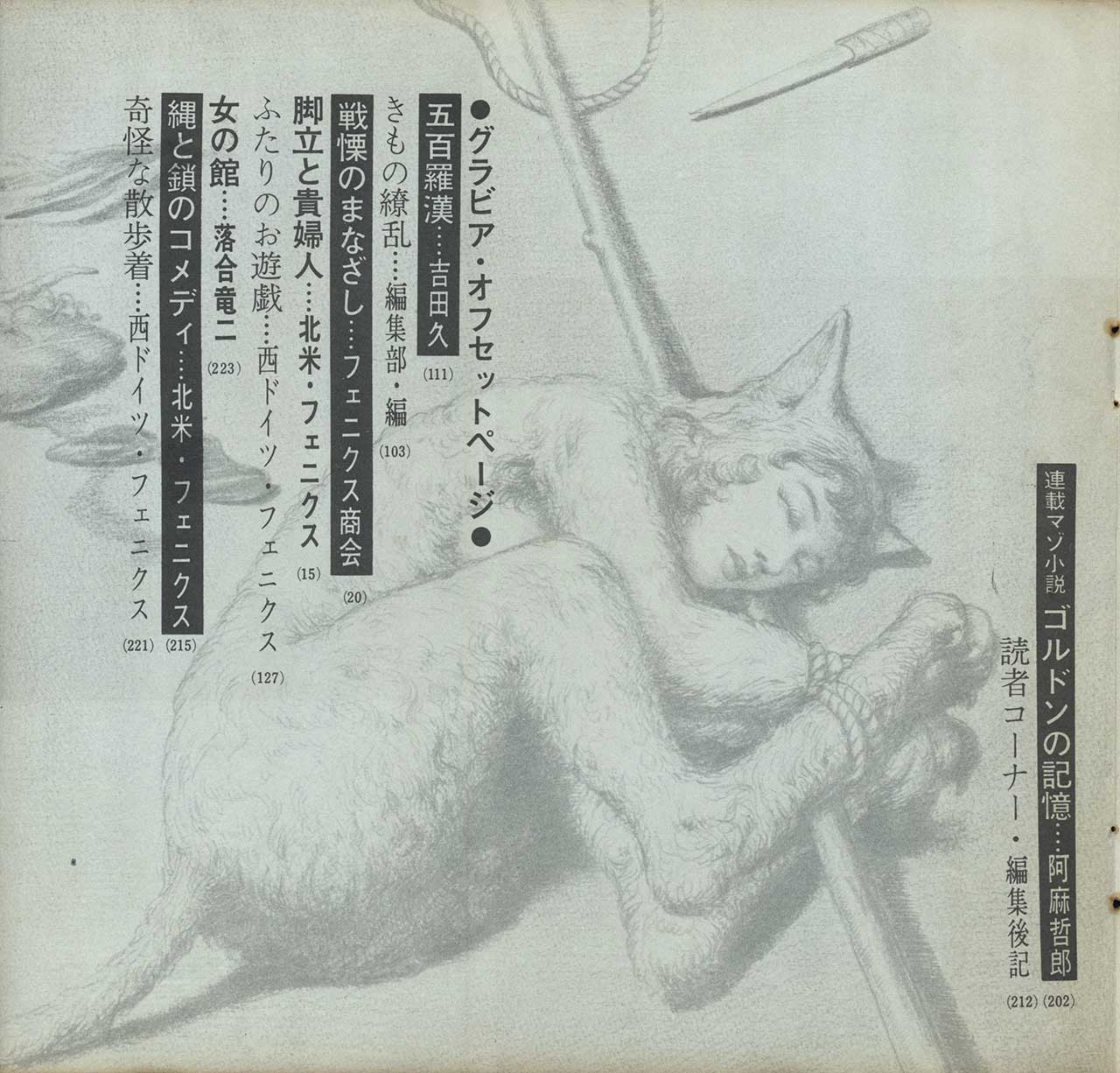
(223)

縄と鎖のコメディ…北米・フェニクス

(215)

奇怪な散歩着…西ドイツ・フェニクス

(221)



① 二人の主役

「裏窓・十二月臨時増刊号」に掲載したドイツのフィルム「地下室の声なき悲鳴」とその解説文は、意外に多くの読者の好評をいただいた。

あの十枚の写真には、回転しているフィルムの迫力ある動きが、かなりよくとらえられていて、それが読者諸氏の好反響を呼んだのであろう。

今回ご紹介の「竹の家」は、増刊号にのせたものよりも、動きの点では、迫力は落ちるようだが、独得のおもしろい雰囲気はある。

ふたりの登場人物は、やはり金髪と黒髪の若い女性で「地下室」とは逆に、黒髪のほうが、いじめられ役。

どちらも美人で、やせすぎたがまずまずのスタイル。



■あるドイツ・フィルムから

竹 の 家

西ドイツ・

フェニクス商会・特約

藤 見 郁・文



② よしず張り

舞台は、日本でいう「よしず張り」みたいなカーテンが立てかけである部屋。

察するところ、これはまったくの舞台的背景で、気分を変えるだけのもの。そして、いささか、お手軽な感じでもある。

黒髪のほうは、黒いタイツをはき、下着ふうのホルセットをつけ

ている。

ホルセットの上部から、ゆたかな胸のふくらみが、ゆさゆさと盛りあがっている。まず、S的魅力を感じさせる。

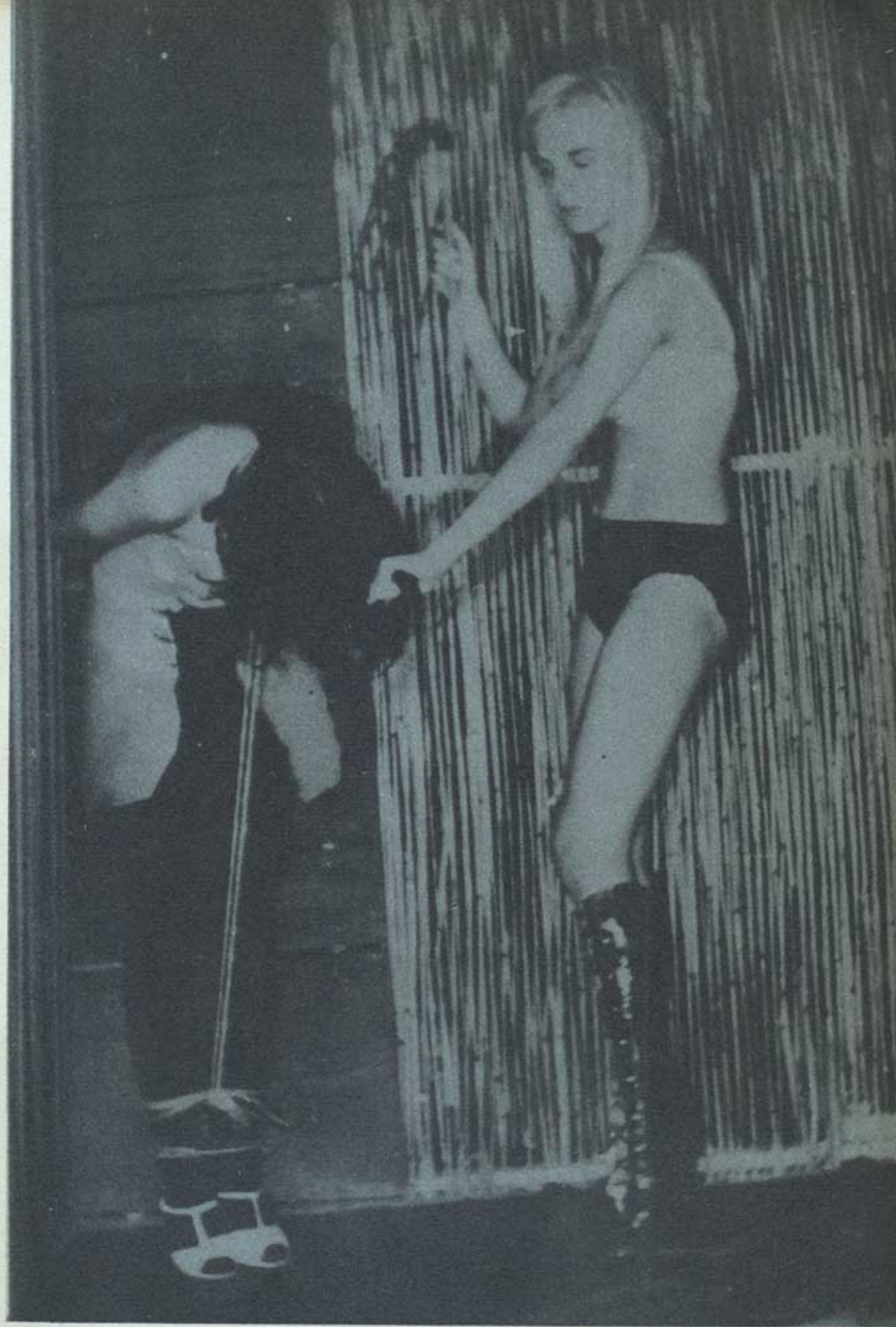
金髪娘が、いきなり手にした縄で、黒髪嬢の両手を縛りあげる。やや不器用な縛りかたではあるが、とにかく縛りあげる。黒髪嬢はあまり抵抗しないで、すなおに縛られている。



③ 簞口具

縄じりを多く余しておいて、両足も縛りつける。それから、金髪娘の攻撃が、きゆうに活発に、勇ましくなる。木筒みたいな簞口具を、どこからか取りだすと、黒髪嬢の歯と歯のあいだに、がっつきりと噛ませ、首のうしろでとめる。日本というサルグツワだろうがドイツ系のSものには、圧倒的にこの種の、ごつい簞口具を使用したものが多い。

実用面からいったら、合理的にはちがいないのだろうが、いささか味気ない感が、ないでもない。そのくせ、縄のかけ方は、アメリカよりも、よほど日本に近いのだが。



④ ムチ打ち

完全束縛がすむと、いよいよ、ごらんのような形のムチをにぎって、黒髪嬢のおしりや背中をたたきはじめ。

右手で縄じりをとり、左手でムチをふりあげて、ぴしぴし打つ。



肩をふるわせてそのムチから逃げる黒髪嬢。可憐である。

いくら逃げようとしても、両足が縛られているので、ついにくろんでしまう。この転倒は芝居ではなく、腰をひどく打って黒髪嬢は苦痛の表情をする。

金髪娘はその上から、のしかかるようにして片手で黒髪をつかみ黒タイツのおしりを、ぴしんぴしんとたたく。



⑤ 黒い皮靴

黒髪嬢は、ムチを避けてごろごろところげまわる。

金髪娘の皮靴が、黒タイツの胴をぎゅうツと踏まえ、また、つまさきで蹴とばしたりする。いじらしいほど、けんめいな演技。

長い皮靴が妖しく黒光りし、それをカメラがひんばんにクローズアップする。つまり、この八ミリ映画は、どうやら、男性M派をよろこばすほうに重点がおかれているようでもある。

黒い皮靴のかかどが、横になった黒髪嬢の頬の上にのり、それがぐりぐりうごく。

加虐者の歓喜と、被虐者の苦痛の表情。

⑥ 世界共通

わずか十三、四分で終了のフィルムである。あッというまに終わってしまう。

もちろん、セリフも音もない。お粗末といえば、お粗末にはちがいないが、無駄な描写がなく、肌にくいこむ縄のアップや、くねくねともだえる全身をていねいにカメラがとらえて、それなりの充

実感はある。

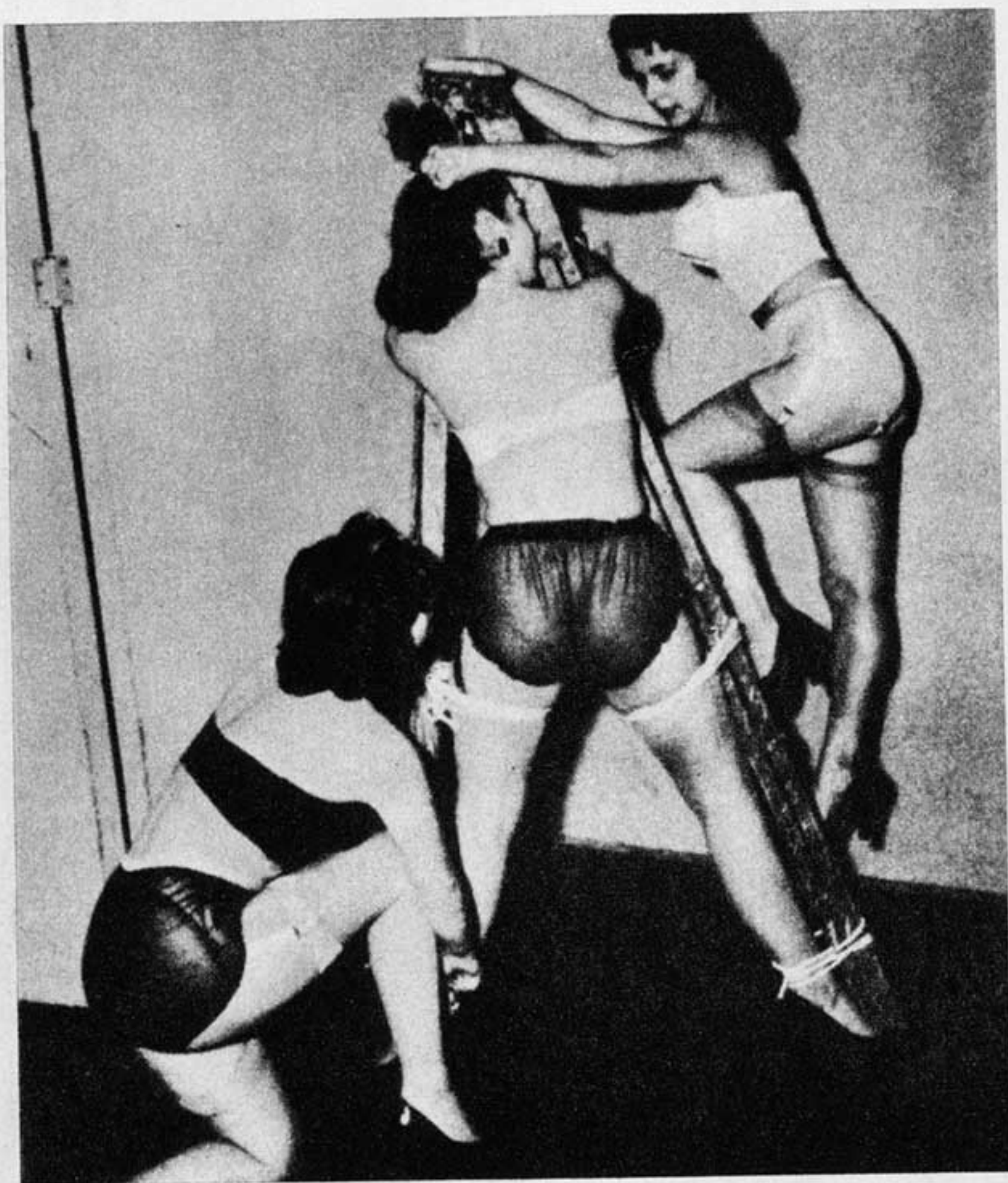
はるかなるヨーロッパの国の一隅で、全世界の人間にこんなにもよく理解できるドラマが撮影されそれが海をわたって日本にやってきて、われわれの目にふれるという事実は、考えてみると、なかなか興味ぶかい。

SM主義こそ、もっとも平和的にして全世界共通の人間的感觉のひとつではなからうか。



海外の公刊誌から

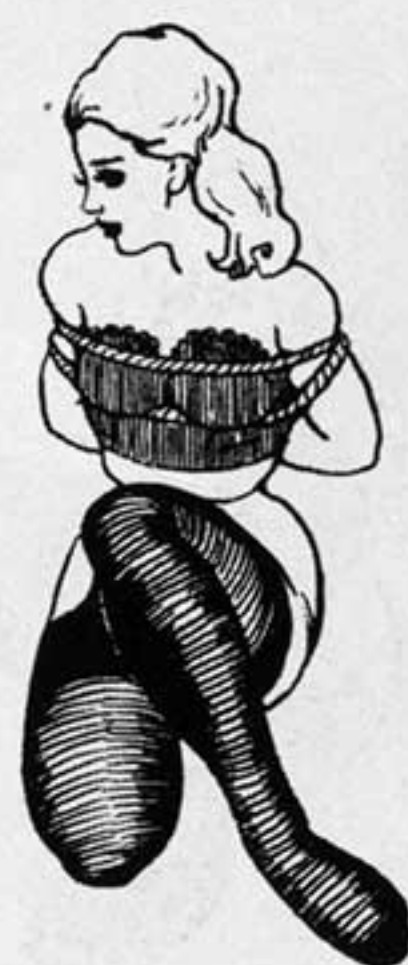
脚立と貴婦人



北米・フェニクス商会・特約





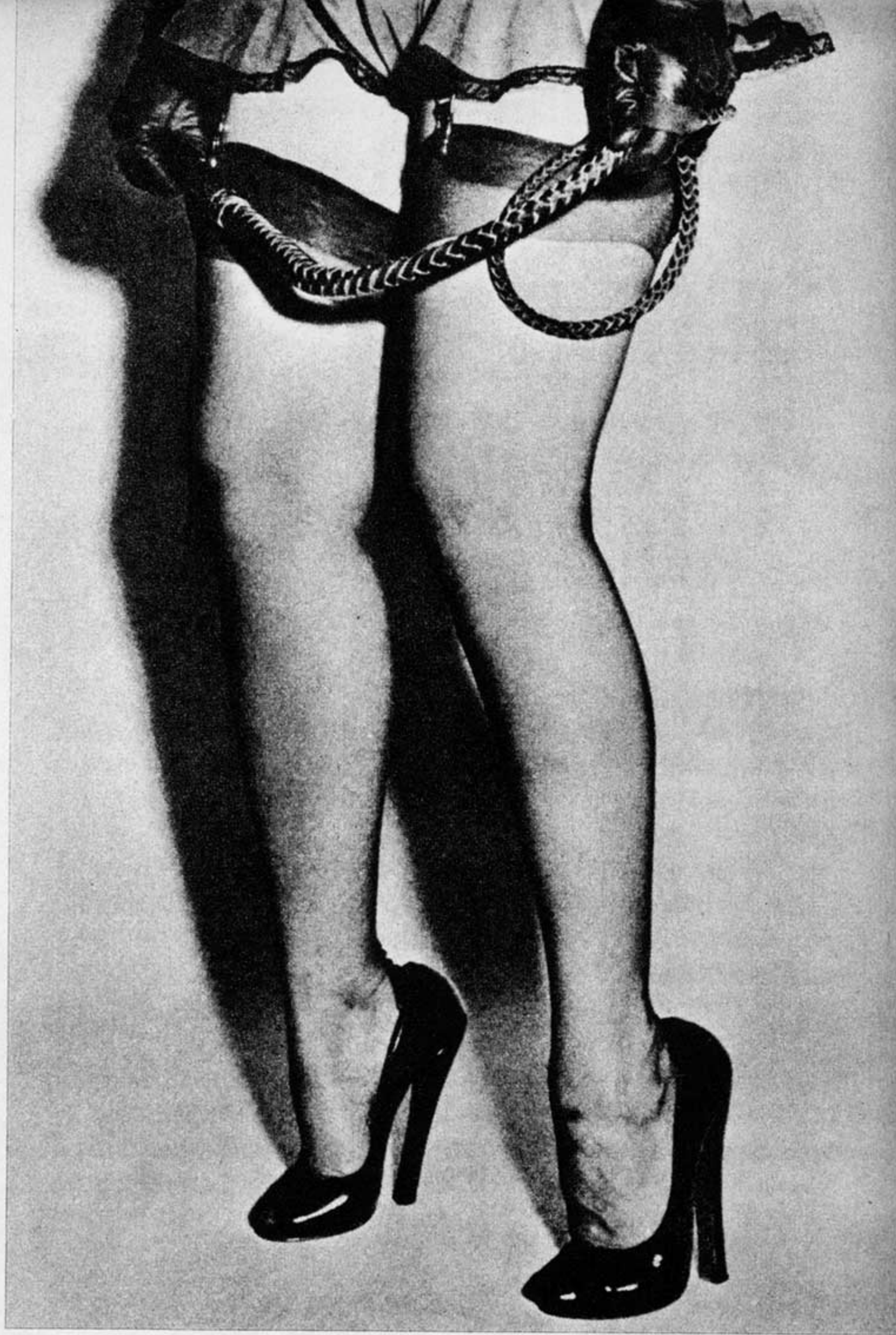




戦慄のまなざし









裏

窓

2 月 号

第9卷・第2号

花と悪心銭

松 山 省 一

1

おれは『市民の声』という大義名分をかかげた業界誌の記者である。

月に一、二度ペラの新聞を不定期に出している。表向きは一般市民の市政に対する意見や不満を取り上げて記事に書き上げることになっている。じっさい『市民の声』創刊当時は、そういう記事ものせていたのだ。

ところが、このごろでは市政の裏話を当て推量で書き上げ、カモをつかまえてはユスルというやり方である。また記事だけでなく、紙面の大半に広告をのせる。それも広告主の依頼や注文によるのではなく、無断で広告らしきものを印刷した後に料金をまき上げると

いうやり方だ。

もし広告料を出ししぶるような場合は、あることないことデッチ上げて、その店の悪口を記事にするから覚悟しろ、と脅迫する。こうすれば、たいてい何かしかの金を手に入れることができる。

言ってみれば活字を利用したユスリやタカリの新聞みたいなものである。もちろん、こういうあくどい商売ができるのは、おれの力だけではない。『市民の声』の社長である田刈大吉という選挙ゴロミみたいな男が、おれのうしろ立てになっているためである。

人口にして十万たらずのZ市^{ゼット}で、かれは裏街道の顔役の一人である。とは言っても大きな邸宅にふんぞり返っているわけではない。社員三人ばかりの小っぱけなバラック建てみ

たいな場末の社屋に、昼ごろ顔を出す。そして、いいカモはいないか、というより、この次ぎはだれにタカろうかと、おれに相談を持ちかける。

二年、三年と、こういうゴロツキ商売をやっていると、Z市くらいな市では、そうネタがころがっているわけではない。手をつけるべきところは、ほとんど手をつくしてしまつたというのが目下の状態である。

こうなると問題はカモを探しだすことと同じに、いかにうまくまき上げるかが、はるか大仕事となってくる。もはや、ささいなユスリでは勝負にならないし年も越せない。

「おい柚須利君、今夜いい話がある。仕事が終わったなら、例の場所へきたまえ」

と、田刈大吉が言ったのは、すでに十二月も間近になってからだ。

例の場所とは田刈が、しょっちゅう出入りしている三業地だ。そこに、表向きは料亭だが、じつさいは、あやしげな商売でひそかに客を呼んでいる『おつき』という店があるのだ。

おれもたびたび行ったことがある。

「じつはだな。例年のように正月が近づくといいネタをつかまなきゃならん。わざわざ君にきてもらったのはそのためだ。まあ飲みながら話すでしょう。ああ、おれたち二人でや

るから、座をはずしてくれ。その方が商談上いいのだ」と、女中をはらった。

見たところ安ものの連れ込み宿と同じ部屋である。いつもと同じことだ。

おれは田刈大吉と差し向かいで、ゆっくりとあぐらをかいた。彼は肥大した体軀の上に色が黒い。顔の型は逆三角形である。鼻の下にチョビヒゲをはやしている。

その上、太くて短い指に金の指輪を二つもはめている。とにかく品格などほど遠い男である。そんな男を前にしても、おれは少しもいやな感じを受けなくなっている。

それはおれの精神の腐敗した証拠でもあるのだが、今さら、まともなサラリーマンになろうなどは、ツメのアカほども考えてはいない。それには、それなりのおれにとって理由がある。大学では法律を学び、成績だって上の部で卒業しているだ。しかし、これはおれの勝手な言いぐさになろう。

「じつはだな。一つネタがあるんだ」

と田刈大吉はビールのアワをチョビヒゲの先につけて言った。この男は、話のはじめにかならず、じつはだな、と前置きをつける。

「なんです」

「金木福助という男、市会議員を知っているだろう」

「知っていますよ。議員の中では区画整理委員をやっています。若手だがなかなか腕が立つと聞いています」

「どうだろうな。彼は？」

と田刈大吉はおれにたずねた。

「どうだろうな——というのは、もちろん力モとしてである。」

「社長の方で心当たりありますか」

「うむ——」

田刈大吉は、いい話があると言っておれを呼びつける。いつもの場合も同じだ。ところが後で考えると、けっきょくおれに知恵を

この同一題の小説四編をお話みになって、どの作者の小説がいちばんおもしろかったか、よいと思ったかを、編集部までハガキでお知らせください。

▼ご応募くださいました全読者のかたに、折り返し『手札型S写真』を一枚、お送りいたします。

▼「花と悪銭」○○○○○（作者名）が、いちばんよかった——とお書きください。おもしろかった理由をお加えくださると、なお、幸甚です。

▼下に掲載のような写真をお送りします。



求めるだけのことだ。

現に金木福助の場合がそうだ。田刈大吉は何もネタを持っていない。だからおれにそれを求めているのだ。そうわかると少々バカバカしい気になる。

「金木は相当持っているということだな」

「持っているでしょう。でなければ三十代の若さで、議員の中であままではばをきかせることはできません。しかし……」

「なんだね？」

「金木福助に関しては、今までのようなやり方では錢にはなりませんよ。うっかりやると逆手を取られますから」

「あの男は、そんなに手ごわい相手かい？」

「社長はご存じないのですか？」

「うむ——そりゃあ……」

と田刈大吉はつまる。彼はこういう男である。何もわかつちやいないのだ。それでもって筋書きも演出も、すべておれにやらせ、しかも分けまえは十分ふところに入れようとすののだ。おれは田刈大吉の腹の底がわかるだけに、この辺で彼をいじめてやろうと考えた。そこでビールを差しながら、彼がおれの問いに答えるのを待つ。

田刈大吉が金木に目をつけたのは、何か理由があるにちがいない。たとえそれが彼自身

の思いつきでないとしても。もし、そうならそれもさぐりたい。そうおれは考え黙ってビールを飲んでいゐる。

じつのところ、金木福助なら相手にとって不足はない。彼はそれだけの人物と見える。

「金木は、たしか民生党で立った男だな」

「そうですよ」

と、おれは答える。しかし田刈大吉を前にし、おれはさらに突っ込んで自分の考えをまとめてみる。その間、目の前にいる無格好な男の存在など眼中になかった。

おれもこの辺で、この男との仕事から手を引いてもよいころだ。その前にぐっと一稼ぎやって見たい。そのためにも相手として金木議員なら申し分ない。彼ならやり方しだいでそれだけのものをまき上げることは可能である。

と内心おれは決心した。すると今、目の前にいる田刈大吉からネタを強いることなど無意味に思う。むしろこのさい田刈大吉を最大に利用してやるべきだと考える。

「金木のライバルはいないかな。たとえば市会の野党でもいい」

「市民党の中にですか？」

「そうだ。市民党に……」

「どういう意味です。それは？」

「うむ——」と田刈大吉は、つまる。

「社長、金木は民生党の若手で、ゆくゆくは国会議員にも出るような男です。もしライバルを探すとすれば、野党の市民党の議員全員が、ある意味ではライバルですよ。しかし、それじゃライバルの意味がない」

「なるほど」

「そこでライバルを探すなら、やはり同じ民生党の議員の中から探すべきでしょう」

「うむ——」

「そのライバルを見つけて、いったいどうすれば錢になるか——というのが社長の腹のようですね」

「うむ。そうだ」

「しかし……それはどうですかね」

「ほかに手があるか。え？」

「ないことはないでしょう。今すぐというわけにはまいりませんが……」

と、おれはにこした。

「柚須利君、ひとつやって見てくれ」

田刈大吉は、急に請願の色を見せる。

おれは、まず田刈大吉がなぜ金木市議に目をつけたのか、それが知りたかった。だから言ったのだ。

「ところで社長、あなたが金木福助に目をつけたのは、いったいなんですか？」

「うむ——それは……」

「おたがい、これから稼ごうという相手です。言ってください」

「要するに金だよ。金、金だよ。きみ……」

「どうしてそれが？」

「うむ——じつはだな……」

「社長、水くさいですよ。今さら……」

「じつはだな、柚須利君。その件については今は言えない。しかしいずれ話す。だから」

「わかりました。これ以上は聞きますまい。」

「ただし社長、この件に関しては分けまえは五分五分と行きましょう。いいですね」

「柚須利君、そりゃあ……」

「いえ、むりとは言いません。もしそれがだめなら、金木福助に関しては手を引きます」

「うむ——止むをえん。きみの言うとおりでゆこう」

「たしかですね。じゃ、さっそく明日から取りかかります。ようすをたしかめた上で、また相談しましょう」

「しっかりやってくれたまえ。じゃ商談はこれで打ち切ろう。ただし今の話は年内にだよ」

「柚須利君」

「わかっています」

「よし。ところで今夜は、ここに泊ってゆかい。泊るならあの方も前途を祝って飛びき

り上玉をサービスするんだが」

「けっこうです。今夜はとても。さっそくはじめますよ」

と、おれは田刈大吉をその場に置いて部屋を出た。

外に出ると、さすがに深々と夜の寒さが身にこたえる。独居暮らしのアパートに帰りながら、金木福助、あの貴公子然とした育ちのよさを身につけた風貌と、それに加え頭の切れる男の名を、なんともなんとも腹の底で噛みしめたのだ。

2

翌日から仕事にかかった。

まず資金を、取材費の名目で田刈大吉から今まで以上に請求した。それに対し、かつてのように彼は出しおししなかった。その上これは特別雑費だと余分につけ加えて出したほどだ。

それを見て、いかに田刈大吉が金木福助の件で稼ぎを計算に入れているかを、しかとつかみ、同時に最後はおれだけの仕事として、やりがいのあることも感知したのだ。

はじめに金木福助について入手可能な資料を調べ上げて見た。

もちろん一流の大学卒である。法科を出ているところを見ると、はじめから政界を目指していたのかもしれない。卒業後はこのZ市に帰郷して、彼の叔父が社長に納っている金木産業に勤めている。ちなみに上げると、金木産業は、Z市では超一流の生産会社で年間売上げ高は約四十億である。

市会議員の当選は二回目である。邸宅は山の手近代的な二階建てを持っている。市会に出ないときは、もちろん金木産業の重役として出社する。彼が、市議会で区画整理委員会の重要な主導権をにぎっているのは、あるいは、会社とのつながりがあるのかもしれない。現在、二人の女中と夫人と彼の四人が、いわば家族である。子どもはない。

以上から金木福助のアウトラインはのみこめた。これから押しはかっても彼個人の資産は相当額だと見当がつく。しかし一見、非の打ちどころがない。

ちっぽけなアカ新聞で、彼にユスリやタカリをいどんでも、とうていはいはじまらない。これが、三日ほどかかつて調べ上げた結果に対する卒直な感想だった。

しかもわずか一カ月たらずで、目的を果たそうとするのだから、これでは盲目ヘビに恐れず——のたぐいではないか、とさえ思えて

くる。

「そうおれは考えながらも、内心それとは逆に、くそ！ と闘志をもやせていた。ふしぎなくらいの闘志である。」

「社長、例の件で今夜……」

「そうか。何かつかめたか。よし」

「ということで、田刈大吉と『おつき』で落ち合った。もちろん手がかりは何もなかったのだ。むしろ田刈大吉に、あるところみをしたようと考えたのである。」

「まず金木福助についての報告をした後、」

「社長、卒直なところ齒が立ちそうにない人物ですよ」

「そうか。しかし……」

「もちろん投げだすつもりはない。ただ大物だということです。議員内でのライバルがあるとしても問題にはならんでしよう」

「問題にならない？ そんな……」

「社長には、そうは考えられないというんですか？」

「いや、そうは……」

「そこで、一つ、こちらから手がかりを作ること、それ以外にないです。つまり早く言えばユスリになるようなネタ、それをデッチ上げではなく、実際につくるのです」

「うむ——それで」

「言うまでもなく、金木市議のメンツにかかわることをつくる。これです」

「うむ。どういう手でだ」

「おれはすぐに言わなかった。」

「ゆつくりとたばこを吸いこみ、田刈大吉の動きを見ようとした。ここでもう一度たしかめておく必要がある。」

「ところで社長。あなたに声色、つまりモノマネのできる人間、たとえば特定のひととそっくり同じ声や話しぶりのできる人間、そういう知合いはありますか？」

「うむ——そんな者をどうするというのだ」

「わけは、今は言えません。どうです？」

「……」

「たとえば芸人くずれでもよい。ただし男ですよ。男の声を出せることが条件です」

「探して見よう。心当たりはある」

「そうですか。二、三日うちに頼みます」

「それで、今後どういう方法をとるのだ」

「その点についてですが。社長が特に知りつくしているような男で、もちろん腕がきく奴でなければならぬ。そういう男を一人探してほしいです」

「それは、かんたんだ。たばこ銭をやれば命がほしくないという奴もいるんだ」

「たばこ銭？ そんな」

「わかっている。死んでも口を割らない男ならよいだろ、袖須利君」

「そうですよ。ちんぴらではだめです」

「よし！」

「現在のところは以上の次第です」

と田刈大吉に言って立ち上がった。たまには上玉を抱いて行け、という彼を振り切っておれは帰った。じっさい田刈大吉のすすめにあずかりたいおれだが、しかし、そんな有余はない。

電話をかける前に、断わられるのを十分覚悟していたものの、金木福助市会議員はインタビューを承諾した。

彼にとっては『市民の声』など、おおよそのの相手ではないはずだと、おれは考えていたのだ。あえてアカ新聞の記者などに対して、それなりの心得があつてのことか。その上、幸いのこと、自宅の方へきてほしいとのことだ。これはうなずける。市会や会社などの重役室の応接間では、札つきのブン屋と話しができない。そういうことか。それは願ってもないチャンスだ。

準備をととのえ、おれは金木邸へ行った。高台にある屋敷は、港や市街の一部を遠く眼下に見える。そういう明るい金木邸の応接

間である。

「さっそくですが、年末をひかえわが社でも市民の声の特集版をと思ひましてね。先生に区画整理の現状なり来年度の抱負なりをお聞かせ願いたいのですが——」

と、卒直に問いかけた。

金木市議は、ゆったりとソファに身をよせていたが、答えるときは、むしろおれの方にうつむきかげんに体を起こした。

おれはメモをとりながら、いくつかの質問を発した。それらすべてに對する金木市議の回答は、一口に言つて立派だった。現実性をふまえたものだった。そして最後に、「ところで先生、先生のご趣味はどういう方面で——」

と問うた。

「ゴルフはつき合いていどです。酒、これもゴルフと同じですね。あとは……」

「たとえば映画などはいかがですか？」

「映画？」

と金木市議は、おれの顔を見た。

「いろいろ映画もあるでしょう」

「ありますよ。もし……」

「ああ、その節には——」

と金木福助市議は、おれに意味ありげな笑みを口もとに見せた。彼はどこまでもソツが

ない。これが大きな収獲の一つだった。

「柚須利君、この男だ」

と田刈大吉は、声色のできる男を例の『おつき』の一部屋で引き合せた。もちろん身元についても保証すると付加した。

おれは、さっそく有名な芸能人の名を上げその声色をテストした。まったく上出来だ。

内心おどろきをこらえ、その五十男をじっくりと見つめた。貧相な服装だが目の光りに芯の強いところ、根情のすわった男だと受けとれた。

「社長、ちょっと座をはずしていただきたいのです。いえ、いずれあとで話します。今この人と二人きりで相談すべきこと、テストすべきことがあるんです」

「よし。いいだろう。じゃ、頼んだぜ」

と田刈大吉が部屋を出て行つた後、おれは声色を使う男に、すばり言った。

「社長にいくらもらっている」

と。彼はこれだけだと手の指を見せる。

「よし、おれはその三倍出す。いいな」

と念を押した。彼はうなずいた。

「男と男の約束だ。このテーブルに納めた声をよく飲みこんでほしい。いいか、テーブルコーナーも用意してある。おれといっしょにつ

いてくるんだ。わかったな」

彼はうなずいた。そのとき、また彼の目の光りがおれに十分な自信をあたえた。

「もし成功したら、プレミアは契約金の十倍を払う。まずこれだけ受け取ってくれ」

3

おれの計算に狂いがなければ、すべてはバシライだと自信をつけた。その後、田刈大吉に頼んでおいた腕の立つ男にも、声色の男と同じ手で、十分手なずけたつもりである。

頬にキズのある、おれ自身そつと、初対面で感じたような男だ。

図体も大きい。やはり四十男だ。そこらのちんぴらとは、まったくちがう陰のある、ナイフを使う男だった。

「柚須利君。あと十日で今年も終りだ。例の件大丈夫だろうね」

という田刈大吉に向かって、おれは自信のある笑みを返した。

すでに対決の夜が、その日だったのだ。

金木福助市議は、おれの招待に快諾した。場所はZ市でも余り目だたないホテルをえらび、あとは金木市議のお出を待つのみであった。

「柚須利さん。じつは私がこういう所へ足を運ぶのはお忍びですからね。その点は後々も十分お願いしますよ」

ホテルの一室に入った金木市議はおれに言った。

「その点はお心配なく。ここには先生と私のみです。ご安心ください。ところで上映料つまり鑑賞料は十分いただきますよ。はっははは……」

と、おれも彼に安心させておいた。

これで難攻不落の金木城も壊滅か、そのよろこびが、まさに札束の山といっしょにおれの手に落ちこんでくるのだ。そう考えると、さすがに頬がほころびてきた。

「金木先生、これは白黒でもごく特殊なものですよ。撮影と同時に音もテープに納めていきますから。とにかく未封切です。いわば今夜が試写会というわけです」

「それはありがたいですな。お話だけでもなんだか胸が熱いくなってきました」

「じゃ、部屋のライトを消しますよ」

と、おれは言い、八ミリ映写機にスイッチを入れた。同時に用意しておいたテープレコーダーも回転させていく。

映写機からもれるライトで、画面に見いる金木福助市議の横顔を、じっと見つめる。こ

のときのおれの歓喜、それは何ものにも置きかえることはできなかった。

上映時間は十分たらずだ。しかしこのわずかな時間が、おれにとっては数千万円に変わり、前途有望な市議、金木福助にとっては生涯を左右する瀬戸際となる。

おれは冷酷に部屋のライトをつけた。

元どおり明るくなった部屋の中で金木福助は、しばらくは放心したように動かない。

「いかがです。ご感想は」

「……」

「あのミンクのコートを着て現われたご夫人は、まちがいなく先生の奥さんです。そしてホテルの一室に連れこまれ、和服をはぎとられる。下着だけの姿で、両手首をロープで吊り責めにあうのが、あれが奥さんですよ。そのときの奥さんの叫び。呻き、苦痛にあえぐ一声はテープでお聞きのとおりです——」

「きみ！ きみという人間は！」

いきなり金木福助市議は、おれにつかみかかるようにした。が、その手をおれは難なく押えることができる。

「むう！ ちくしょう！ きみは！」

「まあまあ、先生落ちついてくださいよ。話せばわかることです」

振り上げてふるえている金木の手を、おれ

はニンマリと押さえ、イスにすわらせた。

「どうです。テープだけでも、もういちど聴いてみては」

「……」

彼は再び放心したように黙っている。静かに目を閉じているのだ。そこでおれはテープレコーダーにスイッチを入れた。

「ああ！ やめて！ い！ ああ……ゆるして！ うっ！ うっ！ いっ……」

「ここは、ちょうど奥さんが後ろ手に両手をねじ上げられ、ロープをかけられているところでした。やくざ風な男というか、殺し屋みたいな男によってです」

「ギ、ギューギ、ギ、ギ……ああ——いっ！ やめて！ ビシ！ ビシ！ うっひひひ……」

「ここは、ほら滑車によって吊り上げられ、ムチ打たれているところ。どうです……」

ここで、おれはスイッチを切った。

「どうです。取引きしませんか。先生」

「……わかったよ。言うとおりにしよう」

「わかればいいです。損のない取引きですからね。これにはだいたい手間賃もかかっていますから、そうですね。二千万でどうです」

「二千万？」

「いやですか。もし先生が不服ならこれを乙市の議員さんたちにお見せする手もあります」

よ。それじゃ、金木先生の方が、ね？」

このとどめが彼の胸を刺し、取引きを決定せずにはおかなかった。そこで取引きは翌晩Z市から車で一時ほどのY市、その某ホテルを指定した。こうなれば、すべてはおれの筋書きどおりである。勝利を九分どおりつかみ、おれは田刈大吉の顔を思い浮べて、ニンマリひとり笑いをしたのだ。

「約束の二千万。柚須利さん。フィルムとテープをこちらにいただきましょう。さあ！」

約束どおり指定のホテルに現われた金木福助は、札束をカバンから取り出して並べた。

「これが、夕べのフィルムとテープです。ご不審でしたら、もういちど映写してもいいですよ」

「その必要はありますまい。ところで柚須利太郎君、きみも九分どおり成功したかに見える大博打だが、残念ながら的はずれだ！」

「なんだって！」

おれは思わず驚きの動作をしめた。

「おい！ 柚須利君、もうじたばたするのはやめたまえ」

入ってきたのは田刈大吉である。用心棒として男を従えている。

「社長！ あんたは金木と組んでいたんです

か。え？」と、抗議してみせる。

「今さら気づいてもおしまいよ。わしの口から言うのも先生の前では言いにくい、きみはまぬけだよ。じつはな、金木先生は、あれがご趣味なんだ。つまり奥さんが他人の手によっておしおきされるのをひそかにねがったのさ。わかるかい。え？」

「ちくしょう！」

「柚須利太郎君、きみには悪いが私のために消えてもらうよ。いいですか」

これは金木福助だった。つづけて、

「きみは私の思いどおりにやってくれた。感謝する。きみの狙いと私の狙いは全然つながりはないはずだったが、偶然というものは恐しいね……、しかも取引きは私の勝ちだ。ところで一つだけ聞こう。私の妻をどうして連れ出したか、それが知りたいよ！」

「はっはっははは」

おれは思いきり甲高く笑ってやった。

「お望みとあらば言いましょう。この部屋の窓の下は海への断崖だ。いずれおれは消される身だからな。いいですか金木先生。あんたとのインタビューのとき、ふところに入れていたテープレコーダーで先生の声をいただきました。それを元に声色のできる男にそっくり先生と同じ声を練習させた。彼を使って奥

さんと呼びだすには、電話だし、わけはありません」

「なるほど。その男はいまどこにいる？」

「ははは……教えましょう。私がこのホテルから抜けだせないときは、彼は本物のフィルムとテープを、しかるべき所へ売込みに行く手はずです。おわかりですか？」

「なに！」と、これは田刈大吉の怒声。

「じゃこれは！」と、金木市議の声。

「それはニセモノ、音も出なければ写真も映らないニセモノでさ。おわかりかね」

「ちくしょう！ きさまは！」

「おっと、乱暴はよしな。今さらおれ一人を消したところで始まらない。さあ、その頬にキズのあるお兄さん、あんたならこの場の勝負はわかるはずだ。さあ、物騒なナイフなんか始末しな。約束どおりの分け前はやろうじゃないか」

奴はニンマリとうなずき、札束をおれのカバンにつめこんだ。そこでカバンを受けると同時に、奴の脇腹へ、コルト・四五の銃口をすばやく当てた。

「動くな！ ヘッヘヘ……Z市での三年間二千万のボーナスもらったぜ……」と、ドアをしめるおれの首に、ナイフが飛んでくる。

引金を引いた。コルトは玩具だった。

花と悪心銭

風 松 英 之 介

「たいへんな寺だな」

腐りかけた堂縁の端へかけた片足に、用心ぶかく力をこめて、仙之助はいった。

草履の下縁がきしんで、朽ちた板は老猫の泣き声のような音をたてた。

「すまねえ、兄貴。雨あがりのぬかるみ道をずいぶん歩かしちまった」

鼻のあたまで大粒の汗を、汚ない手拭いでこすって、岩松がいった。

本所石原からこの金杉村まで、足のわるい仙之助には、たしかに、らくではない道のりだった。

「化け物でもでそうな寺だな」。

仙之助は、岩松をふりかえっていった。

「このとおりの荒れ寺だ。化け物どころか、むじな一匹いねえ。だからよ、娘どもを押し

込めておくには、もってこいの場所なんだ、兄貴」

そこから岩松は自分が先にたち、堂縁をぐりりとまわった北側から、のっそりと本堂に足を踏み入れた。

仙之助も、あとからついていく。

うす暗い本堂のなかには、三途の川の上を吹く風のような、湿っぽい、カビくさいにおいがわだかまっている。

色あせた金襴巻きの柱のかげから、枯れ木のようにやせて肩の上がった男が、うっそりと姿をみせた。ひとめで、浪人者とわかる。

「岩松か、おそかったな」

咳を耐える苦しい声で、その浪人者がいった。それにはこたえず、

「お蝶は、お蝶はどこへ行った？」

岩松は、きろきろと本堂のあちこちをみまわす。

「ふん」と、浪人者のうすい唇がわらった。

「よっぽど惚れてやがる。安心しろ。お蝶はどこへも行きゃしねえ。須弥壇裏の穴部屋で、ふたりの娘をじわじわ責めつけている」

ひどく下品な口をきく二本差しだった。

「兄貴、こちらのご浪人は、上尾甚九郎さんとおっしゃってね、つまり、こんどの一件じや、おれたちの仲間だ」

岩松が、ようやく仙之助と甚九郎をひき合わせた。

「疾風の仙之助というのは、おまえか。たのむぞ。岩松からきいただろうが、うまくいったら、礼は千両箱ひとつだ」

甚九郎は、山犬のような暗い目つきで仙之

助をにらみ、ふいに背中をまるめると、はげしく咳こんだ。

疲咳だな、と仙之助は直感した。いやな音色の咳だ。しかし仙之助は小腰をかがめ、愛想よくいった。

「三年前までは疾風かもしれねえが、いまはびつこの仙之助でさあ。そのびつこをしおに悪事からすっぱり足を洗い、いまは堅気の紙屑ひろい——という次第で、あまりアコギなお手伝いなら、いまからでも、ごめんをこうむらせて頂きたいもので……」

「おっと、兄貴。ここまできて、いまさらそ

んな冗談は、言いつこなしにしようぜ」

岩松が、大きなてのひらを仙之助の顔の前で左右にふり、あわてていった。

「わかってるよ、岩松。それじゃ、その、ひつさらってきた、鼠小僧の娘ってえのは、どこにいるんだ」

仙之助は、とにかく自分にあたえられた役割りを、早く片づけたい気持ちだ。

おそらく、あと味のわるい、いつまでも、いやな思い出になることだろう。それを知っているながら、つい、ひき受けてしまった仙之助だった。

首尾よくいったら、千両箱ひとつを兄貴に——という岩松の口に、貧に痛めつけられた心が、ついつい、うごいた。

四百四病の苦しみよりも、貧の病いがなおつらい——。おれもつまりは、我慢のねえ、いくじのねえ男だったのだ……。

見かけ以上の、たいへんな寺だった。

本堂のまっ正面からみたら、なんの変哲もない、埃と蜘蛛の巣だらけの須弥壇だが、一歩そのうしろへまわると、裏ッ側はぼっかりあいて、手ごろな穴部屋となっていた。

これなら博奕も打てようし、娘ッ子の五人や六人、雑作もなく押し込むこともできる。

「む、この娘かい」

仙之助は思わず声にだし、その声をのむ。穴部屋のなかには、ふたりの娘が、荒縄でうしろ手に縛りあげられ、埃だらけの床板の上にころがされているのだ。

須弥壇裏の穴部屋は、本堂よりもいっそう暗い。その暗い底に、ふたりの娘は、ぼっかりと浮きあがるような美しさでうごめいている。

さすがの仙之助も、息をのんだまま、しばらくは声がでなかった。

——だが、きれいだななんて感心しちゃア、

この同一題の小説四編をお読みになって、どの作者の小説が

いちばんおもしろかったか、よいと思っただかを、編集部まで

ハガキでお知らせください。

▼ご応募くださいました全読者のかたに、折り返し『手札型S写真』を一枚、お送りいたします。

▼「花と悪銭」○○○○○（作者名）が、いちばんよかった——とお書きください。おもしろかった理由をお加えくださると、なお、幸甚です。

▼下に掲載のS写真をお送りします。



いられねえ。きれいにはちげえねえが、ひでえ眺めだ。なんとも、むごい眺めじゃアねえか。

仙之助の目は、針で突かれたように痛み、そのくせ、娘たちから、視線をそらすことはできなかった。

ふたりの娘の口は、それぞれ手拭いのさるぐつわでおおわれている。しろうゆで煮しめたような汚ない手拭いは、びっしりと娘の頬の肉にくいこみ、首のうしろで固く結ばれていた。鼻までふさがれて、息をするのが苦しいのだろう、白いのどが、蛙の腹のようにあえいでいる。

この暗さに、仙之助の目が、ようやく馴れてきた。娘を縛った縄のあらさがしだが、よけいに痛ましく、仙之助の目にうつる。

左右の腕が、むりやりねじまげられたような乱暴な角度で背中へまわり、組み合わされた細い手首には、荒縄がぎりぎり噛みこんでいる。

馬鹿力の岩松が、こんな無茶な縛りかたをしやがったにちげえねえ。

仙之助は無性に腹が立ち、舌うちした。

「おや、疾風のにいさん、しばらく」

この秘密の穴部屋の、いちばん暗い片隅から声があがった。なまめかしく、馴れ馴れし

い声音だ。

お蝶だな、と仙之助は思った。声だけでわかる。緋牡丹お蝶だ。

「しばらくだな、姐御」

仙之助は、ことばをかえした。

「いやですよ、姐御だなんて、水くさい」

小袖の結城縞に、黒七子の通し絆天を羽織っている。肌の白い、いろっぽい女だ。

「たいへんな仕事に手をだしたな、お蝶。おめえもすっかり、いい悪党になったよ」

「ひさしぶりで会えたと思ったら、すぐにまた皮肉？」

小さく、きりりとひきしまっている唇が、うすい笑いでくずれる。

ふん、と仙之助の唇も苦笑した。こっちの皮肉が、すぐ皮肉と通ずる。相変わらず、小利巧な女だ。

山犬浪人の甚九郎が、背後から、仙之助の左肩に顔を寄せた。

「さっそくだが、よく見てくれ、仙之助。このふたりのうち、どっちかが鼠小僧の娘であることに、まちがいはない。名は、ふたりともお千代。こっちの、色の浅黒いほうが、両国の『喜の字屋』という水茶屋の娘だ。そっちの色白のほうが、深川万年橋の仁泉寺という寺の前の花屋の娘……」

「へえ」

仙之助はうなずき、視線をお蝶から、縛られたふたりのお千代にもどした。

「水茶屋の娘のお千代は、いまから十三年前に、店さきへまぎれこんできて泣いている迷い子の小娘を、子どものないおかみが哀れに思い、そのままひき取って育てたといういきさつだ」

「なるほど」

「花屋のお千代は、仁泉寺の墓地にすてられていた捨て子を、寺の前の花屋の親爺がひろって育てたという……」

甚九郎の話は、要領がいい。からだは弱そうだが、頭の切れそうな浪人だ。

「ふたりとも、五歳のときに、それぞれ茶屋と花屋にひろわれた。五歳になっているから親のつけた名前を自分でももうおぼえている。お千代という名は、だから、育ての親がつけた名ではない」

「ということは、つまり、実の親である鼠小僧がつけた名前さ、ねえ」

お蝶が、横合いから口をはさむ。

「五歳まで江戸で育ったお千代という名の孤児は、いかに広い江戸といえども、そんなにはいない。結局、おれたちの目星は、このふたりだけにしぼられた。ふたりとも本年十九

歳、卯年生まれだ」

ここまで一気にしゃべると、甚九郎ははげしく咳こんだ。

仙之助の左の耳もとから頬に、黄色い臭い唾がはねかかった。仙之助は首をすくめる。

「たのむよ、兄貴。この娘ら、どう責めても吐きやがらねえ。ここまできたら、兄貴だけが頼りなんだ」

岩松が、切実な顔色になっていった。

「よし、まず、さるぐつわをはずしてくれ。顔をよく見なくちゃ、話にならねえ」

「はいきた」

打てばひびく、という調子で、お蝶がすばやくふたりの背後にまわり、娘たちの顔半分をおおった手拭いを解いた。

「あ、あ、ああ……」

息が自由になったふたりの娘は、同じような声をあげ、肩と胸とをあえがせた。同じように痛々しく、美しく、可憐だった。

胸を波のようにあえがせて、いままで苦しかった呼吸をとりもどそうとするのだが、その胸にも肩にも、荒縄がぎりぎりくいこんでいる。息は、やっぱり縄でふさがれているのだった。無慈悲な縄に締めつけられ、風にそよぐこともできない、二輪の花だった。

「暗いな。あかりをくれ」

仙之助の注文に、お蝶がまたすばやく器用な手つきで、百刃ろうそくに火をつける。

お蝶もまた、けんめいなのだ。鼠小僧が隠した、千両箱十個のゆくえを求めて、牝狼のような目つきになっているのだ。

鼠小僧が御用弁になり、江戸市中引き回しの上、品川で獄門になったのは、十四年前の天保三年八月十九日のことである。

鼠小僧次郎吉、ときに三十七歳。

係りの北町奉行、榊原主殿頭の判決文によると、次郎吉の仕事ぶりは、こんな程度である。

すなわち、武家屋敷に忍び入ること九十九カ所、度数は百二十二度。盗んだ金は、しめて三千八十六両一分。

ところが、本当の稼ぎは、そんなものではなかった。次郎吉が大名屋敷ばかり狙ったのは、外見の嚴重さにひきかえ、いざ、奥向き長局まで忍びこめば、備えというものがほとんどなく、つまりは仕事やりやすかったためである。

次郎吉が忍びこんだ大名屋敷の数と、稼ぎためた金は、奉行調べよりも、ざっと十倍はあったといわれる。表沙汰にすると恥になるのはわかりきっているから、公儀へ届け出た

被害大名の数は、実際の数の十分の一だったというわけである。

鼠小僧という盗ッ人は、ケチで嫉妬ぶかく猜疑心がつよかったから、仲間というものをもたなかった。

お信という女房がわりの女が一人いたが、その女は次郎吉の子どもを生むと、すぐに死んだ。その子どもがお千代である。

次郎吉は、お千代だけはかわいがった。

仙之助が次郎吉と知り合ったのは、お千代が赤坂桐畑できちがい犬に足を噛みつかれ、すんでのところまで大事に至るとき、偶然その場を通り合わせた仙之助が、犬を蹴殺して助けてやったのが、縁だった。

いつのまにか、おたがいと同じ日かげの道を歩く渡世人だと知ると、次郎吉は仙之助のことを「兄哥」とよんだ。

次郎吉が夜働きに出るとき、仙之助が自分の家へお千代をあずかり、同じ布団に寝かしつけたのも、二度や三度ではなかった。

鼠小僧がつかまったのは、天保三年五月八日、浜町の松平宮内少輔の屋敷へ忍びこんだ夜だったが、その三日ほど前に、仙之助は次郎吉から、こんな秘密をうち明けられた。

「兄哥、おめえだけに言っておきてえことがあるんだ。……おれはな、じつはお千代のた

めに、千両箱を十ばかり、ある場所に埋めておいた。鼠小僧と人によばれ、こんなに世間で騒がれるようになったちゃ、おれの悪運も、もう長くはねえ。そこでだ、おれにもしものことがあったら、兄哥にお千代を頼みてえ。その千両箱を埋めた場所は、お千代が大きくなったときに、しぜんにわかるようにしておいた。たのんだぜ、疾風の兄哥……」

次郎吉の予感に適中して、それから三日後に御用弁。三月のちには獄門。

ところが、お千代の面倒をみるはずの仙之助も、その御用風のあおりをくらって江戸から上方へずらかった。

自分の首があぶなくなると、悪党同志の義理も仁義もなく、仙之助は次郎吉との約束を破り、お千代をほうりだした形になった。

それから十四年――。

十九だというふたりのお千代を前に、どっちが次郎吉の娘のお千代か、それをこの男女三人の悪党に教えて、鼠小僧が埋めた金を掘りだすことに成功すれば、仙之助の手にも、千両箱をひとつ、渡すという……。

千両あれば、びつこの足をひきずりながらこがらしの町を屑ひろいに歩かなくてもよいのだ。

ひとの稼いだ悪銭で、死ぬまでうまい酒が

のめるのだ……。

仙之助は目をとじ、ごくりとのを鳴らした。

「起きろ、顔をあげろ」

と、仙之助は、ふたりの娘にいった。

ふたりのお千代は、ひしと肩を寄せあい、あごをふかく襟もとにうずめている。小鳥のように、恐怖と羞恥にふるえているのだ。

「ろうそくの前に、もつとツラを寄せろ！」

となりつけながら、岩松の手が、水茶屋のお千代の髪をつかみ、それを下に引いて、顔をあおむかせた。

「ああッ」

紅をぬった唇が、あえかな悲鳴をあげ、ぬれた花のようにひらく。肩と胸を右ひだりにゆすって、髪を引かれる苦痛を訴えるのだ。

「ゆるして、ああ、ゆるしてッ……」

品のいい、愛らしい目鼻たちが、おそろしい受難に泣きゆがむ。

「ゆるしてやる。おまえが鼠小僧の娘だということを、すなおに吐けばゆるしてやる。親からもらった守り袋かなにかがあるだろう。それさえ教えれば、すぐにもこの縄を解いてやるのだ」

ひくい声で、甚九郎はいった。

「知りません、そんな、鼠小僧とか、千両箱だとか、私、そんなこと、ちっとも……」

「ぬッ、まだ強情をはるつもりか！」

甚九郎の顔が、青みを増して、どす黒くなった。腰から大刀を、鞘ごとぬいた。

茶屋のお千代の背後にまわると、大刀の鐙を、うしろ手に縛った娘の両手首と背中にあいだに、ぐりッ、ぐりッと力をこめてこじられた。

「あッ、ひいッ！」

お千代のあごが、自分からのけぞった。

きびしく背中にいましめられた両手首、そして両腕を縛った縄が、大刀の鐙に巻かれ、いっそうむごたらしく、引きしほられていくのだ。たとえ、着物を身につけているとはいへ、背中の両腕がしめあげられるのと同時に乳房をも固くしめつけている同じ縄は、倍のきびしさを加えて、ぎりぎり、ぎりぎりと、肌身に噛みこんでくるのだ。

「ひいッ、ひいッ……」

お千代の腰が、浮くようにのびた。中腰に自分から身をのばして、背中の縄を巻く鐙の襲撃から、すこしでものがれようとする。

びりりッ、という布の裂ける音がした。悲鳴に似たすどい音だった。娘の着物の、腰のあたりが、大きくななめに裂けたのだ。

「もういい、そのへんでいい。それじゃ、つぎに、花屋のお千代の顔を、よく見せてもらおうか」

みかねて、仙之助がいった。ふたりのお千代は、この古寺にさらわれてきてから、もう数刻こうして責められていたにちがいない。

岩松が「よしきた」と声をあげ、てのひらに唾を吐きつけた。花屋のお千代の縄じりをつかむと、こわれた人形でも扱うような乱暴な勢いで立たせた。

右手で縄じりをつかみ、左手で髪の毛をがっしりとにぎりしめて、お千代の顔を、裸ろうそくの前へ、むりやり近づけるのだ。

「あッ、あれッ、おゆるしを！」

焰から、ぎくんとあごをひき、顔をのけぞらす。この娘は押し込められる前に、よほど抵抗したのであろう、右肩から着物が大きく剥がされ、むきたまごのような白い肌をさらけだしたまま、縛られている。

「く、くうーッ！」

焰の前の顔を、狂ったように左右にふる。その勢いに、岩松の手が、つかんだ髪からすべった。一瞬の隙だった。娘の足は本能的にゆかを蹴り、この須弥壇裏の穴部屋から逃げだそうとした。だが、岩松のもういっぽうの手は、縄じりを固くにぎっている。

「このあまッ、逃げるつもりかい。へへッ」
岩松は、獣じみた笑い声をあげて、縄じりをもとにひき寄せ、たぐった。

「あれえッ！」

うしろ縄に引かれて、お千代はもろくものけぞる。どうとばかりに、転倒する。

「だめなんだよ、岩さん。この小娘は、顔に似合わず、しぶといんだ。だからね、お前さんの作った、あの木馬の上へのせて縛りつけてさ、それから、疾風のにいさんにゆっくり見てもらおうじゃないか」

口をだしたのは、お蝶だった。そいつアいい、と岩松は歯をむきだして同意した。

「また、あんなものにのせるのか」

甚九郎がつぶやき、にがいような形に唇をゆがめたが、笑ったのかもしれない。

その、木馬というしろものが、どこからか暗い穴部屋に運びこまれた。

「あッ、いや、いやッ、かんにんしてッ！」

木馬というには幼稚な、しかし奇怪な形をした道具をひと目みるや、お千代は顔をこわばらせて絶叫した。

花屋のお千代は、すでにこの道具のおそろしさを知っているのだ。ひと目みただけで、苦痛と恐怖をたちまちよみがえらせたのだ。

「甚九郎さん、手伝ってくれ。このあま、あ

ばれやがるから、ふたりがかりでねえと、うまくのせられねえんだ」

黒牛のような男の手と、山犬浪人の骨ばった手が、左右から娘のからだをつかんだ。

恐怖と悲しみのきわまった声が、お千代の舌の奥から、細く鋭く、ふきあがった。

「落ちないように、腰から足を、がんにがらめに木馬へ縛りつけるんだよ」

お蝶が黄色い声をあげて、用意してある縄束を、ふたりの仲間の手にわたした。

娘のからだを、四本の男の手で強引に、木馬の上に押しあげられる。

「のれ！ ひらいてのるのだ！」
するどくとがらせた木馬の背中の頂点。

「あッ、痛ッ、うううッ！」

自分のからだの重みが、死よりもつらく、地獄よりも呪わしい。苦痛は、中心から、全身へ、脳髄へとつらぬくのだ。自分の重みを両手でささえようにも、その左右の手は、ただかかと背中縛りあげられている。

「落ちるぞ、足と腰を縛れ！」

甚九郎がわめいた。お千代のからだは左のほうに傾斜している。岩松は、あわてて木馬の中にもぐりこみ、お千代の右足首に縄を縛りつけ、木馬の腹の下に通して、反対側の左足首につなげて縛り、力いっぱい結んだ。

甚九郎もまた、お千代の腹を縄で縛り、その縄を木馬の胴にぎりぎり巻きつける。

木馬にまたがったお千代の腹から足にかけて、数巻きの縄がきびしくからみ、木馬の胴体に苛酷な様相をみせて密着を終えた。こうすれば、たしかにお千代は木馬の背から落下しない。からだが平均を失って傾斜しても、落ちることはないのだ。

「さあ、ゆっくりと見てくれ。おまえが十四年前に、おまえの夜具の中で、子守り歌をうたって寝かしつけたという娘は、こいつか」

甚九郎が、はげしく咳こみながらいった。

「よく見ておくれよ、疾風のにいさん！」

お蝶も、すがりつくような声をあげる。

足を左右にひらいて木馬にまたがったために、お千代の着物の裾は、大きくまくれあがっていた。娘らしい。白いふとももが、仙之助の前にあえていた。瞬時、仙之助の目がそのふとももに吸いついた。

「どうも、ふたりとも、ちがうようだ」

仙之助は目をとじ、首を横にふった。

「なんだと！」

岩松と甚九郎が、噛みつくような声をあげた。せつかく苦勞して探がしだし、かどわかしてきた娘ふたりだ。ちがうといわれて、大声だすのも、むりはない。

「疾風のにいさん、おねがいだから、もつとよく見ておくれよウ。いくら十四年たったからといって、面影ぐらい残ってるはずだよ。でなけりや、ホクロとか、傷あととか、アザとか、そんなものがひとつやふたつは、からだにあるはずじゃないか。ねえ、頼むから、思いだしておくれよウ。この娘たちを、すっぱだかにして調べたっていいんだよう！」

お蝶は、泣き声をあげて、仙之助の胸にかじりつく。

「そういわれてみりやア……思いだした」

仙之助は、目を暗い壁にむけると、つぶやくようにいった。

「お千代坊の耳……たしか左の耳だ。その耳のうしろに、小さなホクロが三つ、かわいらしく行儀よくならんでいた。そのホクロを指でさすりながら、おれは子守り歌をうたってやったんだ……」

仙之助のことばが終わらないうちに、岩松と甚九郎とお蝶の三人は、いっせいに、ふたりのお千代にとびかかった。

「ない、ない、耳のうしろに、ホクロなんてありやしねえや！」

岩松がわめき、地団太を踏んだ。甚九郎はがっくりと肩をおとし、また咳こんだ。
「くそッ、いままでの苦勞も水の泡だい！」

またはじめッから、お千代探がしだい！」
岩松は吠え、そのへんに落ちていた割れ竹をひろうと、ふたりのお千代の肩や背を、氣ちがいのようになぐりつけはじめた。

「やめなよお前さん、殺しちまったら、えらいことになるよ。この娘たちは、なんとかべつに仕末するより、しかたないよ」

お蝶が、岩松をしずめている。

仙之助は、だまってそんな騒ぎを眺めていたが、まだ咳をしている甚九郎の背後に寄ると、その耳にささやいた。

「甚九郎さん、ちよつと外へ出てくれ。お前さんだけに、話しておきてえことがある」

本堂から縁廊をまわり、外におりた。

すっかり日が暮れている。つめたい夜だ。

古銀杏のかげの、くろぐろとくまどられた祠の前までくると、仙之助は足をとめ、甚九郎をふりかえった。

「なんだ、話とは？」

ようやく咳のおさまった甚九郎が、陰険な警戒の目を、仙之助にむけた。

「左の耳のうしろに、ホクロが三つならんでいる十九の女を、あつしは一人知っている」
仙之助は、ほそりといった。
「なにッ！」

甚九郎の両眼は、月光を吸って光った。

「お前さんがたは、どこのだれから、そんな隠し金の噂をききこんだか知らねえが、鼠小僧の娘の名前はね、おちよじゃねえ。本当はおちよう、というんだ。おちよ、おちよう。似ているが、ちがう。……ひとの口から口へと伝わっているうちに、いつのまにか、まちがって伝わっちゃまったんでしようねえ……」

「それは、本当か」

「いまさら嘘をついたってはしまらねえや」

「で、耳のうしろに、ホクロが三つあるという女は、どこに？」

はげしく、また甚九郎は咳こんだ。

「その荒れ寺の、須弥壇裏の穴部屋におりますよ。三人いる女のなかで、ひとりだけ、縛られてねえ女だ」

「なんだと、あの、お蝶か！」

咳のなかで、甚九郎はうなった。

「さよなら、ご浪人さん。あつしはやっぱり堅気の紙屑屋でござんした。きょうのことは悪い夢をみたと思って忘れます」

仙之助は、くると甚九郎に背をむけた。びっこの足をひきずりながら、闇のなかへ走りだした。

かつて緋牡丹のお蝶は、仙之助の情婦だったのだ。

鼠小僧が埋めた十個の千両箱のことや娘のお千代のことは、そのころ仙之助がぞっこん惚れたお蝶の耳に、寝物語にささやいた話だ。

三年前、捕方役人の手がまわったとき、お蝶は自分が助かりたいために、仙之助を毘にかけて逃げた。仙之助のびっこは、そのとき役人の刀によって斬りはられた傷のためである。

仙之助は捕縛され、入牢したが、お蝶はうまく東海道へ逃げのびていた。

出牢後、盗ッ人稼業のばかばかしさにあいそをつかし、仙之助は堅気になった。

手に職のない悲しさ、不具の身の不便さ、ついには屑ひろいになって糊口をしのいできたが、くらしの苦しさ、わびしさに、つい鼠小僧の隠し金の誘惑に心を迷わされた。

だが、いまはもう、そんな迷いもさめていく。いまごろ、あの荒れ寺のなかでは、大きなわぎだろう……。仙之助は苦笑する。

三年前、仙之助がお蝶にきかせた鼠小僧の千両箱十個の話は、嘘ではない。

だが、たつたいま、あの山犬浪人にきかせた、おちよと、おちようとの話はまっ赤な嘘だ。お蝶の左の耳のうしろに、ホクロが三つあるのは本当だが、お蝶と次郎吉のあいだに

は、なんのつながりもない。

わざわざ甚九郎をそそのかしたのは、自分を裏切ったお蝶に対する、仙之助のちょっとした復讐だった。

あの、木馬にのせられた花屋のお千代、あの娘こそ、次郎吉の本当の娘だ。仙之助は、そう信じる。

木馬に縛りつけられ、裾がまくれあがったとき、ふとももがあらわになった。そのふとももに、十四年前、きちがい犬に噛みつかれたときの傷が、はつきり残っていたのだ。

——あの目鼻だちにも、たしかに幼ないころの面影がある……。だが、あのとき、もし仙之助がそのことを悪党どもに告げていたらあのお千代の運命は、もっと大きく残酷に狂うにちがいない……。

そうだ、これからまっすぐ番所へ行き、あの古寺に捕われている娘を救いだすように、しっかりと頼まなけりやならねえ。

——疾風の仙之助は、もう死んだ。おれはびっこで屑ひろい屋の仙之助だ。

江戸の町の夜を、こがらしが吹き、そのなかを仙之助は背をまるめて走りつつける。

足がわるいので、左の肩があがったりさがつたりする。しかし、早い。びっこだが、疾風は、やっぱり疾風なのだった。

花と悪心銭

井村錠

(前略) 当地、京に於ける盜賊は、江戸表に於ける薩摩御用盜に劣らぬ所業にて候。

三人、五人と徒党を組み、中に指揮者と覺しき武士が長州訛りであるところより、我等見廻り組は、長州浪人の動勢監視を特に怠らず、また町家の豪商に於いても、自費にて浪人共を雇い入れ、警備に当たらせ候。

且また我等と、御用盜捕縛に先陣を争ふ壬生新選組共々、日々探索の手を厳しくいたし候ところ、今月に至り、御用盜は襲撃の鋒先を罪も無き町家に向き代え、あまつさえ婦女子を拐かし、遊里に売るといふ非道にて候。――

見廻り組本陣に磯部をたずねたが、あいにく磯部は他出しているとのことだった。

どうせ私用で借りうける金が、本陣で手わたされようとは初めから思ってもいなかったが、錦四郎を待っている磯部のいどころが、島原の廓、吉乃家ときいて、

(相かわらず磯部さんらしいな)

と錦四郎は思わず苦笑をもらした。

なにせ、まだ少年の錦四郎にとって、遊里に足を運ぶことは、金子の借用という用件と相まって、いっそう足を重くした。

錦四郎は仕方なく島原に足を向けた。

教えられた吉乃家は、島原も中ほどの豪華な構えの廓で、ひと目でそれとわかった。

長州御用盜の出現らしい、夜ともなればま

るで息をころしたように淋れ変わった京の町ではあったが、さすがに島原は別世界で、初めて足をふみいれる陣之内錦四郎は、なんとなく足もおどろおどろである。

が、後に引くこともならなかった。思いきったように、吉乃家のしきいをまたぐ。

格子ぎわにいた妓の目が、一せいに錦四郎の顔を射る。

しかし、いかにも野暮用をおもてにむきだした錦四郎には、一人二人秋波を送る妓はあっても、声をかけることをはばかっているふうであった。

「たのみもうす」

「へい、おいでやす」

帳場にいた、やりて婆というにはまだ大年増が、肉づきのいい顎をあげた。

「磯部さんがきているはずだが、私は陣之内
というのですが……」

「へえ、お待ちしておりはります。あ、そや
けど……」

女の顔に、ちらと当惑がはしったようだ。

「あのオ、そんならちよっと待っとおくれや
す」

磯部に告げるのだろう、女はふとった腰を
ゆすって、小走りに奥へ引っこんだ。

ほんのしばらく……。女はすぐに顔をみせ
た。

「ほんなどうぞ、おあがりおして」

「では」

妓のしのび笑いをあとに、錦四郎は女の後
につづいた。

通りすぎる部屋々は、錦四郎の想像より
静かだった。

静かさの中に、どこかなまめいたはなやぎ
が感じられ、廊特有の香が、錦四郎のこころ
を幾分ともやわらげる思いでもあった。

奥まった部屋の前まできて、女は目顔で錦
四郎にうなづいてみせると、

「おつれしましたえ」
内へ声をかけた。

「おうつ、はいってくれ」

磯部の、なにか咽喉がつまったような声が
内からした。

逃げるようにたちさる女をみとどけてから
襖を開けてはいろいろとした錦四郎は、あつ、
と思わず声をのんだ。

まず、錦四郎の目にうつったのは、内にい
る妓の、落花狼藉の姿態だった。

妓は緋の長襦袢を乱した姿で、部屋の床柱
に縛りつけられていたからである。

錦四郎が襖を開けると同時に、妓の、堅く
閉じあわせた膝を枕に、寝そべっていた磯部
が酒で赤黒くした顔をおこした。

「いよう、色男。まあまあまあ」
はっはっはっ、と、磯部はまず、照れ笑い
に笑いとばした。

初手からおどろかすつもりだったのだろう
が、意外に堅い錦四郎の表情に、磯部は一瞬
冗談のやり場にとまどったふうであった。

錦四郎がはいってきたことで、わが身のし
どけない姿を恥じてか、妓は猿ぐつわに覆わ
れた顔をふり、柱に結えられたからだを烈し
くもだえさせた。

（あくどいいたずらだ。相かわらず磯部さん
らしいな）

しかし、転倒した気持ちがおさまると、錦

この同一題の小説四編をお読みになって、ど
の作者の小説がいちばんおもしろかったか、
よいと思ったかを、編集部までハガキでお知
らせください。

▼ご応募くださいました全読者のかたに、折り
返し『手札型S写真』を一枚、お送りいたしま
す。

▼「花と悪銭」○○○○○（作者名）が、いち
ばんよかった——とお書きください。

おもしろかった理由をお加えくださると、なお、
幸甚です。

▼下に掲載のような写真をお送りします。



四郎は招じられるまま、磯部の前に正座した。

磯部のいたずらは、かならずしも錦四郎にとって無効ではなかった。磯部に借財しようとしていた錦四郎に、それは錦四郎のころを解きほぐす役目を果たした。

「磯部さん、この度はどうも……」

「まあまあ、びっくりしたろうな錦ちゃん。

帯を解くのが妓の値うちなのに、さからいやるんでこうしてるんだ」

磯部の言いわけめいた口調が、錦四郎には気のどくな気がした。

妓は一そう烈しく、身もだえをやめようとしな

（これは、早々に退散しなければならんな）

錦四郎はここで、借金のを話を話すつもりだった。

が、それは後日と決心した。

「錦ちゃんもなかなかやるぢやないか。え、

二十両という金は、おれは妓の身受けとみたがどうだ。しかし、まさかこの店の妓じゃあるまいな」

「磯部さん、そんな……」

色恋ではないぞ、と弁解しかけて、錦四郎は口をつぐんだ。

とにかく急ぐのだ。磯部の勝手な想像もいではないか。二十両あれば哀れな娘の身が

救われるのだ。

義をみてせざるは武士にあらず、十九才の少年隊士をして磯部に大金の借用を申し込ませたのも、実にこの一言がささえとなっていればこそだ。

「まあええ、まあええ、野暮は聞かんとしよう」

磯部ははだけたどてらからのぞいている、酒やけた胸をなで、膳をさし向かいの真ん中に引きよせると錦四郎に酒をすすめた。

床柱につないだ妓のことは、けろり、忘れたようである。磯部は手酌でぐいぐいとおった。

「それにしても錦ちゃんは話せる。兄貴とはずいぶん違う。あいつはどうもつきあいにくい」

磯部は勝手な想像から、錦四郎の兄の主馬を引きあいにした。

錦四郎はちらと目をあげて頼もしげな磯部の胸毛のあたりに視線をやった。

会津藩家老、陣之内刑部の嫡子、錦四郎の兄にあたる主馬と、磯部は兵学塾とともに

したいわば竹馬の友であった。

主馬がともなつて、よく屋敷に遊びにきた磯部は、幼ない錦四郎を異状なほどにかわいがった。

錦四郎もまた少年の頃から磊落で、主馬にない男らしさのひめらく磯部の来訪が楽しみであった。

年経て、政争の風雲、急を告げるいま、京都守護職見廻り組が結成されたとき、錦四郎は一隊士として、磯部は勘定方見廻り組として、ともども京におもむいたのである。

地味ではあるが、勘定役としての磯部の働きは見事なものだった。

藩から支結されるわずかな財政をきり盛りし、いかななく辣腕をふるう磯部に、隊員のひとりとして口だしできるものはなかった。口やかましい勘定頭でさえ、見廻り組の財政は、殆んど磯部にまかせきりのありさまであった。

金の入用にせまられた錦四郎にとって、あまえられるのは磯部以外になかったのだ。

どこかで、ものうい三味の音がきこえてきた。

錦四郎は目のはしに床柱の妓の方を見つめた。

もだえつかれたのだろうか。妓はくずれた髪を深く胸におとしていたが、肩さきが小さくふるえていた。

「ところで、御用盗の詮議の方はどうなつて

る？」

思いだしたように、磯部がたずねた。

「ああ、なんとか新選組の鼻をあかしてやろうと思ってるんですが……」

思えば、その御用盗の探索が、錦四郎がいま必死に救おうとしているお露という娘との出合いのきっかけであった。

病いに臥せる父親を助けようとして、借用した金が利息に利息を生んで二十両。とうてい取り戻せぬとみた金貸しが土地のやくざにそれを売る。——やくざのこわ談判。お露が美人であるばかりに、金のかわりに、と思うのは誰しも当然であろう。

それは、いかなる土地の、いかに善政のもとにおいてもおこりうる運命のいたずらであろう。

だが、家老の次男として何不自由なく育ってきた錦四郎にとっては、初めて経験する新鮮な刺激であり、少年武士にとって、見過ごしてはならない最初の試練でもあった。

やくざの三下がお露の家に押し込み、無理やりお露を連れ去ろうとしたとき、たまたま錦四郎がそこを通りあわせた。

——いつまでも、金を出してくれそうになり磯部に、錦四郎は次第にじれてくるのが押さえきれなくなってくる。

幾度か口にてそうになりながら、なにかいいそびれるものがあつた。

なぜだろうか。

しゃべり続けている磯部の言葉を適当に相づちしながら、錦四郎はなぜかしゃく然としないものがあつた。

好いているからではないか。

馬鹿な、と錦四郎は自答した。

ここから、ここからただ、貧しい娘を救おうとしているだけなのか。

だが、はらってもはらっても、お露のぐみのような唇が錦四郎の口づけを待っている幻影がしつようにまとうのである。

小さなほくろがあつたな。

唇の下、白いあごの小さな黒点が、お路の不幸を象徴しているように印象に残った。

(助けて、はやく！)

ふと、錦四郎はお露の声をきいたようにおぼえた。

「あ」

思いきって、錦四郎が口をだそうとしたときである。

「磯部さん」

襖の外で、誰かが呼ぶ声がした。

「おっおう、ちょっと」

狼狽した動作で磯部が錦四郎を制すると、

自分から座を立った。

磯部の足もとがよろりとした。

磯部は廊下に出ると、襖を閉めて、立ち話をしているようである。

きくともなく、いつか耳をすませていた錦

四郎は、男の声にぎくりとした。

明きらかに、その声に長州訛りをきいたからである。

(磯部さんの知り合いが、馬鹿なつ)

錦四郎は即座に否定した。

いまの錦四郎にとっては、御用盗の件はごく些細な存在にすぎなかった。一刻も早く、お露さんをよろこばせてあげたい思いがいっぱいだった。

床の間に気配を感じて、錦四郎がめぐらせた視線へ、まともに妓の食いいるような目が合った。

磯部のいなくつろぎと、酒の酔いが自分でも意外なほど錦四郎をふてぶてしくさせていた。

錦四郎は、撥ねかえすように妓の顔を凝視した。

妓の目に憎悪の光がふくれ、やがてそれは涙となって、廊の名を染めぬいた手拭いの猿ぐつわに落ちて……消える。

(似ている)

錦四郎はまた、妓の目にお露を見だしていた。

だが、お露が野辺の白百合に例えれば、これはこぼれおちるような大輪の緋牡丹であるうか。

と錦四郎の凝視に耐えきれなくなったか、妓は顔をそむけた。

あさましいとは知りつつも、錦四郎は視線を妓の肌に這わせ、おろした。

むきだしにされた胸もとは、恥羞が桜色に染めていた。

妓のもだえを嘲笑うように、おこないすました乳首の笑くぼ。

あえぐ双丘を、自身の腰ひもが、空しくあがく手首をおのれの腰をまとうべき帯が、すべての自由を奪っていた。

割れた裾からのぞく肉づきのいい内ももまでが、恥羞の色をみせていた。

いつか、妓の肌をお露の肌に置きかえていくことに錦四郎は気づき、はっ、とふりはらうように目をそらせた。

（お露さんも、やくざの手下に連れ去られようとしたとき、この妓のように手足を縛られ、猿ぐつわをされていた。そうだ。私は縄を解くとき触れた肌だ。やわらかい腕だった。あの胸の弾みは、何に例えようか）

全身の血が、頭にかけてのぼってくる。

錦四郎の盲想を破るように、がたりと廊下の襖が鳴った。

「やあ、長州ものでな。いわば犬だ。役に立つ」

いいわけをしながら、磯部が戻ってきたが、錦四郎の真つ赤な顔にぎょっとしたらしい。

「錦ちゃんはおれをひどい奴と思うだろう。だが所詮は売られてきた妓だ。おれが摘まずとも誰かが散らす」

いいながら、やっ和金をだすために奥の襖を開けて中はいった。

奥の間に、きらびやかな夜具がのべられてあるのを見て、錦四郎は思わず生唾をのんだ。

「やあ、すまんすまん」

磯部のさしだす紙包みを、錦四郎はおいしいたいてふところにした。

「磯部さん、悪いですが私はこれで……」

錦四郎の腰が浮いた。

「急ぎよる。急ぎよる」

磯部の揶揄もそそろにきいて、錦四郎はたちあがった。

「錦ちゃん、そのかわり、礼はたんとしてもらえよ」

「はあ」

「わからんかな。からだでたんと返してもらえというんぢや」

「そんな……」

逃げるように部屋を出た錦四郎の背へ、またしても磯部の高笑いひびいた。

風こそなかったが、まるですべては凍てついたような夜だった。

無気味なまでに明かるい月が、乾いた道に白く映えている。

だが、錦四郎の足は軽い。寒ささえ感じなかった。

錦四郎は、すでに深夜であることも忘れ、ひた急ぎに急いだ。

寺の土塀が続く四ツ辻をまがったとき、錦四郎はあやうくそこに横たわった黒いものにつまづきそうになった。

あわてて飛びすさった。

こらした眼に、まだ血塗れた死体が俯伏せになっていた。

浪人ものらしい。死体は見馴れている錦四郎ではあったが、なぜか今夜は悪感に似に戦慄が背すじを走った。

錦四郎が死体から目をはなした道に、人影が二人立っていた。

ぎくりとして身構える。

一人はずんぐりとした浪士風で、いま一人の、しきりと錦四郎の顔をうかがい見ている方は、この寒空に素足をむきだしにした、やくざものらしかった。

「見たか、仲間の、いや、首領の死骸だぞ」浪士が口をひらいた。押しころしたようないやな響きをもつ声である。

人ちがいしているな、と錦四郎はほっとした。

「人ちがいをしておられるな。私はこの男を知らぬ」

きびすを返して去ろうとした行く手に、いつの間にかまた二人の武士が立ちふさがっていた。物かげにかくれていたものらしい。

錦四郎は油断なく、左手を刀にふれて構えた。

「あっ！」

ふいに、やくざが大声で叫んだ。

「こいつや、へえ、まちがいおまへん。こいつや、こいつや、ぬすつとめ」

男は錦四郎を囲んだ三人の浪士の顔を交互に見ながら、錦四郎を指さした。

ぬすつとよばわりされた錦四郎は、いよいよ人ちがいであることに確信を得て、一たんだ刀にかけた手をおろした。ようやく、怒りがこみあげてきた。

「盗賊よばわりは無礼であろう。私を見廻り組のものと知ってかつ」

錦四郎は、ずい、とやくざにつめよった。ぱつ、と飛すさった男の手に七口がきらめいた。

三人の浪士は無気味に黙りこんだまま、二人のやりとりを見すえていた。

「やいつ、その見廻り組がぬすつとの先手とあっちゃあ、お天道さまがきいてあきれるぞ。やいつ、おれがお露のあまを連れだしたんは金のかたぢやい。誰に文句がつけられるんやい。それを、なんのかんのとぬかしくさって連れ戻したあとで、おめえの仲間がよつ、そつくり連れだしたんぢや、おれの顔がどうなるんや。こんちくしょう、こんちくしょうめ」

錦四郎は雷電にうたれたように、その場に立ちすくんだ。彼はうそまやかしくでなく、やくざの顔が憤激のために、ますます蒼白にひきつるのを見た。

そして、何よりも錦四郎をおどろかせたのはすでにお露は御用盗に連れさられたということだった。

「わかったな」
二人づれの浪士の一人が、罪人をさす獄吏のような口調で錦四郎に向きなあった。
「さあ、岡田さん」

いま一人がずんぐりした浪士に声をかけ、同時に刀を抜き放った。

錦四郎は、ふたたび恐怖に背をつらぬかれて、四肢が思うようにならなかった。

いま、岡田と呼ばれた浪士は、優れた剣士として錦四郎も幾度か耳にした、岡田以蔵にちがいない。

錦四郎は鯉口に手をかけたまま、じり、じり、と摒ぎわに後退する。

ゆっくり、岡田は鞘をはらった。

「おりゃ」

と、実戦の場数を踏んだ暗殺者は、道場と同様の、誘いの声をかけた。

本能的に身構たままで、早くも錦四郎の息が乱れてきた。

ああ、待て、と錦四郎はこころの中で、悲痛な声をふりしぼった。

私は、私はこの二日間、いったいなにをしてきたのだ。お露のいないいまは、すべてが徒労だったのだ。

そして、ここで、御用盗の汚名を着たままで果てるのか。

死んではならぬ、死ぬな。

きらり、と錦四郎の手に太刀が光った。

一瞬、岡田の足がとまる。が、錦四郎が打ちかからぬとみるや、下段に構えたまま、ま

たじりり、と間あいをちぢめてくる。

「陣之内錦四郎ここで討たれても、御用盗は身におほえないぞッ」

悲鳴に似た叫びが、錦四郎の咽喉をついて出た。

「うそつきやがれ！」

岡田のななめうしろから、やくざの声がすぐさまめき返した。

「御用盗がお露を吉乃屋に連れこんだことや、てめえや、そこにくたばってる奴が吉乃屋でこそささらしたことまで、ちゃんと調べてあるんぢや。はよ、くたばりやがれ」

あつと錦四郎はよろめいた。

錦四郎の胸裡に、さまざまな光景が洪水のようにあふれてきた。

闇の中に白く、お露の顔が浮かんで見える。そして、その父親の、絶望的な暗いまなざし。

それはいつか錦四郎の父、刑部の顔と変わっていった。父が笑った。いや、笑っているのは誰だ。やがて高笑いの主は磯部亘の酒焼けした赤黒い顔となって浮かびあがった。

御用盗。やくざのひと言にいまはつきりと

錦四郎は御用盗の正体を知った。

錦四郎の脳裡を走る走馬燈は狂ったような勢いで回転をつづけ、ある極色彩の光景を映

しだしたときびたりと静止した。

緋の襦袢がみえる。妓は錦四郎をすぐ見とめて、烈しく身をもだえ……、ああ、あれは羞恥のためばかりではなかった。あれは、必死に救いを求めるあがきではなかったか。

長いあいだ、ずいぶん長いあいだ妓は身もだえをやめようとはしなかったではないか。

磯部が席を立ったとき。あれが最後の機会だったのだ。

錦四郎の目を見つめる哀願のまなざしは、男の不逞な視線に押しもどされて、やがては憎悪の影をおびていった。

そうだ。あれは妓の運命をもてあそばうとする男の仲間に対する憎しみの色だった。

堅く、妓の口を覆った猿ぐつわの下には、あの、不幸せを象徴するようなほくろが、きつと怒りと悲しみのためにわなないていたにちがいない。

錦四郎の臉に、くつきりと夜具の紅色がしみついていった。

もう、間にあわぬかも知れない。だが救われねば死んでも死にきれぬ。

(待ってくれお露さん！)

錦四郎の生命は絶叫した。

「待て、待てくれ！」

彼は暗殺者に向かって悲鳴をあげた。

びたり、と背後の土塀が錦四郎の退路をさえぎっていた。

「卑怯！」

「女々しいぞ！」

二人の浪士の口から、同時に錦四郎をのしる叱咤が飛んだ。

「長州浪士をよそおい、長州御用盗と名をかたり、われらを京より駆逐せんとした奸賊」浪人の一人が叫ぶ声が、錦四郎の耳に、念仏のような不吉さをもってひびいた。

その声にあやつられるように、岡田の太刀は地を這いながら、ツ、ツツと錦四郎に迫ってくる。

絶体絶命だ。

錦四郎のからだは恐怖のため硬直し、四肢の感覚を失っていた。

(死ぬな。私は死んではならぬ！)

錦四郎のわずかな生命は、なおも絶叫をやめようとしないう。

「まてっ！ まてってくれっ。ちっ、ちがう。誤解だ。私ではない。話がある、き、きいてくれ」

もう、武士の体面も、外聞もなかった。

錦四郎は四人の前に太刀を投げだすと、凍てつく大地に膝をついた。

「武士のなさけだ、頼む。一刻、いや半刻で

よい、私を見のがしてくれ。私は死ぬまえにどうしてもなさなければならぬ事があるのだ。そうではない。事が済めばかならず、かならずここにかえって、いさぎよく討たれよう。武士のなさけじゃ、おたのみ申す」

錦四郎は幾度も、幾度も土の上に手をつき、ひたいを地面にすりつけた。

「ちい」

浪士の一人が、いまいましげに舌打つ音がした。その顔は、きつと侮蔑にゆがんでいるであろうことが、錦四郎には痛いばかりに感じられ、自分の身が一そう哀れであった。が、彼にとっては助かりたい一心で必死であった。

あまりにもあさましい錦四郎の態度に、さすがの岡田以蔵は、討ちかねて構えをといいた。困惑しような顔には、明きらかに嘲笑が浮かんでいた。

刺客たちの気配が錦四郎に感じられた。

(助かる！ おれは助かるぞ)

そう思うと、錦四郎はあさましくもいつそうひたいを地面にこすりつけ、頭をあげようとしなかった。

どうする、といったふうには、岡田が長州浪士の方をふり返って見た。

二人の浪士はあきれかえった顔で、岡田と

錦四郎の方を交互に見かわしていた、そのときである。

「あ！」

浪士の一人が小さく声をあげた。

岡田のうしろから黒いかたまりが猛犬のようになり、岡田の傍を走りぬけ、まっすぐに錦四郎の方に突進するのが見えた。

「あっ！」

岡田も気づいて、止めようとしたが間にあわなかった。

黒いかたまりがかざす、七口が月光にきらりと光るのを見た。

岡田の叫ぶ声に、頭をあげた錦四郎の目の前に、死にもの狂いに歯を食いしばった、やぐさの顔が映ったのが最後だった。

体当たりをくれた男の七口は、錦四郎の胸板を深々と刺しつらぬいていた。

(中略) たまたまその日は、御子息錦四郎殿は非番の夜にて候えども、常より正義感に溢れた烈しき御気性の方なれば、

單身、御用盗の探索に出かけられ、折悪しくも御用盗の首魁、長州浪士小早川某と遭遇されしものと思われ候。

錦四郎殿、その折の手並みはまことに目

覚ましく、小早川の肩先よりけさがけに肋骨まで一刀両断にいたしおり候。

錦四郎殿の傷は、鳩尾から背骨にいたる刺し傷にて、両名の様子より、殆んど刺し違えたと同時に絶命いたしたるものと相見受けられ候。

ともあれ、錦四郎殿この度の御殊勲により、長州御用盗の根元を断ち、京の治安ようやく元に復しましたること、我等見廻り組の名誉にとどまらず、まことに武人の鑑として、深く感銘いたしおり候。いずれ詳細は国もとに立ち帰りましたる折、御対談申すべく所存にて候えば、まずは御子息錦四郎殿ご最後のこと、とりいそぎお伝え申し上げ候。

尚また、些細なるご用件にて恐れ入り候えど、先日錦四郎殿が御家老にご無心なされし金子のこと。この度の錦四郎殿ご最後の故、何卒ご無用にいたされ度、まずは追筆仕り候。

文久元年十二月二十日

見廻り組勘定方

磯部 亘

陣之内刑部様

花と悪心銭

京 剣 児

髑 髏 簀

利鎌のような下弦の月が中天にあり、夜の江戸は凍てついていた。

髑髏簀を突き抜けて盲目橋を渡ると、右手が女犯寺の浄蛾院、左手が武宮織部正の屋敷である。ともに、いまは廃屋となっていたし、住む人もなければ、近づく粋狂者もめったにいなかった。

江戸には、こうした朽ち腐れた忌み場所がいくつもある。

髑髏簀に盲目橋——あまり気持のいい名前ではないが、かつてこの簀は直参簀とか織部簀と呼ばれ、簀と寺を結ぶ土橋も、ごくありきたりの寺橋という名称で、土地の者たちに親しまれていた。浄蛾院や武宮屋敷が廃屋に

なる前のことだ。

ところが、浄蛾院を訪れる女たちのうち、美しい娘や若御家に限って、直参簀の中でフツとその姿を消してしまふ——という怪異があいついで発生した。

女たちの行方は、そのご査として知れず、むなしく一年の歳月が経過したある夏の夜、夜盗を追って、この簀の中へ馳けこんだ土地の岡っ引とその子分たちが、目当の夜盗のかわりに、不気味な髑髏を四つも発見するハメになったのである。

——神隠しのように簀の中で姿を消した女の数が、やはり四人。

そのまがましい数の符合と、暗い連想が髑髏簀、あるいは死人簀といった薄気味の悪い名称をうむ原因となった。

寺橋が盲目橋に変わった原因も、これまた無惨なできごとに繋がっている。

髑髏事件の直後、この橋の上で一人の盲人が後袈裟の一刀を浴びて、冷たい骸と化しているのを、寺社奉行の内意を受けて浄蛾院の内情を探っていた女——寺社奉行松平伊賀守屋敷の奥向きに仕える初穂という美女が発見した。

初穂はその操を犠牲にして、浄蛾院の住職浄雲の女犯狂いを通報し、その直後、旗本武宮織部正の屋敷内で非業の死をとげている。

つまり、織部正も浄雲と同腹の女犯旗本であり、老中水野越前守の密命を受けて、御府内探りを働いた甲賀侍にその事実を剔抉されてしまったわけだ。

こうして、処断を受けた浄蛾院と武宮屋敷

は、それぞれ忌み寺、忌み屋敷として打ち棄てられ、廃屋と化する同時に、橋の名前もいっしか盲目橋と変ってしまった……。

——こうした因縁のある髑髏藪の道を、いま一人の男が歩いている。

くわえ楊子に懷手、どう見ても遊び人だが身体のだこにも隙がなく、腰のあたりに、なんとなく異和感があった。

「む。——またか……」

この男は、フツと足をとめて、暗い藪道の一点を凝視した。

血の匂いと死臭が、凍てついた夜気を濁し

ている。そして、そこに犬の死骸があった。足をとめたのは、ほんの一瞬、ふたたび歩き出すと、こんどは盲目橋を渡ったところで、またもや犬の死骸だ。

いずれも、あざやかに一太刀で斃（た）さたている。……

男の片頬が、かすかに歪んだ。足をとめ、しばらくは動かない。懷手のまま、左手をぬうつと顎の下まで突き出して、握り拳（こぶし）の甲で下顎をなせている。

何かを思案する顔だ。

握り拳を開いた。掌の中に、一枚の銭（ぜに）があ

った。

いや。銭ではないのだろうか。寛永通宝にそっくりだが、まるで小判のように山吹色に光っている。

寛永通宝は、寛永十三年に初めて鑄銭されて以来、銅、鉄、真鍮の三種類に限られ、このような黄金銭は一枚も存在しないはずであった。——しかし、男の掌にある黄金銭には、あきらかに「寛永通宝」とある……。

男は、その異銭を懷中に戻し、一步二歩淨蛾院の方角へ踏み出した。

「む、——う……」

まるで地の底からでも響いてくるような、陰にこもった声が、この男の耳に入ったのはそのときであった。

男の片頬が、深い皺（しわ）を刻んで歪んだ。踏み出した足を停止させ、全身を耳にして、声の発産源を探るような形になっている。

犬 浪 人

朽ち抜けた屋根から、かすかに月光が流れ込んでいる。

灯りは、どこにもない。

したがって、その広い部屋は薄暗く寒々としていたし、眼が馴れるまで、物の形もはっきりとは識別できないだろう。

この同一題の小説四編をお読みになって、どの作者の小説が

いちばんおもしろかったか、よいと思っただかを、編集部まで

ハガキで、お知らせください。

▼ご応募くださいました全読者のかたに、折り返し『手札型S写真』を一枚、お送りいたします。

▼「花と悪銭」○○○○（作者名）が、いちばんよかった——とお書きください。おもしろかった理由をお加えくださると、なお、幸甚です。

▼下に掲載のような写真をお送りします。



破れほうだいの襖がある。もともとは群雀の絵襖だったと思われるが、それと気づくためには、よほど丹念にこの破れ襖を観察する必要があるようだ。

畳がある。いや、もはやこれを畳と呼んでいいものかどうか。

ぶよぶよに、むくみ、ふくれ、破れて、かつての面影はどこにもなく、埃やカビや鼠の糞や犬猫の屎尿で、表現に困るような異臭を放っている。

これが廃屋の匂いというものだろうか。

しかし、ここに二人の人間がいた。その一人は、この部屋の廃気を凝集して、人間の形に具象化したような、おぞましい存在であった。

のびほうだいにのびて、まるでカビでもはえそうな月代、極端にこけた頬、薄い血の気のない唇、三白眼の細い目、鉛色の肌。黒無紋の着流しは、ところどころに裂けめがありそれに垢と埃がこびりついている。

あきらかに尾羽打ち枯らした浪人侍だが、ただ一つ異和感を与えるのは、この男が手にしている太刀であった。

黒塗りの鞘には艶があり、鍔も櫛も手入れがゆき届いて、あわい月光の中でくつきりと浮き上っているのだ。

この瘦浪人は、崩れかけた壁に、退屈を絵にかいたような姿でもたれかかっていた。

残る一人は——女であった。

乱杭歯をむき出しにして、皺の中に眼鼻のあるような白髪の老婆……なら、この廃屋と瘦狼を思わせる浪人者に配する人物として、いかにもふさわしいのだ。腐れ畳の上に転がされているその女は、この部屋のたたずまいとは、およそ異質な存在であった。

黒々とした島田の髷が、がっくりと崩れている。その下に白い額と美しい瞳と形のよい鼻があった。猿轡をかまされているので、顔の半分は見えないが、その美しさは、こぼれるように匂っている。

黒濡子と緋鹿子継ぎの文庫帯に縞の着物、裾が乱れて、紅い蹴出しや抜けるように白い膝小僧がのぞいていた。

それだけならいいが、無情な荒縄がこの美しい娘を、ぎりざりと縛りあげているのだ。

「吐く気になったか？」

瘦浪人が、物憂げに言った。

「婆羅門の黄金銭はいずこにある？」

娘はこたえない。

瘦浪人は、めんどくさそうに起き上った。

とたんに、娘の瞳が恐怖の色を浮かべた。これから何が起るのか……

瘦浪人は、畳の上に転がしてあった木剣を握っていた。その木剣を、後手に縛った娘の手首の下へこじ入れ、ぐいっとこねる。

髑髏に皮を被せたような、極端に頬のこけた灰色の顔には、なんの表情もない。

たとえ憐憫の色はなくとも、好奇心なり、憎悪、憤怒、嗜虐といった感情の表現がその顔にあったら、まだ救われるのだが、この瘦浪人は、まるで無表情のまま、可憐な娘を責めつけるのであった。

「手首の骨がくだけるぜ」

と言いながら、木剣に加える力をしだいに増してゆく。

「うう……う……う……」

猿轡の下で、苦痛に耐える呻き声が、陰にこもった。眼が吊り上り、白い額にあぶら汗が浮き上ってくる。

「婆羅門の黄金銭は？」

問いかけたこの男の視線が、チラと左に走った。

左手は、わがもの顔に雑草のはびこる荒れ庭であり、その荒れ庭に面して朽ち腐れた濡れ縁がある。

そこで、白い影が動いたのだ。

白い影——それは、痩せさらばえた野良犬であった。

朽ち座敷の片隅に食べ残した握り飯があり
野良犬は、あきらかにそれを狙っていた。――
と見て、瘦浪人は凝固したように微動もし
なくなつた。

沈黙と不動のときが流れてゆく。

野良犬は、動かぬ人間に警戒をゆるめたの
か、しばらくして、のっそりと動きだした。
濡れ縁に上り、座敷の中へ入ってくる。

そして、一瞬！

チーンと鐙鳴りの音が聞こえた。犬の悲鳴
は、その後で、同時に生ぐさい血の匂い。腐
れ畳の上に犬の血が散り、その二、三滴が娘
の白い額を紅く染めた。

犬斬り浪人……

無表情なこの浪人者の顔に、このときはじ
めて喜悦に似た翳^{かげ}が浮かんだ。

お芙沙小町

「刀が泣くぜ」

破れ襖の向うから声が飛んだのは、犬を斬
つて虚脱したような数瞬を経てから、その瘦
せ浪人が思い出したように木剣をぐいっとこ
ねたときであつた。

「――む！」

細い眼を、さらに細くして襖のほうをにら
む。

黒い影が、のっそりと出た。

もう、くわえ楊子や懷手の姿ではないが、
あきらかに遊び人風の着流し男だ。

「何用だ？」と、瘦浪人。

「その娘を貰おう」

「娘を？」

「そうさ、犬を見たら斬りたくなるような、
そんなおぞましい男にあずけちゃおけねえ」

「うぬにあずかった女でないぞ」

「いいや、おれがあずけた娘だ」

「ばかな、寝言なら床の中で言え」

「とにかく貫う」

二人の問答はこれだけだった。瘦浪人の右
眼が、極端に細く、糸のようになり、殺気が
その枯木のような五体に充満したのである。

「えいッ」

「とう！」

犬を斬ったときのような早業で、浪人の刀
が鞘を滑り、朽ち腐れたこの部屋の空間で火
花が散った。同時にブーンと焼け鉄の匂い。
――必殺の居合剣を宙空でとめたのは、遊び
人の懷から飛び出した銀磨きの十手であり、
つぎの瞬間、その十手は相手の刀身をぐいと
捻^{ひね}って部屋の隅へ飛ばしていた。

大刀を失った瘦浪人は、きゆうに総てのこ
とに興味を失ったような顔で、

「連れて行け」

と、吐きすてるように言った。

「ふ、お許しがでたぜ」

十手を使うこの奇妙な遊び人は、苦笑しな
がら娘の縛^{いましめ}を解いている。

猿轡がはずれた。

恐怖と苦痛に歪んではいても、その娘の顔
は予期した通りの美貌であつた。

油屋小町のお芙沙――

一枚絵にもなっている、この小町娘の顔を
知らぬ江戸っ子は、まずいないだろう。いた
としたら、そいつはもぐりだ。

「歩けるかい」

と問いかける遊び人の声に、

「はい」

と、やっとの思いでこたえるお芙沙小町。

「それじゃあ、道行きとしやれこむか」

二人は腐れ畳を踏んで濡れ縁に出た。と、
それまで虚脱したように立っていた瘦浪人が
どうでもいいような口調で言った。

「うぬの名は？」

「ほう、やっぱり気になるかえ」

「どうでもいい……しかし、いずれは斬る」

「犬のようにか」

「――む！」

「ふふふ……そうさな、犬太郎――てことに

しておくか」

犬太郎男とお芙沙小町は、濡れ縁をおりて荒れ庭のかなたへ姿を消した。

それから小半刻。

崩れ壁に背をもたせかけて眠りの姿になった瘦浪人の前に、頭巾の武士が音もなく立った。

「千野……」

押し殺したような声で呼びかける。瘦浪人は、しかし身じろぎもしなかった。

「九十郎！」

頭巾侍の声が、こんどはやや高くなった。

「おい！」

「覚えておる」

やっと瘦浪人の唇が動いた。

「油屋のお芙沙はどうした。首陀羅銭の所在を吐いたか？」

「吐かぬ」

「吐かぬ？——すると、きさま妙な仏心を……」

「違う。邪魔が入った」

瘦浪人——千野九十郎は、物憂げな声で、事のしだいを説明した。

「なに、犬太郎——十手？」

頭巾侍の声に疑惑の響がこもった。

「いったい、なにやつ？」

「おぬしの仲間だろうよ。やつも十手を持っていた。——が、そこらの目明しふぜいでないことだけはたしかだ」

「十手の房の色は？」

「房なんぞなかったぜ。おぬしが持つてるような華奢な十手と違って、犬殺し向きのごつい裸十手だ」

「ふうむ」

頭巾侍は唸った。その懷から朱房の十手のぞいている。

加虐の竹針

軽業や娘手踊りの一座の用心棒として、上方から江戸へ下って来た浪人榊原孫兵衛は、いま死病の床にいた。

「千絵」

孫兵衛は枕元の娘を呼んだ。

「わしの命も、もう長くはない。——それで

お前に遺す物がある。これじゃ」

孫兵衛の瘦せた手が、枕の下から山吹色に丸く光る物を取りだした。

一枚の銭だ。それも、表に寛永通宝と刻んだ黄金銭である。

「千絵。これは榊原家代々の申し伝えによれば、刹帝利銭——と申すもの。他人の眼に触れさせてはならぬ」

いまは西紅芥一座の花形である千絵女も、もともとは武士の娘、父の言葉に厳肅な響を感じて、膝を正した。

「この刹帝利銭は榊原家の富裕を約束する家宝じゃ。家訓によれば、この黄金銭と同一形状の異銭が、他に三つ存在する。すなわち、婆羅門銭、毘舍銭、首陀羅銭と名付けられた三つの黄金銭じゃ」

孫兵衛の声が、急に細くなった。

「お父上！」

色こそ浅黒いが、軽業で鍛えたしなやかな肢体と、若さと美貌にめぐまれた千絵が、あわてて腰を浮かせた。

そんな千絵女を制して、孫兵衛はまた話を続けた。

「よいか。いずれお前を訪ねて誰かが来るはず。その者は、必ずこれと同じ黄金銭を所持しておる。それを確めた上で、その者と行動を共にするのじゃ。四つの黄金銭が集るとき……それは富裕となるときじゃ。その富を得て、榊原の家を興してくれ」

これだけ話すのが精一杯だったのに違いな。榊原孫兵衛は、まだ何か言いたそうに口をもぐもぐさせたが、次の瞬間、がっくりと息絶えた。

——その夜、浅草寺の境内に小屋掛けした

西紅齊一座のねぐらで、一つの異変が発生した。

一座の花形、千絵太夫の千絵女が、フツとその姿を消してしまったのである。——それは、こんな事情であつた。

「千絵太夫、御上のお呼び出しだ」

呼び込みの仙次に言われて小屋を出ると、そこに頭巾の侍が立っていた。手に朱房の十手を握っており、その十手で頭巾侍は千絵をまねいた。

呼び込みの仙次は、そこまで見届けて小屋の中へ入ったのだが、それっきり千絵女は戻らず、頭巾侍の姿も消えてしまったのだ。

千絵女はいずくに消えたのか？

二人の行先は、あのおぞましい髑髏藪のかなた——盲目橋のその向こう……いまは朽ち腐れて近づく者としてない浄蛾院の本堂であつた。

「いったい、あたしをどうしようって言うんだい！」

勝気な千絵がわめいている。

「悪い奴をふん縛るのが役目のお役人が、ひとをだまして、こんなところへ連れこむなんて……」

声だけは、けつこう威勢がいいのだが、その姿は、まことにあわれであつた。

千絵女の姿は、宙に浮いている。本堂の梁にひっかたけ縄が、ピーンと張りつめて、

その先は千絵の手首に繋がっていた。

縛られて、宙吊りにされている千絵女。

「おれは、黄金の刹帝利銭が欲しいのだ。どこにある？ 申せばすぐにも帰してやろう」

綿を含んだような声で言ったのは、れいの

頭巾侍である。

「さつきから何度もいつてるじゃないか。そんなものは知りません——って！」

宙吊りの苦痛に耐えながら。千絵女の声は気色ばんでいた。

「孫兵衛は死んだ。とすれば、一人娘のその方が、必ず引き継いでいるはず」

「知らないったら！」

「——む。女を痛めるは本意でないが、やむをえぬ。おい、犬っ！」

頭巾侍は本堂の隅へ視線を転じた、そこにあの痩せ浪人がいた。柱にもたれて眼を閉じているのだ。

「責めろ」

楽しみは犬を斬ること——それ以外の事には、まるで無関心な千野九十郎は、なまアクビを噛み殺しながら、のっそりと腰をあげた。

この男の後頭部には、醜い刀傷がある。それが原因で脳の一部を狂わせ、犬斬りのみに執

着する異常者となったが、これでももとは、南町奉行所の定廻り同心の一人であつた。

千野九十郎は、風に押されるような足取りで宙吊の千絵に近づき、その足首をぐいと掴んだ。

そして、また生あくびを噛み殺す。

「な、な、なにを！」

千絵が叫んだとき、千野九十郎は、いとも無表情な顔で、右手に握っていた竹針の先端を、この勝気な娘の足指に近づけていた。

「ひいーッ！」

脳髓を引き裂かれるような激痛が、千絵の背筋を走った。無理もない。九十郎の竹針が一瞬、地獄の針と化したのである。

足の親指の、爪と肉との間へ、ぐいッと押し込まれた竹針！ 大の男でも、その激痛に耐えきれず、ついには脳乱してしまうというおぞましい加虐の針……。

「刹帝利銭は？」

苦悶する千絵女を、冷酷に凝視しながら、頭巾侍が問いかける。

「そ、そ、そんなもの……」

ともすれば萎えんとする氣力をふり絞って千絵は反抗の言葉を投げた。

九十郎は、こみあげるアクビを押さえて、爪の間に刺入させた竹針を、ぐいッところねた。

「ひいーッ」

あまりの苦痛に身を揉めば、裾が割れ、宙吊りの縄が、ぎしぎしと手首に食い込む。梁の震動で、堆積していた埃が、まるで牡丹雪のように廃屋の暗い空間に舞い落ちた。

父譲りの刹帝利銭は、いま千絵女の帝の内側にある。その秘密を、いつまで守り通すことができるだろうか。

冥府盗賊

油屋小町のお芙沙は、あの夜から高熱を發して寝込んでいた。

その枕元で、犬太郎と名乗った小粋な遊び人が、あの黄金銭をひねくりまわしている。

「う……う」

とお芙沙が呻いた。

「可哀そうに……」と、つぶやいて、この男は片頬を歪めた。

町内の本道（内科医）は、もう大丈夫だとうけあって、いましがた帰ったばかりだ。

油屋の店は、伯母のお常が切り廻して、店の方で小僧に小言をいつている声が、この奥座敷にまで聞こえてくる。

「それにしても……」

つぶやいて遊び人の犬太郎は瞑目した。過去の一連のできごとを回想する顔である。

——油屋の店を妹のお常に任せて、おのれ

はお上の十手をあずかっていた油屋治助が、嵐の夜、袈裟懸けに斬られて斃れていた。この惨劇を、遠く影絵のように望見して駈けつけた遊び人犬太郎は、この太刀をふりおろそうとしていた頭巾侍に石を投げた。その石は下手人の左眼に命中し、無言のまま逃走せざるをえなくした。

重傷の治助は、すぐ近くの自宅へ担ぎ込まれ、外科の手当を受けたが、翌朝、意をひきとっている。

しかし、死ぬ前に、治助は不思議な話をした。

——明暦の昔、冥府党と称する盗賊が江戸を荒して、十万両近くの金を奪った。しかし奇怪なことに、四人組のこの冥府党は、お互いに仲間の顔を知らなかったという。

仲間にも素顔を見せず、お互いが冥府盗賊であることを確認する手立てとして、天竺の四姓にちなんだ四つの呼び名を利用した。

婆羅門、刹帝利、毘舍、首陀羅の四姓である。

四人の冥府盗賊は、盗みためた十万両を、一個所に秘匿し、一年後に再会して掘り出す約束で、お互いの身分証ともなり、秘匿場所を指示する案内割符ともなる四つの黄金銭を

こしらえた。

——しかし、その直後、明暦の大火の際に最後の仕事を計画したこの四人は、捕えられて斬首の刑を受けている。

「てまえが、その婆羅門盗賊の子孫で、代々黄金銭を受け継いでおりやす」

油屋治助は、死期の迫った声でいい、一枚の黄金銭を、遊び人犬太郎の手に押しつけたのだ。

「あつしは、必死になって、冥府盗賊の子孫たちを探しやした。そうして、やっとその一人で、毘舍盗賊の子孫が……お奉行所の、よ与力の、せ、せ……」

油屋治助が息を引きとったのは、この瞬間である。

——遊び人犬太郎は瞑想からさめた。

治助の娘のお芙沙小町が姿を消したのは、翌々日の夜で、このときは番太爺さんがお芙沙を担いで走る犬斬り浪人の姿を目撃している。

遊び人の犬太郎は、犬の死骸を求めて歩き廻り、ついにお芙沙を発見した。犬の死骸の近くに、犬浪人は必ず存在する……と考えたのだ。

「う……う」

そのお芙沙小町が、また呻いた。熱にうな

され、どんな悪夢を見たのであろうか？

犬太郎は、黄金銭をひねくりながら考え込んでいる。

その黄金銭は、表に△寛永通宝▽とあり、裏に、△婆▽の字と、△嘉▽の字が刻まれている。

婆——は婆羅門の婆であり、しかし嘉の字は何を意味するのであろうか……。

肌桜奉行

頭巾侍は、歪んだ笑みを浮かべて、三枚の黄金銭を朽ち腐れた床板の上に並べた。

△刹▽ △助▽——刹帝利銭

△毘▽ △簀▽——毘舍銭

△首▽ △央▽——首陀羅銭

「あとは、治助の婆羅門銭のみ……ふふふ」
笑って頭巾を取る。ととのった能面のような美貌であり、この顔を知らぬ悪人は江戸にはいないだろう。

しかし、白洲では、この顔が鬼よりも酷薄で惨忍な表情に変転するのだ。

南町奉行所吟味与力、瀬沼綱四郎——これが頭巾侍の正体であった。

瀬沼綱四郎は毘舍盗賊の末裔であり、偶然のことから、目明し治助が婆羅門盗賊の子孫だと知った。

しかし、治助を襲って婆羅門銭を奪う気になったのは、夜盗風の兵助を捕えて、この男の口から、残る二つの冥府銭の行方を掴む——という幸運にめぐまれたからである。

風の兵助は、首陀羅盗賊の子孫であり、しかも上方を荒していたときに、いつとき西紅脊一座の下働きとして身をひそめ、用心棒の榊原孫兵衛が刹帝利盗賊の血統を継いでいることを知ったのであった。

兵助と孫兵衛はひそかに名乗りあい、お互いにもう二人の末裔を探し出す約束をして別れたのだ。

その兵助は、番所牢の中で綱四郎の毒酒に斃れた。

すべての秘密を握った鬼与力瀬沼綱四郎の暗躍が、このときからはじまる。

「九十郎、もう一度お笑沙を奪うのだ」

ふたたび頭巾侍となった綱四郎は、飼犬のように手なづけている千野九十郎をせきたてて、廃屋の浄蛾院をあとにした。

苦痛のあまり、帯裏に秘めた刹帝利銭の秘密を吐いて失神した千絵女を放置したまま、二人は凍てついた夜道を急いでいる。

——しかし、そのころ、油屋治助の家は、北町奉行所配下の手の者で、極秘裡に忍び捕りの網が張りめぐらされていたのである。

瀬沼綱四郎と犬浪人の千野九十郎は、この忍び網にひっかかった。

殺到する捕物陣。——

裁く身の吟味与力が、いまはお白洲で裁かれる身となった瀬沼綱四郎。

白洲の砂をなめて、一段高き奉行席をキッと見やれば、そこに威儀を正した遊び人犬太郎の姿があった。

犬太郎——すなわち、桜の入墨で江戸っ子の人気をばくした遠山左衛門尉景元。北町奉行職に登用されて間もない花の姿……。

「これで、冥府盗賊の黄金銭は、四枚みごとに揃ったのう。武宮屋敷の廃屋で、無房の裸十手を振り廻した遊び人の犬太郎が、この景元の忍びの姿だと見抜けなかったのは、瀬沼綱四郎一代の不覚じゃ。ふふふ、見抜いておれば、ふたたび治助の家を襲うような愚は避けたであろうに」

左衛門尉景元はニヤリと笑った。

「冥府銭四枚で、悪銭の謎はみごとに解けたわ。嘉助簀、央——存じておるか。いまの髑髏簀、あれは明暦の昔、地主嘉助の名を取って嘉助簀と呼ばれていたのじゃ。その嘉助簀の中央に、盗みためた不浄の十万両は埋められている……」

これが奉行着任、最初の景元裁きだった。

犬の樂園

下須 畜男

秋吉 巒・絵

1

その夜、私はいつものように、パンツ一枚のはだかで、家から外に出た。

月のない夜。星ひとつない夜。神秘的な暗さが、この夜にあった。

晩秋の夜の空気をつめたさが、私の素肌に泌みる。

すでにもう十一時半。この地方都市の、しかも町をはなれた郊外には、一人の人影もなかった。

だが私は、本能的に足音を殺してあるいた。足にはいているのは

ズック靴である。底はゴムになっ
ていて軽い。

この夜の散歩のために、愛用の靴であった。私の心には快樂への期待があり、ズック靴は、いっそう軽かった。

西欧諸国でさかんになっているというヌーディストクラブのことを、ふと、私は思いだした。

健康と精神の自由のために太陽を浴びる、というそのヌーディストたちと、月もでない深夜、病んだ猫のように素肌をさらして道にあるく私のすがたとは、大きなへだたりがあるにちがいない。



それなのに、私はなぜ、そんな
明かるい国のことを連想したのだ
ろう。

道がほそくなった。

このあたり、家はもう、まばら
にしかない。田や畑や小さな雑木
林のなかに点在するだけである。

その家も、もうすべてあかりを
消してねむっている。

のほり道になった。道の両側に
枯れたすすきが白い波のようにゆ
らいている。なだらかな丘陵の上
に、風が吹いているのだ。

雑木林が、くろぐろとしたかた
まりをみせていた。この丘にすむ
けものたちが、背をまるめてねむ
っているような形の、雑木林の影
であった。

丘陵をのほりつめると、いきな
り平地になり、うそのようにしや
れた、二階建ての洋式の建物が、
私の視界にはいる。

丘をのほりつめ、この洋館を望
んだ一瞬が、私は好きだ。

アメリカ映画のなかの一場面が
そのまま、自分の目の前に現われ

たような錯覚をおぼえるからだ。

それほど、エキゾチックな眺め
なのだ。

建物をとりまく庭園には、十五
メートルおきに、水銀燈がたつて
いる。その青白い光りは、ひと晩
じゅう消えないのだ。

庭園には、テニスコートがあり
水泳プールもある。花壇がある。

その花壇に通ずる小道を、私は
しずかにあるいていく。

もう午前零時にちかいというの
に、建物はまだねむっていない。

客間には、あかあかと、灯がと
もっている。音楽がきこえる。

女性たちの笑い声がひびく。

ガラス戸は、カーテンにおおわ
れているが、そのカーテンに、人

影がうつっている。

私はその人影をみながら、建物
の北側へまわる。砂利を敷いた小
道を避け、芝生の上をあるいてい
けば、絶対にさとられることはな
い。

私の足は、まっすぐに目的の場
所へむかう。そして、すぐ、そこ

へ着く。

私は、ズック靴をぬいで、はだ
しになる。足のうらは、コンクリ
ートのざらざらした感触を踏む。
私にとって、それはなつかしい
官能をそそる感触なのだ。

そのコンクリートは、建物の内
部から外へはみだした汲みとり槽
なのである。

地面とすれすれの高さに、そし
て広さは三メートル四方もある、
大きなコンクリート槽の表面であ
った。

その中央に、円型の鉄板がはめ
こんである。汲みとり口である。

私は、その鉄板の把手に右手を
かけて、力いっぱい引いた。

コンクリートと鉄板が触れあう

音が、私のキモをひやす。

両手でつかみ、持ちあげた円型
の鉄板を、しずかに注意ぶかく、
芝生の上におろす。

コンクリートのゆかのまんなか
に、マンホール状のまるい穴があ
いた。私は、そこに顔をちかづけ
る。

暗く深い穴のなかから、異臭が
たちのぼってくる、しかし、私は
このにおいを、悪臭だとは感じな
い。若く美しい女性たちから発散
する香気のエッセンスだと思う。
私は、穴のなかへ両足をそろえ
ていれる。私の身心には氣力が充
実し、私の筋肉はまるでサーカス
の曲芸師のように身軽に、敏捷に
活動する。

この家の便所は「厚生省式改良
型」というのだ。水洗便所よりは
劣るが、こんないなかの、水道も
下水管もない丘の上の便所にして
は、ずいぶん費用をかけた、せい
たくな構造をもっているのだ。

私たちは、この便所をつくると
き、話しあったものだ。

「ずいぶん、でっけえくそつぽだ
なあ、これなら、一年ぐれえ汲ま
なくともでえじょうぶだ」

だが、この家の女主人は、神経
質に、二週間に一度ずつ汲ませて
いる。

私は、この町では、いちばん大
きな土建屋に働く、作業員という

わけである。人夫といっても同じだが。

2

この丘の上のお邸の土木建築のいっさいは、私のところで請負った。むろん、私もその仕事に従事した。

私は工事途中に、技師の手にある設計図をのぞき、便所の位置と構造を示す青写真をみたとき、大きな期待を抱いたのである。

私の勤務する店が、創立以来はじめて手がけるような、まるで雑誌でみる映画スターのお邸みたいにしやれた、その丘の上の家の工事がはじまったのは、去年の七月だった。

その日、私たち人夫は、真夏の炎天の下で、もろぬぎの肌から汗

をふきだしながら、敷地一帯の地にふった。ならしをやっていた。

頭上には、青空を背景にして精力的な入道雲が、もくもくとわきあがっていた。

私のとなりで、汗と土だらけになって松の根を掘りおこしていた同僚が、いきなり、

「おい、みろよ」

と私にいつて、大きく首を左手

私は、なんの気なしに、その同僚の視線を追った。

でっぶりふとって、横に大きいだけの下品な顔をした男がいて、そのうしろに彼女がいた。

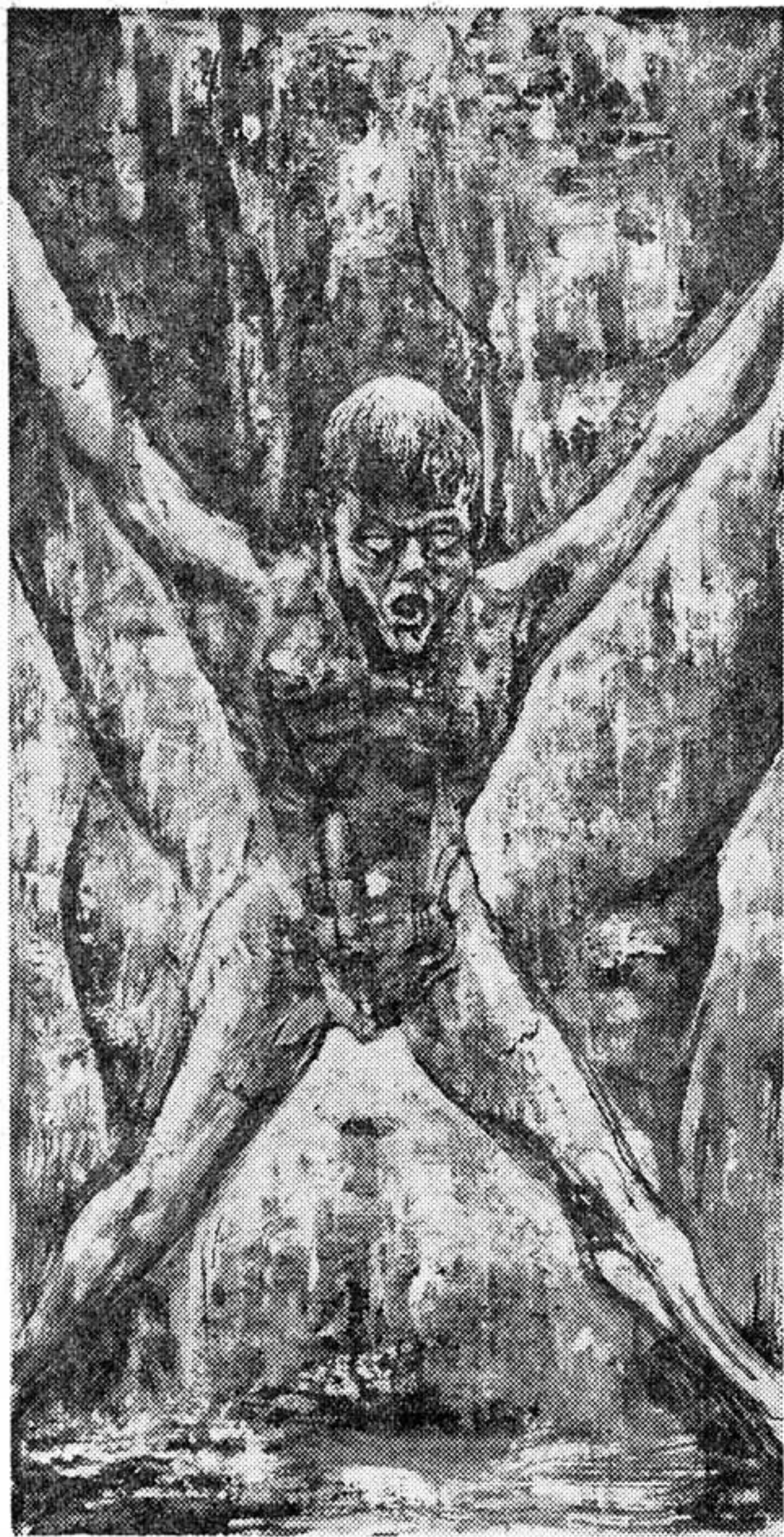
下品な顔をした男とは、私たちの社長である。その社長にべこべこ頭をさげさせている相手の女性は、したがって、この工事の依頼主に近い筋合いの人物にちがいない、と私は思った。

きらきら光る真夏の太陽よりも私の目に、その女性のすがたはまぶしかった。

この暑いのに、ごくうす地ではあったが、赤いスラックスをはいていた。

みごとにのびた下半身は、スラックスをはじき破りそうで、ことにふとももにびっちり密着し、まるで、素肌に赤い塗料をぬったようにみえた。

蜂のようにくびれた胴の上に、胸が高く大きく盛りあがり、白い半袖のブラウスもまた、乳房のた



めに突き破られそうであった。

女そのものの肉つきである。サ
ンドルをつっかけた素足の白い足
から、女のおいがむせかえるよ
うに発散していた。

左足の小指のところに赤土がす
こしつき、汚れていた。そのわず
かな汚れが、ひどく官能的な色に
みえた。

私は彼女の前にいきなり這いつ
くばって、その小指の汚れを、な
めてぬぐいたい衝動にかられた。

しかし、そんな勇気が、そのと
きの私にはあるはずなかった。

私には、あこがれと、おそれと
あきらめだけしかなかった。スコ
ップの手をやすめて、ほんやりと
眺めていた。むかし、黒人の奴隷
が、白人の女をみるときの心理は
こんなものではなかったか、と思
った。

「客間だけは、とくに念入りにや
ってね。私のところは、きれいな
お客さんが多いのだから」
と、彼女は青い図面をみながら
いった。

その声は、男のように、やや、
しゃがれていた。が、ききにくい
というほどではなかった。

なぜかその声に、私はいつそう
女を感じた。都会の女は、みんな
こういう声をだすのだろう、と私
は思った。

彼女の容貌は、まず色が白く、
目は切れ長の一重まぶたで、つめ
たい中性的な魅力があった。

くちびるには口紅をぬっていない
ようだった。髪も潔癖なほど、
みじかく刈りあげている。

正体不明の女だった。

やがて彼女は、黒いサングラス
をかけると、

「たのむわね」

といい残して、丘の下に待たせ
てあった車にのり、どこかへ帰っ
ていった。

彼女が工事場へ現われたのは、
私の知るかぎりでは、そのときが
最初で、最後だった。

私はどんなにか、あの、ふとも
もに赤い塗料をぬったようなスラ
ックスをはいた彼女が、雑木林の

あいだの小道から現われやしない
かと、心待ちに待っていただろう
か。

工事が完成したのは、翌年二月
のはじめであった。

そして待望の彼女は、三月の末
に、丘の上の新居に移ってきた。

そのころになると私は、彼女自
身が建築主であることを知ってい
た。だが、それ以上のことはなに
もわからず、町のひとびとは、大
金持ちのパトロンをもった女優か
なにかだろうと噂していた。

女優であろうと芸者であろうと

バーの女給であろうと、私の敬愛
する彼女の魅力には、なんの関係
もないことである。

家族は、彼女のほかに青年が二
人。計三人である。

その男というのは、二人とも眉
目秀麗な、青年というより美少年
とよびたいような人物であった。

若い男二人を混じえた彼女の生
活について、町のひとびとは、ま

た好奇心な風評をかわしあった。
二日おきか三日おきに、丘の上

の洋館から町へ買いものにおりて
くる。

そのときは二人の男のうち、ど
ちらかが自家用車を運転してくる
のである。

町の食料品店で、ことばすくな
く買いものをすませると、また車
をとばして邸へ帰ってしまう。

しかし、やがて邸に電話が架設
されると、町の商店での買いもの
は、みんな電話ですませるようにな
った。

3

私が、はじめて彼女の邸の汲み
とり口から貯りゅう槽のなかへし
のびこんだのは、あれは四月なか
ばの、なまあたたかい風がふく晩
だった。

私はもう、どうにもこうにも、
がまんしきれなかったのだ。なに
か魔性のものに魅入られたような
感じだった。仕事を手につかない
のだ。

切実に会いたいと思った。会っ
て、求愛するとか、交際をもとめ

るとか、そんな大それた気もちもは
まったくない。

貧しいこの人夫すがたを彼女の
前にだして、思いきり、さげすみ
の目でみられたい。だが、まとも
に会いにいったところで、会って
くれるはずはない。へたをすれば
彼女は悲鳴をあげ、今後を警戒す
るだろう。

私のような汚ない卑しい人間が
彼女のような美しい女性に接する
ことができるとしたら、やはり、
はじめに計画した、ここよりほか
にはないのだ。

この暗い湿った貯りゆう槽こそ
私が呼吸するのに、いちばん適し
た場所なのだ。

私は、工事が完成した二月のは
じめから、彼女が移転してくるま
での一ヵ月余のあいだに、この貯

りゆう槽の内部へ、ちよつとした
細工をほどこしておいたのだ。

コンクリートの内壁の上のほう
へ、六、七本の鉄鉤を打ちこんだ
のだ。カスガイ型になっているや
つである。

その鉤に手足をかけて壁にへば
りついていれば、下の貯りゆうに
没しないですむという、かんたん
な道理である。

だれにもみつからず、その作業
は完了した。私にとっては、やさ
しい仕事だった。

彼女と二人の男がこの邸にすみ
ついたのは三月の末。そして、な
まぬるく湿った風がふく四月なか
ばの真夜中に、私ははじめて、そ
の暗い、せまい、固い壁の鉤に、
手足をかけたのだ。

鼻をつく異臭は、すぐに異臭で
はなくなった。この家には、男が
二人いるという事実も、私の脳裡
から消え去った。この貯りゆう槽
に固体と液体を落とすのは、彼女
だけなのだ、という観念に私はお
ぼれた。

その夜、私の頭上には、三度、
液体が降ってきた。私は顔をあげ
た。胸を大きく上にそらせた。
なまぬるい液体は、はげしい勢
いで、私の額をぬらし、鼻をぬら
し、くちびるから、あごをぬらし

た。

うれしさに、私はのどから声を
あげて、むせび泣いた。念願がよ
うやくかなえられたのである。

あの美しい女性に、ようやく接
することができたのだ。異臭は、
まさしく芳香となった。私は陶醉
した。

それからは一週間に一度、いや
五日に一度は、かならず丘へのぼ
った。

貯りゆう槽のなかに、二時間ひ
そんでいると、たいてい、二度か
三度の恩恵にあずかる。

待てよ、妙だぞ、二時間に三回
とは。多くはないか、と不審を抱
いたとき、私は、ハッと気づいた
のである。

頭上から放射される際の液体の
状況が、三度が三度とも、ちがう
のだ。

放射の勢いと角度、さらに音、
そして量など、これらには微妙な
個人差があるものではないだろう
か。ということは、一人の女性が
同じようなポーズをとって放射す

るときには、三度が三度とも、ほ
ぼ同じ状態を示すのではないだろ
うか。

それがちがうのは、三度とも、
放射する人間がちがうからだ。
つまり、この邸には、この便所

を使う女性が、三人いるのだ！
暗い貯槽にへばりついたまま、
芳香も忘れて私は思考をめぐらせ
た。

一人は、あの美しいこの家の主
人。そして、あとの二人は？……
私には、すぐにわかった。

あの青年二人だ。美少年とよん
でもおかしくないあの人物二人は
じつは女だったのだ！

女性が、なぜ男装してこの家に
住んでいるのか、私にはよくわか
らなかったけれど、この推理に、
私は自信があった。

そして、この甘美な推理は、私
を有頂天にさせた。

常に男装している二人は、美少
年とみまचाがうほどだから、むろ
ん若く、美しかった。
つまり、この四角いコンクリー

トの貯槽は、まぎれもなく三人の美女の排泄場所なのだ。

私は歓喜し、芳香と液体にまみれる回数は、急激に増えた。

その結果、こまったことが、ひとつおきた。

まみれることはよいのだが、着

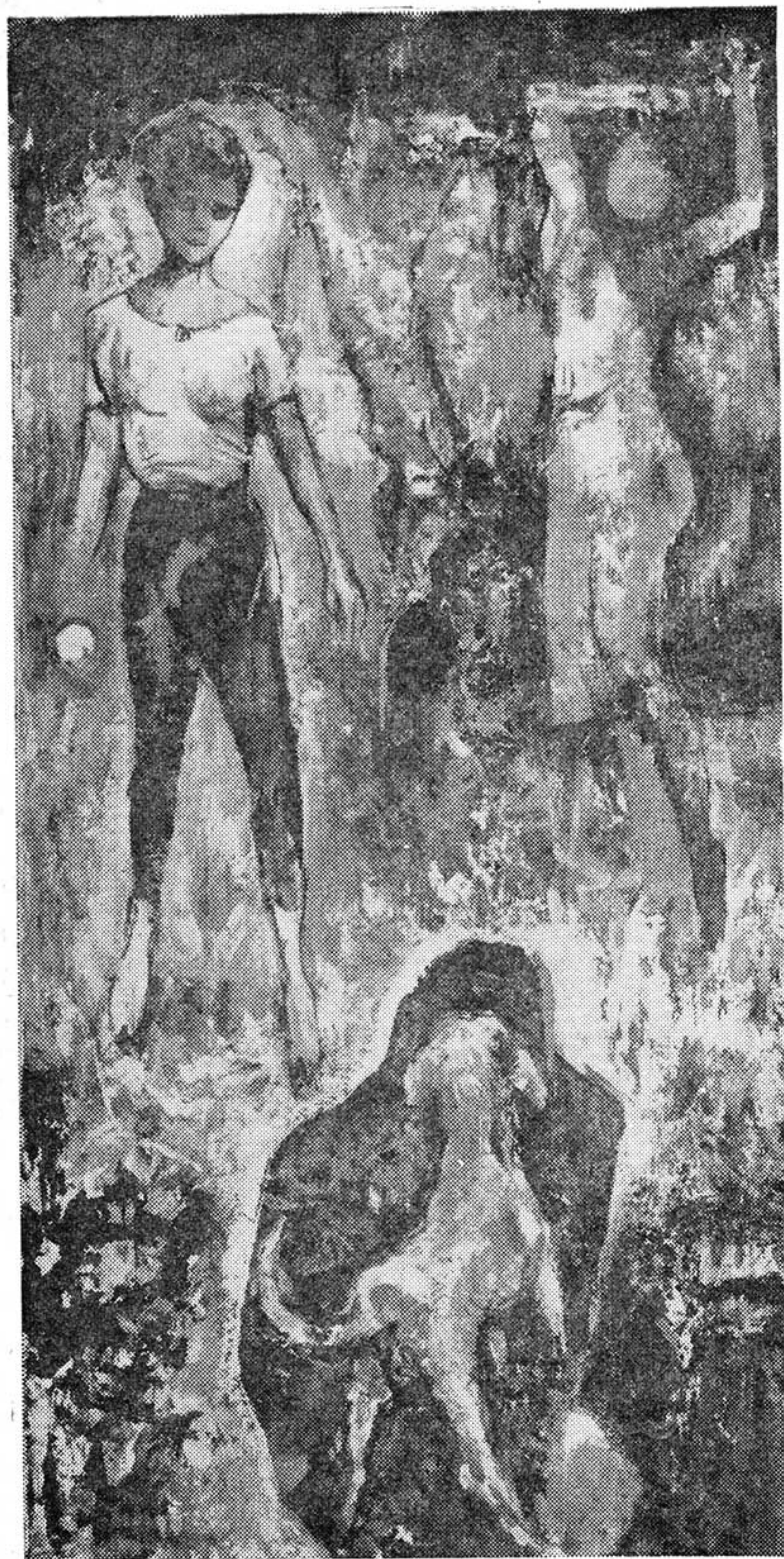
ているものがぬれて、外へ出たときには、さすがに悪臭を放つのである。

ふくれあがった欲望の前には、どんな汚臭も芳香だが、その欲情を存分に吐きだしてしまい、陶酔からさめた後では、やはり、悪臭

を自覚するのである。現金なものだ。人間の生理なんて、おかしいほど、現金なものだ。

悪臭のしみこんだ服をきて下宿へもどるのは、真夜中だから他人にはめったに気づかれないにして

考えた末に、私はパンツ一枚のはだかで行くことにしたのだ。こうすれば、彼女たちの液体も直接、私の素肌にあたるわけだ。一挙兩得というわけだ。



はげしい勢いでほとばしる液体を、じかに首すじや背中にかけて私は、十分にまんぞくする。

はじめて、この貯りゆう槽のなかで感涙にむせんだのは、ことしの四月なかば。そしていまは十一月の末。

七ヵ月間は、だれにも知られない秘密の愉悅のうちに、夢のようにすぎ去ったのだ。

私の感覚は、すでにもう、ベテランだった。昆虫の鋭敏な触角に似ていた。

いま私の頭上に、惜しげもなく足をひらいているのは、このお邸の女主人。もつとも美貌で、もつとも驕慢な放射の儀式をおこなうあの彼女である。

彼女のもののほとばしりには、たしかに個性があった。ほかの二人にくらべて、香気が高く感じられた。

やがて、音がやむ。白いやわらかい紙が、雪のかたまりのように

降ってくる。

私はそれを、動物園で芸をするなにかのケモノのように、じょうずに口をあけて受けとめ、そしてたべてしまうのだ。

この瞬間、私の欲情はクライマックスに達し、やがて完了する。私の全身を襲うけだるさ、疲労感。ぐったりと氣力が消え失せる感じ。

すると、いままでの芳香が、きゆうに耐えられないほどの悪臭と変じて、私の鼻孔に押し寄せる。

私は、あわてて貯りゆう槽から汲みとり口へ這いあがるのだ。

マンホールの穴をぬけ、まるい鉄板のふたを、ようやくしめ終えたときだった。

懐中電燈の光線の輪が、ふいに私の全身を照らしつつんだ。

私は目がくらみ、中腰になってまぶしい方角に対した。「くさいッ」

と、悲鳴のような女の声があがった。懐中電燈をにぎっているのが、その声の主だった。

「あんた、だれ。泥棒？」

と、べつの女の声が詰問した。発見されたのだ。ひざの力がぬけ、私は地面の上に、へたへたとすわりこんだ。

泥棒とまちがえられては困る。いちばん、こまる。

「ああ、ああ……」

私は、ことばにならない声をあげた。とにかく、謝罪することだと思った。

「すみません、すみません」

私は無抵抗を表意して、地上に平伏した。

世にも哀れな、いくじなしの男の顔をつくった。

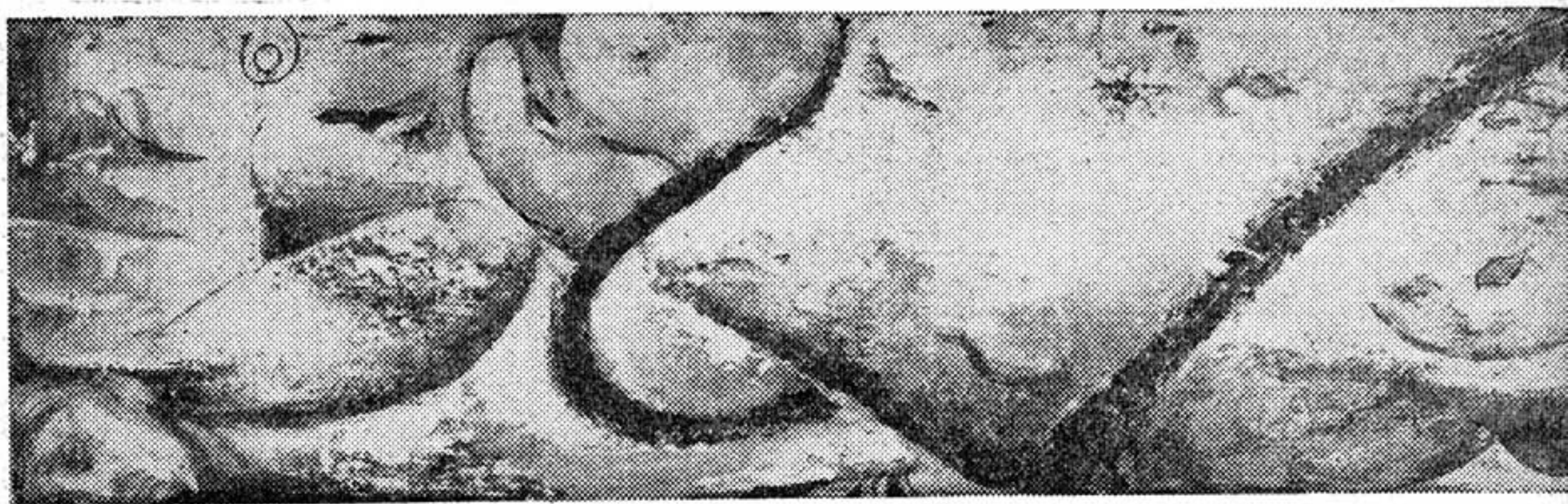
「けっして、泥棒なんかじゃありません」

泣き声をだし、なんともなんとも頭をさげた。

「じゃ、だれなのさ」

懐中電燈をにぎっている女がいった。光りの輪が接近し、私の全身を、まざまざと照らしだす。

「あら、このひと、はだかじゃないの！」



もうひとりの女が、サンダルの足を一步踏みだし、中腰になって私をたしかめ、かん高い声をあげた。

おどろくのが当然であろう。

汲み取り口のまるい鉄板の上にパンツ一枚だけの男が、両ひざをそろえてかしこまり、頭をぺこぺこ上げたり下げたりしているのである。

「ゆるしてください、ゆるしてください」

私は、なおも哀れっぽい声をあげた。

「なんだか、気もちわるいわね」
二人の女性は、顔を見合わせ、当惑の色をうかべた。

このとき、彼女ら二人の背後に足音が近づき、怒ったような声があがった。

「どうしたの。なに騒いでるの」

私の胸が、ドキンと鳴った。

まぎれもない、この邸の美しい主人の声。あの、適当にかすれて魅力的なひびきをもつ声音であった。

「だって、おねえさん。へんな男が、こんなところにすわりこんでいるのよ」

「へんな男？」

女主人が近づいてくる気配。

私は顔をあげた。私の視界のなかに、スラックスをはいた長い脚があつた。彼女の脚である。

暗いのでスラックスの色はわからないが、ももにびっちり密着して、素肌以上に足の線をあらわに誇示していた。

思わず呼吸がとまるほどの、迫力ある、すばらしい下半身であつた。

私は、ぶるぶるツと胴体をふるわせた。首のうしろの骨から背骨へ、さらに腰の骨のズイまでを一瞬のうちにつらぬく強烈な感動があつた。

私は我を忘れ、目ですがりついた。彼女の白い顔へ、熱い視線をむけた。

「おねがいです。私は、わるい男です。こんな夜なかに、だまってお邸のなかにしのびこみました。」

どうか私を叱ってください。ぶってください。なぐってください。どんなお仕置きもいけません。私を奴隷にしてください。おねがいです！」

私は舌をもつれさせながら訴えていた。

なみだが、ウソのように目からあふれた。けんめいだった。このチャンスに逃がしたら……。

両手をつめたいコンクリートにつき、その手の甲の上になみだをしたたらせながらの、夢中の哀願であつた。

「ふうん」

と、スラックスの彼女は、ためいきをついて腕組みをした。それから、私をじろじろと見まわしながらいった。

「おもしろそうね。なにかありそうね。あんたのお話をきいてあげようか。テニススコートのわきに足洗い場があるから、そこでからだをごしごし洗って、うちの中へおはいりなさい」

そういうと、彼女は私に、くる

りとおしりをむけた。

私は、ほうぜんとして、そのかたちのいいおしりを眺めたのだ。

いまのことばを、信じてよいものか。いや、信じるのだ。歓喜が胸の低から、じわじわとひろがってくる。信じなければいけない。

目の前に、まったくあたらしい運命が顔をのぞかせたのだ。たとえ気まぐれであろうとも、私はその運命の神にすがりつくのだ。

5

大きなタオルが、ぬれた私のからだにあたえられた。

さっきまではいていたパンツのかわりに、私はそれを腰のまわりに巻いた。

広い客間のなかだった。むろん洋室である。若い女性だけが住む家の客間兼遊び部屋らしく、はなやかで動的な色彩とかたちの装飾具が、やや奔放に室内をいろどっていた。

いまはカーテンがひかれているが、そのバラ模様の厚いカーテン

が左右にひらかれると、庭の風景がひろびろと見わたせる。プールと、その周囲につくられた花壇がそっくり眺められるはずだ。

「わりに、いいからだをしてるじやないの。あなた、お仕事は？」女主人がきいた。彼女は、ソファにふかぶと腰を沈ませ、長い足を組んでいた。

スラックスはもう脱いでいた。ぴかぴか光る桃色のガウンを着ていた。彼女の足のつまさき一メートルほどの位置、私は両ひざをそろえて正坐していた。

「はい、私、じつは昨年夏、このお邸の工事をしたときの夫人のひとりで……」

私は、なにかもしやべった。私の口は、ためらいも迷いも忘れてうごいた。

三人の美しい若い女性にとりかこまれ、バラ色のふんい気にはうぜんとなり、私はあたたかい雲のなかにいるような気もちだった。なやましい香料のにおいにつつまれ、なにかに憑かれたように、

私はしゃべりつづけた。なにもかも吐きだしつづけた。とめようとしてもとまらなかった。

貯りゆう槽のなかにもぐりこんで液体を浴びる恍惚の心理状態までも、つぶさに語ってしまったのだ。

三人の女性は、はじめは私の顔を、さも汚ないもののように眺めて、相手にしなかった。私の話をまったく信じない顔つきだった。

わずかな好奇心だけが、彼女の表情にあった。

しかし、私の舌が熱を増すにつれ、しだいに、呆然と私の顔を見つめた。

やがて、その呆然の表情のなかに、私への、いっそうの軽蔑と、怒りと、自身への羞恥と、そして最後に、激怒の目の色を示したのである。

「まあ、あんたって人は！」
「すみません。さぞお怒りでしゅう。ごもつともです。どうか、お気のすむまで、そんぶんの目に合わせてください。覚悟しておりま

す。どんな苦痛も耐えて、おわびのしるしといたします」

私は、ゆかに額をすりつけた。彼女は、怒りをおさえた微笑でいった。

「なにいつてるの。おわびのしるしだなんて。あんた、あたしたちに、苦痛をあたえられれば、そのほうがうれしいじゃないの」
けたたましい嘲笑が、私の頭上に降った。

「あんたみたいな男に会うのは、いまがはじめてじゃないのよ、あたし」

彼女の白い長い足のつまさきが私の鼻さき二十センチの距離までずいとのびた。

腰をソファに沈めたまま、右足のさきだけを、まるで猫か犬でもからかうように、私の顔の前にはばしたのだ。

「あたしにこんなりっぱなお家を建ててくれた男、つまり、あたしのパトロンね、その男は、あたしの皮鞭がとても好きなの。手つとり早くいえば、このお家は、あた

しの皮鞭で建てたようなものなのよ、わかる？」

わかるどころではない。私の全身に、また、ゆえ知れぬ戦慄が襲った。

私の直感は適中していたのだ。

あの真夏の太陽が照りつける建築現場で、なぜ私があんなにも強烈に彼女に心をうばわれたか、その謎が解けたような気がする。「望みどおりにしてあげるよ。退屈しのぎにね」

そういうと、彼女はいったん客間を出た。

ふたたびこの部屋にすがたを現わしたとき、彼女の右手には、長鞭がにぎられていた。

すさまじい威力を秘めた、あきらかに皮鞭だった。にぎる部分が異様にふとく、黒光りしていた。

黒光りは、手垢のせいにはちがいない。にぎりの部分がいちばんふ

とく、それから次第に細くしなやかにになって、先端はまるで紐のようになまかく編まれていた。

「はじめよ」

彼女の両眼が、きらきら光りはじめた。青みを帯びた瞳だった。

「とにかくお前は、あたしたちのもっとも恥ずかしいポーズを、だまってさんざん観賞していたんだからね」

私は玩具の犬のように、四つん這いになったままだった。鼻のさきの彼女の足が、スリッパをぬいだ。鞭をふるうには、足さきに力がある。そのためにスリッパをぬぎすてたのだ。

指が白くまるく光った。まるで十個の宝石だった。その宝石を、ぱくりと口にいたい欲望を、私はかろうじて耐えた。

十個の宝石が、赤みを帯びた。つまり、足の指さきに力がこめられたのだ。私は目をとじた。

彼女は皮鞭をふりあげたのだ。私の背に、それが、ついにふつてくるのだ。

音がした。私は思わず声をあげその声をのんだ。鞭が鋭敏な生きもののように私の肉にくいこみ、灼けるようなショックがあった。

同時に、骨のズイからわめきだすような快感が、私の全身の神経をつらぬき、瞬時に充滿した。

「どう、感じは？」

頭上に、声がした。勝ちほこつたような、驕慢な声音だった。

「は、はい」

と私はこたえたつもりだが、声は、ただのうめきだったにちがいない。

二度目の鞭が、肩さきから背中へ、ななめに襲った。私は吠え、その痛撃に思わずのめり、腹をゆかにつけた。

「いくじなし！」

三度目の鞭が、私の背中をはじいた。

苦痛とか、快感とか、そんなうすっぺらな感覚を超越した激烈な陶酔が、私の全霊を浸した。

真紅に燃えた熱いかたまりが、まぶたのうらで踊り狂った。

私の目は、ものをみることを忘れ、耳は何もきこえなくなった。

私は口をあけ、よだれをながしてのたうちまわった。

これが極楽だ、おれの天国だ、と燃えさかる火の渦のなかで、私はわめきつづけた。

いつそうするどい音が肌に鳴つて、私は高压電流に触れた犬のよう

に、腹を上にしてはねかえる。過去も未来もなく、現実も夢幻もなかった。

私は、のどを、せいぜいとあえがせた。私の顔の真上に、五個の白い宝石の粒をもった足のうらが乱暴にのつた。

「どうだ」

と、天国からの声がひびいた。

「おねがいです」

と、私はあえいだ。

「私を、いつまでも、ここに、ここにおいてください。下男がわりに！」

私は、なぜか泣き声をあげていた。涙が、とめどなく私の目からのどからあふれた。

「おねがいです」

哀願しながら、私の意識は、さらに強烈な快感の渦のなかに巻きこまれていった。

赤坊修業の弓子

北園透一郎

1

Qが部屋に戻ると、そこでは、まゆみが最後の仕上げをすませ、Qの帰りを、からだを固くして、じっと待っていた。

「こちらへおいで」

Qは、机の前の椅子にゆったりと腰を下ろしてから言った。

「ハイ」

まゆみは、化粧椅子から立ち上がった。いつのまにか彼女は、ふっくらしたピンク色の化粧着で身体を包まれている。

まゆみは、そっと歩いてQのそばまでくると、一礼して、

「どうぞ」

と、小さな声で言った。

「もっとはつきり言うのだ。それとも、まだお仕置きが足らんのか」

Qは、ニヤリと笑った。

「はい、どうか、おゆるし下さいませ。あのどうぞご自由にして下さいませ」

まゆみは、いよいよ小さな声で、恥ずかしそうに言った。

しかし、この言葉の調子には、Qに対する媚が混っていた。

いつの間にか、まゆみは完全な女奴隷になってしまっているのだった。

「フフフフ。よし。もっと近くにくるのだ」

Qは満足気な笑いをもらしながら、さらに近付いて来たまゆみの化粧着の、首から長く下っていたひもを、ちょっと引いた。

すると、ゆるくまとっていた化粧着は、ま

ゆみの肩からさらりと脱げ落ち、彼女のなまめかしく化粧された豊かな四肢は、すべてQの目の前にあらわになった。

「フム」

Qは葉巻きに火をつけ、椅子に深く坐りなおすと、ねっとりとした光る視線で、ゆっくりまゆみの全身の鑑賞を始めた。

まゆみは、それに合わせるように、モデルポーズで、Qの目の前でひとまわりして見せる。

「よし」

やがてQが言った。

するとまゆみは、両手を背中で組んで、Qの方に向けた。

「どうぞ、縛って下さいませ」

「フフフフ。まゆみも、本当にいい女の子に

なったね」

Qは笑いながら、まゆみの手に、用意してあった皮手錠をはめた。

「では、これでお前の訓練は、全部すんだことにしてやろう。これから、今までの訓練をいろいろ応用する。本当の女奴隷の生活に入ってもらおうとしよう。いいな。いやなら、もう一度初めから、訓練しなおしてやってもいいのだぞ」

「ハイ、結構でございます。まゆみは旦那さまの奴隷でございますもの、どのようなでも、お気のすむままになさって下さいませ」

まゆみは答えると、後手錠のまま、Qの椅子の前のゆかに正坐して、ふかく頭をたれた。

「フフフフ。そうか。そうか」

Qは、満足げに葉巻きの煙を吐いた。

「ちようにどお前のような、従順でグラマーな女奴隷をほしいと言っておられる方があるから、お前をその方にゆずるとしよう。さっすぐだが、今夜のセリ市にお前を出すことにする。フフフフ。心配しなくてもいい。わしがきめた人のところにお前が落札されるようにちゃんと、とりはからってやるからな」

「アッ、そんな。おゆるし下さい。おゆるし下さい。どうぞ、いつまでもここに置いて下さい。どうぞ、いつまでもここに置いて下さい。」

い。どんなことでもいたしますから。どうかお願いでございます」

まゆみは、びっくりしてさけびながら、Qの足に口づけしようとした。

しかし、Qはすぐに足を引いた。

まゆみは、そのまま、ゆかの上にくずれ折れ、ワッと泣き出した。

「どうぞ、どうぞ、まゆみをこのまま、ここにいさせて下さいませ。ほかのひとのところにいくのはいやでございます」

「フフフフ。だめだ、だめだ。もう決まってしまったことなのだ。お前の旦那さまは、お前を歓迎する準備をして待っておられるのだから。今夜は、きつと、たっぷり可愛がって下さるだろうよ。フフフフ。だいたい、私はお前のように訓練の仕上がった女には、興味がわかんのだ。自分の運命をあきらめてしまつて、私の目の前に身を投げ出すような女にはな。」

いいか。わたしの好きなのは、わたしのすることひとつひとつを、何でもいやがつて、泣きもだえる女なのだ。娘だった頃の気持ちを忘れないで、ハレムの生活を嫌がつている女を、いじめたり、恥ずかしがらせたりするのが好みなのだ。たとえば、いま、臭気責めの部屋で泣いている弓子のように。もっと

も、お前も初めの頃は、いろいろとわたしを楽しませてくれたものだった。フフフフ。

とにかく、わたしは、もうお前には用がなくなつた。だが、お前のきれいなからだを、このまま放つておくのはもったいないから、ほかの紳士方の役に立ててもらおうと思うのだ。いいな。それに、今夜は、お前の代わりに、ひとみという新しい娘が、このハレムに入つてくることになつていたので、監禁室のほうも早くあけてもらわねばならん。新入りの娘に似合うよう、少し改造することになつていたのでな。新しい娘も、お前のようなグラマーガールらしいが、まだウブな処女だ。当分、わしを楽しませてくれるだろう。フフフフ」

Qは、足もとで哀願を続けているまゆみを見下ろしながら、因果をふくめていたが、

「ちよつとうるさいぞ。では、最後のお仕置きをしてやるか」

と、言った。

「どうか、まゆみをお売りにならないで。お願いでございます」

まゆみは、いっそう哀れな声を出した。しかし、Qは、その口に無造作に皮のさるぐつわをはめてしまつた。

さるぐつわがはまると、まゆみは静かにな

った。

やっと、あきらめたらしい。

「フフフ。よし。では、テーブルになってもらおうか」

「むッ」

まゆみはうめいたが、からだはQの命令通りに動き、たちまちQの椅子の横に、白い生きたテーブルが出来あがった。

まゆみが、手足でからだを支え、弓なりにそったのである。

Qは満足そうに笑いながら、まゆみの手足に枷をはめ、その形のまま、ゆかに固定してから、ウィスキーのびんとグラスを、そのやわらかなテーブルの上にのせた。

「うッ、むッ」

冷いグラスを、腹の上にのせられたまゆみは、ぶるッとからだをふるわせる。

「おっと、落としたら、どんなことになるか、知っているな。じっとしているのだぞ」

Qは命ずると、ウィスキーをなめながら、テーブルの上に置いてあったファイルを読み始めた。

ファイルの表紙には、「ひとみ」としてさられている。

まゆみのかわりに、この零号ハレムに連れてこられる新しい娘の調査記録なのだ。

しばらくすると、お化粧をすませたスマイレが部屋に戻って来た。

淡いブルウのアフタヌンドレスを着たスマイレは、見なれているはずのQでさえ、眼を見張ったほど美しく優雅であった。

スマイレは、おずおずとQの前までくると、一礼して言った。

「アノ、お乳のお仕置きは、もうかんにんして下さいませ。今度からは、きっと自分でいたしますから」

「フム、初めからそうしていれば、あんな目に合わずにすんだのだ。馬鹿なやつだ」

「ハ、ハイ、申しわけございません」

スマイレは、屈辱の涙を歯をくいしばって、必死にこらえている。

「どうぞ。スマイレを存分にして下さいませ。そして、どうにでもお仕置きなさってくださいませ」

「フフフ、今日はひとつ、自分で脱いで見せてもらおうか」

「ハイ。か、かしこまりました」

スマイレは、うつむいて自分のドレスを脱ぎ始めた。美しい瞳には、こらえきれない涙がキラキラ光っている。

しかし、彼女は泣き出しはしなかった。

泣いたりしても、新しいお仕置きが待って

いるだけであることを、よく知っていたのである。

スマイレは、下着から上のドレスまで、なにひとつ省略せず、きっちり着せられている。

彼女はその一枚一枚を、ういういしい新妻のように恥ずかしそうにしながらゆっくり脱いで、Qのテーブルの上にていねいにたたんで重ねていった。

やがて、最後のものが、スマイレのからだからはなれると、Qは満足そうにうなった。

そこには、お仕置きのあともすっかり消えた、みずみずしいなめらかな肌が輝いていた。「こちらへ来て、よく見せてもらおうか」

おごそかに命じて、スマイレを自分の前の台に坐らせ、若々しい引き締まった四肢をしばらく楽しんでから、用意してあったチャドルでスマイレの顔を包み、ごくうすいナイロンでできたピンク色のガウンを着せた。

「では、あちらの椅子にお坐り」

Qはテーブルの後方に据えてあった椅子を指した。

「ハイ」

小さく返事をしたスマイレは、Qの前の台から降りると、示された椅子に腰かけた。

「教えた通りのポーズをとるのだよ」

「ハイ」

スマイレは、恥ずかしそうにおずおずと腰をあげ、さらに片足だけを椅子の上にのせ、膝をたてた。

つぎに、両手を頭のうしろにあて、形のいい胸をそらせた。

これでスマイレの美しいからだのすべてが、Qの目の前にさらされる結果になるのである。

チャドルで顔を隠して、羞恥に全身をピンク色に染めたスマイレは、うすいガウンをまとっているだけに、いっそうハレムの女にふさわしい妖しいなまめかしさがあふれていた。「フフフフ、お前もきき分けがよくなってきたな」

Qは、まゆみの肉体で出来ているテーブルから、ウィスキーグラスを取り上げながら言った。

「この分では、近いうちに、お前もお嫁にやらなくてはいけないようだな。もっとも、普通の意味のお嫁さんには、そのからだでは、とてもなれないだろうがな。まあ、お前にふさわしい旦那さんをそのうちにさがしてやろう。フフフフ。そんなに恐ろしそうにしないでいい。まだ当分はここで花嫁修業の仕上げをしてやるから。そのほうが結納金もたくさんもらえるからな。フフフフ。とにかく、

そろそろお前のかわりの新しい娘の手配をせねばならんな。今度はどんな娘にするかな」

Qは、スマイレの反応に目をほそめながら、父親のような声で言った。

スマイレは、恐怖の色を浮かべながらも、じつとこらえていた。

この椅子でポーズをとっているときは、身動きはおろか、声を出すことさえ禁じられているのだ。

その時、机の上のインターホーンが鳴り始めた。

「そろそろ、弓子ちゃんのお仕度を始める時刻でございますが」

「ウム、そうか。頼む」

「かしこまりました」

インターホーンの声が切れると、すぐに、弓子に専属の世話係と美容師がやって来て、臭い部屋でうめいている弓子を、移動椅子にのせて運び去った。

別室で、臭くなった全身を洗い、外出の化粧をほどこすためである。

2

Qは、弓子の連れてこられるのを待っていた。

テーブルにされているまゆみの低いうめき

声と、目の前にさらされているスマイレの美しい肌を、楽しみながら待っている。

もちろん新しく入荷してくる、ひとみの記録を読むのも忘れない。

「今頃は、まだ何にも知らずに、ニューモードの宣伝でもしているのだろう」

Qは、つぶやいてニヤリと笑った。

「今夜は、ファッシュショウでもひらいて見せてもらうとするかな。フフフフ」

Qがひとみのファイルをとじながら、ふくみ笑いをうかべていると、移動椅子に固定された弓子が、部屋に戻って来た。

世話係は、弓子の椅子をQの前まで押して来てから、弓子のからだに掛けてあった白い布を取った。

「いかがでございますか」

「フム。いや結構、結構」

Qはこたえて、目を細めた。

臭くなった全身に、たっぷりシャワーをあびて肌を洗った後、念入りな化粧を受けた弓子には、あの屈辱の時間のあとは、もうまったく見られなかった。

それどころか、連れてこられてきた時以上に、清純な、おかし難いほどの気品に輝いていた。

「フフフフ、まったく可愛らしい」

Qは、うっとり弓子を眺めまわす。

「いや、いや。見ないで。あっちを向いて」

弓子は悲鳴をあげながら、固定された椅子の上で、みじめなからだを隠そうともだえている。

「よしよし。それではお洋服を着せてあげようね。おとなしく着せてもらうのだよ」

Qは微笑して、世話係に合図した。

世話係は、移動椅子から弓子を解いて、ベッドに移し、いやがる弓子をあやししながら、外出の支度を始めた。

「さあ、いい子ちゃんだから、じっとしててちょうだい。あんまりあばれると、お洋服を着せてあげないわよ。裸のまんまで、オンソに出るのはいやでしょう。ホホホホ。」

そうそうお利口ちゃんだこと。そうやっておとなしくオネンネしててちょうだいね。すぐに着せてあげますからね。

じゃ、まず、これをはきましようね。ホラお医者さまのお言い付け通りに、内側に鳥の羽根が植えてある、下着を用意しておいてあげたわ。うれしいでしょう。アラ、だめだめ。ちよつとのあいだでいいから、じっとしててちょうだいね。すぐに身をもだえることは出来なくなるわ。それに、足枷もまた、ちゃんとはめてあげますからね」

「いやッ、やッ、かんにんして。かんにんしてッ」

世話係は、いやがる弓子の髪を押さえつけ、おいて、純白のうす絹で出来た肌着を弓子にびっちりはかせた。

「アーッ」

弓子は悲鳴をあげ、全身を羞恥に染めて、ぶるっとふるえた。

しかし、すぐに身をもだえることは出来なくなっていました。

「ホホホホ。どう。もう観念するわね」

世話係はうれしそうに笑うと、今度は鉄のベルトを取り上げた。

「じゃ、今度はこれをはめようね。いったんはまってしまったら、錠がなければ、絶対にはずれないわ。もし、弓子ちゃんが逃げ出したりしたら、一生お腰にはまったままになるのよ。いいこと。もちろん弓子ちゃんはお利口だから、逃げたりしないでしょうけど、ハレムの女が外出するときは、このベルトをはめるのがエチケットなの」

世話係は、ほっそりした弓子の腰に、がっちりした鉄の帯をほどこした。

もちろん、弓子のサイズに合わせて作られたもので、錠をかけると、弓子の曲線にぴっちり合った。

「いや、いや。こんなものいや。はずしてください。お願い。弓子、けっして逃げたりしませんから」

「だめだめ。大事な赤ちゃんを、裸でオンモに出してあげるわけにはいかないわ。いい子だから、聞き分けてちょうだいね。アラアラ、泣かないで、泣かないで。そんなに悲しいの。それじゃ、スカートをかけてあげるわ。ホラ、これでいいでしょう」

ベルトは、白いスカートで隠された。

しかし、そのスカートは、ごく短いもので弓子がおけると、すぐまくれあがってしまった、腰のあたりがあらわになってしまうような布きれであった。

「ホホホホ。じっとしてはだめよ」

世話係は笑うと、今度は上着を着せた。上着は、ブラジャーを兼用するもので、セパレーツの水着のものと、よく似た形をしている。

つまり、乳房から上だけをおおうデザインで、弓子のお腹のあたりの肌は、露出したままになるものである。

おまけに、上着の内側の、ちょうど乳房にあたる部分は、下ばきと同じように柔らかな羽根が一面に植えてあった。

従って、これを着せられると、弓子はもう

ほとんど身動きも出来なくなっていました。
「ああ、かんにんして。かんにんして。じつとしていますから、ちゃんとしたお洋服を着せて」

「ホホホホ。だいぶくすぐったいようすだわね。弓子ちゃんのお肌は、とっても柔らかくて敏感だから、無理もないわ。さあ、がまんして、じつとしていきましょうね。だんだん気分よくなってくるわ。さあさあ、そんなに泣かないでちょうだい。いい子だから。そうね。それじゃ、ここで旦那さまにさるぐつわとチャドルをはめていただきますしょうね。静かにしていられるようにね」

世話係は、泣きだした弓子を、ベッドから起こし、移動椅子にふたたび固定して、Qのそばに運んだ。

「フフフフ。さあ、こちらへおいで。すぐに可愛いお口にふたをしてあげるからね」

「アラ、いいわね。じゃ、これを使っていただきましようね。ホラ、さっき弓子ちゃんが臭いお部屋で作ってくれたものよ」

世話係は、ビニール袋に入った小さな布をQにわたした。

その中には、もちろん弓子の大量の放出液でぐっしりぬれた上、充分にむらされたオシメが入っているのである。

「いや、ひどいわ。ゆるして。そんな汚いものはかんにんして」

「なにも汚いことはないだろう。さっきまで弓子のきれいなお肌にあててあったものなのだから。フフフフ。さあ、アーンしてごらん。すぐに、ちゃんとしてあげるから」

「いや、いやです。どうして、いつもお口をくくるの。弓子、おとなしくしていますからかんにんして。お願い」

「ホラホラ。いつもそんな泣き声を出すからだ。それに、弓子のお口をくくっておくと、とっても可愛いしね。さあ、言うことをきいて、このぬれた自分のものをお口のなかに入れようね。いい子だからね。フフフフ。そんなに、いやなのかね。よしよし、それじゃ開口器を使ってあげよう。もうあきらめるのだよ」

「あーッ、ゆるして。あッ、あッ」

「ホーラ、もう、お口はとじられないだろう。フフフフ。じゃ、ちゃんと詰めて上げようね」

Qは、ビニール袋から、ぐっしりぬれた布きれを取り出すと、弓子のもだえを楽しみながら、ゆっくり口のなかに押し込んだ。

もともと、これは、このような目的のために作ってあるもので、弓子の口の大きさに、きっちり合う大きさになっているのだ。

「ウツ、むうん」

Qは、早くもうめき始めた弓子に、うすいファンデーションとなめし皮の、二重さるぐつわをはめ、つぎに、同じようにして作った汚れたオシメの布で弓子の顔を包み、チャドルをした。

「さあ、これでいい。じゃ、コートを着せておもらい。フフフフ、泣くんじゃない。泣いたってさるぐつわもチャドルも、はずれやしないんだからね」

「むっ、むっ」

「ホホホホ。においやお味はいいが。そんなにうらめしそうな顔をしないでちょうだい。弓子ちゃんのおシッコじゃないの。それに、弓子ちゃんがお医者さまのところでいい子にしていれば、こんなことにはならなかったのよ。だから、今度はいい子にしていなくてはだめよ。でないと、また帰って来てからもっともつと、恥ずかしいお仕置きをするわよ」

世話係は言いかけながら、弓子の後手錠と足枷を嚴重なものに取り換え、びったりした外出用のコートでくるみ、外出用の嚴重な移動椅子に固定した。

「じゃ、いい子ちゃんदैいっていらっしやいね。とってもおいしいお昼を食べさせて下さ

るわ」

世話係はまるで母親のように弓子に言う

Qに向かい、

「支度が出来ましてございます」

と、一礼した。

Qは、せつなくもだえている弓子を眺めて

ニヤニヤ笑っていたが、

「いや、ご苦労。では、出かけようかね」

と立ち上がった。

その時、ふと思いついたように、Qは、持

っていた羽根で、横に無防備な四肢をのぼし
ているまゆみの肌を、すっとなでた。

「うっ」

不意をつかれたまゆみは、おもわずもが
いた。

まゆみのお腹の上にのせてあったウイスキ
ーびんとグラスは床に落ち、ガチャンとくだ
けた。

「粗相したな、まあ、お仕置きは、今夜新し
い旦那にしてもらうのだな。報告しておいて
やるからな」

Qは満足気に笑って、世話係に向かい

「まゆみは予定通り出荷してくれ。監禁室の
改造は、もう始めているのだろうか」

と、たずねた。

「ハイ、新しい娘の入って来る六時までには

全部すむようになっております」

「ウム、よし。ではちよつと行ってくる。ス

ミレは、すこし運動させてから休ませてやれ。

それから、ひとみの連れだしが成功したら、

すぐにわたしに知らせしてくれ」

「かしこまりました。行っていらいっしやいま
せ」

世話係は頭を下げた。

Qは、弓子の坐らせられた椅子を押して部
屋を出た。

後には、スミレの、ワツと泣き出す声と、

まゆみの最後の哀願の沈痛なうめき声が聞こ
えた。

それは悲しい哀れな合唱だった。

3

弓子は、そのまハレムを出て、地下七階に
あるレストランに運ばれていった。

弓子が初めて連れてこられたこのクラブ形
式のレストランは、ナイトクラブを兼ねてい
て、食事どめや夜に上演されるショウと、美
しいウェイトレスが売り物であった。

普通のレストランを想像していた弓子は中
に入って目を見張った。

正面の舞台を前にした客席は、ボックス式
になっており、照明はうす暗かったが、そこ

にいる三組の客たちのようすが見えないほど
ではなかった。

客席の紳士たちは、テーブルを前にゆった
り腰を降ろし、食事をしながら、ショウのは
じまるのを待っている。

弓子をおどろかせたのは、その紳士たちの
そばにはべっている女たちの異様な姿であ
る。

一人の女は、弓子と同じような大きな赤い
コートに全身をくるまれて、紳士の隣りに坐
らせられ、嚴重に固定されていた。

コートの中ではきびしくうしろ手に縛り上
げられているらしく、背中あたりにふくら
んでおり、顔はチャドルを兼用するような大
きなざるぐつわで、たっぷりおおわれている。

女は、椅子に固定されたまま、深くうなだ
れていたが、ときどき涙のたまった美しい瞳
を、男の豪華な食事に向けて、低くうめいて
いた。

女の前には、大きなコップに入った黄色い
液体が入っているだけであった。

「どうだ。腹がへっただろう。ゆうべから、
何も食わずに責められ続けなのだからな。だ
が、これを飲むというまでは、何も食べさせ
てやらんぞ。なにもきたないことはないだろ
う。ゆうべ、お前の体内から出てきたものじ

やないか。どうだ。もう飲むか？」

女は、弱々しく首を横にふった。

「フフフフ、そうか。じゃ、飲みたくなるまで待ってやろう。時間はいくらでもあるのだからな」

コップに入っているものは、まさしく自分の体内を通過した液体なのだ。

もう一人の女は、さらに哀れであった。

彼女は、黒光りする皮のパンティだけにされた四肢を、細い皮ひもで嚴重に縛りあげられ、客の足もとの冷い床に正座させられていた。

口には、皮の玉をふくませられる嵌口具がはめられており、首輪の鎖が、テーブルの脚に固定されている。

彼女は、愛玩用の美犬なのだ。

主人の食事が全部すんでから、嵌口具だけはずされて残飯があたえられるのである。

それまでは、じっと床に正座したまま、主人の足で愛撫を受けていなければならないのだ。

客席のいっぽうのすみでは、美しいウェイトレスの一人が、制服のチャイナドレスを脱がせられて、客の紳士の手で、冷い鎖の拘束具をはめられているところであった。

クラブ形式のこのレストランでは、ウェイ

トレスの自由を買うことも出来るのである。

彼女は、なまめかしいウェイトレスの姿から、たちまち、重く固い枷を全身にほどきされた哀れな女奴隷の姿に変えられていった。

Qはニヤニヤ笑いながら、おどろきと恐怖に目を見開いてふるえている弓子を眺めていたが、

「ホラ、あそこをごらん」

と、ステージの片すみを指さした。

弓子はそこを見ると、すぐに真ッ赤になってうつぶいってしまった。

そこには、ガラス張りの小さなトイレが作られていた。

そして、ウェイトレスの一人が、そこにしゃがんでいたのである。

そのトイレは、ウェイトレスたちのためのものであった。

そのトイレを使用することによって、自分の宣伝をさせられているのである。

ウェイトレスたちは、客の用事のない限り一時間ごとに、そこを使うように命じられているのだ。

「弓子も言うことをきかなかったり、オイタをしたりしたら、あそこで、シイコイコイさせるよ。フフフフ。だから、おとなしくお昼を食べなくてはだめだよ。いいね」

弓子は、うつむいたまま、従順にうなずいた。

その哀れなあきらめの表情に、Qは満足そうにまた笑った。

そこへ、なまめかしいチャイナドレスの制服を着た、目のさめるように美しいウェイトレスが現われ、

「こちらへどうぞ」

と、弓子の坐らせられた移動椅子を、背後から押し始めた。

弓子は、Qが予約しておいた特別室に案内された。

特別室は、入口に錠が下ろせるようになっており、正面にはめられた大きなマジックガラスを通して、舞台が眺められるようになっている。

ここは、弓子のような、ほかの男たちから見られたくない大切な女を、隔離して食事をさせることの出来る部屋なのだ。

マジックガラスの前には、テーブルと、大きな寝椅子が用意されていた。

寝椅子はもちろん、かわいい奴隷を、さまざまな形に固定出来るように、あちこちに皮バンドや、金具を取り付けた特殊なものである。

Qは、ウェイトレスに手伝わせて弓子に移

動椅子から解き、外出用のコートを脱がせ、舞台のほうで眺められるようにすこし上半身をおこしたポーズで、弓子を寝椅子の上に固定した。

ウェイトレスは、シクシクすすり泣いている弓子の、清楚で可愛い美しいさにおどろいたらしい。

「まあ」

といったまま、弓子に見とれていたが、やがて気を取りなおして、

「美加子と申します。どうぞよろしく」

と言いながら、メニューをQに差し出した。

Qは、メニューを開いて弓子に見せた。

メニューは、普通料理と特別料理の二種にわかれていた。

普通料理のほうは、どこの高級レストランでも見られるようなものばかりであったが、特別料理のほうはちがっていた。

奴隷用として、残飯、腐敗飯、カビパンなどの項目があり、家畜用として、汁かけ飯、麦飯、ふすま製パンなどが、いずれも特殊容器入りとなっていた。

特殊容器とは、犬用の粗末なブリキ食器のことなのである。

そのほか、油虫料理、ウジのわいた肉、ハエ入りスープなどの項目もあり、お飲み物の

らんには、滋養腸腸用スープや、尿などという文字も見られた。

そしてその下には、「ご希望によりましては、直接採尿の上、特殊香料にして味付けいたしますから、ウェイトレスにお申しつけ下さい」と、しるされていた。

「フフフフ。おいしそうなものばかりだね。どれがいいかな」

「む、む、む」

弓子は、なにを食べさせられるのかと、不安と恐怖にふるえた。

「よしよし、何がほしいか、言ってごらん」

Qは、弓子のさるぐつわを解いた。

「かんにんして。普通のを食べさせて」

弓子は、出来る限りの甘えた声を出した。

「お願い。こんなきならしいものを食べさせないで。いやなの。ゆるして」

Qは、その声に快感をおぼえ、満足した。

「よしよし。それじゃ、かんべんしてあげよう。そのかわり、いつもの赤ちゃん食をおとなしく食べるのだよ。いいね」

「ハ、ハイ」

弓子は、屈辱にふるえながらも、小さな声で笑えた。しかし、弓子はすぐに、

「ひどいわ。ひどいわ。どうしてこんなに、弓子ばかりいじめめるの」

と、寝椅子の上に、ワツと泣き伏した。レストランなら、普通の食事をさせてもらえると思っていたのである。

「さあさあ、いい子だから静かにおし。弓子はわたしの可愛い赤ちゃんなのだから、普通のおとなのお料理なんかたべたら、ポンポンが痛くなってしまうのだよ」

「ウソよ。ちがうわ。弓子は赤ン坊なんかじゃないわ。もう、おとなだわ」

「フフフフ。それじゃ、さっきまでオシメを使って泣いていたのは、どこのだれだっけね。フフフフ。さあ、お利口だから、言うことをおきき。上着を脱がせてあげるからね。オッパイをいい子いい子してほしいのだろう？」

「アッ、ゆるして、いや、とらないで」

Qは、弓子の寝椅子の前に腰を降ろすと、弓子の悲鳴ともだえを、たっぷり楽しんでから、上着を取り去った。

ふっくらした丸い隆起があらわになると、弓子はふたたびシクシクすすりあげるだけになった。いつ、柔らかな羽根が、弓子の肌をなでるか、わからないからである。

「よしよし。いい子だ」

Qは、弓子の髪をなでてやりながら、ふたたびメニューをひらき、自分のための何品かの普通料理と、弓子のためのミルクを一人前

注文した。注文をきいて部屋を出て行ったウ
エイトレスの美加子は、しばらくすると注文
の品を車の付いた台にのせて運んで来た。

「お待たせいたしました。お給仕は私でよろ
しくお願いしますか」

「ウム」

美加子は運んできた料理を、テーブルの上
にそろえ終わると、Qのそばに、そっと腰を
下ろして、酌を始めた。

Qは、うまそうに上等のブランデーをなめ
美加子の給仕する料理に手をつけていたが、
やがて、

「じゃ、弓子のほうも、お昼にしてあげよう
かね」

と言いながら、小さなヨダレカケを、弓子
の首にまきつけ、うがいさせ始めた。

うがいをしながら、弓子は不安げにテーブ
ルを眺めていた。

Qがたしかにミルクを一人前と注文したの
に、テーブルにはそれが見当たらない。

しかし、そのなぞは、すぐに解けた。

Qが美加子に、

「飲ませてやってくれ」と命じて、美加子の
チャイナドレスのボタンをはずし始めた。

美加子は、目をとじ、ぼつと頬を染めた。
ドレスの下は、もちろん、うすいスリッパ

だけだった。そのうす布を透して、みごとに
突っ張った美加子の胸が、なやましくゆれて
いる。

「いやッ、いやです」

弓子は、自分に加えられる新しい屈辱をさ
とって、悲鳴をあげ始めた。

「さあ、お飲みなさいな。いい子ちゃんね」

美加は、スリッパも脱ぐと、盛り上がった
豊かな乳房の先端を、弓子の口にふくませよ
うとした。

「いやです。そんなこと」

弓子は、しっかり口をとじて、いやいやを
している。

「アラ、旦那さまのお言い付けがきけないの。
悪い子ね。じゃ、こうしてあげましょう」

美加子は、テーブルの上からジョウゴのよ
うな器具を取り上げた。

「なにをするの。かんにんして」

「さあ、おとなしくするのよ。すぐ飲みやす
くして上げますからね」

美加子は意地わるく笑いながら、そのジョ
ウゴの先端をいやがる弓子の口の中に押し込
み、つけてあったバンドで、しっかり締め上
げた。

「ウッウッ」と、弓子は、Qを見上げ、しき
りにゆるしを乞うのだ。

「おとなしく飲ませておもらい。美加子のお
乳は、とってもおいしくて栄養があるのだけ
ら。フフフ」

Qは笑いながら、目をほそめて、弓子の表
情をながめている。

「さあ、もう飲まなくてはだめよ」

美加子は、もだえる弓子の頭を抱きかかえ
ると、そのジョウゴのひらいた口へ、自分の
胸を差し入れた。

「吸ってごらんささいな。おいしいのよ」

「ウッ、ムッ」

「悪い子ちゃんね。まだ言うことがきけない
のね。じゃ、こうしてあげましょう」

美加子は、胸を、さらにジョウゴに押しつ
けた。すると、美加子の豊かな白い丘は、ジ
ョウゴの中からあふれて、弓子の鼻口もふさ
いでしまう。

「うん、うん、むむう、ううう……」

「かわいい赤ちゃん。くるしい？ さあ、お
吸いなさい。お口をあけて、たくさんお吸い
なさい」

弓子は、ひたいにたてじわを刻んでうめい
ていたが、やがてあきらめて吸いはじめた。

こうして弓子は、新しく赤ン坊となるため
の訓練を強制されていく……。

一、鞭のあと

老人は朝が早い。

窓のカナリヤがまだコトと音もたてない頃からもう眼をさまして、昨夜の疲れて泥のようになりこけている傍の比奈子に手を伸ばしてくるのだった。

それが愛撫の手だったら比奈子も眼をさますことはないのだが、脂肪ののった柔かい、しかも神経の敏感なところを選んでつねりあげるのだから、いくら熟睡していても眼がさめてしまう。

鉛のような眠りの底で、なにかからだの上を這いまわっているなと考えていたのが、咽喉の肉を小さくつまんでひねりあげられたのに、はつきりと眼がさめてしまった。

意識はさめたけれど、まぶたの方がいうことをきかなかった。

まぶたの裏が糊づけにされたようにつつ張る。それに負けてうとうとしかかると、今度は二の腕の内側をつねられて、思わず涙がでた。

両腕は頭上にのぼしてベッドにつながれているし、足もほんのわずかの動きしか許されないような状態でつながれているので、攻撃の防ぎようはなかった。

■私は不幸ではない みじめでもない
このひとのおかげで美しくなれたのだ！

ご隠居のたのしみ

八巻 令

落合竜二・絵



昨夜はこんな格好で老人にさんざんいじめられたあげく、そのままねむってしまったのだった。

老人の方も相当まいっていたようだから、今朝はおそいだろうと当てにしていたのに、もうこれだった。

(近頃バカに元気のようにだけど、どうしたのかしら)

つねられたあとのずきずきする痛みをこらえながら、比奈子は不思議に思った。

男にも女の生理と同じように周期的な波が

おしよせるというのをどこかで読んだ記憶があった。

今がその時期なのかも知れない。

とすれば——比奈子はそので思考を中断して、たった今眼がさめたというふうに、うむと呻いて不自由な身をひねった。

「眼をさまさせて悪かったね。昨夜はさぞ寝にくかったろう。もう鎖を解いてやるからな」

老人は、長いまつ毛をしばたたいっている比奈子の頬をしなびた指でそつとなぜた。

眼は、庭先に並べた丹精の盆栽に見いるこ

隠居のほれぼれとした眠つきだった。

比奈子のあごをつねったのも、老人にしてみれば、盆栽の無駄葉をつみ取るのと変わらない行為だったのかも知れない。

鎖を解かれて、比奈子はのうのうとベッドの上に起きた。

ふしぶしが痛んで、まるで他人のからだのようだった。ふつくらした白い胸の上を赤いあざが横切っているのを比奈子はそつと指でおさえた。

「痛むかい」

と老人が声を伸ばしてくる。

「はい」

比奈子のはれぼったい眼でニッと笑って、手をわきに落とした。

老人の指先が張り切った肌の上の鞭あとをなぞった。

「ゆうべは少しいじめすぎた。お前の綺麗な肌に傷をつけたくはなかったんだが。しかし、



今こうやって見ると、肌がかえって冴えて見えるようだね」

そう言われて見ると、赤い鞭あとが一層肌の白さ、なめらかさを引き立てているようだった。

比奈子は、人の気も知らないで、と老人をうらむ前に、自分の傷ついた肌を抱きしめた。いようないとおしさに駆られた。

「比奈子の白い餅肌を見ていると、つい夢中になってしまつて、痛めつけてやりたくなるのだ。年寄りの若さに対する嫉妬かな。まるで子供だ」

悲しき玩具、という言葉が比奈子の脳裏をふとかすめた。

老人の比奈子に対する執着は、赤ん坊が好きな玩具に示すそれと全く同じだったし、同時に赤ん坊と同じく暴君的で残酷だった。

老人の、時に示す優しさは、いたわりから出るのではなく、獲物を前にして舌なめずりをするのに似ていた。

比奈子は老人の優しい言葉が一番おそろしい。でも、玩具で死んだ子供だっているんだから気をつけた方がいいわ、と生きた玩具は美しい手のさきを老人にあずけたまま、心の中でつぶやくことだつてできるのだ。

朝の日課の浣腸を老人の手で受けて、よう

やく比奈子は家庭の主婦らしい姿になることを許された。

それでも戸籍上は、れっきとした妻なのだ。ついこの間来たばかりの頬ぺたの赤い女中と朝食をととのえた。この子もいつまで居てくれるだろう。やがて老人のたわむれに気がついて、ひまを取るにちがいないのだ。

いくら洋裁に通わせる、お茶やお花を習わせるなどと条件を出したところで、一家の主婦が鎖につながれて廊下を這いずりまわっているのを目撃すれば、気味悪がつて居たたまれないにちがいない。

それが比奈子には悲しかった。

普通の人なら眼をそむけたくなるようなことを毎日むりやり強いられるのだ。

だが、そのむりやりという気持ち、近頃では仕方がない。というあきらめに変わり、もっと反抗心を燃やしてもいいはずの心までが老人の手に柔順にひれふすようになり勝ちな昨今なのだ。

奥さまはほんとにおきれいですわ。わたし、ときどきゾツとすることがあるくらいです、と人なつっこいその女中は、まだ幼ない眼を見開いて言う。

そんな美しさも老人の鞭に呻吟することから生れてくるのだと考えると、女というもの

の生理の不思議さに、比奈子はわけもなく心弱くなってしまうのだった。

二、美容体操

女中を洋裁学校に送り出すと、家には二人きりになるので、誰はばかりでもない老人の戯れが始まる。

「美容体操の時間だよ」

老人はテレビのスイッチを入れて、ソファにゆったりと身を沈める。

そう命ぜられると、やはり長い間に身にしみ込んだ習慣で、昨夜の今日ぐらひは休ませてほしいという願いも、うやむやになって、意志を持たないもののように帯に手をやってしまうのだった。

女が羞恥を全身ににじませて着物を脱いでゆくのを見守るのも老人には欠かされない楽しみのひとつだった。

あらわにしてゆくにつれて比奈子が無意識のうちに示すはじらいのしぐさの数々の方が、あらわになつてゆく美しさそのものより老人の興奮を呼ぶのだった。

時にはひどい言葉をあびせて、比奈子のほっそりした首すじまで真赤にさせては、手をたたいてよろこぶ。

体操は、裸でおこなうのが原則とされてい

た。

比奈子が最後のものをおどおどとすべらせ、脱ぎ取る頃には、傍のテレビでは、彼女と対照的に何の屈託もなさそうな若い娘のタイツ姿がはがらかに朝の挨拶を送ってくる。

軽快なピアノが始まった。

しなやかに肉のしまった比奈子のまっ白なからだ、リズムに乗って妖しく美しい曲線の律動を始める。

足を広げ、胸を突き出し、尻を高く持ちあげる。たおやかな筋肉がふるえ、形のよい乳房がプリプリ弾む。白い肌が上気してしっとり桜色に染まる。

老人はスクリーンのタイツ姿と比奈子のからだとを交互に見くらべては、比奈子に、もっと脚を伸ばせ、胸をそらせ、つま先を曲げ、などと、いちいち命令した。

老人の頭の中では比奈子のからだをとおして、テレビのタイツ姿も比奈子のように引き剥かれているらしかった。

比奈子は機械のように体を動かしながら、老人の眼の動きによって、自分の体が今老人にはどのように写っているかを、知るのだった。

以前大きな鏡の前で体操をやらされた時、まさまさと自分の眼底に焼きつけられた、あ



の醜惡なまでにのび切った自分のからだを、どうしても思い出さずにはいられなくなるような老人の眼の色だった。

自分がなま身の人間なのが、呪わしくさえる。

このまま冷たい石になれば、どんなに気が休まることだろう――。

しかし表面は何事もないように比奈子は体を動かし続ける。

そうやって何にも束縛されない裸身をピアノのリズムに合わせてゆすっていると、体の奥深いところから、あたかも溶岩が地表の殻を破って吹き上げるように、消え入りたくなるようなはずかしい感覚がひたひたと比奈子のからだを包んでくるのだった。

双の乳房がにわかに重さを増したように感じられ、自然に膝の力が抜けていった。

「眼がうるんで、とても綺麗だ」

彼女の心を見すかしたように老人が言葉を



かける。

はずかしくて、思わずしゃがみこもうとすると、

「こら、からだをしゃんとさせんか。もつと顔を上げて、よくわしに見せるのだ。それ、一、二……」

美容体操が終ると、比奈子は全身汗びっしりになっていた。

見ている老人も大きく胸をあえがせているので、比奈子はてっきり老人が自分に挑みかかってくるものと思ったが、案に相違して、グッタリとソファに沈みこむと、

「からだを洗ってきなさい。まだ着物を着てはだめだよ」

と言った。

バスルームで比奈子はほてったからだに冷水シャワーをあびた。

ほどよく揉みほぐされた筋肉がキュッと引きしまって、それを乾いたタオルでゴシゴシ

こすると、体が軽くなるような良い気持ちだった。

自分のほち切れそうな若さがしみじみと感じられた。

からだを清めてから比奈子は自室の三面鏡にからだをおしげもなくさらして、念入りな化粧をした。

髪の乱れをととのえ、老人の好みの、やや憂いを含んだ眼ざしになるように苦心してアイシャドウをほどこした。

ルージュはひかえめに引いた。耳たぶに真珠のイヤリングをかざり、細い金のネックレスをむき出しの首にかけた。

人工の粹をこらして仕上げた首から上と、自然のままをむき出した首から下との対照が妖しいコントラストを見せて、見る者にサジスティックな気持ちの高ぶりを感じさせる。

これが老人に飼いなされた比奈子の身についた化粧法だった。

こうして彼女は白い素肌のすみずみから香水の匂いをまき散らしながら、きやしゃな素足に廊下を踏んで、老人のおもちゃになるために美しく粧うたからだを運んでいくのだった。

「ああ、今日のお前は素晴らしい」

老人は寢室の分厚い緋のじゅうたんの上に立った比奈子のはじらいを含んだポーズに、文句なしに讃歎の声をあげた。

細くくびれたウエストから豊かに熟した腰まわりのなめらかな盛り上がりがかすかにうごめくのに、老人の眼は早くも熱っぽい輝きを示し始めていた。

「これをはいてそこにお座り」

と老人は上ずった声で言いながら、ひと握りの布きれをさし出した。

黒いナイロンのパンティだった。

裾にレースのかざりがついていた。それをつけると、白い肌が薄い生地の下からすけて見えて、魅力的だった。

黒いパンティをはかされたことで、自分の心までがいやしい思いに崩れてゆくのが、比奈子にはたまらなかった。

じゅうたんの上に円いくぼのある膝頭をそろえて正座した比奈子に

「両手をうしろにまわしなさい」

と老人が命じた。

毎度のことだけれど、自分の意志で両手を後にまわす動作をするのには抵抗を感じる。抵抗を感じながらも命令に従ってしまう自分があわれて、心が騒ぐのだった。

三、テープレコーダー

頭が自然に前にたれて、屈服の姿勢を知らずのうちにとってしまふ。

牛乳を固めたように白い背すじを見せ、両手を自ら後手に組んでうなだれた比奈子を、革の枷がきびしくいましめていった。

「いや」

比奈子は蚊の鳴くようなほそい声で身悶えた。

「こうされるのが嬉しいくせに」

と言葉でなぶっておいて、そのほっそりとうなだれているうなじに革の首枷を巻きつけた。

それについている鎖をグイと引いて、比奈子を後手に拘束している革手錠に結びつけた。

肉づきの良い腕が肩のつけ根のあたりまで引きしぼられ、つややかな脂肪の下から三角形の肩甲骨が浮き上がった。背すじがバネのように弾んだ。

「苦しいの、ゆるめて」

後手に引ッ張られてのけぞらせた顔をゆがめて比奈子は哀願した。

無理に引きのばされた白いのが、ひくひく動くのがあらわに見えた。

老人は親指とひとさし指でその柔らかな部分をささむようにして比奈子ののどを逆なで

した。

えたいのしれない戦慄が、比奈子を思わず呻かせた。

「このまま絞殺してやろうか」

比奈子の眼をのぞきこみながら老人は興奮をおし殺した声で、言った。

「腰まわりにだけ喪服をつけた恰好で死ねばいかにもお前らしいぞ」

さつき比奈子にはかせた黒いパンティのこと言っているのだった。

死がこの上もなく親わしく甘美なもののようにふと感じられた。

ああ殺して、今すぐあたしを殺して——比奈子は眼を閉じ軽く唇を開いて恍惚に身をゆだねた。黒は喪服の色、喪服は死の粧い、死こそわがこよなき愉悅……

「ハハ、今からうつとりしちゃ駄目じゃないか」

老人はグッタリともたれかかってくる比奈子の尻を一打ちして、鎖を苦しくない程度にゆるめた。

「こんなかわいいお前をムザムザ死なせられるものか」

比奈子は打ちのめされたようにグッタリとなつて、肩をふるわせて鳴咽した。

老人はテープレコーダーを運んできた。



イヤホーンを比奈子の両耳につめ、自分もひとつつけた。げんそうな顔をかしげている比奈子をニヤリと見てから、スイッチを入た。

リールがかすかな音をたてて廻り始めた。イヤホーンを耳につめられて、外界の物音をいっさい遮断された比奈子の耳の底に、それはひめやかにひとつの物語をささやきかけてきた。

最初テープレコーダーを見た時、比奈子は近頃よく雑誌なんかで読む男女の睦言を録音したテープを聞かされるのではないかと思つた。しかし、そんな安っぽいものではなかった。

聞き始めは何かラジオドラマを録音したのではないかとさえ思った。ムードミュージックが次第に聞く者の感情を盛り上げ、ナレーターの声がようやく熱気を帯びてきた時、突然比奈子は悟った。



これはポノグラフィード。完璧なまでにドラマ化されたポノグラフィードなのだ。

そうと知った瞬間から比奈子はもはや平静では居られなくなっていた。

ヒロインは女子大生で杏子といった。知的な美貌と均斉のとれた容姿は同級生の羨望の的だった。世の男が彼女をほうっておくはずもない。降るような求愛をすべてしりぞけて、ひたすら学業に専念する彼女を待ち受けていたのは、彼女の誘惑に失敗した上に、その卑劣さを面罵されたプレイボーイ広岡のもうけた黒い罠だった。広岡はかねて関係のあったグレン隊に頼みこんで、杏子をおびきださせたのだ……

比奈子は自分の頬が次第に紅潮してくるのをどうすることもできなかった。

ほてりは両頬から耳の方へ、耳から首枷でしめつけられた頸の方へと拡がっていった。眼を固くつむって、老人の食い入るような視

線に耐えた。首枷がじゃまして、顔をふせられないのが切なかった。

麻酔薬から目ざめた杏子は、自分が後ろ手に固くいましめられたまま、固いベッドの上で固くいましめられているのを知った。自分の投げ出された姿態に注がれている眼、眼。勝ち誇ったような笑みを片頬に浮かべて立ちほだかっている広岡。それを、気丈にものしる杏子。広岡は唇をゆがめて言う。「お嬢さん、へらず口は裸になってから言ってもらいましょう」……

比奈子はゴクリとつばをのみ込んだ。

口がカラカラに乾上がり、唇を開けて喘いだ。

杏子のあげるかん高い悲鳴が比奈子の脳天に突き上げてきた。

男たちの高笑い。ビリリと衣服の裂ける音。着衣強奪という恐怖と羞恥に身も世もなく悶える杏子がそのまま、比奈子に取ってかわった。

「ああ、よして。いやッ」

比奈子はのけぞらせた首を激しくふった。

「てへ、こいつあたまたねえや」「すべっこからだしてるぜ」「ああッごめんなさい」「縛るんだ」「いてッ、噛みつきやがった」「お手々をうしろにまわして、どうせ見られ

るものを、あつさり見せちまいな」「足は縛るんじゃねえ。邪魔なのは手だけよ」「ヒィーッ」「おい、早いとこ椅子持ってこい」

「足もついでの縛りつけるんだ」「ああッ、ゆるして。もういやッ」「これからなんだぜ、お嬢さん。うんと言うまでさんざ痛いめにあわせてやるのよ。もつとも、うんと言わなかったって……」

「ああ、いやいや。もう、ごめんなさい！」

比奈子はすすり泣いた。

「これからなんだぜ、お嬢さん」

と老人がテープの声を真似て言った。眼がギラギラ光っていた。

「どうだい、どんな気持ちだい、お嬢さん。」

男の眼にさらされているのは。それもお行儀のよい格好でね」「あなたたちは卑怯です。

こんな、こんな……」「おやおや気の強いお嬢さんだ。これじゃもうひと汗かいてもらわんと」「兄貴、女なんてもなあ、四の五の言わせずにかわいがってしまやあ、おとなしくなりますぜ」「チッ、だからてめえは何をさせてもトチるのよ。御馳走をガツガツかつこんで、腹さえふくれりやいいなんてなあ下司のすることだ。この楽しみをじっくり賞味しねえことがあるもんけえ」「その通り。だからおれもちゃんと用意してきた」「何をです」

「せっかくの玉の肌を傷つけちゃ元も子もない。だからそれ」「あれ、羽根、筆、ローソク、それにこれは注射器、え、なに、カンチヨウキですって、これやなんだい?」「おめえみてえに、楽しむ道具をひとつしきやねえ男とは格がちがうってことよ」……

比奈子の全身が重くしこつてきた。大きく喘ぐたびに固く上がった乳首がふるえた。折目正しく正座していた膝がくずれた。

「どうやら正座しているのがつらくなったようだね。楽にしてやろうか」

楽にしてやろうという言葉に気をゆるしたのが油断だった。

老人に接近された比奈子は、何の抵抗もできずに、やすやすと複雑怪奇なあぐら縛りにされてしまった。

「お願いです、こんな格好になさらないで。あとでどんなことでもしますから。ああ、やめてえ」

比奈子は肩をふるわせて哀願した。あぐら縛りは今までにもされたことがある。なにもない、みじめな姿でされたことさえある。しかし、今こんな格好をさせられるのはたまらなかった。

「おやおや、喪服が泣いているよ」

老人はあぐら縛りにした比奈子を元の姿勢

に引き起こしてやりながら、さも愉快そうに笑った。

比奈子はそのみじめな姿のまま肩をふるわせてすすり泣いた。その耳に杏子のたえいるようなすすり泣きが重なった。

四、ミンクのコート

午後になってだし抜けに老人は銀座に行こうと言いだした。

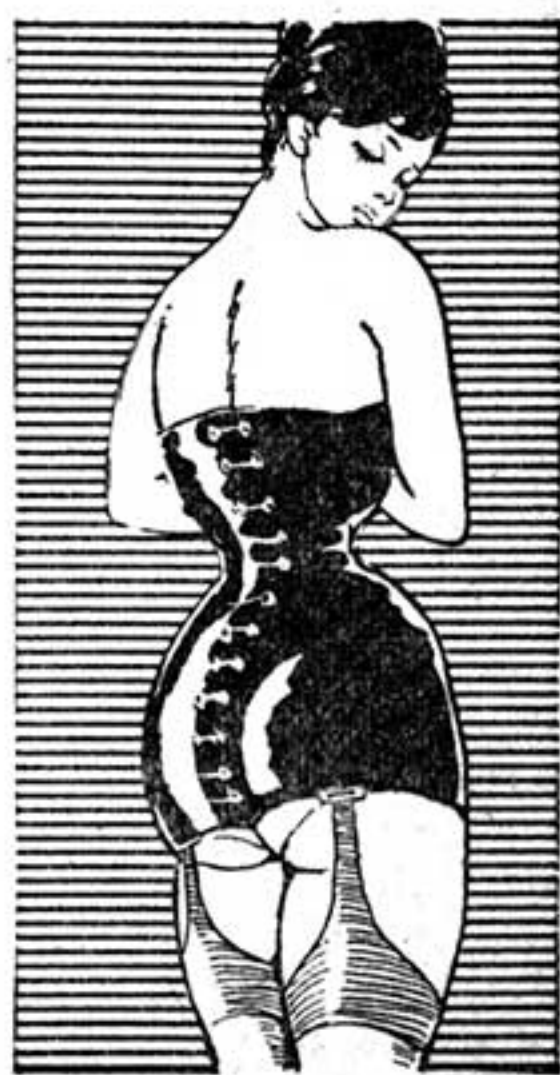
外出する時の常で、比奈子は素肌に革製の貞操帯とコルセットを着けさせられた。

これをからだに着けて歩くと、革が皮膚の柔らかいところにこすれて、足が地につかない思いにさせられる。コルセットは、もうこれ以上指一本さえはさみ込めない程にまでしめ上げられているので、ちよつとでも上体を動かすとキシキシと皮特有のきしみをたてるのだった。

タクシーのなかで二人はほとんど無言だった。

老人の方はシートにグッタリと身を沈めて何を考えているのか瞑想にふけっているし、比奈子はコルセットにしめつけられた上体を不自然にしゃちこ張らせて、貞操帯の刺戟に気を取られていた。

いったい老人は何を目論んでいるのか、何



かまた比奈子を苦しめる材料を見つけたに違いなかった。比奈子是不安とも期待ともつかない思いに胸を高ぶらせていた。

いったいあたしは、いつから、こんなおんなになってしまったのだろう。老人からたつてとのぞまれて、結婚した当時は心の中に打算しかなかった。もうおいほれだから、いくらもつまみ、いますこしがまんすれば後はありあまる程の遺産をかかえて気ままに暮すことができるのだ。どんな男だって思いのままに手に入れることができるのだ。老人がこんな趣味を持っているなどということはもちろん知らなかった。最初の頃は財産家の気まぐれ、ぜいたくな遊びと思って我まんした。せいぜい興奮してあたしをいじめるがいい、そうすれば、自分から寿命をちぢめるばかりだ。こんな考えがはじめは強かった。自分が完全な玩弄物であることが自尊心にはたえがたいこともあった。いまでもよっぽどひどい

ことをされると、いつそ死んでくれればいい
と思うことがある。

しかし、それがいかにも遠く弱いものにな
ってしまった。すでに当初の頃のような死ん
でもいや、という気持ちになることは、全く
なくなつて、拒否が哀願に、哀願が切ない思
いをこめた媚に変わってしまった。むりやり
服従させられることに気が遠くなる程の心の
たかぶりを感じる。いじめられるのだという
思いが、苦痛をともなつた快感になつてしま
つた。こんなものが愛情だとは思いたくなか
つた。それはもつともつと違つたものである
はずだった。

それなのに、老人にたいして感じるこの言
いようのない慕わしさは何だろう。心が強く
反撥している時でさえ、食物を求めて触手を
伸ばしてゆくアメーバーのように、快樂の方
へと崩れてゆくこの感覚はいったいどうした
というのだろう。ハイヒールをはけば自分よ



り小さいくらいのこのしなびた老人、本氣に
なつてかかつてゆけば力の点でも負けること
などありそうにも思えないこの高血圧におび
えている老人。この小男が自分にはおかしが
たい權威をもつて迫ってくるのはなぜだろう
――。

タクシーを、とある洋装店の前に止めて二
人は降りた。一流の店だった。

「ミンクのコートを見せてくれないか」

と老人は無造作に言つた。

比奈子もやはり女だった。

次から次と肩にかけられるミンクのコート
を大鏡の前にうつしてしているうちに、自分がま
るで雲の上にもただよっているような陶然
とした気分になり、胴をしめあげているコル
セットも、股に食い込んでいる貞操帯のいま
わしい感触も忘れた。

「奥様ほんとうにお綺麗で――」

とマダムもお世辞でなしにほれぼれと鏡の
中に眼を見はつた。

老人は椅子の中から満足げに何度もうなづ
いた。値切りもしないで即座に金を払つた。

店員総出で見送るのに愛想よく応えて、老
人は比奈子の腕を取って待たせておいたタク
シーに乗り込んだ。

「××ホテルにやってくれ」

運転手に命じてから比奈子に向つて
「お前はすばらしい。だんだん綺麗になつて
ゆく」

と青年のように眼を輝かせて言つた。

「こんな高価なものを、あたくし――」

のどがつまって、後は声にならなかつた。

老人のキラキラする眼と視線がぶつかつてパ
ツと頬を染めた。ホテルに着くのがなぜか待
ちどおしかった。

ホテルに入ると、ロビーに居る客の眼がい
つせいに比奈子に集中した。

外国人の出入りの多いこの一流のホテルで
も、比奈子のぬきん出た美貌は人眼をひくの
だ。

弱々しくはないが、どこかうれいを含んだ
なやかな容姿が、男の保護本能をくすぐる
のかも知れなかつた。

老人はフロントから鍵を受ける取ると、意
気揚々と比奈子の腕を取ってエレベーターに
入つた。

そこは老人が借り切りにしてある部屋で、
比奈子も何度か来たことがある。

気分を変えたと称してその部屋でいじめら
れたことも数多くある。ロッカーの奥にしま
い込んであるトランクの中には責め具一式が
つまっているはずだった。

しかし、今日はいじめられるのではなしに、老人の優しい愛撫がほしかった。今のこの愛に満たされた気持ちを愛撫によって、もっとハッキリとからだに確かめておきたかった。

だから部屋に入って老人から、

「着物を脱ぎなさい」

といわれた時は期待のためにはずかしさを忘れていた。

スーツもスリッパも脱ぎすててコルセットと貞操帯だけになった比奈子を、老人は何か考えるようなふうで眺めていたが、やがて、

「これも取った方がいいな」

と独り言をつぶやきながら、鍵を取りだし、両方ともはずしてしまった。

光るようなからだの前を両手で覆って、うなだれたまま比奈子は老人の次の手が伸びてくるのを待っていた。

「コートを着てごらん」

意外な言葉に一瞬とまどったが、片手を伸ばしてベッドの上に置いたコートを取って肩にはおった。

えもいわれぬ戦慄がからだを走り抜けていった。

火照ったからだが一瞬鳥肌だち、やがてそれがおさまるにつれて、柔毛に触れられた末梢神経を中心として、そこからこそばゆいよ

うな、思わず身悶えしたくなるような感覚が、次第に全身をしびれさせてゆく。筆の穂先によるくすぐりを全身に一度に受けているような気持ちだった。

比奈子は我から毛皮を自分の肌にこすりつけるようにからだをゆすり、閉じたまつ毛の先を震わせた。

「どうやら本当らしいな」

と、そんな比奈子の表情を観察していた老人はひとりでうなづいた。

「なにがですの」

比奈子は紅潮した頬を手でおさえて聞き返した。

「素肌にミンクのコートを着るのが最高——という女の文句をどこかで読んだように思っ

てね」

「まあ」

呆然と開いた口からさきほどまで胸をふくらませていた希望が、はかない泡のように抜けていった。

わかっていていいはずなのに、またしても老人の狡智に乗せられた自分が情なかった。やりきれないむなしさが寒々と肌をおそってきた。

老人は比奈子の心に一顧も与えず、コートを抜くことを命じた。



ロッカーの中からトランクを取り出し、蓋を開けて中に入っている責め具をあれこれ物色している。

コートを足元に落としたままの姿勢で、比奈子はジャラジャラ鳴る鎖の音を放心した耳に聞いていた。

貞操帯が再び装着され、そのベルトに三本の鎖が取り付けられた。

一本は下に降りて、両脚の膝の下に歩幅を五十センチ以上に広げられないように巻きつけられた。

後の二本は上に上り、首をひと巻きしてから腕にそって手首までのび、そこで手首にはめられた金属の手枷に連結された。

手は比較的自由に動かせるが、そのたびごとに首がしまった。

老人は比奈子の肩にもう一度コートを着せかけると、床に散らばっているスーツや下着類を、ひとかかえにロッカーの中に放り込ん

だ。

「さあ出かけよう」

「こ、こんな格好で」

目のくらむような恐怖だった。

「そうだよ。コートのおかげでお前が素裸だなんて誰も気がつきやしないさ」

反抗したところで無駄なことはよくわかっていて。無力感と羞恥で気が遠くなりそうだった。

老人が背中を邪慳に押した。

比奈子はたたらをふみ、コートの下で鎖が悲しげな響きをたてた。

五、漂流

ちょうど会社の退け時で銀座は雑踏していた。

老人がわざわざそんな時間をねらっていたのに違いなかった。それなのに何食わぬ顔で高いネオン塔を見上げたり、ショーケースに



ひたいを押しつけて見たりして、あてもなく歩きつづけている。

比奈子ははずかしさで顔も上げられなかった。今となつては老人の腕にすがりついて、転ばないように歩いていくことがせいじっぱいで、あたりを見廻す余猶などは全くなかった。

それでなくてさえ銀座の歩道は穴だらけでハイヒールの大敵なのだ。いつなん時足を取られて転倒し、素裸のからだを衆人環視の中に曝す破目にならないとも限らないのだ。わきの下にじつとりと汗がにじんできた。

傍を通る男たち、いや女までが一ように比奈子に視線を送るのが、彼女には耐えられなかった。こんな姿でさえなければ自分を誇らかな気分にくれるはずの他人の視線が、今もぶあついミソクを裂いて、その陰にかくされている羞恥を剥ぎ出すのではないかといういわれのない恐怖を起させるのだ。

誰かいたずら者がいてコートをめくり上げたらどうだろう。いやそれより、
「さあ皆さん、この女はミソクのコートなど着て皆さんに素晴らしい美人だと思われて得意になっているようですが、これ、ひと皮むけばこの通り。一糸まとわぬ素裸を鎖で縛られた奴隷なんですよ。さあ皆さん、だから遠慮

なくさわるなり転がすなりして弄んでやって下さい。こいつはそうされるために生まれてきたんだし、本人もそれがうれしいんです」
と老人が銀座のまん中で、ふとした気まぐれに取りつかれて叫びだしやしないかと、そんな馬鹿げた考えが、頭から離れないのだった。

そしてそんな考えに戦き、恐怖と羞恥にこもごもさいなまれている自分が果してそれを嫌っているのか、それに溺れてただ申しわけであがいているだけなのか、わからなくなってしまうのだった。

四丁目の交叉点で老人はふと足を止めた。
「ちよつと用事を思い出した。すまんが、これから一人で帰ってくれないか」
と老人は比奈子の反応を楽しむ眼つきで言った。

「もうおゆるしになって。お願い」
と比奈子は混み合う人波の中で小さく哀願した。

こんな荒海を、鎖につながれたまま一人で乗り切れることは、たえまのない不安と羞恥は別としても、とても不可能のように思われた。

「だめだね。さ、これは電車賃だよ」
老人はボロボロにすり切れた百円札を比奈

子の手に押しつけると、追いつかるすきも与えずに人ごみの中に背を見せていつてしまった。

呆然と立ちすくんでいる比奈子を、次から次と打ち寄せる人の波がさも不思議そうにふり向いては過ぎていった。

押され押されて、いつのまにか歩道のへりに立っていた。

小型タクシーがするすると寄ってきた。運転手が窓から問いかけるように比奈子を見ている。

（そうだ、タクシーでゆけばいい。お金は家につけばいくらもある——）

しかし、比奈子は意志に反して首を横に振っていた。

タクシーが走り去り、比奈子は縛られた足をかばいながら、よちよち駅の方に歩きだした。

鎖が急に重味を加えたように感じられた。

それは「さあ、これが電車賃だよ」という老人の言葉が加えた重味だった。

比奈子は人波の流れるままに、漂っていた。

貞操帯の緊縛感と、重い鎖の肌ざわりだけが彼女を支えていた。それがなかったら、おそらく彼女はあまりの不安と頼りなさに泣き

出すか叫びだすかしていただろう。

（ひどいかた。もっともっときつく縛っていつて下さればよかったのに——）

歩を運ぶたびに、ブラジャーもしていない乳房がプリプリ弾み、毛皮に乳首がこすれて痛かった。

「チエ、酔っぱらってやがる」

傍をすり抜けた学生が羨望と軽蔑の入りまじった眼で比奈子を見ながら小声でつぶやいた。

事実、うるんだ瞳を宙にすえて、よろめいてゆく比奈子の姿は酔っぱらった者のそれだった。

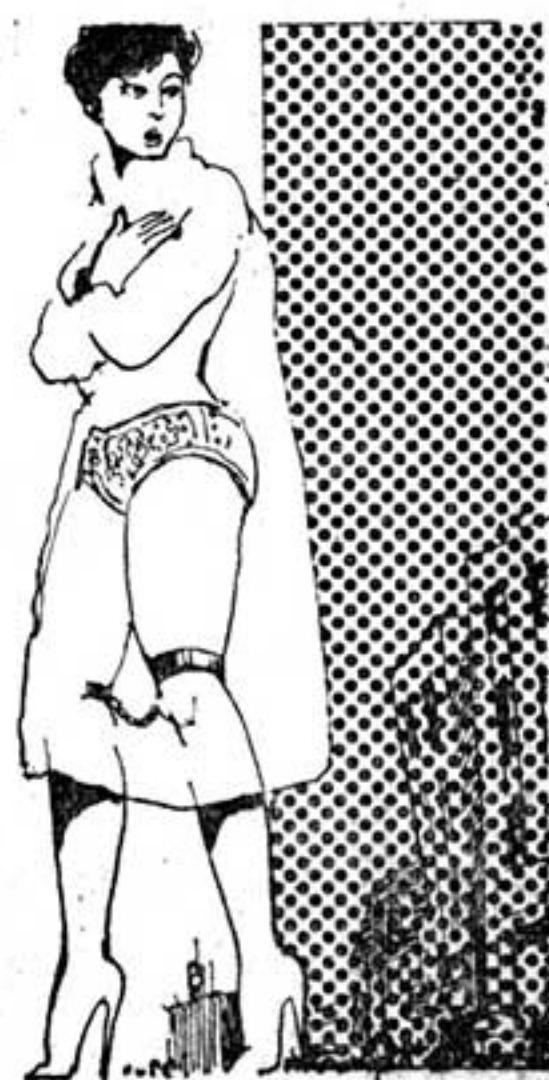
実際彼女は酔っていた。今はもう自分をさいなむあらゆる感情に身をゆだね切って、その被虐感に酔っていた。

どうして切符を買い電車に乗ったのか、比奈子には思い出せない。

それは、あたかも長い漂流に疲れ切った者の見る幻のように、とらえ難いものとして過去の中に消えてしまった。

車内の殺人的な混雑が耐え抜かねばならぬ現実としてなまなましく比奈子の肌にちかに押し寄せてきたのである。

それは混雑などというなまやさしいものではない。



オーバーやコートに着ぶくれた肉体同志が空間の法則を無視して一センチでも一ミリでも相手の占める空間に割り込もうとする、食うか食われるかの戦いだった。

ミンクの毛皮が素肌に押しつけられ、周囲が動くたびに奇妙な刺戟を肌に与えた。それに身にまといつた鎖が肉に骨にギリギリ食い込む。

電車が発着する度に人に押しのけられ、突きとばされてたたらを踏むごとに、膝に巻きついて鎖が皮膚を鋸引きにするように食いち切る。

ひそかに比奈子のコートの間に割り込んできた男の脚が、鎖にひっかかってピクリと引込められる。乳房が圧しつぶされて思わず呻きをあげてしまう。

むき出しの首すじに熱い息がかかったのにギョツとして比奈子は首をねじ曲げてその男を見た。

「奥さん、素肌にクサリカタビラとはイカしますね」

まだ若いサラリーマン風の男が比奈子の視線に照れもせずニヤリと笑った。

腰のあたりをなでまわしているのはこの男の手なのだろうか。この混雑ではそれも判らない。

比奈子は耳たぶまで真赤になって二十センチと離れていないその男の顔に哀願の瞳を向けた。眼をつぶりそうになるのを必死にこらえた。

「こんな中にこんな恰好で飛び込むなんて、奥さんの好みかも知れないけれど、罪な話ですよ。僕の身にもなって下さい。ああ、今夜は眠れそうもない」

男はミンクになぶられている比奈子の白い襟足にひたと視線を落としたまま、冗談とも本気ともつかぬ口調でささやいた。

ごつい指先がコート越しに比奈子の腰の脂



肪をシコシコとひねっている。腰を引こうにも周囲の圧力がそれをさせないのだ。

比奈子はたまらず眼をつむった。

「次の駅で降りましょう。何もしない。ただ豪華なミンクのコートを着た美女が、一皮剥いて見たら素肌を鎖で縛られていたということとをこの眼で確かめたいだけだ。それが僕みたいなの安サラリーマンにはどんなにおどろくべきことが、あなたにわかりますか。この世のものとも思えない美しさだろうな。貞淑ななんてクソくらえだ。男が命を失ってもくいなものがあるにひらかれるのだ。ねえ奥さん」

男の顔があと十センチのところに迫った。

唇がひわれてヒクヒクうごいているのが大写真に比奈子の眼にうつった。

ああ、この男はいやだといってもあたしの後をどこまでもついてくるだろう。秘密を握った者の大胆さであたしを思うままにするだろう。コートをはぎとってあたしの肌をむさぼるだろう。ああ貞操帯がその欲望をさえぎる。欲望をせかれた男は気狂いのようにあたしを鞭打たろう。黒い革で二つに割れた白い双丘をゆすって悲鳴をあげるあたし。鎖をならして床の上をころげまわり、はずかしい格好にすすり泣くあたし。男は何を命令するだろう。唇を使うことを強制するかもしれない。

ああ、いやよ。これもみんなあなたがあたしを一人ぼっちに放りだしてしまったからよ。

電車がガクンと止まった。

重要駅なのか、乗客がドッと降りた。

眼を開けてみるとその男の姿はすでに比奈子の前にはなかった。

彼女はわけもなくろうばいした。プラットホームに続く人波を眼で追って見たが、どれも似たような疲れ切った背中を見せて過ぎてゆくだけだった。

六、空白の時

玄関に出迎えた女中が比奈子の足元に眼をやって、

「まあ、奥さま、血が」

と、すっとんきょうな声をあげた。

「いいのよ」

とさり気なく言って、比奈子は歩みの不自然さを気取られないように注意しながら居間に入った。

「お薬をお持ちしましょうか」

と女中が心配げに顔をのぞかせてきいた。「心配しなくていいのよ。それより、あたし疲れたから旦那さまがお帰りになるまで横になるわ。お夕食は適当にみつくるって仕度し

ておいてちょうだい」

夕食の仕度を女中にさせたことを老人は怒るかも知れない。怒って鞭打つかも知れない。いっそそうしてもらいたかった。打って打って打ちのめしてもらいたかった。この波間にあてもなく流されるような、すぎるものもないたよりなさをしっかりと受け止めてくれさえすれば何をされてもよかった。

コートの裾をめくって見ると、膝の鎖が皮膚を破っていた。白い静脈のすけて見えるふくらはぎを真赤な血がひとすじ流れていた。

血の色を見て、突然比奈子は狂暴な発作に駆られた。みずから鎖を引きしぼって、それを左右にこすり動かした。疼痛に歯をくいしばり、うめきながら幾度かそれを繰返した。生温かい血が後から後からふくらはぎの象牙のような白さをひたしてしたたった。

比奈子は眼をつむり、頬の緊張をゆるめて、自分の良く知っている成る感覚が自分をとらえにくるのを待った。

しびれが、傷口から次第に太腿を登ってくる――

遠くからあわただしく廊下をかけて来る足音がしたかと思うと、ボタンとドアが開き、女中が蒼白の顔を引きつらせて飛び込んで来た。

「お、おくさま、旦那さまが……旦那さまが……」

比奈子は女中の顔つきでとっさに変事を予感した。血が顔からスッと引いた。

「旦那さまがどうしたって」

「交通事故で……病院からだただ今電話が……」思わず走り出そうとした比奈子は鎖に足を取られて、その場にひっくり返った。

肩からはおっただけのコートが落ちて素肌があらわになった。

あつと息をのむ女中の声を背中に聞きながら、もどかしげなちよこちよこ走り電話に走った。

「ああ、奥さんですか。ご主人が交通事故で、ここに入院されたのですが、すぐおいでを願いたいのです。モシモシ、聞いていらっしゃいますか、病院の場所は……」

比奈子は相手の警官らしいいかつい話ぶりを遠くで聞いていた。

容態はという問いには、ただ高齢なので何ともという返事が得られたにすぎなかった。

電話が切れると、背後に立ちすくんでいる女中に、

「タクシーを呼んでちょうだい。それから居間の方に来てね」と言った。



比奈子は自分の今の意外なほどの平静は極度の緊張からきているもので、やがては取り返しもつかない程に崩れてしまうことを感じていた。今のうちにやっておかねばならないことが山ほどあるように思えた。

女中が眼をふせておずおずと入って来た。

「キヨさん、あたしのこの格好におどろいたでしょう」

比奈子は牙え切った頬に微笑を浮かべて話しかけた。

女中は当惑げにもじもじした。頬がパッと赤くなった。

「あたし、旦那さまにこんなふうにもさせられているのよ。鎖で縛られたり鞭でぶたれたり、それにもっともっとつらくてはずかしいことをされているのよ。キヨさんのようなまだ若くて純真な人にはとてもこわくて想像さえできないことね」

ああ、あたしはこんな子供を相手に何をし



やべろうとしているのだろう。夫が死のうと
しているというのに何をこの子に求めようと
しているのだろう――

「あなたは以前、このあたしがとても綺麗だ
と賞めてくださったわね」

女中はあわててコックリをした。

「あたしは、旦那さまにこんなにいじめられ
るので美しくなれたんだと言ったら、あなた
は本当にするかしら」

少女はびっくりしたように瞳をあげた。口
が何かもの問いたげに開いたが、また閉じら
れた。

「いいえ、わからなくてもいいのよ。ただね
あなたが考えているように、あたしは不幸で
もなければみじめでもないっていうことを知
っておいてもらいたかったの」

そうだ、あたしが不幸じゃないということ
を誰かに知っておいてもらいたかったのだ。
そして、それを、こんな生き方を、肯定し

てもらいたかったのだ。

「さあ、あたし病院にゆくからお留守番を頼
んでよ。落着いたらまたお電話しますからね」

比奈子は床に落ちているコートを拾おうと
身をかがめた。

少女がそれを引ったくるようにして拾
いあげ、比奈子の背後からそれを着せた。着
せかけながらオズオズとささやいた。

「このままではあんまり……」

「いいのよ、あたしの鎖を解く鍵は旦那さま
が持つていらっしゃるのだから、このまま出
かけます。旦那さまさえ鍵を握ってしてくだ
されば、あたしはどんなにされてもしあわせ
なのですから」

だが、その鍵が失われようとしているのだ
った。

タクシーのシートに一人うづくまる比奈子
は耐えがたい孤独にさいなまれ続けた。

空白の時間が次第に彼女の視野を灰色に埋め
てゆくようだった。

「死なないで、死なないで」

比奈子は鎖を乳房に巻きつけ、その苦痛に
むかって祈るようにつぶやき続けた。

■ おわびとお知らせ

▼前号（一月号）の「色オフ
セットページ」「絵物語・女戦
士のレポート」および「装身
具とふたりの美女」のページ
が、印刷所の不手際により、
見苦しい乱丁となり、読者の
みなさまに多大のご不快、ご
迷惑をおかけしましたことを
ふかくおわび申し上げます。

▼直接購読会員のかたがたに
は、ただちにお詫び状と、正
しいページをお送りしました
が、書店からお買いあげのお
方は、さだめしご不快のこと
と存じ、重ねておわび申しあ
げます。

▼おそくなりましたが、いま
からでも正しいページと取り
かえたい、とご希望の読者は
おハガキでけっこうですから
その旨、編集部までお申しこ
しください。折り返し、十六
ページ分だけ、お送りいたし
ます。

裏窓編集部
伸光印刷株式会社

女忍おきゃん

とんだ秘巻の巻

左次郎



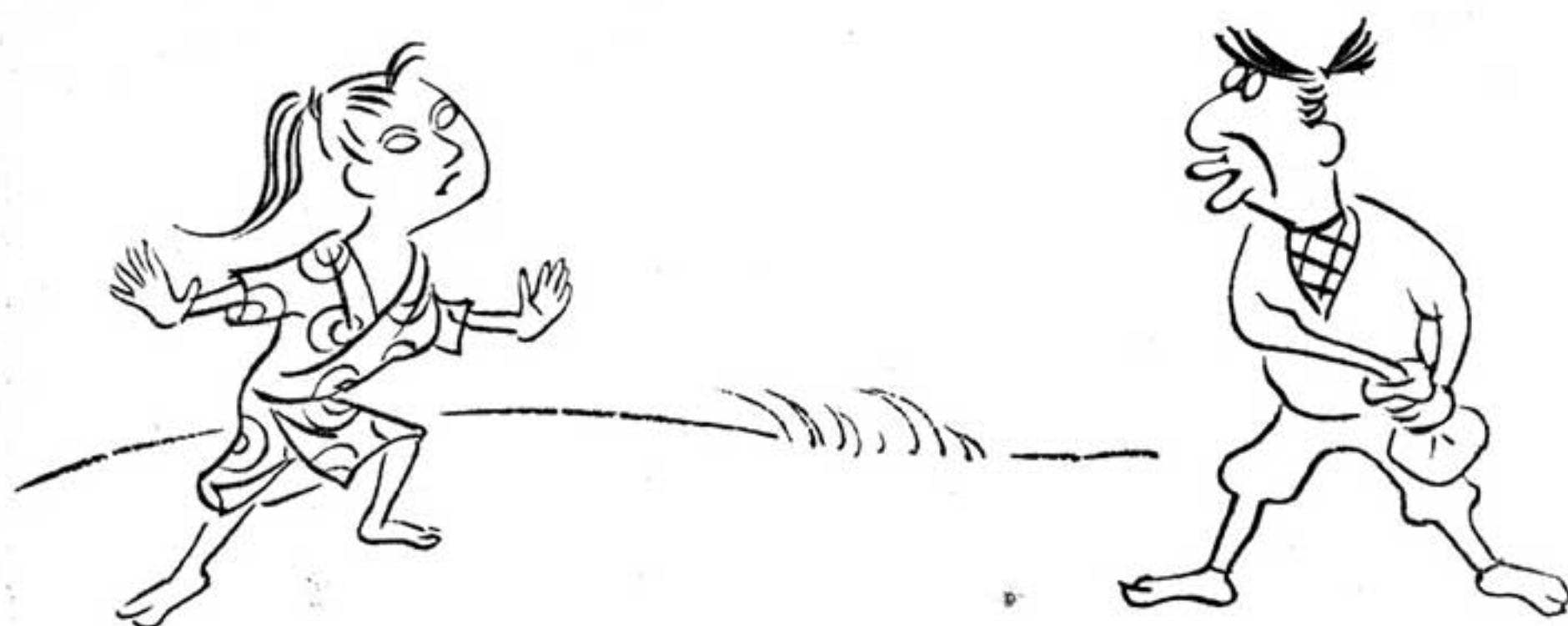
⑤
つぎは古書
文献をひもどき



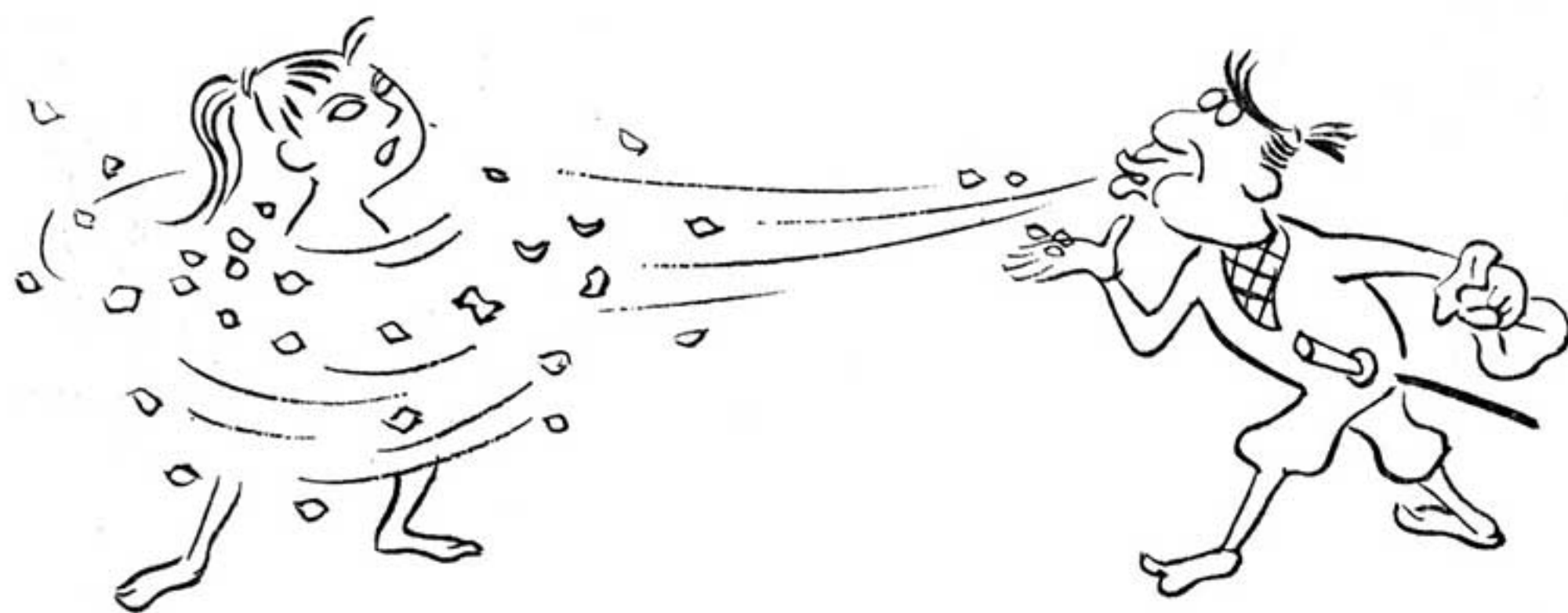
⑥
よし
この手でゆこう
用意はできた



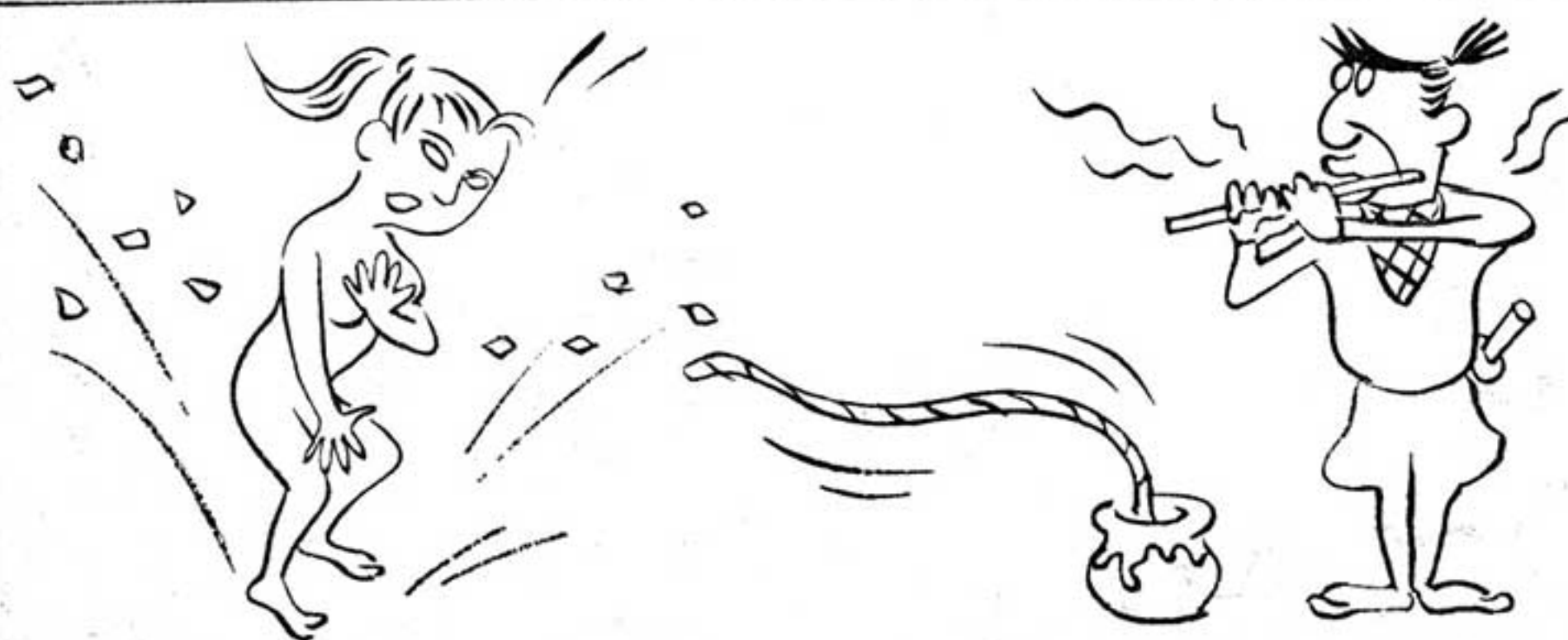
⑦
おきやん 安左
世紀の決戦



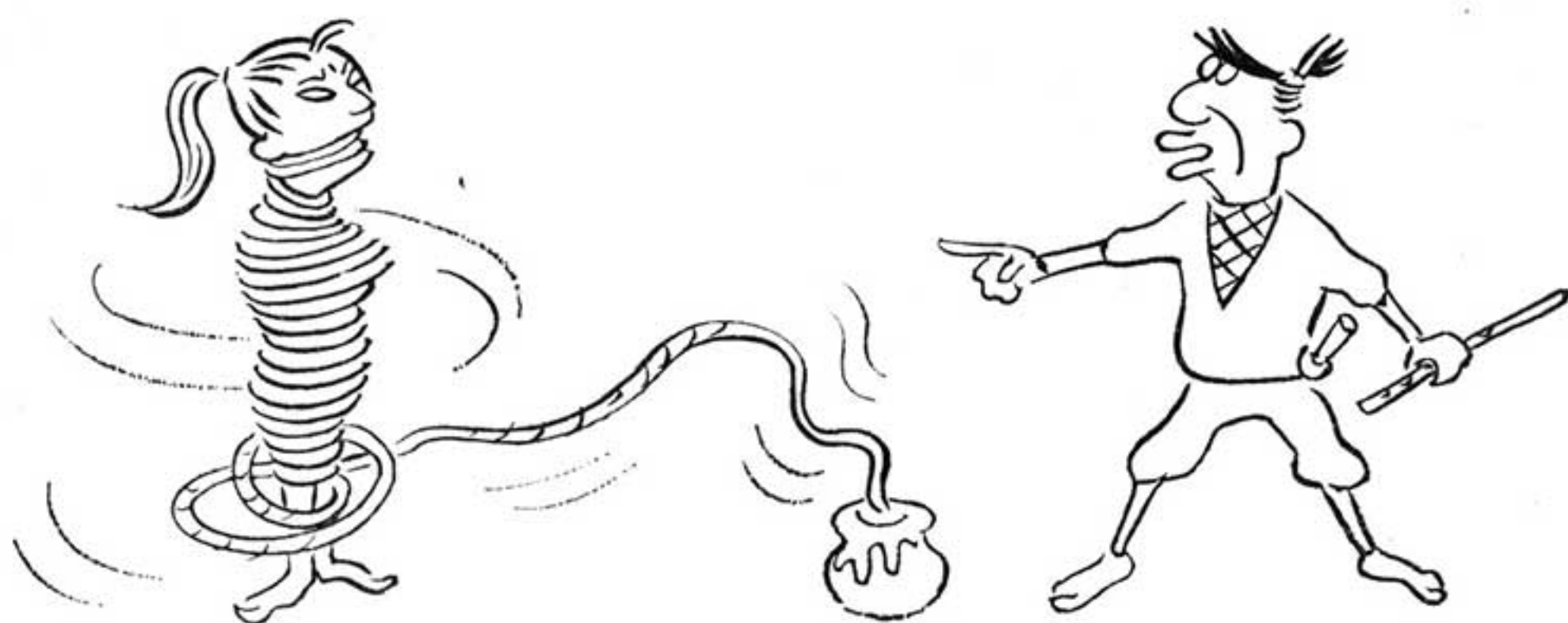
⑧
これぞ新案
ストリップの術



⑨
羞恥にひるむ
そのすきに
とりいだしたるは
笛と壺



⑩ 新案二号は
蛇縄の術



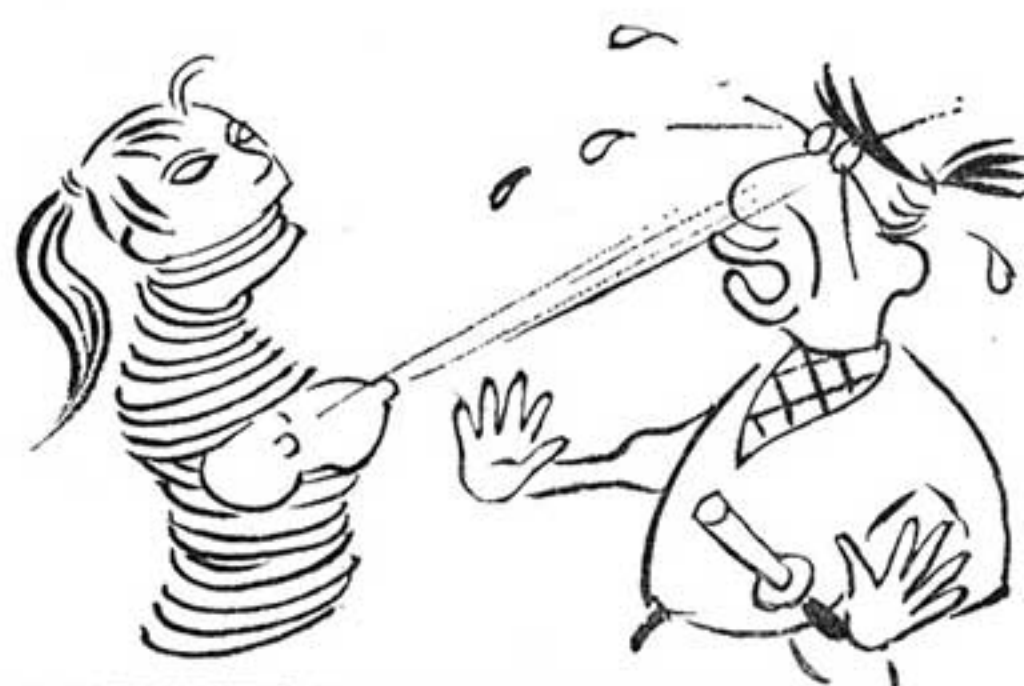
⑪ ちよいと気になる
このふくらみ



⑫ ちよいと拝見
勝者の得



⑬



⑭ 驚の羽ばたき
縄切りの術



⑮

秘術乳鉄砲で
目があけられぬ



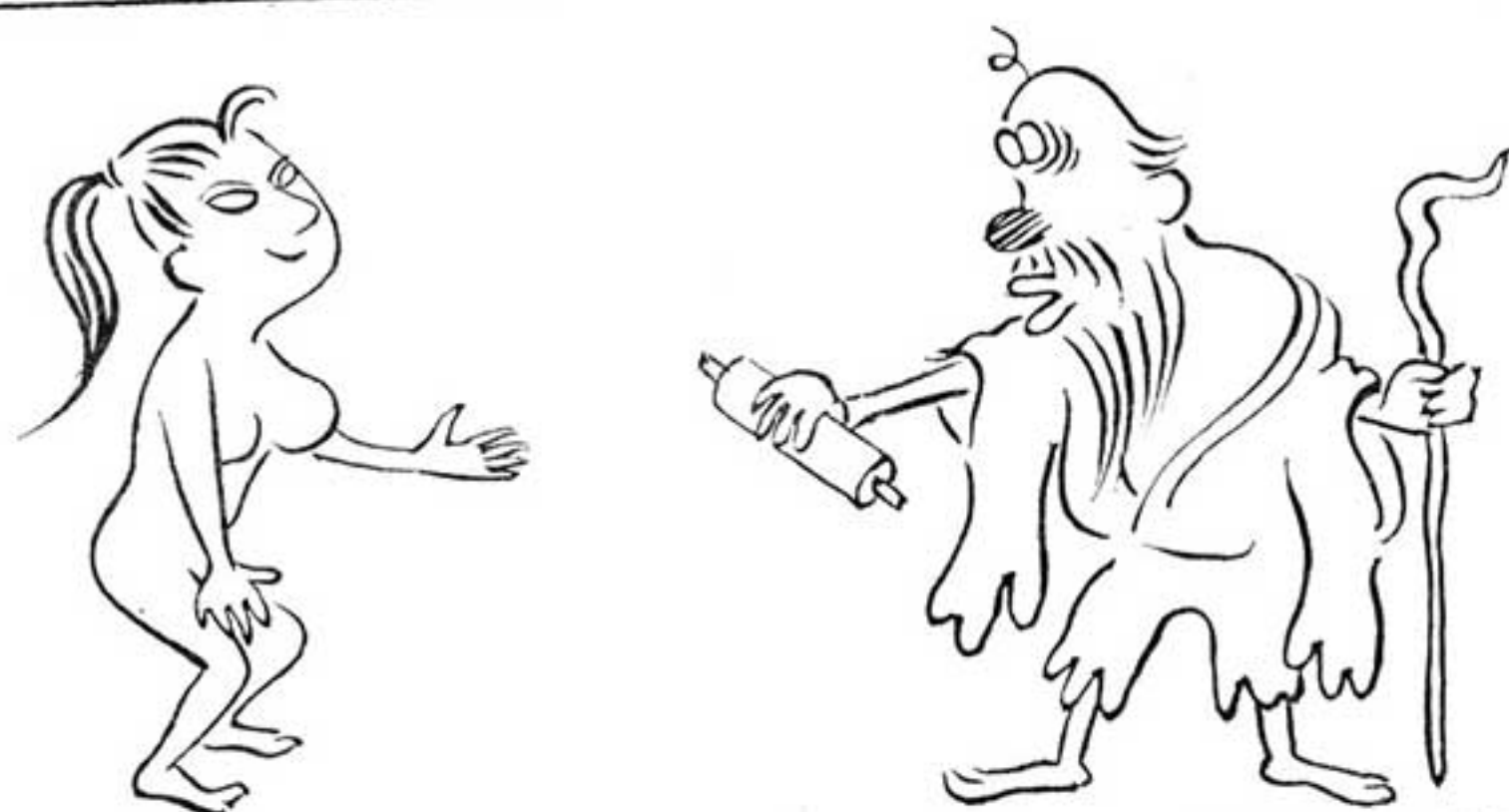
⑯



①7 おきゃん見事じゃ
勝負はあった



①8 秘巻はそちのもの
これさだいじなものじゃ
両手で受けい
ウヒヒノヒ



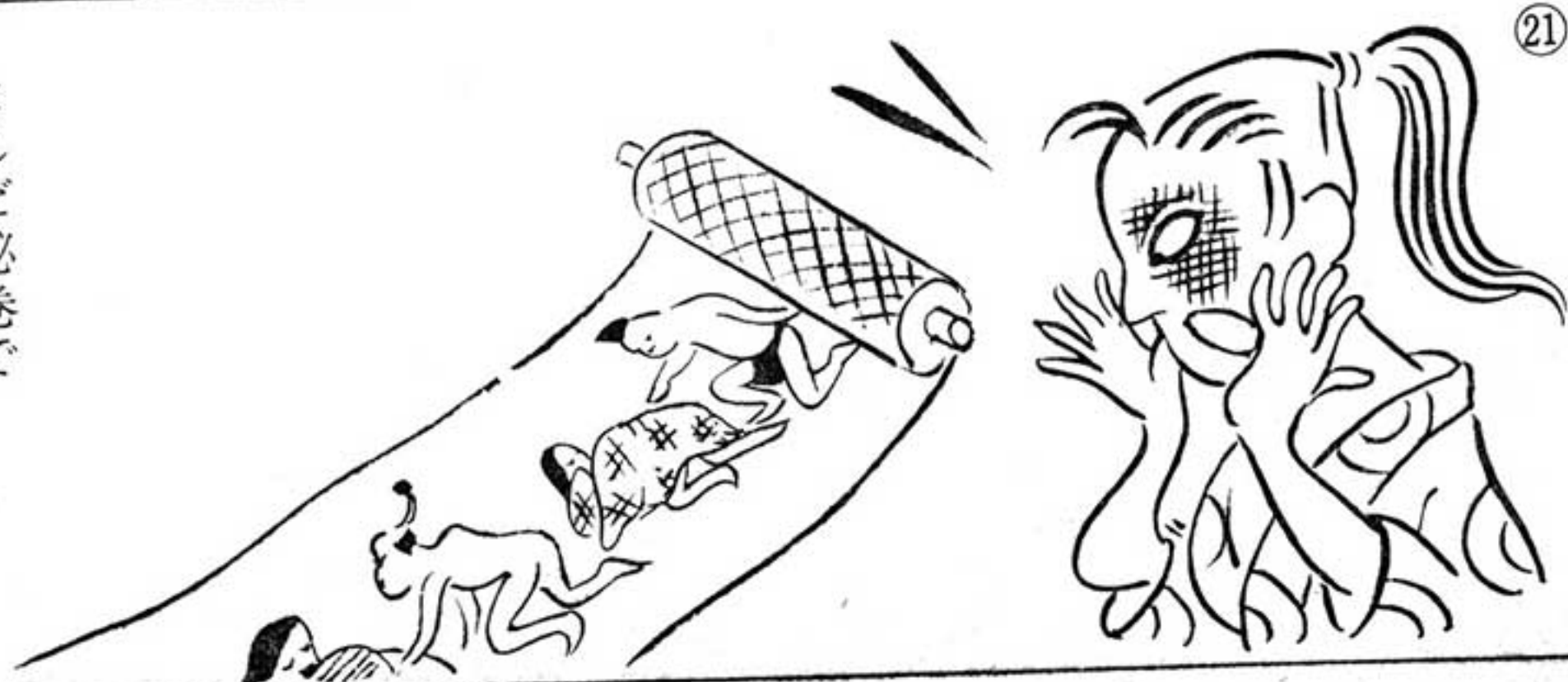
①9 女体に迷うは
まちがいのものと
安左が敗れたも
そのため
ああ!!



②0 ホイ
これはしもうた
裸に見とれて
巻ものを
まちがえた



とんだ秘巻で
免許開伝
女忍おきゃんの誕生!!



恋と仇討と美名と

かびや・かずひこ

東 桂 史・絵

反古からみつけたもの

反古を整理していると、観世ごよりをはじめたという観世又次郎をおもいだす。

——自分もなにか発明でもできたらなあ……などと考えながら、わたくしはおのが居間で、いらなくなった、文反古類をかたずけていた。神無月はじめの、ひっそりとした昼のさがりであった。

——おや？

ふと、亡母の筆蹟の残をみつけて、わたくしは手にとりあげた。残は折り畳まれてその上書きに、

「勝弥十三歳になるとき、これを抜きみる

べし」としるされている。

すぐに封じ目を切った。

「……そなたの父、中井玄番を討った竹下新五右衛門は、吉村安斎と名をかえて、筑後の柳川辺に身を隠し、おもてむきは小児科医とみせかけて、じつは一家中の軍学の指南をして、渡世している。このことを知って、女の身ながら、敵討ちの本望を遂げたいと計ったが、病に罹ってそれも叶わず、無念でならない。そなたが成人の後は、どうかこの無念を晴らしてくれるよう……」
という文面であった。自分に親の敵があることを、はじめて知った事の意外に、わたくしはおもわず、

「うーん——」と唸ってしまった。

——自分はいま十八歳……母の遺言とは五年もへだたっているが、これを知ったうえは、母の意に従わねばなるまいが。

「仇討ちか……」

わたくしの口から呟きが洩れた。

敵討ちのはなしは、わたくしはいままでたくさん耳にしている。みごとに本懐を遂げた話、返り討ちとなった話、または敵討ちにてたまま行方知れずとなった話、敵がさがしあたらず郷里に戻った話等々。

そしてその成功と否とによって、当の武士の将来の運命が、雲泥に隔てられるということも……。

——よし、その運命を賭けて、敵討ちの旅にでてみよう。殿のお心が自分からはなれているいま、いつそそのほうがよいかもしれない。そう心を決めるまでには、さほどの時間を要しなかった。

お小姓の夜の役向き

わたしが父に死別したのは九歳のとき、また、母に死別したのは十一歳のときである。ひとりとのこされたわたくしは、親族合議のうえ、上野黒門前の母方の叔母の

もとに預けられた。

それから三年をすぎた四月十七日——東照宮の祭の日であった。

わたくしはすでに十四歳になっていたが町家の叔母のうちに育てられて、近所の子ども同様、無腰の着流し姿で、遊び友達とともに路傍に立ち、通りを練り歩く大名行列をながめていた。

と、その日の夕刻、立派やかな身装りの一人の見知らぬ侍が、叔母の家を訪ねてきた。そして叔母夫婦となにやら対談していたが、まもなく、侍が帰ったあと、わたくしは夫婦の居間へ呼ばれた。

「勝弥、おまえはよく、父上のような武士になりたいといっていたね？」

と叔母がいった。

「はい、なりたいと思います」

「それが、なれるときがきたのだよ」

「えッ、ほんとうですか」

「こんなこと、だれが冗談にいうもんですか。……じつは、きょうの昼、さる大名の殿さまが、ここをお通りになったとき、お駕籠の窓からおまえをみかけて、たいそう気に入ったとか、ぜひおまえをおそば小姓に召しかかえたいと、ご近侍の方をうちへ

およこしになったんだよ。……では、承知しますね？」

「はいッ……」

わたくしの返事ははずんでいた。先刻の侍がおいていったという支度金で、その日のうちに、わたくしの衣裳いっさいがととのえられた。

あくる朝、侍がお召し替えのお馬を曳いて、わたくしを迎えにきた。叔母夫婦にいとまごいをすますと、きのうにかかわる颯爽とした小姓姿で、馬に跨がり、近所の遊び朋輩が見送ってくれるなかを、侍につれ



杖

られて、お上屋敷にはいった。

さっそく、大殿さまに拝謁した。殿さまはなにも仰言らず、ただ満足そうな微笑をうかべたまま、わたくしの顔にみいつているようであった。

色白の品のよいお顔、お年のほどはわたくしにはよくわからないが、四十歳くらいにもなっていたのだろうか。

その夜、わたくしは、殿の寢所へよびだされた。殿は休んでいられたが、わたくしをみると、おしとねをわずかにひきあけられて、

「ここへ……」

と低いお声で仰言った。

いっしょにやすめ、との意らしい。思いもかけぬことに、わたくしは身体じゅうが羞恥でいっぱいになり、もじもじした。殿は、そうしたわたくしを、じーつとご覧になっている。

——そうだ、自分はきょうから武士になったのだ。と、わたくしは気がついた。

——遅疑逡巡はいけない。早断に、果断に、そう自分にいいきかせると、思いきって衣裳をぬぎすて、下着姿のまま、おそるおそる殿のおそばへ、衾にはいった。

「勝弥は武家の出だけに、凛々しいのう」殿はわたくしのほうへおむきになっていた。

「はい……」

「若道のこと、心得ておるか？」

つついて、ささやくようなお声が、わたくしの耳元へ伝わってきた。

「いえ……すこしも存じませぬ」

「そうか、おくてだのう。……いや、いっそ、そのほうが可愛い。よいよい、おいおいわかってくる」

そう仰言ると、殿はしずかにやさしく、

わたくしの身体をだきしめられた。

わたくしは身体を堅くした。が、堅くしながらも、おそれ多いことだが、幼いころの父のにおいを、殿から嗅いだように感じた。

なにやらわけのわからぬままに、夜が明けてあくる朝、自分にあたえられた居間に戻ると、わたくしは、きのう叔母の家を出るまぎわに、「御前に上ったら、さっそく読むように……」といって、叔母が手渡ししてくれた書物を取り出した。昨夜の不審のわけが、そのなかにひそんでいるように感じたからだ。

書物の表題は、「若衆つれづれぐさ」と記されてあった。わたくしは序文から読みくだった。

はたしてそれは、若道のこと——稚児若衆たるべき者の閨中の心得から、行住坐臥の作法を、うるおいのある文体で、かんでふくめるように教えたものであった。

わたくしはようやく、若道というものをいくぶんのみこむことができたように思った。

——が、自分は男子として、武士として、これでよいのであろうか？

という疑問が、そのとき、わたくしの脳裡に起きた。が、まもなく、その疑問を強いて打ちけした。

——この世に色欲というものがあるうえは、女によってそれを慰めるか、男によって癒すかの二つである。とすれば、女色よりは、むしろ男色のほうが、男らしい気がする。自分はただそれに溺れることなく、武道を励めばよい。と、考えなおしたのである。

殿は愛妾も幾人か抱えていられるようであるが、とりわけ若道のほうをおこのみらしく、ことに新規抱えのわたくしをひじょうに寵愛くだされ、毎夜のように、わたくしに伽を命じられた。

殿はいつもおやさしく、温かであった。あるときはわたくしの寝姿のしどけなさに、はずれた枕をあてがってくださいされた。わたくしの胸のあいたところを、風邪をひかぬようにとお下着の白小袖でふさがれたこともある。

また、わたくしのほほの小さなほくろを、気にかかると仰せられ、たがいにかわらぬしるしの松の葉を束ねた針で、手ずから抜いてくだされたこともあった。



古傍輩は京こじき

敵討ちによって、これからさきのみずからの運命を展開しよう——と、心をきめたわたくしは、ある日、殿のご機嫌のよいときをみて、所存をかきつけたものをさしあげた。

ご寵愛をうけている時分であつたら、おそらく、容易においとまはくださらなかつたであろうが、いまは案に違わず、さっそくお許しがあつて、おいとまごいの盃までくださつたうえ、

「めでたく敵を討って帰参したときは、五百石を賜わるべし」と

という御黒印を頂戴した。

お納戸から道中の路金を貰うけ、心きいた五人の下人を伴つて、三田八幡に祈願のち、江戸を發つたのは、寛永九年十月十二日であつた。途中、泊りをかさねながら、おなじ月の十九日の朝、京都に着いた。三条鯉山の町にしろべの者があるので、もしもそれにみられては……と、馬からおりとすぐ編み笠を深く被つて、方広寺大仏のほうへ路を急いだ。

大仏のほとりに、着込み細工の名人がい

もに、ひそめておいた。

——自分は花ならいまが盛りである。

とわたくしは自負していた。が、それは迂濶な考えであつた。先月のはじめころから、殿のお心が同僚の小姓千川森之丞どのに移られたのだ。

嫉妬よりもむしろ、わたくしは、自負を傷つけられたことで口惜しかった。

自害して果てようと思つた。が、障ることとがあつて延ばしているうちに、反古のなかから、亡母のかきおきをみつけたのである。

あるときはまた、若殿さまにも仰せられぬというお家の秘密を、勝弥だけに……とわたくしにおはなしになられた。

わたくしはだんだんと若道のよさが分つてきた。それは信と愛とで貫かれていると思つた。わたくしは大殿に信服した。このように心をかけてくださる殿へのせめてものご恩返しに、もし大殿に万一のこのあつたときは、ご禁制のことながら、いさぎよく、殉死する覚悟であつた。

そしてその覚悟のために、無紋の上下、小脇差などを、書置き函のなかに、魂とと

る。そこで鎖帷子（くさりかたびら）を求めるためである。ほどなく、目的の場所にきた。耳塚の草のうえに白く霜がおりていた。

と、その霜のなかに、竹の小笠に風をよけながら、こじき風態の、体つき逞しい男がねていたが、わたくしたちをみると、むっくり起きあがって、

「一錢やってください」と手をだした。

ふいと、そのこじきと顔をみあわせたとき、男はいそいで首をちじめ、袖で顔をかきした。不審に思っ、むりにのぞきこんでみると、その男はかつておなじ家中にいた侍、片岡源介さまなのだ。しかもあのころ、わたくしに幾通かの恋文をよせてきたひと……。

「おお、片岡さまでは……」という、

「面目しだいもない」と源介さまは、いっそう顔をうつむける。

「あなたは望みがあつて、おいとまを申しうけたときいていました。……なんでも、このような姿に……？」

「いや、望みがあつたことは事実なのだが……」

と源介さまの語ったところでは——江戸

を發ってから、親族の片岡外記を頼って、越後の村上へ行き、身の振りかたもおおかつすんだとき、外記が急死してしまった。

頼りにしていた人に死なれて、望みは頓挫した。大いに困ったうえに、去る年の六月の末から眼を患って、善峰にきて病氣養生をしていたが、なかなかはかばかしくない。

そのうちに路銀は遣いはたしてしまふしつれてきた下人は渡り者のこととて、源介さまをみかぎって去ってしまった。死のうと思つても、因果で死なれぬ命なので、本意ないことながら、通行の人に物乞いしてその日を送っている、というのである。

「……自分の身のすたるよりも、残る名のほうが惜しまれるから、いちど生国の南部にくだつて、立ち直りたいと思つているのだが……。あなたと別れてからまだ何年にもならぬので、すぐにみつかつてしまいましたナ」

語りおわつて、源介さまは、さきほどのしおれかたはどこえやら、磊落そうに笑顔をあげる。

気がつく、物見高いは京の常、いつのまにかわたくしたちの周りを、近くの店の

者らしいのや、旅人らしい者、馬子などがとりまいて、みまもっている。

「では、わたくしもいろいろおはなし申しあげたいことがございますが、委細は夜に入ってからとしまして、それまでここにいてください」

そう源介さまにいいおいて、その場を去つた。それから京の町に宿をとつて、日が暮れるとすぐ、わたくしは供をつれず、ひとりで大仏前へでかけた。

が、場所をかえたのか、そのあたりに源介さまらしい影はみあたらない。わたくしは困つて、非人のたむろ場所ときく二条河原へゆき、苦を仮り葺きにした片庇のなかで、焚き火をしながらくちでも打っているらしい、三人づれの非人に、

「源介どのというひとは知らぬか」

とたずねた。

「そんなこじきは知りやせんね。ここにいろのは、合いかぎの三吉」

「目ふるまの虎蔵」

「抜け穴の権」

とふざけた調子の渡りセリフで、非人たちはいった。しかたなく、そのまま岸伝いに歩いていくと、暗闇のなかに、老婆らし

い声で、

「もうあすのおまんまの金もないから、誓願寺の門前でみておいた棄て児の肌着を剥ぎにかけようか」

とひとりごとしているのがきこえた。

いままで美しいものにのみ眼をとられていたわたくしには、あまりにあさましいことばかりである。なにやら哀しくなつて、しおれはてて歩きまわっているうちに、どこからか、

へふたたび世をとり、会稽の恥を……

と船弁慶を謡っている声……

——もしや……

と思つて、その声のほうへちかづいていくと、焚き火のなかに石を据えて、土がまをかけた前に、どうやら茶で酒盛りの真似でもしているらしい男。焰のあかりでたしかめると、はたして源介さまである。

「これは奇特のおたずねにあずかります」
わたくしをみるより、かれは茶羅化したような調子でいった。

「なぜ、約束の場所にいてくださらぬ？」
とわたくしは真顔でつめよった。

「そうは仰言られたのだが、考えてみるといまはあなたとは縁のない身。逢つたところ



ろでどうなろうと思ひましてナ」

「そんなことはございませぬ」

「どうして？」

「自分がこのたび京に上つたのは、父の敵を尋ねて筑後まで行く途中なのです。が、人の命は定めがたいもの、もし返り討ちにでも遇つたときは、ふたたびお逢いすることはできません。」

おたがい、江戸詰めだったころ、あなたはわたくしのような者にご執心されて、ありがたい文を数通までも頂いております。しかし、わたくしは、大殿の御座に待っていましたので、あなたにご返事さしあげられず、まして歓を通ずることなど叶うことなく、過ぎてしまいました。

そのことが心がかかりでございましたが、今日はからずも、あなたと再会できましたことは、わたくしにはどんなにか嬉しいこととでしょう。今宵は心のかかりのこと、果たしとうございます」

いいもおわらぬうちにわたくしは、いきなり、源介さまの膝のうえに、倒れ伏した。と、わたくしの体がだきしめられた。強く、口が吸われた。

「勝弥どの……かたじけない……」

源介さまはわたくしのほほにほほをすりながら、低いが、烈しい語気でいう。

ながい非人ぐらしからくる源介さまの体におい、きもののおいも、わたくしにはすこしも厭わしくなかった。いやむしろ、芳香とすら感じた、といったらいすぎと思われるであろうか。

このように睦みかわして、わたくしたちは、その夜は寝もやらぬままに、黒谷の明けの鐘の音をきき、高頼川に棹さす人の顔もみえるくらいに明るくなって、飽かぬ別れのときを迎えた。

源介さまは、ちぎれた^{かます}吠から、ひとふりの仕込み杖の刀をとりだすと、わたくしの前へさしだした。

「こんな姿となつても、一腰を離さないでいることだけは、頼もしいと思つてもらいたい。……大原の実盛の二尺三寸だ。わしの先祖が信玄公に仕えていたころ、川中島で功名をたてた刀と、いいつたえられていゝる。……これで首尾よく本意を遂げなさい」わたくしは辞退せずうけとつて、自分の差し替えを源介さまの手許に残すと、立ちあがりながら、左の袂からとりだした、金子一包みを、そこにおいた。

近くにたむろしているいざりや手無しの非人が、じーッとその金包みをみているのに、わたくしは気がついた。

わたくしはかれらにいった。

「そなたたちにもよろしく頼むゆゑ、これを路銀として、源介どのを国許へ帰してくだされ」

本懐とげての世評判

わたくしたち一行は翌日の、昼船で難波へ行き、二十一日に早船を借りきつて、二十八日に目ざす柳川へ着いた。

ひそかに里に宿をもとめると、一同、商人風、職人風それぞれに姿をかえて、安斉の新五右衛門のありかを捜しはじめた。

なかなかみあたらずに、その年も暮れて、翌る寛永十年三月下旬、野に杉菜やすみれの咲くころ、ようやく敵、安斉の住居をつきとめた。

うしろに山を背負い、前に流の激しい谷川を構え、土橋一本でその家に通うようになつてゐる。狙われる身と覺つて、要害のところ居を構えてゐると知れた。

わたくしは供の下人たちと相談のうえ、二十八日に夜襲ときめ、その前日、最後の

酒盛りながら、攻める手段や、退き道などを討議した。

当日は暮れがたから、一同ばらばらに宿をでて、安斉の家から八町ばかりてまへの辻堂におちあい、夜の更けるまで隠れ忍んでいた。

寅の上刻とおもうとき、辻堂をでた。

下人二人、東西から、笹葺きの安斉の家を火をかけさせ、わたくしは他の三人をつれて、忍び返しを切つて、家内に押し入つた。

安斉の寝所とおぼしき部屋にふみこむと、衾から起きあがったひとりの男が、枕元の刀をとるより、わたくしに斬つてかかった。想像していた、風貌と違つて、半白の髪の毛、品のよい顔立ちの老人である。

わたくしは相手と刀を合わせながら、父とおのれとの名を名乗つた。

「元新五右衛門、いまの名、安斉であろうが……？」

と質すと、相手は即座に、「いかにも……」と答えた。

軍学の指南というだけに、安斉の腕はあなどりがたくみえた。が、わたくしは切つ先するどく斬りこみ、ついに相手を討ち果

たして、首掻き切った。

下人たちは、安斎の一族郎党と斬りあっていた。わたくしはすぐにそれに加わり、後々の煩わしさを思っ、一家みなごろしにした。味方は下人一人が斬られたのみであつた。

表門から安斎の家を立ちいでて、二町ほども来たころ、この村の者らしい群れが、松明をかざしながら、「待て！」「逃がすな！」と大声あげて、わたくしたちを追ってきた。

こちらはいずれも疲れはてている身の、多勢を相手では、とうてい生還は覚束ない。わたくしは斬り死にと心をきめた。

と、そのときである。

「勝弥どの、退き道はここにある。おりてこい」

と高らかによぶ声が、川岸からのぼってきた。

「何者だ？……」

「源介の声を忘れたか……早くしろ！」

わたくしは、あッと驚き、ほっともして、下人ともども川岸にかけおりた。

川明りにすかしみると、岸に繫いだ小舟のなかに、わたくしたちをさしまねいてい

杖



るのは、身装りこそ行商人風になっているが、はたして、紛れもない片岡源介さまであつた。

一同が船に乗りこむと、源介さまは繫いだ綱を解いた。

船は激流のままに、川筋を疾走しだした。追手の者たちは、これとみると、土橋を渡りだしたが、橋のなかほどが壊れてでもいたのか、あつというまに先頭の幾人かが、ばらばらと谷川に墜ちこんだ。

櫓を操る源介さまも、わたくしたちも、

闇のなかに押し黙ったままだ。

船はその夜のうちに、三里半ほども走って、白々明けのころ、脇の浜というところへ着いた。わたくしたちは、はじめて、たがい無事の姿をみあわせた。

「片岡さま、昨夜は大事のさいにわざわざおいで頂き、危うい命をお助けくださいまして……」

わたくしがそう礼の言葉をのべかけると源介さまはニヤリと微笑った。

「さりとは迂濶なことをいうひとだ。おい

でいただきうんぬんは、あのと時のみではござらぬ。三条河原でそなたと別れてから、毎日、朝から晩まで、影の形に添うように、わしはそなたの身の周りに目を配っていたのだが」

「えッ、それはほんとの……」

「うそではない証拠に、一つ二つをお話し申そうか。……あるとき、久留米の城下まで尋ねていったときのことだ。大雪のなかで、あなたは一人の小者ともども、行き倒れとなった。」

わしはすぐに用意のにんじんそなたたちの口に入れて、岩洩る清水の雫を手にとりて飲ませ、また、肌で肌を温めて、正気づけさせた。

どなたさまかとあなたは夢うつつの顔で問いなされたが、通行の者といいすて、その場を考えるようにみせかけ、叢竹のかげに隠れてようすをみていると、あなたは小者にむかい、いまのは氏神さまの化身だろうといって、立ち去っていった。

また、去年十二年九日の夜の野道で、わしはそなたたちの先きに立ち、ところどころに火を焚いて、道しるべしてあげたこと、

おもいあたるでござろう。

近くは昨夜、追手の者が川におちこんだ土橋も、あのようなことがあるだろうと考え、前もってわしが、橋のなかほどを切りおとしておいたものなのだ。だが、墜ちたのは追手ばかりではない。他に犠牲者もあった。

百姓の女と牛飼いとが、知らずに渡って墜ちこんだ。

もしそれを爾前にとめれば、安齊宅に知られてしまうおそれがあるため、わしはみずからの残酷さに身のすくむおもいをしながらも、じっとそれをみていた……」

「それほどまでにお心を砕かれて、まことに礼の申しあげようもございませぬ」

「いや、わしはそなたからお礼をしてもらいたくて、こんなことをしたのではない。三条河原で、そなたから、生まれてはじめてのような、温かい情（なさけ）をかけてもらったことへの、ささやかなお返しのもりなのだ」

「お返し、あらためてありがとうございます。……片岡さま、それほどまでにわたくしを思ってくださいるならば、とてもものに江

戸まで見送ってくださいませぬか」

源介さまとこのまま右と左に袂を別てしまいたくないので、わたくしはそう頼み源介さまの承諾を得た。

翌る四月はじめ、わたくしたちは、江戸へ立ち帰った。

さっそく大殿さまの前に、右の段々を申しあげたところ、大いにおよろこびになつて、源介さまを召しだされ、三百石のご加増、しかも無役で、そのうえ「勝弥との仲を許す」

とのお言葉を賜わった。

源介さまとわたくしは、天下晴れて兄弟と名乗ることができた。

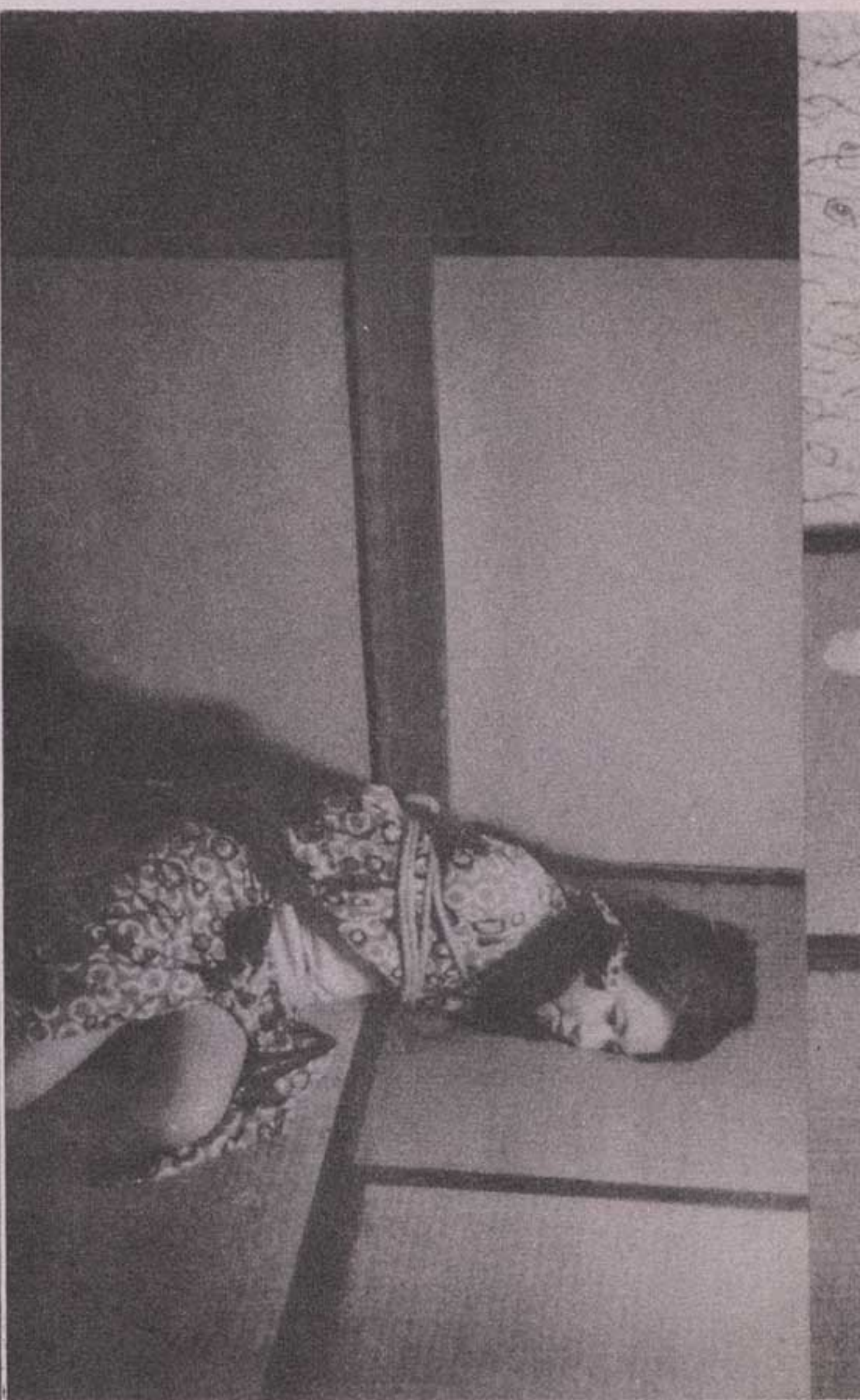
が、もしもこれが、わたくしが返り討ちになったとか、敵を捜しあたらなかったとすれば——わたくしを若衆の鑑などと、世間では評判しているときくが、まことに世の美名のあさはかさは、笑止にたえない気がする。

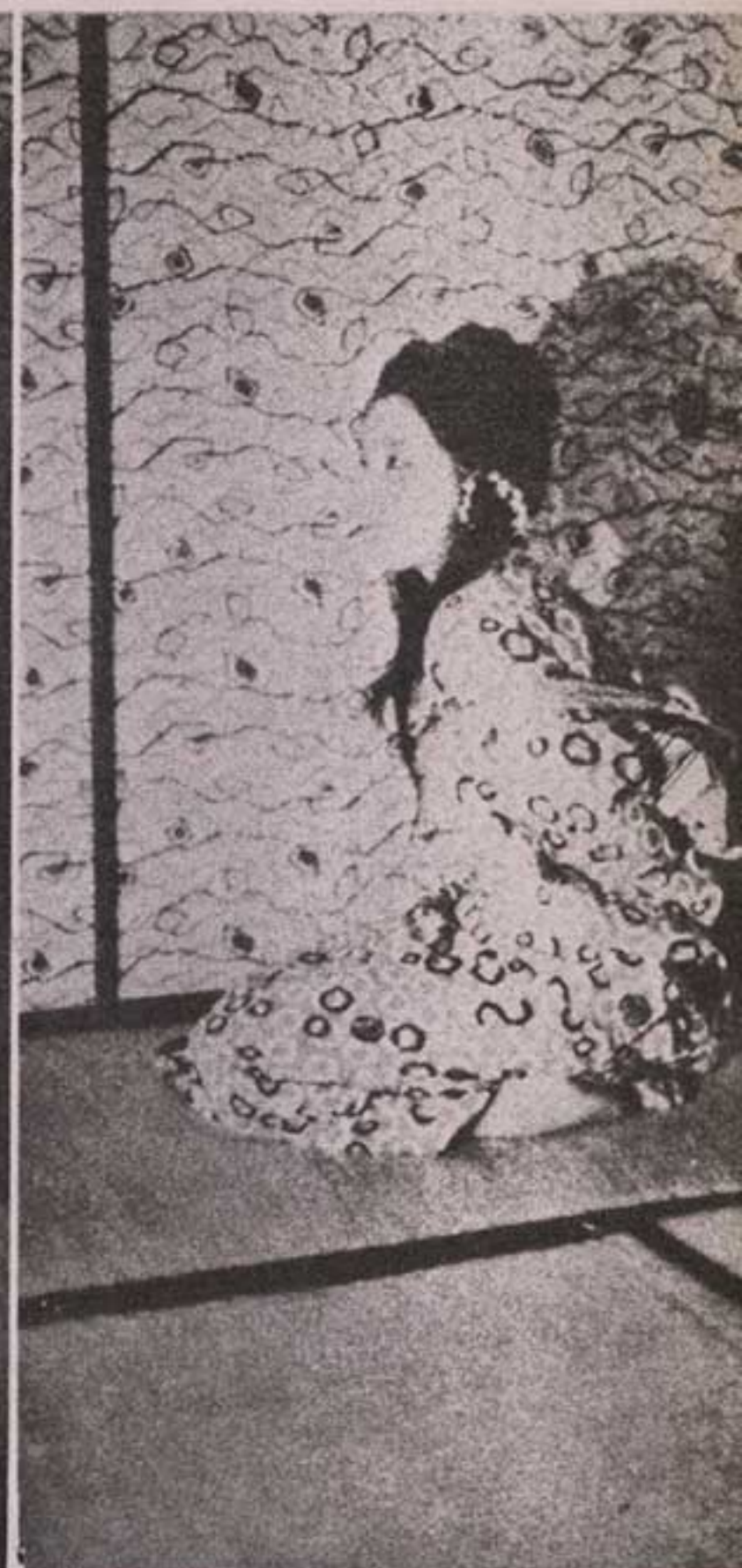
きもの の 繚 乱

モデル・柚木あぐり
カメラ・北 好 夫

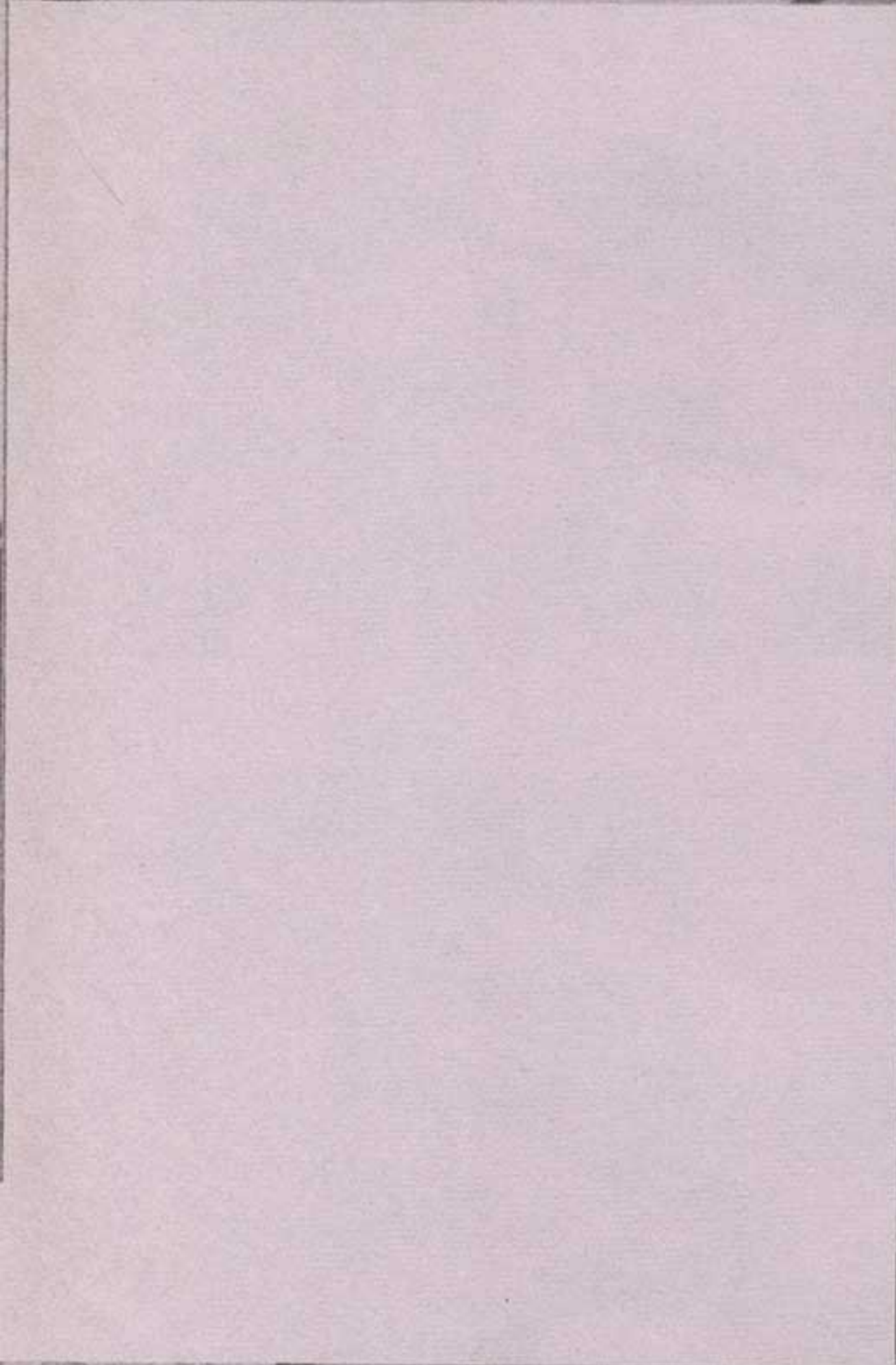




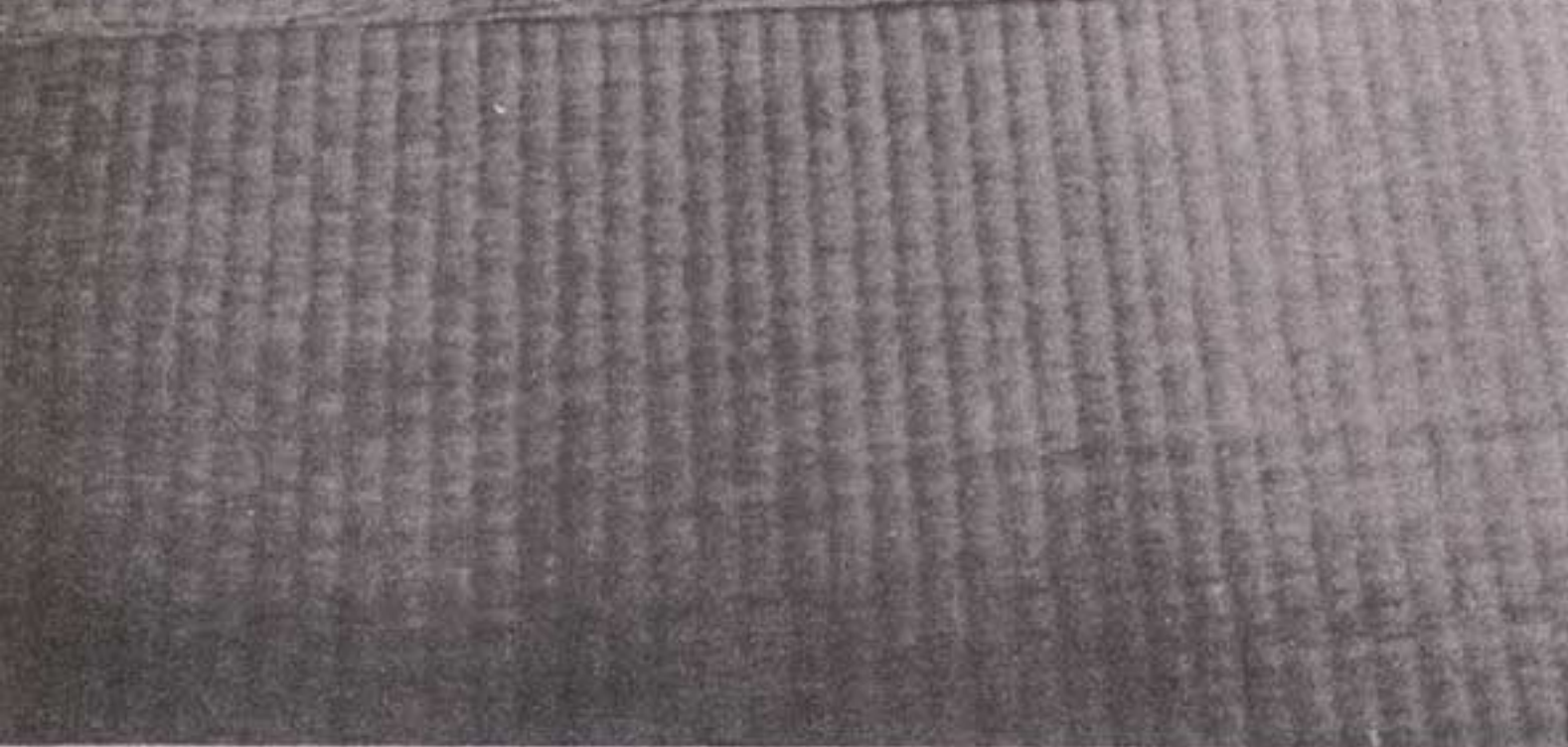












五百羅漢

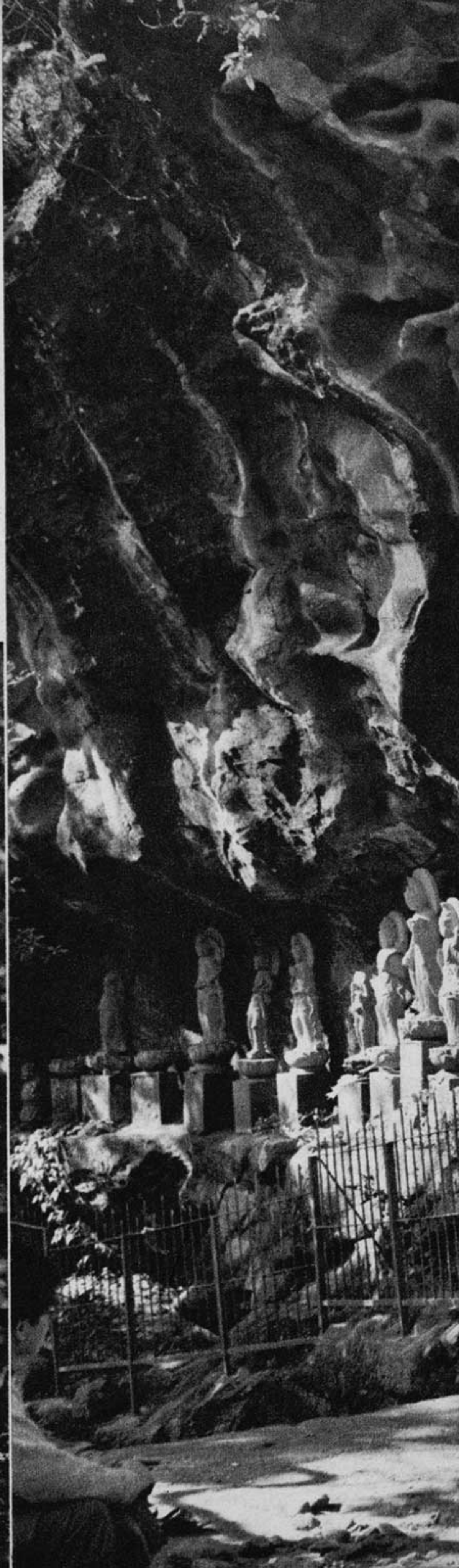
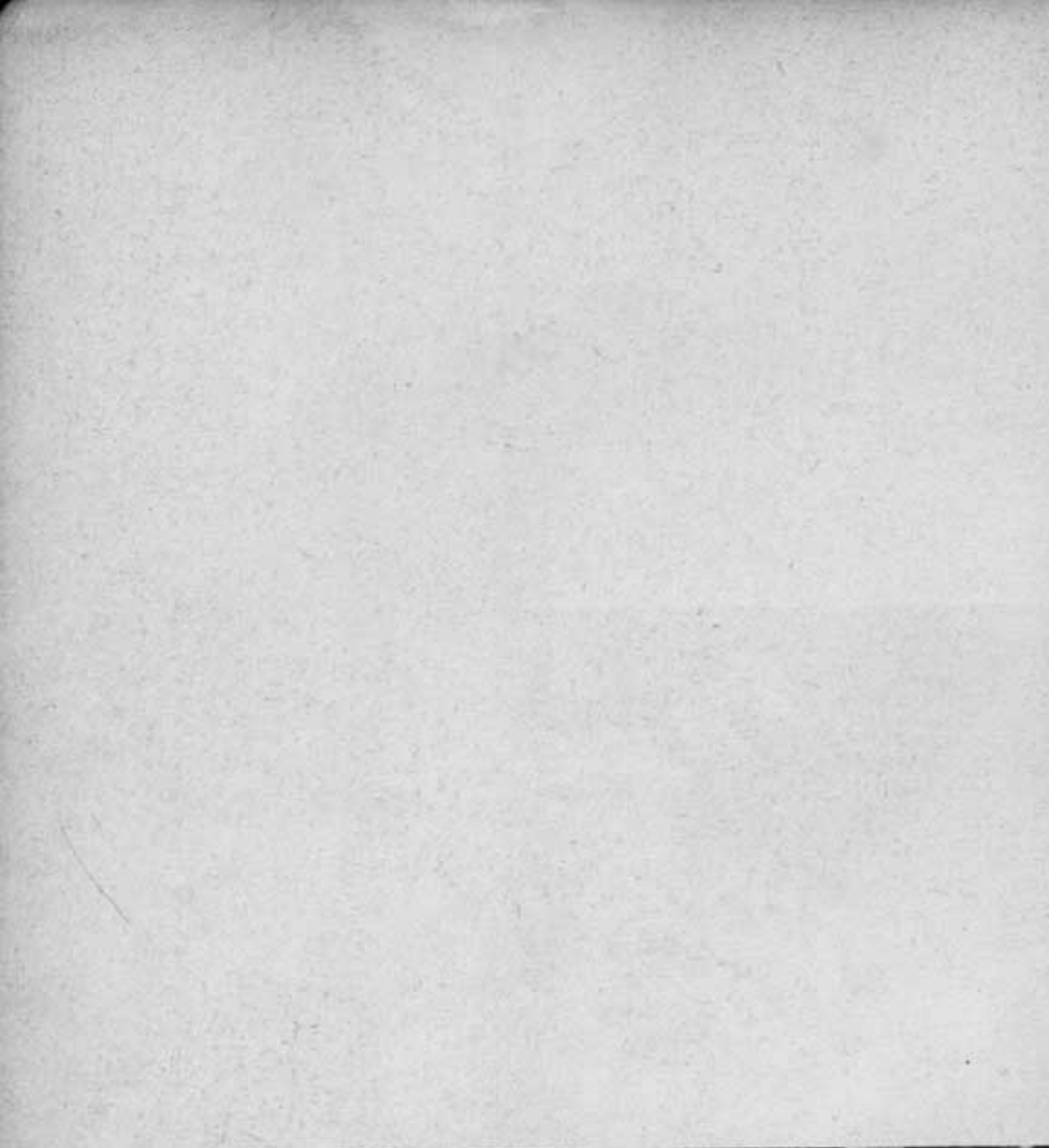
カメラ・吉田 久
モデル・小笠原純子











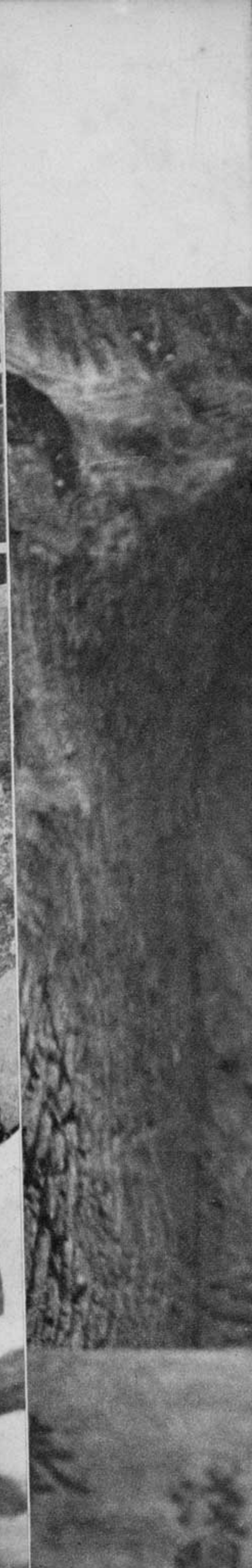
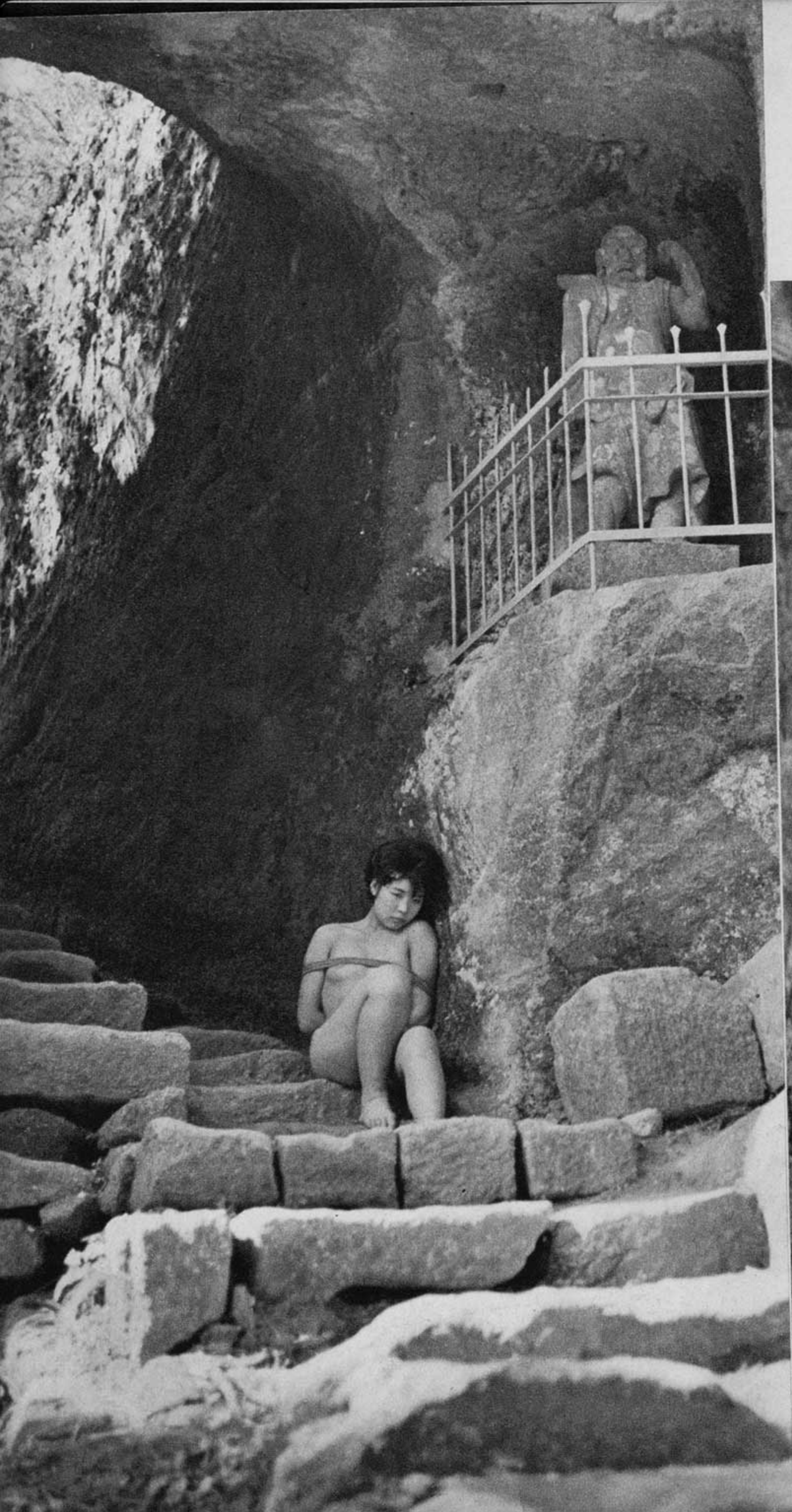


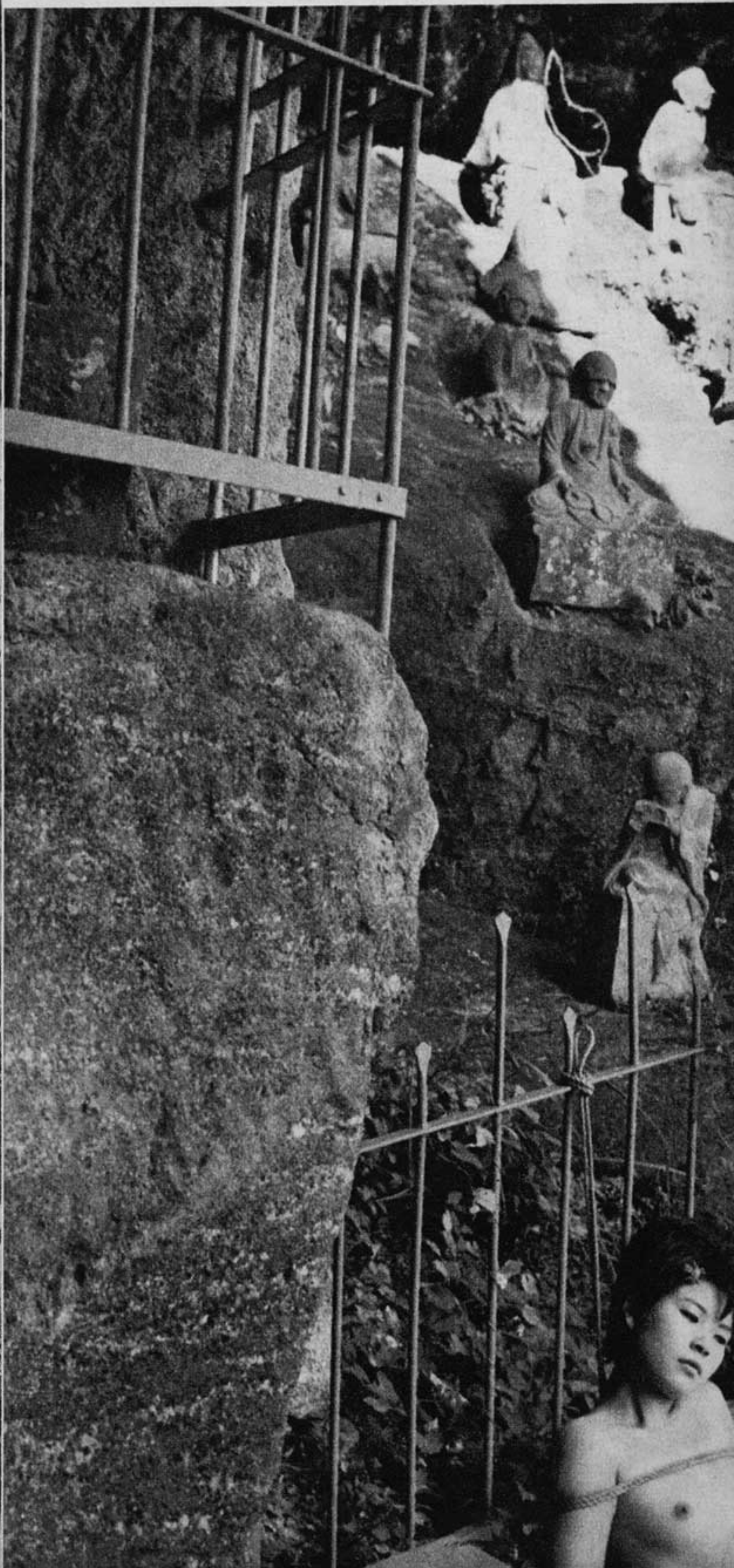
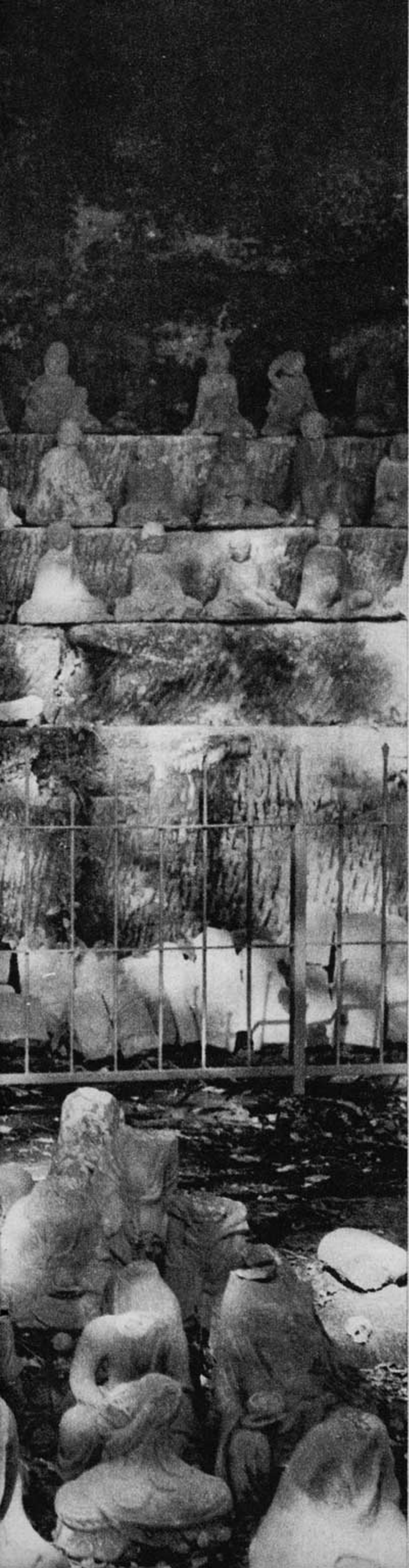






納













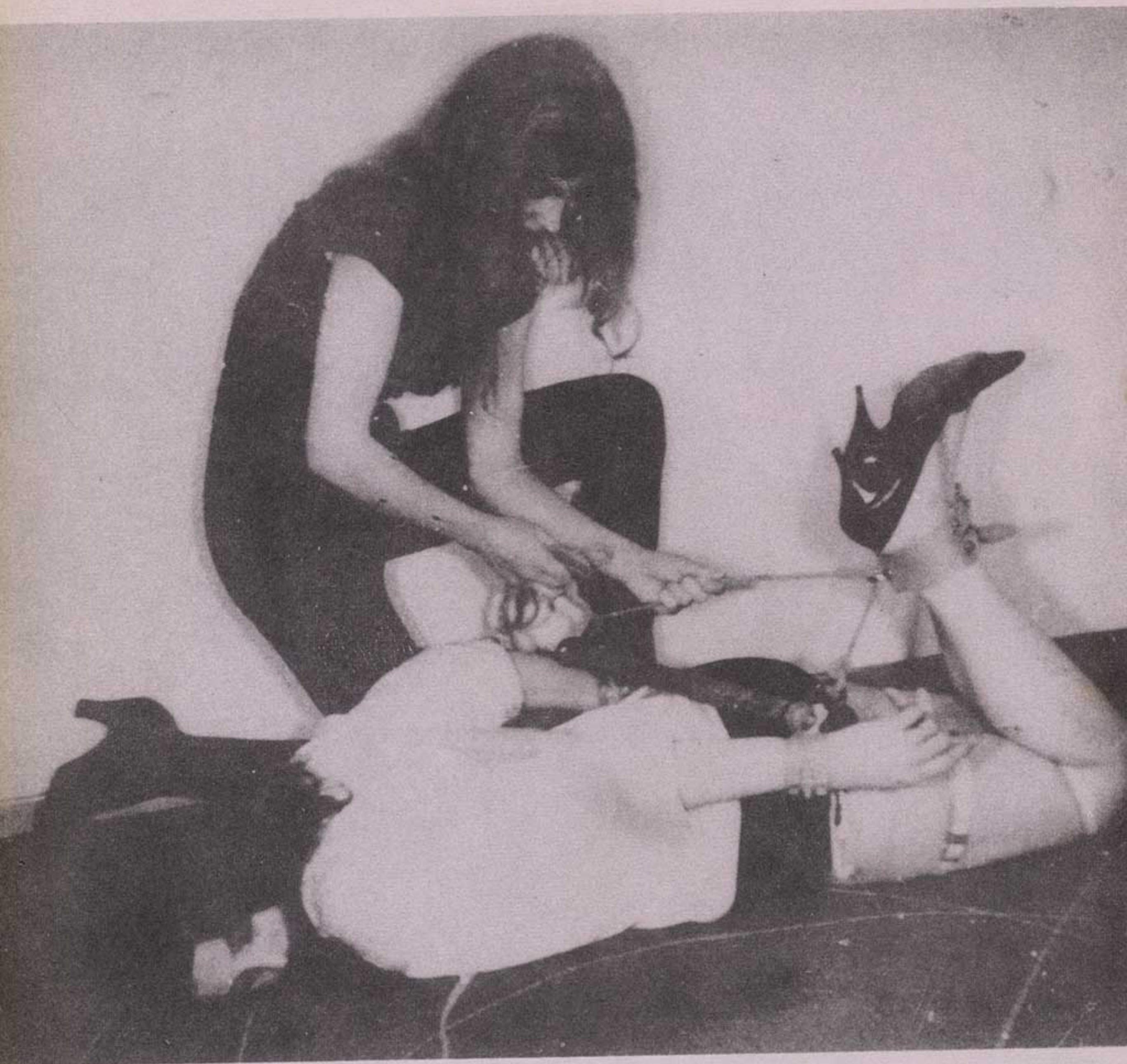
海外の公刊誌より

ふたりのお遊戯



西ドイツ・フエニクス商会・特約



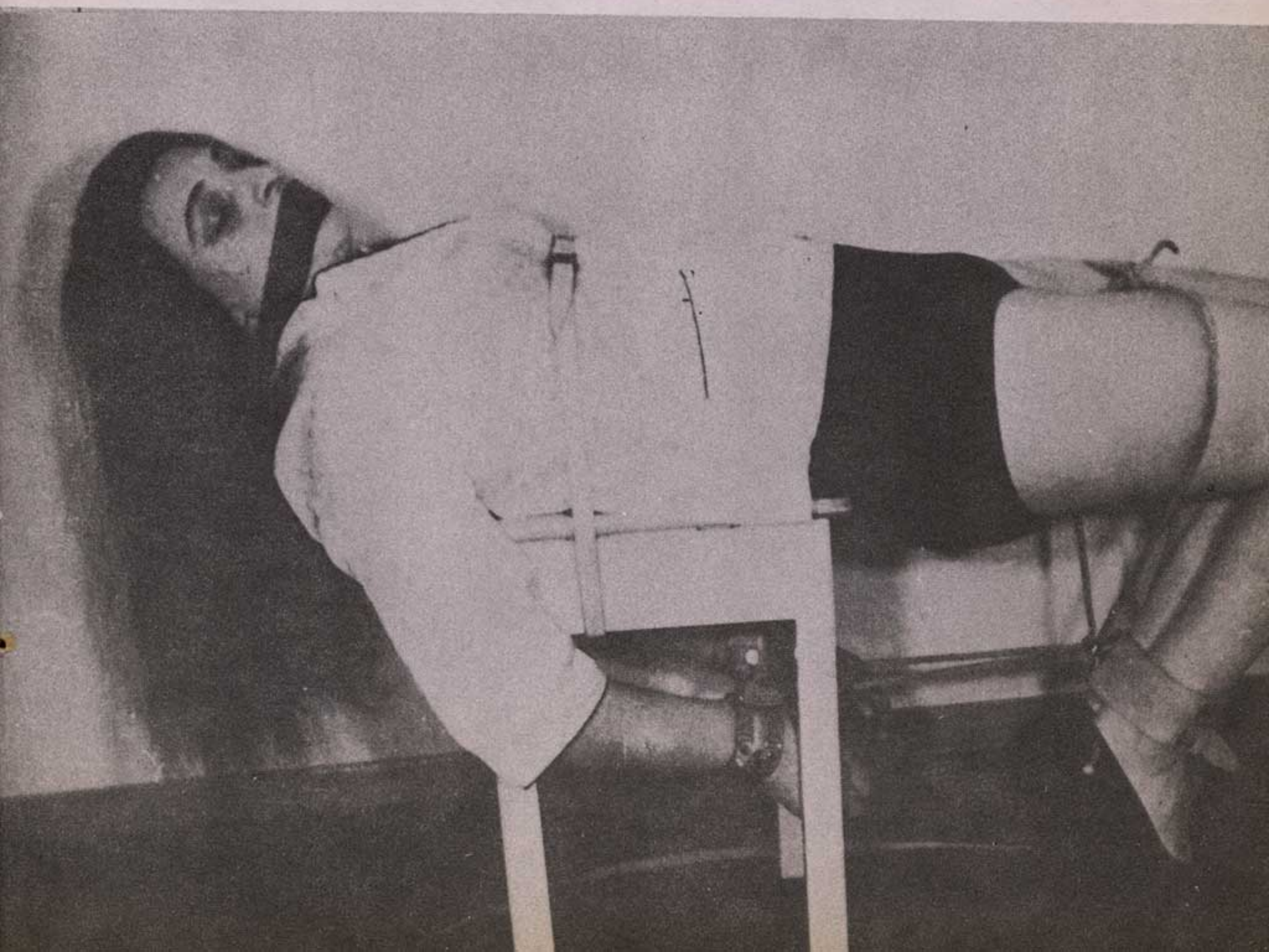
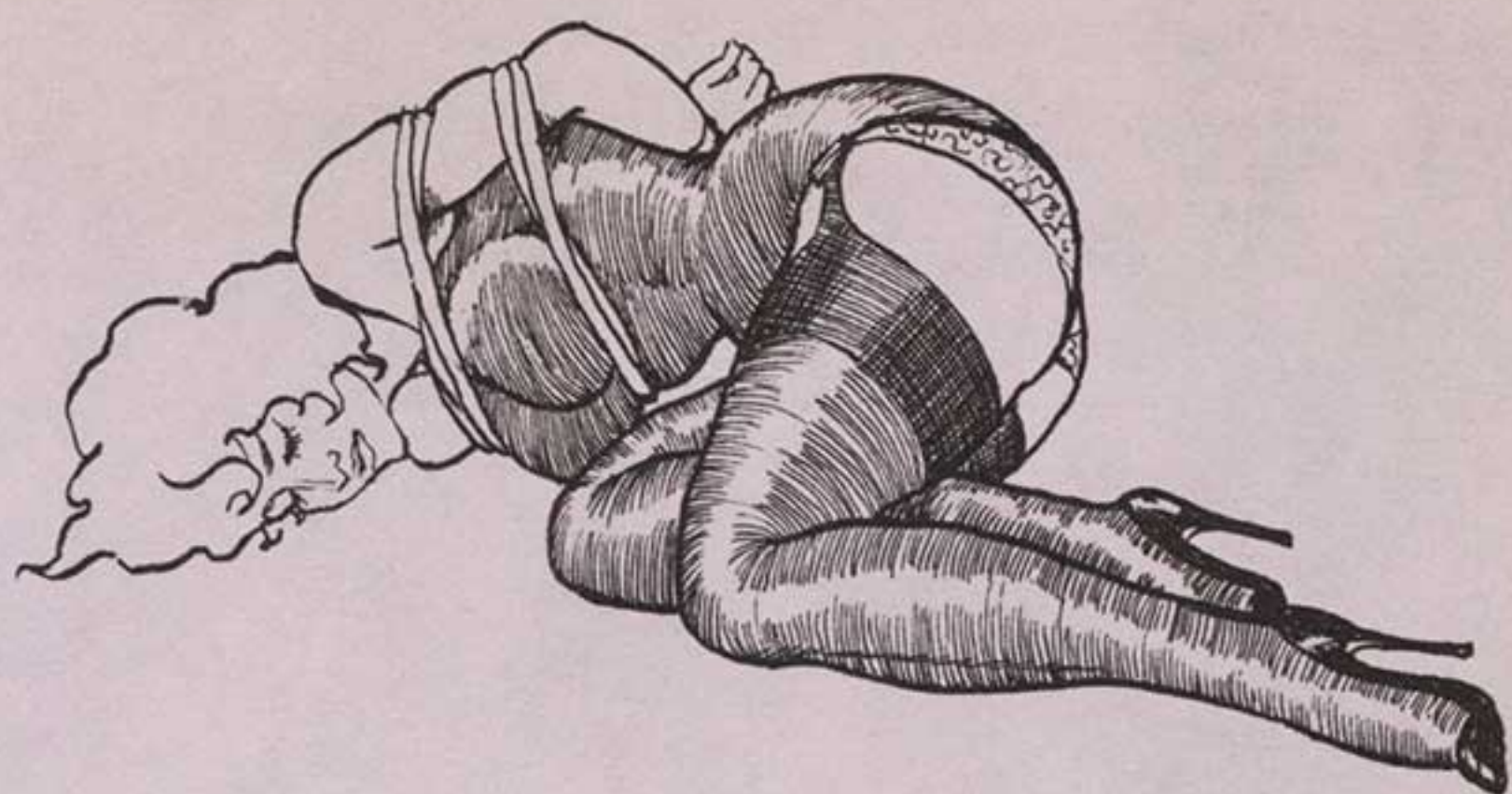












裏窓タウン

「ソドムの罠」

を読んで

女の作家で男色の世界を描くものは——というよりも描けたものは、私どもの知るかぎり、いままで森茉莉より、ほかなかった。

ところが、ここに忽如として、もうひとり現われた。昨年度（三十七年）だったかの乱歩賞の戸川昌子が、「週刊現代」十一月十四日号から、「ソドムの罠」と題する連載の推理小説をかきはじめてのだ。

このタイトルでもわかるように、この小説は男色が主要なモチーフであるらしい。

男色というものの深層部が、推理小説にはもってこいの素材だとかねがね思っていたのだが、いままでそれを扱った推理作家はほとんどみあたらなかった。思うに、男色を毛嫌いしてか、興味をもてぬためかで、避けているのか、または理解できないためかの、いずれかであろう。それを女の作家——

推理小説作家が、先鞭（と思ふ）をつけたとは、いささか皮肉ではある。

さて、この「ソドムの罠」の第一回は、地下鉄銀座線の保線区に勤めている順吉という、二十歳の若者が、はじめてボーリング場へでかけたところから、話が始まる。

そこに、ぜいたくと浪費の雰囲気をおのが周りにただよわしているような、長身の中年（らしい）男が、馴れたふうでボールを転がしている。

それがなかなか上手なので、順吉がみとれていると、男は気軽に順吉に話しかけはじめ、順吉のコーチなどしてやった末、いっしょにその池袋のボーリング場をでると、新宿の場末の映画館、綿糸町のストリップ小屋、新宿のヌードスタジオ等々と、順吉をつれあるいたのち、「ソドム」というゲイ・バーへ誘ってくる。

そして、そのゲイ・バーの雰囲気と、ボーイから山田とよばれているその中年男の正体とに、順吉

が関心と好奇の心もちはじめるところで、第一回は終わっている。

この第一回目のかぎりでは、男色にたいする——というよりも男色者にたいする、作者の眼は、かなり確かである。的はずれていないのだ。

殊に、男色者らしい山田という男の描写は巧く、りっぱに男色者に描かれている。

背の低い、ゴツゴツした武骨な体つきの、野暮ったい感じの順吉——いわゆる純タチらしい順吉を誘惑すべく、だんだんと自分に引きよせていく、ひとつひとつのしぐさの描写など、いかにもその道のヴェテランのさまを、彷彿させている。またゲイ・バーの描写も、じっさいに足で調べているようだ。深いツツこみはないが、ひととおりといってよいだろう。

ただ惜しむらくは、週刊誌の小説だからといってしまえばそれまでだが、なんとしても文章のキメが荒いのが、目立つ。



「スクリーン

エロティシズム」

毎度みなさまおなじみの久保書店から、こんど「スクリーン・エロティシズム」の第二集が発刊される。

古今東西（古はあまりないが）の映画の濃厚なシーンばかりを、鮮明に、強烈に、解説をつけて再現させた単行本で、使用したスチル写真は三百数十枚の豪華版。

この第二集の特色は、かなり積極的に、S・M・フェチシズムなどの、いわゆる「裏窓」的シーンを集めていること。

黒沢明監督の「用心棒」における司葉子の、あのクライマックスシーンの写真までおさめてある。

好事家の方は、ぜひ、お買いもとめください。ねだんは少々お高く、六百円ですが、それだけの値うちがあります。

アメリカ映画

「女のはらわた」

第二次大戦の末期、地中海のある小さな島に、ドイツ軍が支配する捕虜収容所がある。

洞窟を利用した、ささやかな収容所である。収容されている捕虜はまず、アメリカ兵がひとり、黒人の女子留学生がひとり、フランスの看護婦がひとり、合計三人。収容所長というのが、女のドイツ兵で支配者側も彼女ひとりしかない。

映画の後半にはいると、ドイツ軍の脱走兵がひとり加わって、主要登場人物は、都合五人。

されば——洞窟内の捕虜収容所で展開する男女五人の、極限の心理と行動を追究した、手に汗にぎる深刻ドラマ……と早合点するむきもおありだろうが、ちよいと、ちがう。

はつきりいってしまえば、おそろしくへたくそな、エロ映画なのである。五人の主要人物にふんずける俳優は、まず、シロウトか、シロウトに近い演技力であり、監督も、おなじく。

エロ映画とはいっても、なにしろ、出来が稚拙だから、エロ味なんてほとんど感じないが、クライマックスに、かなりおもしろい描写がある。

さて、後半に登場する脱走ドイツ兵は、たいへんな悪党で、まず黒人の女留学生をおかし、女の収容所長とも早いとこ情をむすび、さながら洞窟を、おのれのハレムにしてしまう。

フランスの看護婦にも手をだそうとするが、彼女はアメリカ兵と仲よくしていて、ちよっと手ごわい。

そのうちに、ドイツ軍を破った連合軍が、この島へやってくるという情報がいって、ドイツ兵はあわてる。

「この収容所を捕虜もろとも爆破して、おれたちだけボートで逃げだそうではないか」

と、婦人所長と語らう。

爆破する前に、あのフランス女のからだを一度いただいておこうと、この好色ドイツ兵は考える。



そこで、アメリカ兵を銃の台尻でぶんなぐって倒し、フランス女だけを洞窟の外へつれだし、野原のまんなかでおそいかかる。

のしかかって、いろいろ苦勞するが、彼女の抵抗もものすごい。

もてあましたドイツ兵は、縄でフランス女の両手をうしろ手に縛りあげ、それから、改めて、のしかかる。

縛られた両手首が、女の背中でもだえるアップ。いつのまにか、スカートをぬがされ、パンティひとつに包まれたおヒップが躍動する。ふとももがふるえる。

縄はうしろ手から胸にも三巻きほどかかっていて、このへんの描写は、妙になまなましくて迫力十分。時間的にも、たっぷりとうつされる。

あわや、というとき、婦人所長が現われ、ヤキモチの顔で、「そんなことより、逃げるほうがさきよ！」

という。ドイツ兵は、しかたなくフランス女から離れる。

男女二人のドイツ兵は、協力して捕虜の三人を縛りあげ、洞窟内に運びこむ。このへんの経過も、もたもたしているところが、かえっておもしろい。

洞窟内におしこめられ、足まで縛りあげられた男女三人。そして洞窟の外にはダイナマイトがしかけられ、導火線には火がつけられ……という、活劇映画お定まりの危機シーン。

縛られた三人は、縄からぬけだそうとして、必死にもがく。うしろ手の縄が、だんだんゆるんでいく経過も、ていねいに描写されていて、みごたえがある。

危機一髪するとき、黒人女の縄がとけ、ほかのふたりの縄をとく。

三人は必死になって洞窟の外へ逃げだす。

しかし、結末はアメリカ兵だけを残して、ほかの四人はぜんぶ死んでしまうという非情さ。

監督さんは、戦争の無情感をただよわせたかったらしい。が、いちばん印象にのこったのは、S的

行動と、女にナニする行動とを組み合わせで演出した場面。

十二月号のこの欄でご紹介した日本製の「情欲の谷間」に匹敵する珍映画といえよう。

一流の映画館ではあまり上映しないだろうが、機会があったら、ぜひ、ごらんになるよう、おすすめする次第。

(豊)

スウェーデン映画

「沈黙」

「処女の泉」「野いちご」「第七の封印」などで知られたイングマル・ベルイマン監督の新作「沈黙」が、このほどストックホルムで封切られ、観客のどきもを、すっかり抜いてしまったようだ。

この映画は、東和が輸入することになっているので、いずれ日本でもお目にかかれるが、そのときは、カット、カットで、ずたずたにされるにちがいない。

東方の未開国の焚書族とちがつて、この種のショックには強いはずのスウェーデン人が、目をまわ

したというのだから、それだけで想像がつく。

ベルイマン監督は、

「われわれは観客を教育しなければならぬ。はじめ彼らに、味のいい丸薬をあたえる。つぎに、ビタミン類をふくんでいると同時に多少毒性もある丸薬をすこしあたえる。きわめてゆっくり、だんだん強力な薬をあたえていく」

と、きわめて意味深長なことをいつている。

セックスは、その丸薬のもっとも強い成分だが、スウェーデン人に効力をあたえるには、相当多量に服用させねばならない。

ところが「沈黙」は、それが強すぎたのか、観客に目まいをおこさせ、彼らは沈黙どころではなくなった。

映画の途中で、ブツブツいいながら出ていく人もいるし、しまいまでみたものの、鍵穴をのぞいてしりごみした子どものように、あつけにとられた表情で帰っていく人もいる。

おもな登場人物は、一人の女、その子ども、女の姉である。姉は妹に好色的な興味をもち（このへんがまことに「裏窓」くさい）このため妹の異性愛は、かえって燃えあがる。

彼女がベッドで男と抱き合っているところへ姉がきて怒りだす。こうしたありさまを、少年が、

じいっとみつめている。カメラはこの愛し合っていない二人の性欲や、もっと醜いことを冷静に見守っている——という。

スウェーデンの新聞は、このところ「沈黙」をめぐる「芸術」かそれとも「春画」か、「ベルイマンのもっとも強力な詩」か、それとも「ただのがらくた」かについて、二百余りの評論をのせた。

投書では、女性より男性のほうが、衝撃をうけているようだ。

性には開放的で評判のたかい十代の連中さえ腹をたてており、ある少女は、

「ベルイマンの映画なんか、もう見たいとは思わないわ。セックス

シーンときたら、まるで動物みたいで、とてもショックよ」

と、憤慨しているという。

これに対して、知的な反撃も多く、ある新聞への投書は、

「不道德な人々を描いているからといって、映画も不道德になるのか」

と、反ばくしている。

「沈黙」は「ガラスをとおして暗く」（昭映フィルムが輸入）「冬の光り」に続く「神に関する三部作」の第三部にあたり、ベルイマン監督によれば「神が顔をそむけて光りが全くなかったときの、人間存在のつめたい恐怖を描きだそうとした」ものだという。

ともあれ、うらやましいのは、官憲や、無知な思いあがり人種的小姑娘性的束縛のない、表現の自由をもった国のひとびとである。

映画「沈黙」は、まず、公開され、多くのひとびとの目にふれ、しかるのちに「芸術」か「がらくた」かを、なんらかの強権的圧力もなしに堂々と、人間対人間のあ

裏窓タウン

いだで争われているのである。

多くの良識あるひとびとによって「がらくた」と判断されれば、なんの圧力もないうちに、それは消滅するであろう。

すくなくとも、この国においては、表現の自由に対して「圧力」などの、いまわしいにおいは感じられない。

値打ちのあるものも、ないものも、正々堂々と太陽の下で判断されるのだ。

太陽の下で書物を焼く国の常識が、うすっぺらな、底の浅い文化芸術しか持ち得なかったとしても致しかたのないことである。(東)

ブルー・ボーイ

東京「ゴールデン・赤坂」で、三十八年いっぱい公演したブルー・ボーイたち一行八人は、まさにふつうではない「異常美」を発散させて、けっこう人気をよんだものだ。

ブルー・ボーイというのは、性転換の手術をして、男性から女性

になった連中のこと。

しかし、旅券ではちゃんと「男性」と明記されている。トイレットは、女性用。

パリのモンパルナスのクラブ・トラベスティで、常時、歌や踊りのショーをやっている。

映画「ヨーロッパの夜」「世界の夜」に出演したキャブシーヌがスターで「ゴールデン・赤坂」では女の声で「ダンシング・ウィズ・キー」を歌ったり、ストリップしながら踊ったりした。

すばらしく大きな肉感的な乳房で、足もすうりとはそい。第一に非常な美貌である。

グラマーのシャネルは、前身がスペインの美容師だという。一行のなかでただ一人の男役である。このカスティロとコンビで、花嫁から魔女に変わる「吸血鬼」という踊りをやった。

ミカエルという人は、男女ふたとおりの声を使いわけて歌い、かつ踊る。

ステージ、客席とも、なんとも

いいようなない奇妙なエロチックムードがいっぱい。

まさしく、パリのおいでであった。退廃といえば、それにちがいないが飛行機の上から、パラシュートでとびおりる兵隊の訓練風景よりは、たしかに、平和的であろう。(北)

“地下文化”を探究する作家たち

アメリカの日常生活を覆う面一主義と順応主義への反発は、都会の夜の冒険者としてのヒプスター(アメリカの実存主義者)とビートの文学を生み出したが、彼らよりもさらに深くアメリカ生活の“地下世界”(非日常的な世界を彼らはこう呼ぶ)に潜入し、性、麻薬、非行、放浪などさまざまな面をもつ“地下文化”(サブ・カルチャー)の様相と、それに直面する人間の条件を、独自の立ち場から、よりリアルに探究しようとする一群の作家の進出がいま大きな話題になっている。



黒人の自己破壊的な生き方と性
の問題を大胆にとりあげた「もう
一つの国」のポールドウィンや、
麻薬と性を手がかりに本能と感覚
の極限状況に戦いを挑んだ「裸の
昼食」のバロウズや、放浪と麻薬
の陶酔のなかで異常な自己凝視を
試みた「カインの日記」のトロツ
キなどがそうであるが、最近、処
女作「夜の都会」を発表して爆発
的な人気を呼んだジョン・レチー
もその一人である。アメリカ全土
にわたる数々の大都会を舞台にし
たこの小説で、レチーはひたすら
に男色の世界に踏みこみ、ジャン
・ジュネにもみられないようなユ
ニークな角度から、性の荒野にお
ける人間の限りない孤独の肖像
を、たんねんに、詩的に、いつ果
てるともなく書きつらねている。

これら一連の急進的な離脱の文
学に共通なことは、あくまでも冷
静に、時には過酷なほどに自己を
見極めようとする作家のきびしい
目と、それにもとづく強烈なりア
リティーであり、新しいリアリス

ムの胎動を強く感じさせるものが
ある。

——以上は、東京新聞の「海外
文化短信」欄から。

おそるべき

暴力婦人

テレビの修理人を、アパートの
自分の部屋に監禁し、ハンマーで
なぐりつけながら、まんぞくな画
像がでるまで帰さなかったという
おそろしい女性のおはなし。

アメリカはミズーリー州カンサ
スシティでの出来事で、被害者で
ある二十歳の青年、ロバート・F
・ヘス君が警察へ訴えたために、
この事件は明かるみにでた。

ヘス君は、電話で呼ばれて、そ
の女性のアパートへ、テレビの修
理に行ったのだ。

その日はなにごともなく帰して
もらったが、それから三日後、そ
の女性から、また電話がかかって
きた。

「どうもテレビのぐあいがあるい
の。もう一度きてちょうだい」

そこでふたたび、ヘス君は彼女
の部屋へ出かけて行った。

すると彼女は、いきなりドアを
しめて、カギをかけてしまった。
「こんどこそ、しっかり直さない
と、承知しないぞ」

と脅かされたヘス君は、道具を
とりだして、仕事にかかった。

ところが、ヘス君がテレビセッ
トの上からだをかがめたとたん
ハンマーを持ち出した彼女は、ヘ
ス君の右のヒップを、力いっぱい
なぐりつけた。

「痛いッ」
「痛けりや、しっかり直せ！」

というわけで、哀れやヘス君、
彼女のまんぞくのいく画像ができ
るまで、なぐられながらテレビの
修理をつづけた。

やがて、脅迫下の強制作業を終
えたヘス君は、ドアのカギをはず
されるや、ほうほうのていで逃げ
帰った。

警察では、ヘス君の意志次第で
この暴力女性を起訴するといっ
ている。

裏窓タウン

カギのかかった一室に、男と女がとじこめられたら、悲鳴をあげるのは、まず、女性にきまつてゐるのに、なんともいくじのない二十歳の青年がいたもの。

それとも、この女性がものすごく過ぐるのか。

現代どれい船

ティーンエイジャーのフランス娘ばかりを、西アフリカ方面へ売り飛ばそうとしていた一味を、ニース警察が逮捕、すんでのところ

たら、現代どれい船事件として、たいへんなニュースになっていただろう。

（南）

このどれい商人のボスは、なんと十八歳になる、リュシエン・ゲイドンというちんぴら。

このボスは、フランス東部のメ

ツツで、かどわかしした娘の一人の母親から、身のしろ金十万フラン（約七百二十万円）をせしめようとしていたところを、仲間の二人とともに捕まったもの。

警察は一味の動きを、二カ月前から迫っていたが、つかまったと

き、ゲイドンは、

「母親たちが身のしろ金を払わなかったら、捕まえてある娘たちを船でアフリカ（旧ベルギー領コンゴらしい）に送るつもりだった。えらい金になるところだったのに惜しいことをした」

と、残念がっていたという。

そんなことが、もし実現してい

たら、現代どれい船事件として、たいへんなニュースになっていただろう。

まるで小説みたいなの、とても実現しそうな悪い悪事をたくらむちんぴらは、どこの国にもいるものである。

（西）

イタリア映画

「裸と鞭」

「夜」ものが相変わらずさかんなイタリア映画界に、新しい傾向として、残酷趣味や恐怖をねらった怪談ものがふえているようだ。

恐怖映画の本家みたいなイギリス映画界から、専門スターのクリストファー・リーを招き、ロンド

ン製のお株をとるようないきおいだという。

たとえば、こんど東和が輸入する「ニールンベルグの処女」はヒトラー暗殺未遂事件に加わったため、ナチに顔の皮をはがされた男をめぐる奇怪な話で、リーと、ロッサナ・ポデスタが共演。監督はイギリスのアンソニー・ドーソン。

同じ監督で、リビエールと、バルバラ・スチールの共演する映画「恐怖」というのもある。

もうひとつ、こんど東京第一フィルムが輸入する「裸と鞭」という作品がある。

これは、クリストファー・リーと、ダリア・ラビが共演して、監督はジョン・M・オールド。

この「裸と鞭」と「恐怖」は、いずれも舞台は、陰惨な色彩と空気に満ちた古城。

その古城を背景に、女性に対する加虐者が登場するというから、まず、期待してもよいのではなからうか。



さすがに文化的先進国であり、この方面の歴史も古いときているから、いまの日本では想像もつかないような映画を、おくめんもなく企画し、製作し、そして上映するようである。

(映)

ある運転手の話

「週刊朝日」にこのところ連載されている開高健氏のルポルタージュ「ずばり東京」という記事は、いわゆるルポライターの書いたものところが、観点も文章も、キメがこまかくて鋭い。

三十八年十一月一日号に掲載された「ずばり東京」のなかから、ずばり「裏窓」的な箇所を、引用させて頂こう。

これは、十二人のタクシーの運転手が語った話のなかのひとつである。

——ある運転手が話した。

新宿二丁目でのせた客は、夜ふけなのに、ゆくあてもないらしく、新宿御苑あたりへいつてくれといった。新宿御苑につくと、青

山墓地あたりへいつてくれといった。青山墓地につくと、助手席にのりこんできた。そして、とつぜん、切迫した、熱い、ひくい声で、告白した。戦争中にスマトラのうえにあるなんとかという島で暮したが、男ばかりであった。そのときから、女に感ずることができなくなった。成城の家には妻も息子もいるが、女にはなにも感ずることができない。さっきから後ろ姿を見ていると、耳から顎へかけて、あなたは昔の兵隊仲間の恋人にそっくりだ。そう思うと耐えられなくなった……。

あたりは静かな墓地である。運転手はうろうろしつつ、介錯だけ手伝ってやった。客はポケットから白絹のハンカチを走らせた。なにかの花のいい香りがした。

渋谷へぬけて、成城へいった。

客は厚い木立ちのある、りっぱな一軒の邸へ、通用門から消えていった。屋敷町にはひっそりとした青い匂いのする空気がただよい、霧が流れている。かぞえてみる

と、客のくれた料金には五千エン札が一枚よけいにまじっていた。自動車からおりに、爽やかないい香りを襟からたてるその客は、恥じた低い低い声で、つぶやいた。

「……私は戦争犠牲者だ」

自動車からおりと、手もふらず、ふりかえることもなく、そのまままっすぐに歩いて、大谷石を切った通用門に消えていった。

山田風太郎

「甲賀忍法帖」

こんど講談社から「山田風太郎忍法全集」が刊行された。

全十巻で、第一巻と第二巻が、すでに発売されている。

第一巻「甲賀忍法帖」は、二百五十円。まことに痛快、一読この世の憂さを忘れるほどのおもしろさで、読者をけっして飽きさせない。

奔放自在な忍者群の活躍のなかに、しかもなお「裏窓」派への色目を忘れないところなど、山田風太郎先生のサービスぶりには、感

裏窓タウン

嘆せずにはいられない。

では、その「甲賀忍法帖」からサワリのところを――。

霧ににじむ大蠟燭が一本、なかばこわれた経机に立てられて、埃のうえにうずたかく蠟涙をつんでいた。そのそばのふといまるい柱に、ひとり全裸の女が大の字にしばらくつけられていた。両胸と両足をうしろへひきしぼった縄が、円柱のうしろでかたくむすばれているのである。

その女の雪のようなみぞおちのあたりに、妙なものがみえる。蠟燭がゆらめくたびに、キラキラ銀色にひかる文字なのだ。乳房ほどの大きさに「伊」の字。そして、その下に、やや小さく「加」の一字が――。

そのそばにはだれもいないのに、ときどき彼女は全身をうねらせ、痙攣させ、身の毛もよだつうめき声をあげる。

「陽炎」

遠く、三メートルもはなれて、笑みをふくんだ声がした。

「弦之介はこぬな」

薬師寺天膳であった。この荒寺の内陣のまんなかに腰をすえて、ひとり盃をかたむけつつ、ニヤニヤ、苦悶する陽炎を見つめている。

「盲目とはいえ、わしが立てつらねた立札の風評は街道できくはず――おまえをとらえて伊賀責めを味わわし、明日にもその細首うちおとすとかいておいたのに、弦之介はこぬ。甲賀谷の首領は、味方の命が危いと知っても、救いにこぬほど情がうすいのか。臆病者が」

そういいながら、何かを口にふくんで、ぶつと吹くと、ほそい銀の光がすうとはしって、陽炎の腹にとまった。陽炎はまた身もだえして、苦鳴のほかは声もない。

「ふふふ、味を知っておるだけに、その白い腰のうごめきがたまらぬわ。そばにいつて、抱いてやりたくてうずうずするが、そうはまいらぬ。――（中略）」

と、いつて、また口をとがらせて、ぶつと銀線をふく。はねあがって、陽炎は白い海老みたいに身

をおりまげようとしたが、大の字にひきしぼられた体はうねって、髪ふり乱し、あごをのけぞらしたばかり。――

「ひ、ひと思いに殺しや！」

（中略）それは、小さな吹針であった。薬師寺天膳は、遠くから針で一本ずつ、陽炎の肌に文字をかいてゆくのだ。

ただの針でさえ、文字どおり針地獄なのに、そのうえまたこの針には特別の毒でもぬってあるのかたとえ片腕斬りおとされようと悲鳴をあげぬ甲賀の忍者陽炎が瀕死の美しい獣のよううめきをしほる。すでに彼女は、浜松での、阿福一行の武士たちとの争闘でふとももに重傷を受けている。その目はかっと思ひらかれたまま虚になり、ただ針が一本ずつつき刺さるたびに、その刺し傷に生命がよみがえって、たえきれぬ絶叫をあげるのであった。（中略）

加から賀へ――見よ、陽炎のみぞおちから腹へ、銀の針で浮かびあがった「伊賀」の二文字！



1

「この男はばかだ、このばかな男を、ふたりでからかって遊んでみませんか」

と書かれた紙きれを持たされて女のところに使いに行く身の因果、身の果報のほどは、マゾヒストでないといわからぬところ。

ほくは考える。

マゾヒズムという一の倒錯したイデーがある。そのイデーはひどくおごそかで、ほとんど近づきたいほどの威厳をもって、ほくには感じられる。と考える。

いろいろ手探りしてその外容をなぞってみても、とても中深いところのその正体までは、手が届きかねることを知る。一刀両断に、これがマゾヒズムなりと裁断してみせるのは、とてもに至難のわざだと知るのほかはない。

ただほくは、己がマゾヒストだという動かしがたい自覚から、そのためのがれることはできない。

しかし、マゾヒストにあって貴重なのは、この自覚である。幾つもの解釈を積み重ねても中から一の真正のマゾヒズムも生じうるものではない。

福原麟太郎が『毛並よき三文紳士』という、吉田健一の人と作品を扱った一文の中で、次のように述べている。

『私などの知っているイギリス人で、いやしくも詩人だとか批評家だとか言われる人と、英文学の話をしていけるとする。あの詩人は好きだなと私が言うとする。相手は「ああ、あの詩人、何とか何とか何とか（この何とか何とかというところで、相手は、すぐ、その詩



■体当たりマゾヒズム論・20

ああ、かぐわしいスカートのそよぎ
そのぬくみこそぼくのほうえつ

水 尾 究
江 渕 晃 夫・絵



人の作のすぐれた詩句を忽ち暗誦するものである」と応じる。決して「ああ、あの詩人は、象徴的で極左の思想をほのかに表現する西暦何年生れの、ケムブリッジ大学出の有望な人だね」とは答えない。そんなことを言うのは日本人である』

つまりぼくが、E氏から「この男はばかだから」という女あての言づてをあずかって、その女のもとを訪ねる興奮の度合いは、日本的西暦何年生れ式の思考法では、とても捕えることは不可能だということを考えるのである。

マゾヒズムは一のイデーである。

ところがマゾヒストの胸中に躍動するM的感興そのものは、すでにイデーではない。生きて動いているものである。それをマゾヒズムという固定したイデーと照応したとき、そこに食い違いは生じないであろうか。既に全く大きなズレがそこにはあるのではなからうか。

そんなとりとめもないことを考えながら、ぼくは目ざす女の家を尋ねていった。

高円寺駅を南東に下がった大きなお寺の近くにあった。古い家並みが続いて、彼女が住む二階建のしもたやも、古びたままいたんでいた。閉めきりになったままの玄関のガラス戸はひび割れ、まるで空き家のようにすさんでいた。

柱に名刺代わりのような紙片がはりつけてあって、それに四人の名がインク文字で書かれていた。その中にI嬢の名もあった。ぼくはついでにほかの者の名も見てみた。ふたりは女名であったが、ひとりだけ男がその中にまじっているのを見つけて、ちょっとがっかりした。

いずれも名はもとより、姓が違う。つまり、友人たち四人共同で

小さいながらも一軒の家を借りて共同の生活をしているのであった。女三人の中にまじって、ひとりその生活に加わっている男とは、どんな男だろう、興味がわくのと同時にうらやましさも手伝った。

戸に手をかけたが、ガラス戸は開かない。声をかけようにも、ぼくはE氏の言つての紙片にあるように、ばかだということになっている。普通人のように明りような声で、表から呼び立てることはできない。そこで裏手に回った。

同じく古びて建付が悪くはなっていたが、勝手口の戸はどうやらあいた。台所もひどく荒れていた。掃除が行き届かないのと第一、余ほど無精な住人たちばかりとみえ、とつぎの流し台の下あたりの床板に、飯粒や野菜くずが散らばったまま、ながいことほっておかれたような状態になっていた。台所特有の、モノのすえたにおいがこもって、その中にネコが一匹、板敷の隅にうずくまっていた。

I嬢は、銀座に働くホステスだとE氏から聞いていた。はなやかな銀座の女給の生活が、その裏側で、こういうモノのすえたようなにおいを発散させていることが、奇妙にも思え納得もできた。少なくとも、このにおいの中には、女三人と男一人の生活がこめられていた。ともかくぼくは、I嬢の住居が豪華な高級アパートでなかったことに、少しも失望はしなかった。

マゾヒストは高貴さをとうとぶ。豪華なはなやかなふん囲気の中に手も届きかねる威厳を見せて高貴な微笑をほおえむ女性にこそ、拝跪するものである。それがマゾヒズムのイデーである。イデーは万華鏡のように生きて揺れ動く現実日常のマゾヒストの複雑な感懐に遭遇しては、それとして通用しない場合が多い。

原則はいつまでたっても原則にしかすぎない。だが世の中のこと、人の反応、人の感情は、常に原則をはみ出す応用問題で錯綜し

ている。台所の、モノのすえたにおいの中に、女の生活をからだで感じとり、かえってM的興奮をおぼえるというのも、日ごろ高貴性を最も良しとする原則からいけば、矛盾したことである。

だがこの矛盾ということは、それが生きているということのあかしでもある。マゾヒズムは、ぼくのからだの中で呼吸し生きている。波のようにふくらんだり縮んだりするのである。その呼吸作用が或る時は高貴性を、或る時は退廃した卑俗さを選ばせる。

マゾヒストの心は、マゾヒストにだってわかりはしない、矛盾錯綜の中にそれがある。

2

明りような発声を欠く、動物じみた含み声でぼくは呼んだ。

反応があり、奥でコトコトと人の気配がした。でなかったら、だれでもこの家を、無人の家と思いこんでしまうであろう。女性と初対面するとき、相手がどんな女だろうかと予想するときの気分は格別なものがある。

特にマゾヒストにあつては、女王となるべき女をまぶたに思い浮かべながら、いざ女王のお出ましを持つその短い時間、たとえばもない、ほうえつの感懐に襲われるのである。からだはすくみ、ほおは紅潮する。いじらしいほどに卑下しきったおろかなしもべが、女王の台座の下でかしこまっている。

いざ女王のお出まし——いぶかしげな表情を浮かべながら、若い背の高い女が出てきた。彼女がI嬢であることが直感ですぐわかった。ぼくはE氏の言づけの紙片をおそろおそろ差し出した。

彼女はなおもいぶかしそうに、心もち小首をかしげながらそれを

受け取った。I嬢へ、という表記の文字を認めても彼女のいぶかしげな面持ちには変化はなかった。

だれからかしら、今すぐここで読めとでもいうのかしら、その返事を待つかのように気のきかなそうな使いの男が、ぼんやりした表情で立っていた。彼女は台所の床板の上に立ったまま、チラとぼくのほうに流し目をくれると、今、渡されたばかりの紙片の文字を読み始めた。

ぼくはその彼女の表情が、手紙の内容でどんな変化を示すか、まるで吸いつくように見守った。

3

「この男はばかだ。今夜あたり、ふたりでこの男をからかって遊んでみませんか」

女の表情からはいぶかしげな面持ちは消えた。それはさまざまに変化した。微笑笑ともつかぬ、嘲笑とまでは言いきれぬ、説明の尽きかねる笑いが、いろいろさまざまに浮かんでくるのであった。ぼくは今回、ついにそれが成功したことを知った。

彼女は手紙から目を離し、ぼくのほうになれなれしげな笑いをこめた視線を投げ、しばらく馬を値ぶみする親方のように、無遠慮にながめ続けた。

「あんた、E先生とこの何なの」

「ぼく、お使いしたり、洗たくしたり、何でもするんです」

「へーえ」

あわれみと軽べつのまじった笑いが、彼女の顔に、今度こそ何の気がねもなく、いっぱい広がった。彼女は立った姿勢から中腰に

なり、両手を合わせて前かがみにひざの上に置き、ちょうど子どもにでも物を言うようなくだけた態度とことばで話しかけてきた。

「E先生とこは渋谷でしょう」

「ううん、渋谷から電車でちよつと行くの」

「そうだったわね。で、奥さんもいらっしやるんでしょう」

「うん」

奥さんが居るのに、男を女中仕事に住み込ませるなんて、といった軽い調子と、またそれは一般的にどの女でも持つ、知人の家庭の事情といったものへの好奇心が女の質問には含まれていた。

「よくひとりでここまでこられたわね。わかりにくかったでしょう」

「うん、ぼく、ひとりで電車に乗るのが好きだもん。道は巡査さんに地図見せて、教えてもらったんだー」

甘えるように語尾を引っ張り、はすかしそうにうつむいてもじもじする三十七歳の男子を、二十二、三のI嬢は、全くおもしろくてならぬように興味深そうにながめ続けるのであった。

4

I嬢は立ち上がった。

何か、かんまんと、動作にメリハリを欠いたうらみはあったが、背はスラリと延びて高かった。

「ひとりで帰れる？」

「うん」

ぼくはうなずいた。

「じゃ、先生には、わたしのほうからお電話しておくから、あんた

はこのまま帰ってもいいわ」
ほくはたたきの上に立ったまま、じっと下から床板の上に立ちは
だかる彼女のほうを見上げていた。
彼女がE氏に、どんなふうに電話をかけるかは知らない。だがそ
れは、きつとほくにとって失望するような内容のものでないこと



は、彼女の安心しきったあの生地そのままの態度と、少し残酷な印
象を加えた不思議なその微笑を見ればわかることであつた。
でもだからといって、これをこのままで帰って、あとE氏の指示
を待つだけでは心残りが大きかった。
E氏と彼女とほくとを加えた夜の饗宴の前に、何かすることはな

いだろうか、その前奏曲がぼくにはほしかった。

「何かご用はないでしょうか——くつみがきかおそうじか、お洗たくか、——先生は何かお嬢さまのご用を何でもいいからしてこいて。それしなかったら、ぼく帰っておこられるもん」

I嬢はちよつと思案するようだったが、すぐに反応を示してくれた。

「じゃ、洗たくたのむわ。ここんところ少したまってるからね。あんた、きれいに洗えるの」

「うん、ぼくきれいに洗う」

「それじゃそこに待ってて」

I嬢が持ち帰った手さげの中に、いっばいのよこれ物が詰めこまれていた。

I嬢は台所の横のふろ場にぼくを導いて、洗たくの手順を一通り指示した。タライと洗い板と、粉石けんに固型石けん、それを示し終わると、

「ちよつと電話かけに行ってくるから」

と裏口のゲタをつっかけるなり出ていった。どうやら、今家には彼女のほかに、だれも居ない様子であった。初回訪問のことの際とて、ぼくにとってはこれはありがたかった。

彼女が出ていったあと、ふろ場のひび割れたセメント床の上に、かごの中のものこれ物を残らず引き出した。おもに下着がその大部分を成していることに、ぼくはどれほど感謝したことであろう。

敷布が二枚、ねまきが一枚、そのほかくつ下、ハンケチ、エプロンのたぐいがあったが、他は幾枚も幾枚も、シミーズやパンティが中でも生理でよこれきって、はなに当てるたとえようもなく酸っぱい異臭が濃くこもりきっているパンティを見いだしたとき、ぼく

は最大の感謝をささげたのであった。

5

I嬢の家を辞去すると、すぐにぼくは、高円寺駅の赤電話でE氏との連絡をとった。

E氏は待ちかねたように電話口に出るとすぐに、

「彼女から電話がありました。うまくいったようすな。じゃ今晚七時、渋谷の高野でおちあいましよう」

高鳴る胸を押えながら、何度も何度もあの手紙の文面「この男を、ふたりでからかって遊びましよう」のことは思い返すのであった。

七時、渋谷の高野で落ち合った後ぼくたちは、すぐに表に出てタクシーを拾い乗り込んだ。

「直ぐ近くです。彼女は先に来て待ってるようすから」

詳しい打ち合わせはなかったが、ふたりの間の了解は日ごろ話合った事からから、既に深く成り立っていたことであつた。にもかかわらずぼくは、何かE氏との間に、言い残しておいた何かがあるような気がして、不安だった。

車はふたりが無言のうち、渋谷の表通りを裏へ、円山あたりの細い曲がり曲がった坂道を上っていた。

S荘と門燈にはあつた。和洋折衷の建物で、ホテルの部と旅館の部と二つあり、ぼくらは二階の洋室に案内された。

ドアをあけるとそこにI嬢が来て待っていた。赤いじゅうたんが敷かれ、深々としたソファアが壁ぎわに置かれていた。そのソファアのはしっこに、彼女は物うげにすわっていた。真白いワンピース

に黒味がかったハーフコート、家で初対面のと看ときは人が変わったようにおとなしうだった。

E氏はへやにはいるとそのままソファへ、彼女と並んで腰をおろした。ソファのほかには中央寄りに、円卓やひじいすが何脚もあったが、ほくはそこにすわらずにソファの前の、つまり彼と彼女の足もとのじゅうたんの上に、正座するような格好ですわった。

これから何が始まるのかはわからない。あとはすべて、E氏の胸三寸の中にある。

円卓には遅目の夕食の準備がされ、その間宿の女中が出たり入ったりするので、ほくはじゅうたんの上にじかにすわっていることはできなかった。その間立ったりすわったり、時々判断で動いた。

E氏はI嬢と食事の席についても、当たり前前の会話を交わしている。ホステスと、なじみの客との会話以上には出なかった。

目の前にいるばかな男はその間無視されていた。

6

食事の間ほくは、E氏がほくとの暗黙の打ち合わせを、ほとんど忘れているのではないかと思った。でなければ、いざ事に臨んで、少しばかり気遅れしたのではないかと思った。というのは、つまりこの大事な食事中、ついに何事も起こらなかったからである。

食事はマゾヒストにあっては大事なチャンスだ。どれいの食事、犬の食事、ブタの食事、食事作法は女主人の前で、いろいろに分かれるはずである。

だがほくはどの食事作法でもなく、当たり前前に普通の人間として、いや、召使いの食事ですらなく、対等に彼女と彼に伍しての食事を

当てがわれた。ちゃんと三人分の用意が円卓には準備されていた。今さら氏をなじる場面でもないので、いかに無念の涙をのみながら、当たり前前に当たり前前の食事をとったか、その心境をマゾヒストの読者諸賢にはわかっていただけたと思う。ほくは床に投げられるパンがほしかった。床に投げられる肉片がほしかった。

だが無言のまま、ほくはひっそりと当たり前前に食事をとった。I嬢のことば数は少なかった。E氏から問われると、「あら」とか、「いやだ」

とか、軽く聞き流すふうに無表情な笑い方をするだけだった。E氏はウィスキーをちびちび飲み、I嬢もいくらか口をつけた。だがひかえ目で多くをとろうとはしなかった。幾らかかたくなっているようでもあった。

こうしてふたりは、お互いの少なめのことばのやりとりの間にも、そばに居るばかな男のことは忘れてしまったように、流し目もくれずに過ごした。やりきれない気がしたが、ほくのほうから催促するわけにもいなくなった。

おそらくE氏も、いちおうI嬢の前でいろいろに構えみせてはいるが、彼は彼なりに固くなっているのではなからうか。だとすると、これほどまずいふん囲気はなかった。ほく自身にも或ることを期する緊張が、ほくの態度を不自然な形に縛っていることに気づかねばならなかった。

食事が済み食器類は全部下げられ、もう女中たちの出はいりする用事はすべてなくなった。

この時、初めて氏は、ばかな男についてそれを話題にのせた。E氏もI嬢も、最初のと看のように、ソファに並んでかけていた。ほくはその前の赤いじゅうたんの上に、だれはばかることなく、

じかに、折目正しく正座の状態でかしこまっていた。

7

「この男をどう思う」



E氏は、ほくのほうにあごをしゃくって言った。
「ちょっとおもしろい男だとは思わないかい」
重ねて言った。

「どうでしょうか」

I嬢は自宅で見せた生地丸出しの無遠慮さを内に引っ込めて、静

かに笑うだけだった。もちろんどんな女にしろ、よそ行きの顔というものはあるだろう。だがこうして、その日のうちに、内と外とでこうもあざやかにひょう変する女の両面を、こうして目の前で見せつけられてみると、それは予想以上に興味深いことであった。

とはいふものの、こうして静かに装おってはいいても、彼女にはどうしても装おいきれない生地荒らさは隠しきれなかった。あのモノのすえたような台所の不潔なおいが、彼女のからだのどこかに隠しきれず残っていた。

I嬢は背が高い、ということは、スタイルのいい女には違いなかった。足もきれいで長い。まず申し分はないところだ。中には既にこの条件だけで、すっかり彼女に参ってしまう男性だって十分過ぎるくらい居るに違いない。顔立ちも十人並み、とび抜けて美しいとは言えなかったが、少し長めの、線のきついマユの太いI嬢の顔はマゾヒスト好みのもの、といつてもいいところがある。

だがどこかにふしだらなくずれがあった。客商売の女、というところからくるくずれではなく、性格上の欠陥がそうさせているようであった。だから、高貴性にはほど遠かった。

ほくには幾らかの妥協があった。妥協にも真正の感激が無いというのではない。ほくはI嬢の前で、本当に心から感激していた。

「こいつはどんなことでもする、おもしろいんだから、——いいから見ていな」

E氏はめがねの奥の目を細く光らせ、ほくのほうに低い声で命じた。

「おい、こっちへこい」

ほくはじゅうたんの上を、すわったまま、E氏のほうにいざり寄った。ちょうどE氏のひざがしらが、ほくのはな先に当たった。

E氏はそのはな先で両ひざを広げた。

「股の中にはいるんだ」

E氏の股の間にほくのはおははさまれていた。彼の両ももの暖かみがズボン地を通してほくの両はおを包んだ。

8

I嬢は積極的な反応は示さなかったが、それほど驚いたふうもなくこの場の様子を見守っていた。いかにもばかな男に思えた。そう思ったに違いなかった。股倉に顔をはさみこまれ、頭を手でこずかれ、もっとその奥にはなづらをこすりつけられていた。そういう屈辱的な姿勢をとらされることに、何の反発も示さず、むしろキキとして命令に服している様子は、あわれさを通りこして、こっけいに思えたに違いなかった。

ほくは見られていることを意識するだけで心よい緊張が全身を貫くを感じた。

男のおいがどんなものか、顔をそむけたくなるほどいやなものだというのに、ほくは見られているという意識だけで、すべてを超越していた。このことは、以前にも述べた、マゾヒストの三者願望のあのケースに見事に該当するものであったからだ。

「おい、もういいから、今度はお嬢さまの中にはいれ」

E氏はずばりと命令した。

ほくはその命令があまりにも端的に、ズバリそのものをさし示していることにためらいを感じた。瞬間とまどったが、しゅんじゅんする必要はなかった。

I嬢は静かに装おってはいるが、ヘタな物おじはしなかった。初

め彼女は、E氏の手前、少しはしりごみするかとぼくは思った。

彼女のスカートにぼくはいざり寄り、はなづらを当てるようにしながら低頭し、手ではなくて頭ですそを持ち上げるようにした。

今にもI嬢は、恐れをなしてしりごみするかと思ひながら、恐る恐るすそに頭を寄せたが、彼女は別にあわてる様子も見せず、なすままにさせていた。

その中は暖かだった。固い彼女のひざがしらが、きちんとそろえられていた。そのひざがしらを、ぼくはひたいや、ほおや、はなづらで、なで回した。I嬢は、自分の衣服の中に頭を入れさせることだけはしたが、ついに両ひざはとじたままで終わった。

しかし、その折ぼくがI嬢の足の甲や、スリッパの先を口にくわえて、小犬のようなじゃれ方をしてみせたことは、特別の興味を示したようにおもしろがっていた。

9

その後、ぼくはE氏には無断でI嬢の家を訪れてみた。

その時は、彼女のほかに若い男がひとり居た。髪の毛を長くした新劇青年であった。破れた畳の四畳半、座づくえの上に手製の本立があり、演劇関係の本が立ててあった。

I嬢と彼とは、まるで姉と弟のように外見では見えた。

彼はただっ子のようにわがままを言い、彼女は母親のようにほおえんでばかりいた。といって、そのふたりが、実の姉弟であるなんぞとは、ぼくも思ひはしなかった。第一、表札の姓が違っていたし、それにこのふたりには、男と女とのあの当たり前な、いわゆる普通人に称する俗っぽい慣れあいが根本にはあった。

奇抜なことは、この彼が、押入れの中にサルを飼っていることであつた。サルを入れた手製のオリを押入れの中から引き出し、それを窓ぎわの日の当たる場所に置いてやりながら、彼は、今度振り当てられた芝居の役回りのことについて、彼女に話かけていた。

彼女はおもに聞き役であつた。ぼくもその横で、だまってふたりのやりとりを聞いていた。彼は、直接ぼくに物を言いかけることはしなかった。物を言いかけるのが、何かしら恥じられるといったような、初心なところが彼のぎこちない態度には見られた。

彼も彼女と同じく、目の前に居るのっそりと構えた男を、ばかだとは認めているようであつた。その親しみを無言の形でぼくに示していた。

「それはね、今の自民党の政策がまちがっているからだ。ぼくなんか、演劇をやっているけど、根底にはいつもそれに対しての反発があるな。現状がたまらないんだ」

寝ころびながら、彼は足をばたばたさせ、今度は不意にことばを変え、「このサル、だれか四千円で買ってくれないかな」

と幾分やけぎみの笑いを浮かべたりするのだった。

I嬢はおとなしく彼の言うことを微笑で聞き流していた。

I嬢の面持ちには、つつましい女が現われていた。ぼくはふと、E氏をまじえて過ごしたあの夜のI嬢のことを思った。もし、その夜の彼女の行為や反応を、この若いきまじめそうな新劇青年がすべて知ったらどんな顔をするか、大変興味のあることだと考えた。

帰りしなに立って来たI嬢がぼくに言った。

「この次の日曜に、すぐ近くに引っ越しするから、その時また来るのよ。わかって」

それは否応もない強い命令として響いた。

■若い女性の和服すがたこそこの世でいちばん美しいものです
振り袖すがたこそ私が憧憬する最高の女性であります

被縛美私見

内本 達也

喜多 玲子・絵

一

個々の男性が胸中ひそかに抱いている性的嗜好は、十人十色であり、千種万様であります。その倒錯趣味の内容は、各人の性向や生癖に相異があること以上に、微妙な差異を持っています。男のもつ性的偏執性や偏向性欲の多様性は、サディズム・マゾヒズム・フェティシズム・ホモセクシュアリティ等の語で分類し去りうるほど簡単な現象ではないようです。

男性が意識下に具えている性的傾向の内面現象は、フロイトやユングやアドラーらによる精神分析学の諸理論を以てしても説明を完うすることができないほど、微妙な契機を内包し、複雑な様相を呈するものなのです。というよりも、性的傾向の基となっっている心象の一つ一つには、もはや科学や理論の介入を許さない特殊な要素が含まれていて、それはもはや、私たちの知的認識の対象の枠外にあるもののように思われます。つまり、各人の性的嗜好の独自性の根源は、知性や理性の世界にはな

くて感性の世界に、いわば、人間の感覚細胞の原形質の内部に奥深くしまいこまれている「なにものか」であるように思えるのです。そこには、自然科学ないし経験科学で律し切れない深層心理の神秘性が窺われます。

以下において私は、私個人の性向を告白します。世の中には私のような傾向を有する男もいるのだという、ただそれだけの軽い意味でお読みいただきたいものだと思います。

二

私は、「エリガンス」こそを女性の本質と見ます。私は、女性美の極地を「優雅さ」のなかに感得するのです。

豊満な肉体の若い女が全裸にされ縛られている姿は、たしかに、「単純サディスト」を満足させることでしょう。それは「戦闘的サディスト」ないし「能動的サディスト」にとって、かなりの価値があるということを私は認めます。けれども、私個人の好みからすれば、全裸の女の縄目姿はあまりに露骨で、あま

りに残酷なものに感じられ、これに魅せられることは少いといわなければなりません。そこには夢幻的な雰囲気がいからでず。私は、時として、全裸または全裸に近い女体を「醜惡な肉の塊り」のように感じることもあります。

私が女に求めるものは、「清純さ」であり「女らしさ」であり「優しさ」です。ところで日本の女性が「女らしさ」や「優しさ」を最も強くにじみ出すのは和服姿ではないでしょうか。女は洋服を着ているときよりも和服を着ているときのほうが女



らしく優しく見えます。女性自身も「着物を着ると、自然に自分の心がしおらしくなり、動作もしとやかになる」という事実を認めています。つまり、女らしさや優しさが、着物をきちんと着たときに、ひとりで彼女の身と心を支配するのです。

女の着物のなかで、いちばん優雅なものは、なんといっても「振り袖」です。いな、世界中のいっさいのコスチュームのなかで、最もエリガントで最もデラックスなムードをかもし出すものが女性の振り袖の訪問着なのではないでしょうか。優美な

袂、帯揚げ、衿元、そして背中にゆったりと結んだお太鼓——私たちは、そのような気品に溢れた姿を、テレビなどでも見ることができます。たとえば、藤本三代・島倉千代子・高石かつ枝・五月みどり・神楽坂浮子・朝丘雪路らが晴れの舞台で歌うときに、彼女らのすばらしい盛装にお目にかかることがあります。また、平凡・明星・週刊誌などの正月号の表紙やグラビア写真などにおいても、若いスターたちのすてきな振り袖姿に接することができます。女性自身も、じつはそのような同性の振り袖姿を眺めたときに、ため息をついていることが多いようです。百貨店などで花嫁姿のマネキン人形を見ている女性の目が、ある種の生き

いきとした光を湛えていることを見出すこともあります。ウェッディングドレスを見るとときよりも振り袖衣装を見るときのほうが、日本の女性の胸のときめきは大きいようです。それは老若にかかわらないのです。日本の女の血のなかに流れている和服への執着や憧憬や愛情は消えはしないように思われます。

三

和服には帯がつきものです。特に盛装の場合の帯は胸高に締められ、背中に高く品よく結びあげられているべきです。女性が、その柔かい両手を後ろにねじ回されるとき、彼女の組み合わされた両手首を載せる場所を——たおやかな両手首を置くべき位置を示すもの、それがあの美しく結んだお太鼓である。そのように私は考えています。つまりお太鼓は女性の両手首を固定させるべき台なのです。大映作品の「越前竹人形」のなかに見られる若尾文子の花嫁姿のごときはその着物の美しさと帯の結び方の雅びやかさにおいて、まさに最高の和服姿だと言えましょう。

女性は、どのようなときにも、あくまでも、「女らしさ」と「優しさ」と「しとやかさ」と「気品」とを失ってはならないと、私は思います。だから、彼女が、振り袖姿で厳しい縛しめの縄目を受ける場合にあつてすら、その着物姿には一分の隙もあつてはなりません。それが私の持論です。振り袖の袂の「振り」から長襦袢の袂が乱れ出たり、衿がはだけたり、裾が開いたり、帯揚げが垂れたりしてい



てはいけないのです。「しとやかな日本の乙女たちよ、よりしとやかであれ」と私は叫びたい気持です。

さて、胸にかけられた縄目がありますが、これも、三重以上の縄目が、隙間なく、平行的にきちんとかけられていることが望まれます。その縄目は帯揚げにかかることなく、帯揚げよりもさらに高い胸の上に位置していることこそ美的です。また、ささくれだった藁の荒縄ではなくて白木綿の細引や緋扱帯（ひしごき）が用いられているほうがいっそう美的でありましょう。

両手首は肘より高い位置で括られていなければなりません。すなわち文字通りの「高手小手」であってほしいのです。この場合、十本の指は自然に開いて掌をまうしろに向けているべきものです。握っていても優しさが出ません。両手の指の表情にも女らしきが宿っていなければならないのです。

次に、振り袖の袂の「振り（やつぐち）」は完全に前向きであることが要求されます。長い袂が直線的に垂れていてほしいのです。そしてその袖付けのあたりも折り目正しく閉じているべきです。「二の腕」が袂の「振り」から覗いているようでは括られた女性の「ひき緊まった感じ」は出てこないのです。

さらに要請されることは、被縛女性の「内面的な心の姿勢」についてであります。これは最も大切なキイポイントとなることなのですが、後ろ手に括られた振り袖姿の女性は、「自らが捕らわれの身であることを自らに言い聞かせ自らかみしめ」ていなければならないという点です。従って、その結果として、彼女の表情には、当然に「気品」と「哀愁」がにじみ出てい

なければならない。すなわち「怨み」の心ではなくて「締め」の心が、「苦痛」や「反抗心」ではなくて「憂愁美」や「清純さ」が表われていなければならない。そこでは「苦悶」の表情よりも、むしろ「可憐さ」のほうがより多く感じ取られることが大切です。

四

華やかな振り袖を着た盛装の女性が、そのふくよかな胸に縄を打たれ、その両手首に縄をかけられ、後ろ手、高手小手に縛りあげられるときには、「心の姿勢」と「体の表情」の両面から、以上述べたような点に注意してもらいたいものです。

後ろ手の縄目姿で正坐させられている場合にも、また、縄尻を取られて括られたままで歩かされる場合にも、この二つのことが全身で表現されていることが要求されます。

これらの要求に応えることによって、彼女は、この世のものとも思えないような、美の極地を現出することができるとしよう。彼女の繊細で行き届いた神経は世の多くの男性の胸をときどきさせ、彼女への憧れをいやがうえにも高めさせることができるでありましょう。

まことに振り袖姿で縛しめを受けるときこそ、女性が最高に輝くときなのです。

かくて、私は、優美と憂愁こそ縄目姿の女性のかもし出す妖しくもまた美しい雰囲気の真髄である、と結論しないではいられません。

媚薬の夢魔



森 本 愛 造

今回を第一回として、主として、マゾヒズムを中心とした、忠実に引用しながら、未だに解明されつくされたとは言えない、倒錯の世界の真実を、ここに記録に残したいと考える。

すでに半世紀をすぎた実例を、ひたすらに最近の実例と考えていなければならなかったこの世界にとって、生きた、そうして修飾されない資料が、いかに貴重であるかについて私達はまだ考えるところ少いと言わなければならぬ。もちろん、在世の人々の記録に実名を求めることは愚の骨頂であろう。問題の要点は、「誰が」ではなく、「何を」したかに

あるのだから。

したがって、私は「倒錯にのたうつ美女の告白」や「白日の下に、さらされた変態紳士の変態生活」などをここに紹介しようとは夢にも思っていない。

といって、変態優越の讃歌を謳おうというでもない。美も、真実も感動も、そうして悦楽も、ついに追究によって解明され、それは、すべての後につづくものに対する何物にもまさる遺産であるという、いくつかの例証を実際の記録から拾いあつてみようというのである。

真実の性生活が、隠語や擬音句によってし

か語ることが出来ないと考える人たちにとって、私の引例は全く無縁のものであろう。屢屢エロチシズムから派生して来る倒錯の形式があるために、サジズムを加虐淫乱症と訳し、かつ解した医師が大手をふってあるいている今日の世界である。多くの記録の中にはたしかに、倒錯的な不十分な現象が発見される。それらは、便所の落書に少しばかりサド・マゾヒズム的シーンを付加した混合物であって私達は、その異質の構成要素を単に混合しているからと言って同一のもの、共通のものと見なしてはならないのである。

この混合視から、長い間、正統的な理論と

されてきた「倒錯前戯論」が発生するのである。ファン・デ・ヴェルデから発し、性生活の知恵に至る無数の性解説書が、一様に倒錯を性生活の付加物、薬味、前奏と考えていることは、彼等が不必要に正常生活の「高等技術」として「愛咬」に始まる倒錯的技術とすり入れていることによって明らかである。

倒錯前戯論が、正常人——私のいう正常人とは、肉慾という言葉に代表される、異性と

の性行為による満足のみしか考えられない人という——の側からのみ述べられていることは、一見、倒錯擁護論者であるかの如く見える、サド裁判の特別弁護人たちの発言にも、裏返しになって発見される。

彼らの主要な論点は、サドが自由の哲学を保持しており、これを封殺することはすべての自由を制限する前提となる、ということにつ

という面から純精神的な作品と見ようとするのである。これは、倒錯が性行為の前戯であるとする人達の考え方と大した相異のない考え方であると言わねばならない。かれらがなぜ「哲学」という可知の世界にサドを迎え入れなければならなかったか、それは真実を知らざる、知ろうともしない大変な厄介者だからである。

倒錯を知る感覚は、FM受信機に似ているし、FM電波に対する装置が、あらかじめ組み込まれていない普通の——それは最も一般的で最もありふれており、受信機としての性能も研究されつくされている——受信機しか持たないものには、どのようにすばらしいFM放送でも聴きとることはできないのだ。

そこで彼らは、彼らの用いている電波と同質の性質をもっている別の波、つまり短波を思いだす。そして短波についての知識からFMを割りだそうとするのである。この答えがいかにかに真実と遠いものであるかは容易に考えることができる。即ち短波の放送による体験や類推からFM放送のあの特殊な美しい完璧な実態を想像することは出来ないのである。

倒錯前戯論は、実にこの中短波によって、FMを語るに等しい無意味な仮説にすぎないのである。エロチックとは別の、しかも同種



の快楽をもたらすもの、それが倒錯なのである。このことを、かなりはつきり極限の形で示す例が幸に手もとにある。この例は、雄弁に前に述べた倒錯と一般性愛とのはげしい対比を示している。それ故にこそ、この記録は一般人社会に、倒錯もまた認識可能であり、それはこれまで語りつがれたような怪物ではなく、精神的感動と肉体的感覚の緊張との、優雅にして完全な融合であることを示すであろうと思われる。

夢の中ですばやく眼を奪う絢爛さで位置を交代し、その対位によって更に烈しい情熱を伴ないながら上昇をつづけるサシスチックな感覚とマゾヒスチックな感覚の合一物が、ここには見事に捉えられている。ただこの記録の如く、夢だけが遂に唯一の自由の時間であるとするならば、人生はなんという浪費であろうか。ともあれ、記録の実物によって妖精の時間の実態をご覧いただきたい。

「私が由来マゾ的な人間であることはすでに御承知のことと思います。ですから、いまこの中に、私がどうしてマゾ的になったか、という経緯について書くことは止めます。▲筆者付記。本人は一九二九年生れの妻帯者。結婚生活十年。四児あり。経済的

に中流の商店主。旧制専門学校卒、マゾ的というその具体的分類は広汎な意味での動物化願望(ツォーミミック)。縛りについての興味はなく、凌辱、鞭打等に主として興味を感じる。▽

はじめのうちは、関西で出ているK誌やその同類のサド雑誌にあるマゾ記事を読んだりして、満足感を秘かに味わっていましたが、こういう雑誌が一時町から姿を消してしまったので別の方法を考え出す必要に迫られました。心齋橋筋で買った「戦争と性」の原書がかなりの間、私の満足感をたすけてくれたことも事実ですが、何といっても映画の中に出てくるマゾ的場面が一番刺激的でした。特に私に皮長靴についてマゾ的な刺激を感じさせるようにしたのは、モーリン・オハラが男装して暴れまわる「剣豪ダルトニアン」というアメリカ映画でした。

「前から、犬の首輪をつけて女性の散歩に連れていかれる男とか、特別に設計して作ったくらや手綱をつけて、女騎手の命令通りにはいまわされる男には大いに興味もあり、実際に何度か実地に試してみようとしたことがあるので、その映画の中で彼女がさっそうと馬を走らせたり、ふとももまで

あるゆったりした長靴で走ったり、歩いたり、敵と切り結んだりという有様を見てみると、自分がその場に居あわせたら、というような想像をしては耐らなくなったりしたものでした。そのあとでまた二番煎じのように封切られたアメリカ映画「すべての旗に背いて」も長靴の前面にちよつとした模様が入っているだけの違いで、同じような刺激を感じさせられました。今度は女海賊の役柄だったので、その無法さが、前回よりも強かったように思います。敗けた方の捕虜と女海賊という場面では、この女首領の慰さみ者になって、ついにはどこかの港で鞭で追いたてられながら奴隷に売られてしまう。という筋を勝手に空想してはたのしんだものでした。

もちろん、このほかにも、数本の映画が特に刺激的でした。タイトルだけをあげますと、「摩天楼」「妖花アラウネ」「たそがれの維納^{ヴィンナ}」などです。「摩天楼」には、主義のために身を石工におとしたG・クーパーを、馬で追いかけて来たパトリシア・ニールが、短かい鞭で二度三度と打つ場面。「アラウネ」では、魔性の女アラウネにふんするヒルガルド・ネフが遠乗りに男を誘って嵐の中を駆けぬけてゆく場面。「たそ



がれの維納」では、ポーランドの女貴族が、腹立ちまぎれに夜の広野を馬で馳けまわりついに馬を乗り殺してしまう場面が印象にのこっています。実際、ここに書いただけの場面をつないで一巻の映画を作ったら、私はいまでも毎日見にゆくことでしょう。こんな風に、映画は私にとって一番仲のよい友達でした。ところで、私は最初の妻と死別して、後妻格で家に入れた内妻と一

緒に暮していましたし、子供も段々大きくなって来ますし、商売もお陰様で少しずつは良くなって来ていましたので、そう毎日映画に通っているわけにもゆかなくなり、また、映画もそう面白いものも上映されなくなってきたので、いつとなく私の映画通いも回数が少なくなっていきました。今度の妻は大変な嫉妬やきでしたので、彼女は私の映画通いを、他の女のところに通

っている言訳だと思い込んでいました。そのやきもちの程度はまた大変なもので、自分から言ってもおかしいのですが、十人並以上の容ぼうを持っていながら、自分は不器量だと信じ込んでいましたので、すべて私が会う女は私と関係があると思い込んでいるのですから、亭主たるもの、説明にあきてしまつて、ただ言うままにまかせてあったというのが事実です。彼女は少しばかりマゾ的だったので、どうも私とはうまくゆかなかつたのかも知れません。

あまりのやきもちやきにへきえきした私は、或る日一計を案じました。夜の床に「剣豪ダルトニアン」のグラビア切抜きを持ち込んだのです。内妻との性生活で、彼女はすでに私の変な趣味を知っていたので、このこと自体は別にいざこざの原因とはなりませんでしたが、モーリン・オハラの写真が私自身の能力を刺激し増加させたことは予期しない程すごいものでした。そのことは、彼女に妙なむじゅんをもった感情をおこさせたようです。

純粹に肉体的に、彼女はいままでよりも烈しく、活力のある私を賞味し、満足しました。しかし、その一面、第二の女性が、たとえ切抜きでも二人の間に介在すること

になったという事が、彼女の自尊心と女らしい愛情を傷つけるのでした。”——中略——

そのうちに、モーリン・オハラは他の女性と変り、二人の間に割り込む外国女優は実に二十人以上にもなった。そして、ついに、日本の女性の写真が、二人の寝室に置かれるようになった。さらに、彼の記録は、彼がしばしば疲労のために半分眠っている中に、彼女が彼の肉体を使って満足することがあったと書かれている。

彼は、写真による暗示を受け、実際に内妻の与える直接的刺激によって、十分ではないにしても性的快感に露悪的快感を加味した独特の感覚をたのしむようになった。一方、妻の方は、自分の肉体によって、对手が第二の女性を感じている事自身には反撥しながらも、その事によって倍加される満足と、彼の偽悪感に対応するサジスチックな快感とを感じとりようになってしまった。記録は、延々とこの間の推移を伝えながら、ついに信じ難い事実を、幾分の羞恥を交えながら語る。性的と私が書いた快感が肉体の性満足感と見事に分離されるのである。

“ついに、彼女は私の夢の中での暗示に誘

惑されてしまいました。彼女は、私が借りて来たその拍車のついた長靴を布団の中に持ち込んだのです！ 私達はしばらくの間お互いにそれぞれ違った意味での興奮に身を委ねました。そうしてのち、誰でもが知っているあの疲労感につつまれてとろとろと眠りにおちていったのです。まもなく、私は、思いもかけず、自分の身体に黒いつやつやした毛が生えて来るのを発見したのです。私は、四肢で立ち、重い頭を立てて前を見ました。カメラのファインダーから覗くような、黒っぽい青空の下で、私はやわらかな草の上に立っていました。点のようにな小さな人物が、ずっと遠くの方にぼつんと見えたかと思うと、急にものすごい速さでその人物は大きくなって来ました。それはまことに見事なデザインの乗馬服に身を包んだモーリン・オハラでした。鋭くひかっている彼女の瞳は死人の様に動きません。しかし、彼女が、生きている証拠に、持っている細身の黒い鞭はびりびりとふるえています。ずっと彼女は私に近寄ると、誰に言うともなくはつきり喋りました。もう春の目覚めの時ね。ではあたしの来る番だね。

彼女はぶいと横をむくと、そこには、銀

色の飾りにかがやくすばらしい古風な鞍がありました。それに両手をかけて持上げると、片足をあげて彼女はそれとんと蹴りました。いらない、というのでしようか。私は、モーリンがするすると手早く手綱を手でしぼり、私の口が、手の力で力強くひっぱられるのを感じました。鉄のいやな味を舌の先で感じながら、私は彼女が、両手で私の背中に力を入れるとひらりと跨ったのを知りました。思いのほか軽いと、私は感じました。その黒く、光りかはやいていた長靴が、ぴたりと私の両腹に構えられ、かかとの鋭い拍車がぐいと突きささったのと、私が弾丸のように走り出したのは同時でした。一步ごとに加えられる新たな刺激、私の乗る番だわ、というモーリン・オハラの乾いた囁き、羽毛のように軽いその女騎手の体重と両腹に感じる力強くたくましい圧迫、飛ぶようにうしろにすぎゆく緑の平野、やわらかく、走りやすい大地、その中で私が感じているものは、息切れと、彼女の与えた刺激と、風とだけでした。

もう春の目覚めの時ね。とモーリンはもう一度つぶやきました。私は、春が馬にどんな作用をするかを知っていました。春は、



私たちにどんな義務を与えるかを——。軽く、けれども鋭く彼女の一撃が、私の性的な器官のどれかを打ちました。私は大波のように近づいて来る興奮を感じていました。もう一度、モーリンの乾いた声が、私の乗る番ね、ときこえた時、私はおびたらしいエネルギーと一緒にザーメンが奇流のように体外に押し出されてゆくのを身体中で感じたのです。

ファインダーは閉され、青空も、風も、彼女の刺激も、すべてが終わりました。ただ、息切れだけがつついていました。この事件は、妻が、眠っている私に長靴をふれさせていたずらをしたために起こったのだと、彼は私に説明しました。暗示によつて、このおそろしく詳しい、色彩のついた夢を見た私は、ふと自分が布団を汚してしまつたのではないかと心配になりました。

た。が、布団は乾いており、私が洩らしたと思つた何物もそこにはありませんでした。この日を初めとして、その後私には同じような経験が次々とありました。——以下略——

夢の中で色情的な経験を重ねるといふ事自体は決して珍しいことではない。夢精によつて代表されるように、この種の体験は多くの男子が体験していることである。しかし、この例では、実際に夢の中で満足感を得ているにもかかわらず、またあきらかに通常性体験と同質、或いはそれ以上の頂点を、何度も永続して感じているにもかかわらず、彼は実際には何の排出も行なっていないのである。

通常は、おそらく万が一の例外をも含めて一分間以上、いや二十秒以上性感の頂点にとどまることの出来る男性はいないといつてもよからう。にも拘らず、夢の持つ不思議は時間、一秒を一日に、一秒を一月に、一秒を一年に簡単に置き換えてくれる。人類が、万全を投じて研究しつくし、食物ならざる強精食を食して、老年に至つて強精法を講じて、求めつづけているものは何であろう。それは、頂点の持続なのである。一般に、男性の頂点の持続は秒を以つて数えられる。そして、それを一秒だけ延すことが出来るなら、人々は



争って、教えを乞いに門前に集ることである。
う。

しかるに、ここでは、実際の非性的刺激によつて増幅された夢の中の興奮は、頂点に至る道を急激に上昇しそして持続しつづける。事後感に至るまでの時間は、当人にとって、或いは広野の馬としての一周であるかも知れないし、街頭の散歩の犬としての一巡りであるかも知れないし、また拷問室における一週

間であるかも知れない。

このおどろくべき長時間に涉つての絶頂は私にナイヤガラ瀑布を思わせる。そして実質的には、肉体的性感と全く異なるこの頂点とは、実に純粹に扱ひわけられた倒錯的頂点なのである。この一人の男のフェチシスチックな媒介物は靴の感触であつた。それは当人以外には信じる事の出来ない媚薬である。最も色彩的で、最も刺激的で、最も性感的な時間

は、夢と、非性的物質とによつて見事に完成されたのであるが、私達は、古い書籍の中にも同様の記録を読むことが出来る。

「彼はベッドの中に遂に靴を持ち込んだ。

彼は夢の中で、逞ましい馬となつた。性は勒のひきしまりを感じ、拍車の圧迫を感じた。」
▲クラフト・エビング著 セクシュアル・パトロギイ▼

音楽好きの方はおそらくご存じであろう。

「トスカ」という歌劇がある。序曲もなく前奏曲もない。ただ短い序奏——それは単なる和音の斉奏（ユニゾン）による五つの音にすぎない——によつて、すべては絶頂感と緊迫とにつつまれる。そしてその緊迫感（クライマックス）は実に延々と二時間半にわたる全編をおおいつづける。劇中のいくつかのエピソードは決して緊迫感をやわらげない。恋の歌も美しい歌姫の登場もすべてはクライマックスの中でつづけられてゆく。

その第二幕、悪玉の主役たるスカルピアが歌姫によつて刺し殺され「ローマは明けてゆく」と、歌姫がつぶやいても、そして甘美な二重唱が延々と歌いつづけられても、クライマックスは決してそこなわれない。すべてのエピソードの後、暗い、夜明けのティベレ河

に向かつて歌姫が城壁から身をおどらせる終曲に至って、私たちはふたたび短い序奏をきくのである。はじめて呪縛から解き放され、そこに平和、安全、事後感が残るのである。

これに似たふしぎなクライマックスを私は彼の記録を読むうちに思いだした。

眠りは、私達にとって安息の時であると同時に、自由の時間でもある。自由とは、単なる神経の解放ではない。それは空間と時間の制約からの解放である。そのまった中に自我の胚種となって漂う。この保証された漂流は、夢という一滴の媚薬によって、一瞬にして歓喜の場の種類と方向とを指定するのは、与えられる刺激である。その刺激は、フェチシスチックなと呼ばれる物質による。この物質だけが現実の世界から漂流の世界にさし出されるただ一本の綱である。

この一本の綱を所有すること、それがフェチシズムの一つの効用である。靴は、他のいかなる非性的物質と置きかえることが出来る。それは、一本の刺のあるバラの花でもよい、一本のロープでもよい。あなたの同衾者は、きつといぶかしく思うに違いあるまい。しかし、そのいぶかしさは、初めて鏡の中に自分の姿を見る原始人のいぶかしみと同じものである。

第七の官能としての倒錯の歓喜は、このようなやり方で実現されたとする、この一人の平凡人の記録は、非性的絶頂の存在と、絶頂の持続という二つの事実を私たちに教えている。彼はなおも書く――

「ついに、私は全世界の女性を私のハレムに置くことに成功した様な気持ちになりました。彼女たちの一人、又は二人、あるいはもっと多くを、一時に相手として、私は思いのままによろこびにひたることが出来るのだと考えるようになりました。」

しかし、私は妻と別れようとは思いません。彼女は私のハレムにとって必要な只一人の現実の人なのです。私はハレムを持っているですが、彼女はその鍵を持っているわけですから。

わたしは、サジストでしょうか。妻はこの役柄を決して喜んでいないのです。むしろ嫌っているでしょう。しかし、彼女はほかの夢の中の女性によって自分自身もまた楽しみを増加出来ると考えています。」

「そうです。あなたは、サジストでもありません」と、私は答えてやりたい。彼女の心の中に解明しがたい謎の仕掛けを作り上げ、その

中に追いやっているのは、彼女なのだから。馬となるという欲望のためには、彼女の心も、肉体もすべてを投じて悔いようとしないうのだから。そして、その目に見えない檻の中で、彼女を馴致したのも彼女なのだから。この種のマゾヒストは常に太陽の玉座に側近く坐ることが出来る。彼は全世界を自己のためにだけ所有し使役するのである。

「たしかに、」とフリドリヒ・テエレンはその著「倒錯の幻想性」の中で書く。

「倒錯の精華とも云うべきは、サジシチックなサジストではなく、サジズムを駆使するマゾヒストである。彼らはどん慾に漁り捕え、馴らし、そして屈従させ、その奴隷の身体を敷きつめた大地に馬を駆りながら悲しげな歌を歌うのである。」と――



白い粉の秘密

佐藤 達四郎

豊田みのる・絵



新宿の都電の通りに面したとある小さなビル
の二階の一部屋。そこに次のようなネーム
カードがかかっている。

「紫姉妹私立探偵事務所」

お気軽に何でもご相談下さい

紫邦子 ゆかり」

(1)

木枯らしの吹きあれている日であった。紫
姉妹探偵事務所を訪れた一人の男があった。
グレイの服に灰色のコート、そして目深にか
ぶっているソフトもグレイ、灰色ずくめの服
装の男であった。

姉の邦子は外出していて、事務所にいたの
は妹のゆかりだけだったが、男は落ち着かぬ
ふうにゆかりを見つめて、

「あなたは？」と尋ねた。

「私、紫ゆかりです。あの、ご用件は？」

「そうですか。じつは、預かってほしいものがあるんですが、おたくは依頼主の秘密は守ってくれるのでしょうかね」

「ええ、それは私たちの義務ですから」

「お願いします。その品というのはこれなんですが。……」

男はデパートの包み紙に包んだ紙包みをテーブルの上に置いて、セカセカと言葉を続けた。

「これは、私以外の誰にも渡さないでほしいのです。あ、でもこの写真の女にだけは渡してくれてけっこうです。名前はヒロミっていうんですが」

男は一葉の写真をテーブルの上にのせ、こんどはポケットからロングサイズの外国タバコを取り出して、気ぜわしげに吸いだした。

「あの、お預りしますが、内容は？ それにあなたの住所とお名前は？」

「何も聞かないでほしいんですがね。むろん礼金は前払いします。——いいですか、秘密は守って下さいね。むろん警察にもですよ」

最後の一言はやや脅迫めかして、男は誰かに追われているかのようにあたふたと去っていった。男がテーブルの上に残していったのは、紙包みと写真、そして五、六枚の一万円紙幣、忘れ物のマッチが一箱、それだけであ

った。ゆかりは少しあつけにとられて、男の後姿を見送った。

しばらく後、外から帰った姉の邦子に、一部始終を話して聞かせるゆかりである。

「フーン、変な男ね、で、ゆかりちゃん、その男が置いてった品物はこれね」

しかしその紙包みには、別に何の異状もない、中味はどうやら袋入りの砂糖か小麦粉のようなものだ。

「とにかく一応は預かっておきましょう。でも、これは何となく犯罪の匂いがするわね」
しかし、第一幕はそれだけだった。姉妹はその紙包みや写真やらを金庫の中へしまい込み、幕はあつけなく下りてしまった。

(2)

第二幕は、三日のちのある朝に始まった。

姉妹の住んでいる部屋は、事務所の隣の部屋だったが、二人は、そこで遅い朝食をとっていた。すると、トーストをかじりながら新聞を読んでいたゆかりが、突然、叫び声をあげて立ち上がった。

「お姉さん、この男!!」

朝刊の一角、そこはいわゆる三面記事だったが、そこに一人の男の写真がのっていて、五段ぬきの記事であった。

「身許不明の死体発見、他殺か？ 胸にナイフの傷……」

「ゆかりちゃん、たしかにこの男ね!!」

「たしかよ。それに服装もびったりだわ。何から何までグレイずくめだった。……」

姉妹の視線がピタリと合って、チカリと鋭い光がきらめいた。

「立花さんに電話してみる」

邦子は事務所へとんでいって、電話のダイヤルを気ぜわしそうにまわし出す。かける先は警視庁捜査一課。

「もしもし、立花警部をお願いしたいんですが、……あ、立花さんですか？ 私、邦子です。今朝の新聞のあの男の死体ね、くわしいことわかりましたか？ え、あそうですか。いいえちょっと気になることがあったものですから、ごめんなさい、ではまたあとでお伺いします。失礼しました。——」

受話器を置いた姉のうしろで、ゆかりはまだ片手にトースト、片手に新聞を持ったまま立っている。

「どうなの、お姉さん」

「ええ、まだ今のところ鬼の一課もお手あげらしいわ、ところでゆかりちゃん、あの男に預かった紙包み、あれいったい何だろう？」
「そうだ、依頼主が死んでしまった以上、一

応内容をたしかめておく必要があるわ」

二人は金庫にとびついて、鍵をあける手もどかしく、例の紙包みを取りだして、ていねいに包み紙をはがしていった。

「あら?!」

「どうしたというのかしら、これは」

あの男を死に追いやった理由かもしれぬその紙包みの中味は、なんとポリエチ袋入りの砂糖が三袋。どれもS製糖のもので、封も切っていない。

二人はしばらく呆然としていたが、とつぜん邦子が一つの袋の隅を破り、中へ指を突っこんで、その指を注意深くなめはじめた。とたんに、邦子の瞳は異常に輝きだした。

「どうしたのよ、お姉さん」

そう言いながら姉のそのちよつとお行儀の悪い動作をまねたゆかりも、みるみるおどろきに目を見はらせた。

袋の中味は、なんと非常に純度の高いヘロイン、多くの人をむしばんでいる白い魔の粉だったのである。

(3)

「どうする? 立花さんに相談する?」

「ちよつと待って、ゆかりちゃん。ことは慎重を要するわ。立花さんは一課よ、麻薬はお

角違いよ。むろんこんどの殺人事件には関連があるでしょうけど。——とにかくこれだけのヤクがあるからには、裏にはボスやら街のダニどもがうようよしてるにちがいないわ。そいつたちを根こそぎつかまえてしまうためには。……」

「じゃ、このことはだれにも秘密?」

「そう。明日の新聞に書きたてられるくらいがオチだからね。そうなってしまったら、もうボスなんかつかまえられるいわ。ここへ置いとけば、ボスや街のダニどもは血眼でこれを探すでしょうし、そうすればいつかはシッポをだすわ」

「ふーん、ちよつと大仕事ね。相手にとって不足なしか」

「だけど、あまり危険なことしちゃ駄目よ」

ゆかりはそう言う姉の目の中に、執念のような光を見出した。お姉さんは麻薬を憎んでいる、そしてそれを日本に持ち込む連中も!

——邦子の親友だった遊佐景子のことをその時ゆかりは思い出した。景子はモダンジャズピアニストとして将来を期待されていた。だが、ほんのちよつとしたスランプからの逃避を、彼女はそこそこジャズメンの間にひそかにはやっていた麻薬に求めたのである。そしてついには、その白い粉に、身も心もむしば

まれてしまった。

(あの事件のせいだわ、お姉さんがこんなに麻薬を憎むのは。——)

「でも、手がかりは今のところこれだけね、この女の人の写真と、マッチ。……」

「そうだ、そのマッチ、どこかの広告マッチじゃない?」

「あ、そうよ。グランドキャバレー、『白い城』」

「そこに何かありそうね、鍵が」

「私いてみる、そのキャバレーへ」

ゆかりは立ち上がると、もう身仕度をはじめていた。

(4)

新宿歌舞伎町。

小さなバーやキャバレーがごちゃごちゃと立ち並んでいる中の一軒がキャバレー『白い城』であった。

もう時刻は昼近かったが、その一角はまだ眠りから、覚めてないかのように、静まりかえっていた。夜はネオン華やかな街だが、昼見れば汚らしい建物の林立である。あてやかなホステスたちの昼間の素顔のような。……『白い城』の通用口から入っていったゆかりは、事務室のような部屋のドアをノックし

た。出て来たのは目の鋭い若い男であった。

「何の用だい？ ホステスの面接は午後三時からだぜ」

「いいえ、ちょっとお聞きしたいことがあるんですが、ここにヒロミさんて方が勤めていらっしゃるいませんか？」

「ヒロミっていう女はいるにはいるがね、何か用があるのかい」

「それはこの方ですか？」

ゆかりの見せた写真を一目見るなり、男はぶっきら棒に、ああとうなずいた。

「会いたいのですが、どこに住んでいらつしやるか、教えて下さいませんか」

「ちょっと待てよ、今聞いてきてやるから」男は部屋を出てゆき、ゆかりは一人残されて、五分くらいの時間が流れた。

突然、部屋の中へ数人の男たちがドヤドヤと乱入して来た。その男たちの目の中の危険な色と、中の二、三人の手に握られている拳銃とによって、ゆかりは事態を悟った。

「ホウ、ヒロミにご用というのはあなたでしたか、こりや意外ですな。女探偵さん」

三十前後の背の高い、やはり目の鋭い男である。この男たちの中の親分格に違いない。「当キヤバレーのマネージャー、小泉です。お見知りおきを。……」



男の口辺に、皮肉な微笑が浮かぶ。

「……！」

「おっと、自己紹介はけっこう。紫ゆかりさんですな。あなた方姉妹のことは先刻ご承知でね。あんたは柔道三段、射撃は玄人はだし、お姉さんの方はこれも射撃とフェンシングの名手、今まで立花警部を助けて解決した事件が十数件。フッフフ、これくらいは知らなきゃ、新宿じゃモグリかな、とにかく、ヒロミに会いたいのなら今すぐ会わせてあげましょう」

小泉、と名のるその男がまわりの男たちに合図をすると、たちまちゆかりはロープで嚴重に後手に縛り上げられてしまった。

胸に、腕に、手首にギリギリと喰い込んでくる縄の痛みに顔をしかめながら、ゆかりは男たちに追われるようにいくつかの階段と廊下を通って地下室らしい一室に連れられていった。その部屋の内部を一目見て、ゆかりは思わずハッと息をのんだ。

うす暗い裸電球の光に照らされた部屋の中に、一人の女が立っていた。いや、立っていたのではなく、両手を高くロープで吊り上げられて、立たされていたのである。その半裸の、背に、胸に、幾条となく走っているのはまぎれもなく鞭の跡、そしてまた赤黒くこ



びりついているのは皮膚を破って流れ出た血の跡か。

ゆかりを驚かしたのはそれだけではなかった。その女、髪は乱れ、顔は苦痛に歪んでいるが、その女こそまちがいなくあの写真の女ヒロミだったのである。

(5)

「どうした、吐いたか」

「いけませんや、強情ですぜこのあま」

女を囲んで、ここにも四、五人の男たちがいた。

「バカ、女ひとりにてこずって、情ない奴ら

だ。おい、もう一泣き泣かせてみる。……」

マネージャー小泉は、そう言い捨てて、自分分はゆかりを部屋の隅の柱に縛りつけて、ゆかりと女を半々に見ながら言った。

「さあ女探偵さん、あれがあんたの会いたがっていたヒロミだぜ。なぜあんたがあの子に会いたがっていたか、それはあとでゆっくりと聞かせてもらおう」

女のからだに、再び皮の鞭が浴びせられはじめた。間断なく続くその鞭が肉体を打つ鋭い音がゆかりの耳朶をつんざく。女ははじめただ低く呻吟するだけだったが、やがて耐え切れずに、鞭の音のたびにヒューッという悲

鳴とも泣声ともつかぬ声を洩らしはじめた。

鞭の雨がやみ、マネージャーがつかつかと女に近よっていったかと思うと、彼は次の瞬間女の髪の毛を左手でつかんでぐいと引っばった。ガクンとうしろに反らせた女の顔は、引き下げられる髪の毛の根もとの痛みと、吊り上げられた腕の痛みにひきつっている。

「おい、ヒロミ。お前があの子の松崎のスケだつてことはわかってるんだ。奴は品物を持っていなかった。とすればどこにかくしてあるに違いないんだ。お前は知っているはずだ。さあ言え、品物はどこにあるんだ！」

「あ、あんた達が松崎を殺したのね。そんな

品物のことなんか、知るもんか！」

「まだ強情をはる気か。よし、それならこつちもどうしても言わせてみせるぜ」

女の髪の毛をつかんでゐる小泉の手に力がこめられた。と、彼の右手にはいつの間にか一本の万年筆が握られていて、女の胸と胸の間の谷間に、その万年筆は力の限りグリグリとえぐりこまれた。

「あつ、あつ、あうっ」

女の半身がよじれ、悶える。だがその上半身は、髪の毛とロープによって固定されていて、男があやつる一本の万年筆から逃れることができない。

女の瞳はもうなかば視力を失い、気絶一歩前の状態だった。

「待って！」

あまりのことに声も出なかったゆかりは、やっとそれだけを叫んだ。拷問の手がやみ、女の全身からガクリと力が抜けた。

「品物のことは、その人は本当に知らないのよ。殺されたあの男から品物を預かったのはこの私なんだから」

「何っ!？」

小泉の目はリンのように燃えてゆかりをにらみつけた。

「そうか、松崎の奴め、そんな所に。それで

お前がヒロミに会いたがった訳もわかった。

おい、その品物はどこだ。事務所か？」

「事務所になんか置くもんですか。お姉さんが秘密の場所に」

言いながらゆかりは後悔していた。女を救うためについ口をついてでた言葉がかえって自分のみならず姉までも危険にさらすハメになつてしまったようである。

「おい、あの探偵事務所へ行って品物を探せ。姉の方の女探偵がいたら、有無を言わさず連れてこい！」

五、六人の男たちがとびだしていくのを、さすがにゆかりは蒼白な顔で見つめていた。

(6)

一時間のち、男たちは帰ってきた。

「マネージャー、事務所には誰もいませんぜ。鍵をこわして中へ入って、隅から隅まで探しましたが、出てこないんで。金庫の中はカラでした」

「うむ、こうなつたらやむをえん。さあ女探偵さん、素直に言ってもらおうか。もう一人の女探偵の行先と、品物のありかをね」

「ホッホホ、おあいにくさまね。知らないと言つたら……」

姉と品物が無事だったことを知つたゆかり

の心には余裕ができていた。

「あの女と同じように、からだに聞くさ」

さっきまで女を責めていた皮の鞭が、こんどはゆかりの肩に、胸に、太腿に、激しく打ちこまれた。

「う、むむっ。——」

呻きを歯でかみころして、ゆかりは心の中で叫んだ。

「畜生！ 誰が声なんかだすものか！」

骨にまで喰い込む鋭い痛みが、次々に襲ってくる。しかしゆかりの目はしっかりと見開かれて男たちをにらみつけていたし、唇はかたく閉ざされたままだった。

「ふむ、なかなか気の強い女探偵さんだ。だがまだまだこれくらいのことじゃ済ませないぜ」

マネージャー小泉の右手に、再び万年筆が握られていた。そしてそれは、身動き一つできないほどかたく縛りつけられているゆかりの、わきの下、胸、背などを、ぐいぐいと力いっぱい突きえぐるのだ。

「ふふ、どうだ、少しはこたえるかな」

ゆかりの全身にじつとりと脂汗がにじみだし、唇からはもらすまいと思つても無意識のうちにかすかな呻き声がもれていく。後手に高くねじ上げられている両手の指だけが行

動の自由を残されていて、ひきつれたようにヒクヒクと動いている。

「あ、あつ、う、むむっ！……」

苦痛と共に、かすかな吐気とめまいが襲ってくる。苦しい、とにかく苦しい。

（ああ、お姉さん！ どこにいるの?! 助けて!）

ついにゆかりも心の中で声にならない悲鳴をあげた。もう数分したら、その悲鳴は声になつて、口をついてでてきたかもしれなかつた。だがその時、

「大変だ、マネージャー、手入れたっ」

「何っ?!」

男たちが振り返るひまもなかつた。部屋の入口にはもう一隊の警官隊がなだれをうって押しよせてきていた。

「抵抗するなっ、抵抗すると射つー」

リボルバーを構えて仁王立ちの立花警部、それによりそうように、姉妹の愛銃であるベレッタを持って立つ邦子。……

勝負は一瞬のうちについてしまった。マネージャー小泉をはじめ十人あまりの男たちはあっけなく逮捕されてしまった。

「お姉さん!」

「ゆかりちゃん、遅れてごめんね。痛む?」

「ううん、平チャラよこれくらい」

負けおしみを言う妹に、邦子は優しく微笑みかけながら、

「一足先に事務所に帰って寝ていてね。私もすぐ帰るから」

そう言い残すと、こんどは、いましめを解かれた例の女、ヒロミに向かって言った。

「磯村ヒロミさんね。松崎さんがとんだことになつてお気の毒ですけど、あなたが無事でよかつたわ。いずれ参考人として呼びだされるでしょうけど、今日はお家へもどつてゆっくりお休みなさいな。私がお送りするわ」

(7)

三十分後、探偵事務所、長イスをベッド代わりに横になつてゐるゆかりの前で、立花警部が成り行きを説明していた。

「ゆかりちゃんのその一言が怪我の功名だったわけだな。邦子さんはその四、五人の男のあとを尾けて、ゆかりちゃんがあの地下室にとじこめられていたのを発見したんだからね。だけど少し無鉄砲だったな」

「ところで立花さん、お姉さんは?」

「邦子さんにはまだ少し仕事が残つてゐるんだ。なに、じき終るがね。……」

その時、電話のベルがけたたましく鳴りだした。受話器をとった立花警部の顔色が変わり、

声がにわかに荒くなる。

「何だどっ!? 女と邦子さんを見失つた! 女のアパートにもいないのか。しまった! すぐ非常線をはれ。よし、すぐいく」

「立花さん、お姉さんは?」

電話を切つた立花警部は苦い顔で答えた。

「あの磯村ヒロミという女、あいつやはり麻薬ボスの手先だった」

「え? あの女の人? それでお姉さんはそれを知つて。――」

「そう、敵をおびきだそうとしたんだ。だが部下がまんまとまかれてしまった。すまん、ゆかりちゃん。きつとお姉さんは見つけだす。きみはここを動いちゃいかんよ」

そう言うなり、立花警部はとびだしていつてしまった。

（お姉さんが! あの女に）

ゆかりの心の中で何かがぐるぐるとまわつていた。と、突然ゆかりは一つのことを思い出した。

（そうだ、ある写真、ある女の写つていた写真、あの写真の背景はたしかパシフィックホテルだったわ!）

天啓のように彼女の心の中にひらめいた直感がゆかりを動かした。

パシフィックホテルへ!

痛みも何も忘れて、彼女は鬼のように事務所をとびだした。掌にかくれそうな小さな拳銃ベレッタをバッグの底にかくして。

(8)

紫邦子は、ゆかりの直感通り、たしかにパ

シフィックホテルの一室に監禁されていた。背のついた木のイスに、手足をがんじがらめにしばりつけられた邦子を囲んで、一人の女と二人の男の姿があった、

女は磯村ヒロミ、男は、一人はどうやら一味のボスで明きらかに第三国人、もう一人は

日本人で配下のようなであった。

「さあ、邦子さん、品物はあなたがかくしたことはもうネタがあがっているのよ。素直に渡してちょうだい。事務所にもない、警察の手にも渡っていないとすると、どこかの貸しロッカーにでも？　そしてその鍵は？」

「ホホ、貸しロッカーだと思ったら、東京じゅうの貸しロッカーを全部見てまわるといいわ。どうせ無駄足でしょうけど。……」

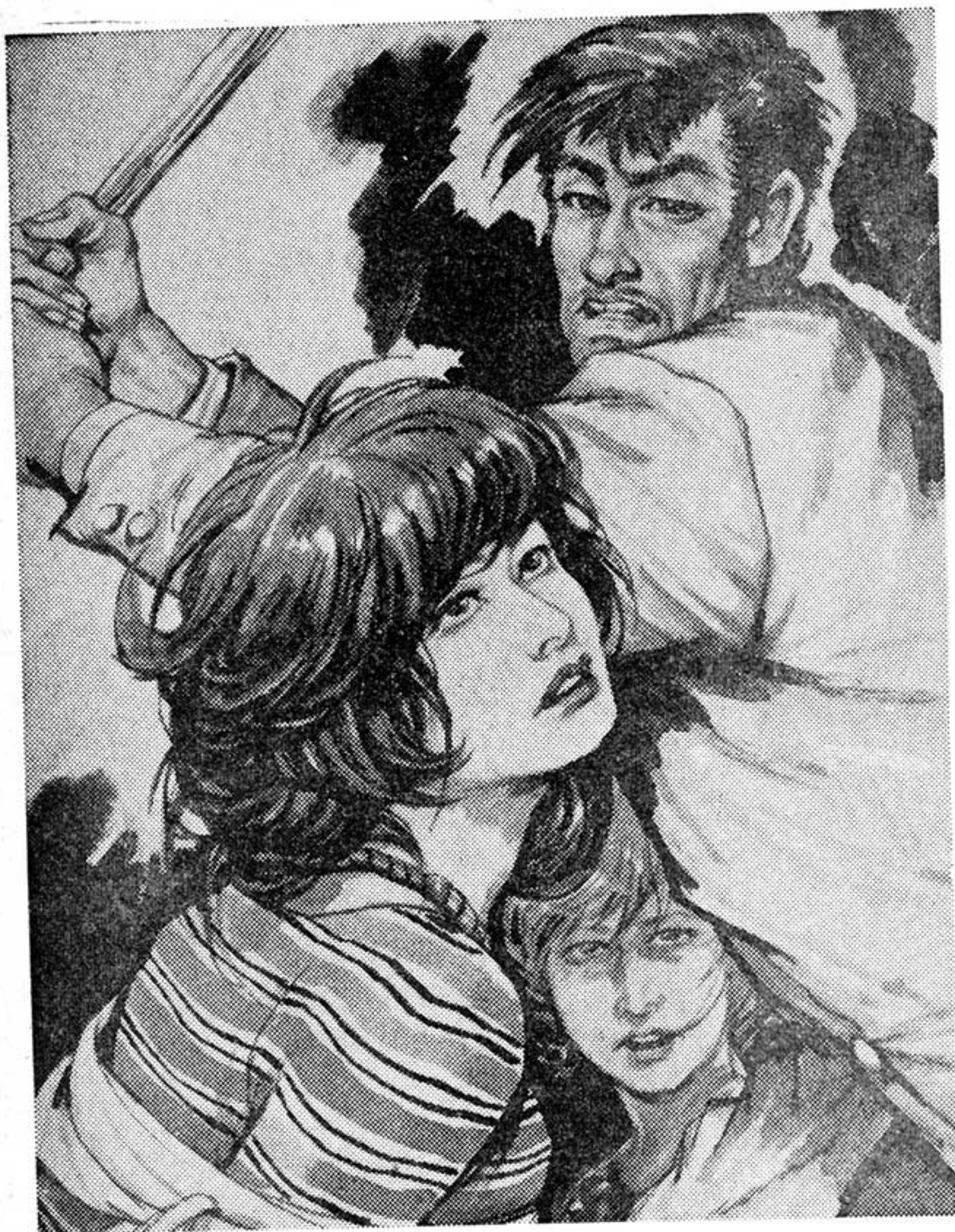
「私たち、急いでいるのよ。松崎が品物を持ち逃げしようとしたり、よけいな邪魔が入ったり。あの品物を取りもどさないとこっちは大損害よ。警察もだいぶ動いているし。さ、どこにあるのっ、言わないつもり？」

ヒロミの少し吊り上がった目がよけいにきつきを増して邦子をにらみすえる。そしていきなりハイヒールの片足を邦子の太腿の上に乗せ、その鋭いヒールの先でぐいぐいと踏みこむ。

「さあ、言うのよ、言わないと！」

バシッ、バシッと、目を閉じ唇をかんでハイヒールに踏みにじられる苦痛に耐えている邦子の両頬に、ヒロミの激しい平手打ちがとぶ。三度、四度。

「まあ待てヒロミ。そんなことくらいじゃ音を上げやしねえよ。——」



流ちような日本語でそういうのはボスである。そのボスの右手に何かがキラリと光り、カチツと鳴ったと思うとポツと焰が吹きだした。ガスライターである。そのライターの焰を十センチ以上も吹きださせると、ボスはゆつくりと邦子に近よってきた。

「どうだ。そのきれいな顔をまっ黒けに焼いてやろうか」

顔前十センチ、激しく焼え上がるガスライターの焰、さすがに邦手の顔も熱気と恐怖にこわばってていた。

「だが、いきなりやってはおもしろくない。まず小手調べに」

邦子の服の袖がまくり上げられ、二の腕があらわにされる。その白い肌をなめるライターの赤い焰の舌。

「ああーっ、うーむ！」

指先が空をつかんで悶え、足の爪先は苦痛に反りかえる。

だが、その時部屋のガラス窓が粉々に吹つとび、そこから一つの黒い影が躍りこんだ。

「ホールドアップ！」

ベレッタをかまえたゆかりであった。と、配下の男が、相手は女と知るやいなやいきなり胸からピストルを引き抜いた。しかし、ガーンという銃声と共に、吹き飛んだのはその

男のピストルであった。

三人が手を上げている中を、ゆかりは姉のところへかけよってすばやく縛しめを切り放った。そのほんのわずかなスキに、こんどはボスが後からおどろかか。だが一瞬後には彼の体は宙を舞って床にたたきつけられていた。講道館じこみの鮮かな一本背負い！……

(9)

その夜、紫姉妹は、ズキズキ痛む身体をベツドの上に並べていた。

「だけどおどろいた、窓からとび込んでくるとはね」

「ドアからはとても入れないと思って、隣の部屋から窓伝いにいったのよ。でも何しろ四階でしょ、ちよつとスリルだったわよ」

「まったくおてんば娘ね。ピストルを射って大の男を投げとばして。……」

「でも、これで貸し借りなしよ。助けられたり助けたり、ね。だけどお姉さん、品物はいったいどうしたの？」

「そうね、ゆかりちゃんにもまだ説明してなかったわね。あれ、書留小包で送っちゃったわ」

「えっ、どこへ？」

「北海道の、いい加減な住所氏名のところへ

ね。きつとそのうちに受取人不明でもどってくるわよ。そしたらどこか病院か研究所へでも持っていきましょう。白い魔の粉も、形を変えれば人間のためになるんだもの」

「そうね」

「でも、殺された松崎は少し可哀そうみたい。ボスを裏切って、品物をもとでに再出発しようとした相手の女が、こともあろうにボスの女だったなんてね」

「まったく天の差配ね。でもたったあれだけのものが何千万円という価値があるなんて信じ切れないみたい。人を殺してでも自分のものにしたいくなるわけよね」

「ところでゆかりちゃん、松崎が置いていったお金があるから、しばらく休養してどこかへ旅行にでもゆこうか」

「ナイス。たまにはああいうお客も悪くないわね」

「バカね」

姉妹はベツドの上で、身体の痛みを顔にしかめながら笑いころげるのである。



「裏窓」を毎月確実に

お手に入れるために

☆☆☆☆☆☆☆☆
直接購読会員募集

▼三ヵ月会員……七五〇円

▼六ヵ月会員……一五〇〇円

▼一ヵ年会員……三〇〇〇円

■いずれも、店頭発売前に直接お送りいたします。送料は、当社で負担します。

■〇月号から三ヵ月分、とか、〇月号から六ヵ月分、というふうにはじめの号を、はつきりお書きください。

■住所氏名を正確に、はつきりとお書きください。

■直接購読会員には、S写真の無料サービスをいたします。

三ヵ月……三枚 六ヵ月……六枚

一ヵ年……十二枚(手札型)

東京都中野区松が丘2丁目21番

あまとりあ社

「裏窓 営業部」

ヨーロッパからも、アメリカからも
あなたのお手元にとどく

★M—S 資料★

試みに試注品シリーズをどうぞ

Mシリーズ……1,000円

Sシリーズ……1,000円

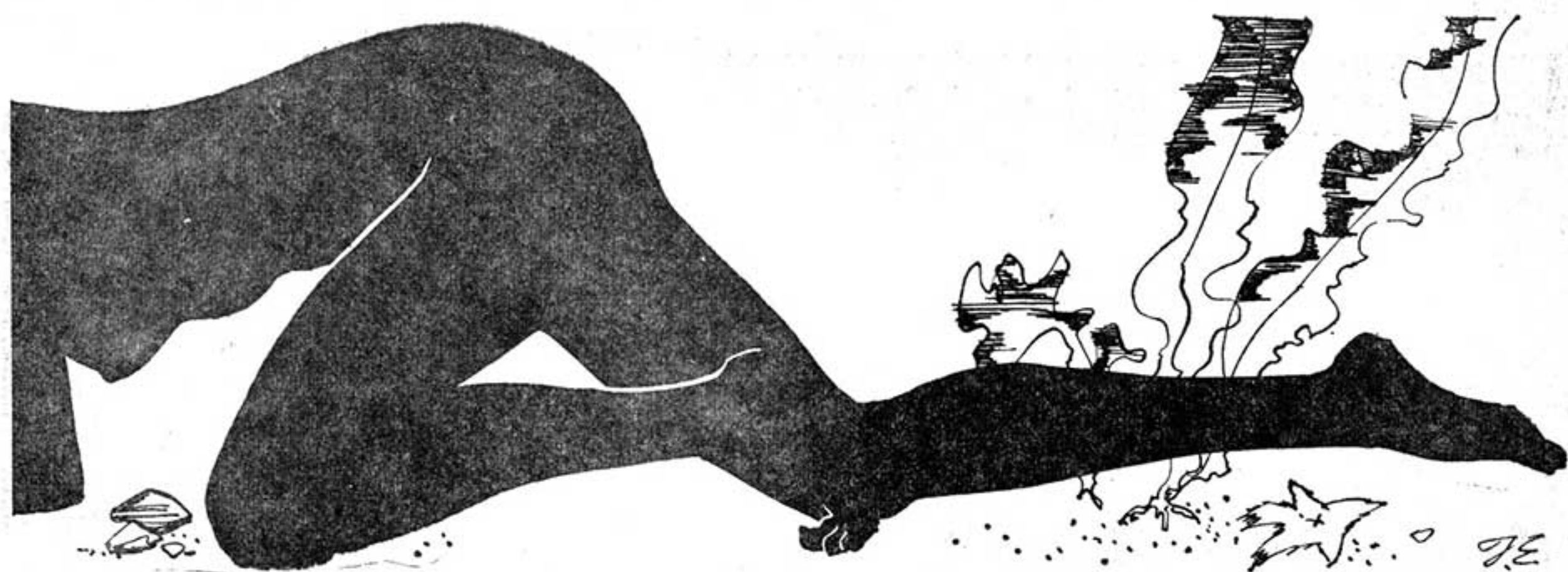
目下カタログ及び見本UM版500円で配送中

フェニクス商会・東京支社

東京町田局私書箱21号
(振替・横浜608番, 東京8304番)

■当社若林分室は都合により移転しました

すでに資格取得の方を除き申込み受付を一時中止します



■おたがいの愛をいたわりあい
なぐさめあって生きていくこの異端者の群れ

わが愛のうめきとさけび

新村 満美子

江渕晃夫・カット

普通世間で「異端者」と呼ばれている性の倒錯者達は、その苦しみの故に、いつの間にか仲間たちだけの集合体を創り上げてきた。

その流れは女子同性愛もしくは男子同性愛と呼ばれる人々であり、ふとした興味本意の行きずりで踏み込んだにすぎぬ単なる仮性同性愛者ではなく、泥沼の中から永遠に浮かび上がる事の出来ない真性同性愛者たちそのものである。彼ら同志、彼女ら同志は互いに身をよせ合い、いくたびか自殺を決意しながらも、今なおひそやかにこの世の片すみで息づき続けているのだ。

あなたは信じる事が出来ないだろう。そしてまた私たちの生活とか苦悩とをいくぶんとも理解してもらおうと望むのも無理な話に違いない。そうだとしたら、あなたがこの手記を読み流し、これっきり忘れてしまっただけで願うのである。

☆

私は神戸の某女子大学を昨春卒業した二十三才の平凡なB・Gである。変わっているのはお化粧らしいお化粧もしないし、男ものの衣料品を割合持っていることで、白いカッ



ターに黒タイトという、実にありふれた女の子だった。だがその私も自己の内部に流れる異端の血はどうする事も出来ない。この世界における脱皮はとうてい望み得ることも出来ないのだ。

私は世間に妥協する事ばかり考えているので、お化粧は十九才の時からしていますが全然効果なし、男ものの服など買ったら母に叱られます。男性は便利ですがセンスなし美しくもなし、まるで私みたいです。

私と同じように不幸せな性格の一人の女性横浜に住む二十六才のB・Gは、そう書き送ってくれた。世間に順応し生きてきざるを得ない人々の哀れな姿がここに現われている。異端者の大半は、その姿が好奇心の対象としてだけ世間に見られているために、そして、Un-naturalという一般の道德基準によって、ますますしいたげられ、世の片すみに押しやられて生きているのである。

普通のSなら良い。(この場合のSはサディズムのSではない：編集部・注)

成長過程にありがちなS関係は、上級生に憧れたり下級生に手紙を出したりする位が関の山で、時の流れと共に楽しい想い出になる

のだが、私たちにとっては、それは苦悩の道への開門である。

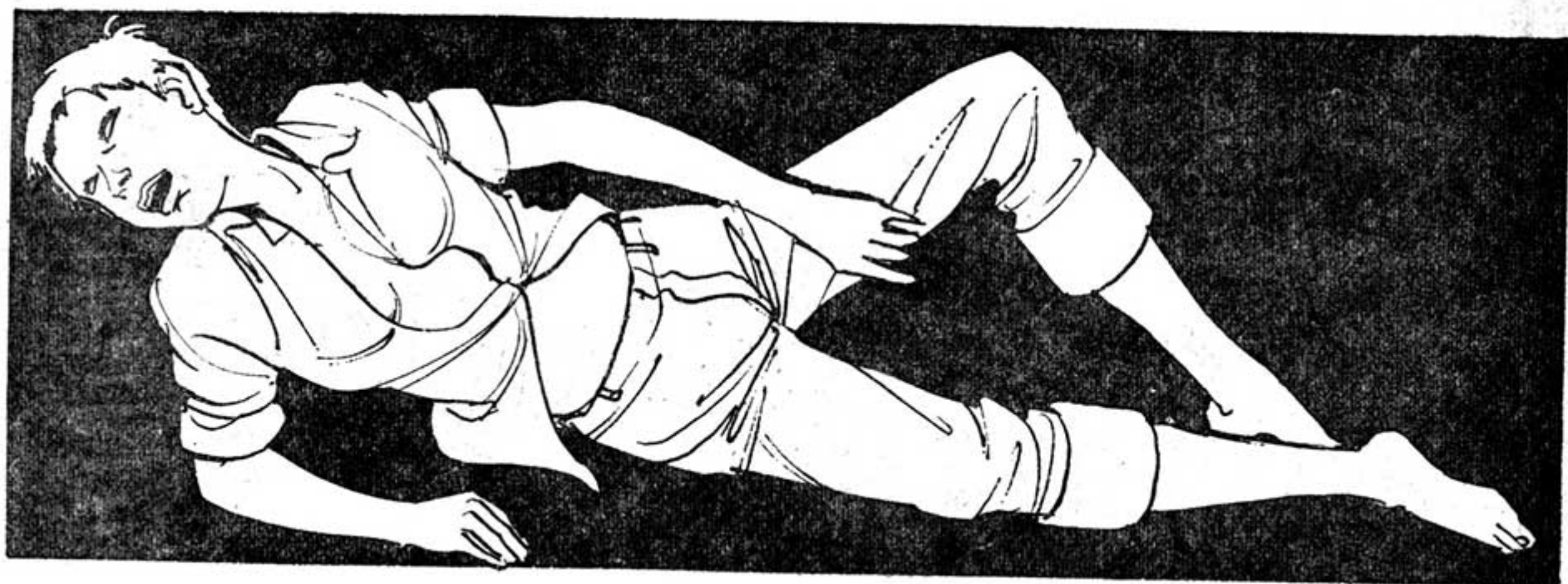
学者たちから自己愛ナルチシズムとかエディプス・コムプレックスとか分類されたとしてもそんな事はどうでもいい。厳たる事実なのだ、単なる精神プラトニック・ラブ愛から肉体的な愛に推移する人々が今ここに居るということは。

私の場合を例にとれば、幼いころ、心ない大人に依って汚された肉体への苦しみと、かてて加えて姉妹の居ない一人っ子であり、已れの先天的な体質とが加わったものと云えよう。自分の肉体の傷あとに悔む年代になったとき私は荒れた。

いくたびか男たちとの桃色遊戯を経て見出した世界は、全く閉鎖的なレスビアンと云う名の異端の道であるにもかかわらず私でさえ、愛されたと云う安らぎから、今や全生命を私はそこに賭けているのである。

結婚でも期待していません。しかし現実では早く結婚しないとオールドミスになつて、不幸な人生を過ごすであろう事が目に見えていて、現実と欲求とのジレンマに悩んでいます。

結婚というものは、いくら女性の地位が向上したとは云え、一人っきりで生活してゆく事が島国根性の日本の内でなんとむずかしい



ことが！それは私どもにとってはたえがたい苦痛でしかない。

数年前からのゲイ・バーの流行は氷山の一角であり、その多くの人々は生活手段のために倒錯を売りものにしてしていると云ってよい。しかし真の異端者達はまだ世の流れの下にどんでいる。

単なる女の子が男っぽい服装をしているってのと、期せずして何年もかかって自然に男みtainな様子になっていくってのとは根本的に違いますね。

そして私たちは、自分の信ずる道を歩んでいる人が、たとえエセであっても羨やみ続けているのだ。

自分の真の世界がレスボスである事は、百も承知していますが、夫、子供がおります故思うにまかせません。

三十六才になるある主婦は、そう述べている。先天的な異端者としての自意識の元で自己をさいなみながら生きるよりほかに手段のない人々がいかに多いことか。そこには学歴も職業も年令も……まことにどのような差別もない。だが世間はそれを見栄とか外聞とかによって、非社会的と呼び、画一的なものの中

に押しこめようとして、淘汰しようと計るのである。

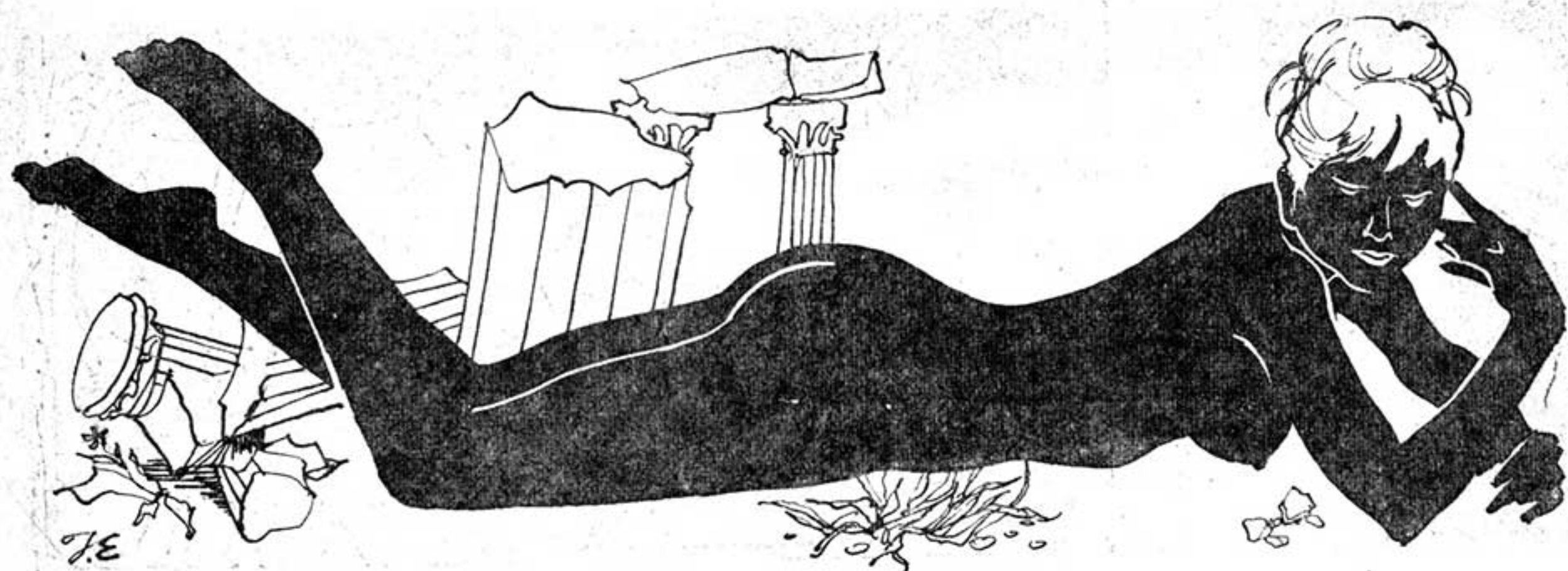
親が云うように、結婚後子供が出来、かつ孫の代まで末永くお付合するのが真の友情である……確かに親友というものはそうかも知れませんが、私にとってはあくまでも愛人であり、恋人である貴女なのです。

その先天的なものは、真性であるが故にすぐ消えるとしてもいう他動的な開眼ではなく、むしろ己れの内含する異端の心の、一日一日の変化をどうすることも出来ず、じっと手をこまぬいて見つめていなければならない事ほど残酷な苦しみがまたとあらうか。

私も自称レスビアンです。真のそれか否かは何とも判断出来ませんが、男性に対してよりもあるタイプの女性に心引かれる事は事実です。かつて普通の女の子をおいかけて、結局片おもいの、それも痛ましいひじ鉄砲をくらい、みじめな敗北を喫し、それ以来普通の女の子に恋をする事を努めて抑えております。

☆

古代ギリシヤにおいて、レスボス島より発祥した女性同性愛は、当時の女流詩人サフォ



によつて詠まれてから、サフォイズムとか、レスビアン・ラブとか形容されるようになった。その倒錯の世界をテーマにしたものは、バルザック、ボードレール、モーパッサン、ミュッセ等の外国作家や我が国でも割合多い。今でもある種の雑誌は世に受入れられない人々のために刊行されているのだ。

私が某誌を買うのは読者文通欄が必要だからですが、なかなか同趣味の方が無くて探すのに骨がおれます。

三十四才になるバーの経営者はこう書いている。もはやそこには真実の愛ではなく、プレイ的な要素しかない。

だが、それを代表として呪われた者とする見方、加えて「不潔」とただ一言で私たちを片づけるのは余りに酷ではないだろうか。

通常の家庭や個人と全く何ら変わらない我でありながら、単に、相手が同性であるというだけでそのように批難されるのか？

手を握る位ではあき足りません。私が心の中で考えている事を普通の女の子にしかけたら、おどろいて騒ぐ事は目に見えています。

この言葉の中には、赤裸々な真性同性愛者のやり場のない苦悩がうかがえる。自己の生活の抑圧されたもの：それは通常の恋愛関係

以上に鋭い精神を張りつめていなくてはならない。そして、私たちは互いの異端の血の故に、寄り集まる世界が、必要となってくるのである。

遊びでないグループを作る事は何かとむずかしいと思います。でも貴女のようなファイトにあふれた同志と知り合えて力強いのです。(二十二才会社員)

私達はすべてが分身なのではないかと考え得ずにはいられません。大きなかたまりからひとにぎりずつ離されて散らばっている私達が、その原型を求めてあちこちで苦悩しあえいでいるのではないか、だから我々は、かたく結び合っているのだと。(二十三才 無職)

だが、この仲間としての結びつき、話し合いも一歩まかりまちがえば、桃色遊戯に終る危険性を持っている。そして仲間意識で世間に反発することの不利さを知る人は、まず自己保身を計ろうとするのである。

私はグループ作りに反対はしませんが、あまり大げさなポーズをとる事には異議があります。

そこには常に恐れおののいている私達の姿がありはしまいか。



☆

かく云う私も、かつて父母の前で慟哭して「私は女の人しか好きになれないんです。義務教育だけで終れば良かった！」

と血の出る程の悲痛な叫びを挙げた事があった。その私の叛逆の宣言をいやおうなしに聞かれる父母の苦しみもまた余りであったに違いない。私の幼いころからの生活態度を知る故に、男泣きにあふれる涙をぬぐいもせず、父が私に向かって、

「お前を女子大へ進学させたのは俺の一番の間違いだった……」

と、つぶやいた暗い言葉もまた永遠に相入れられぬ肉親間の異端の血への嘆きでもあったのだ。

あたしはあなたの母親です。けれどもあたしにはあなたが、天罰のように思えます。いったいあたしは自分の娘のためにドン底まで引きずりこまれるような何をしたのかしら、とわれとわが身に聞きたくなります。

R・ホール著の「さびしさの泉」の中では異端の娘に相対する母の言葉をそう述べている。親と子の闘いのさまが万感せまるのである。

る。

だが、それらのハンディや親子の情を断ち切ってまで、人々は自己の本質に忠実であるうとする場合が出てくる。

この愛は自分の一部である。それを救わないかぎり、もはや自分を救うことも出来ない。その愛の勇氣によって、愛の自由の権利を敢然と主張するために立つか倒れるかしなければならぬのだ。へ「さびしさの泉」引用

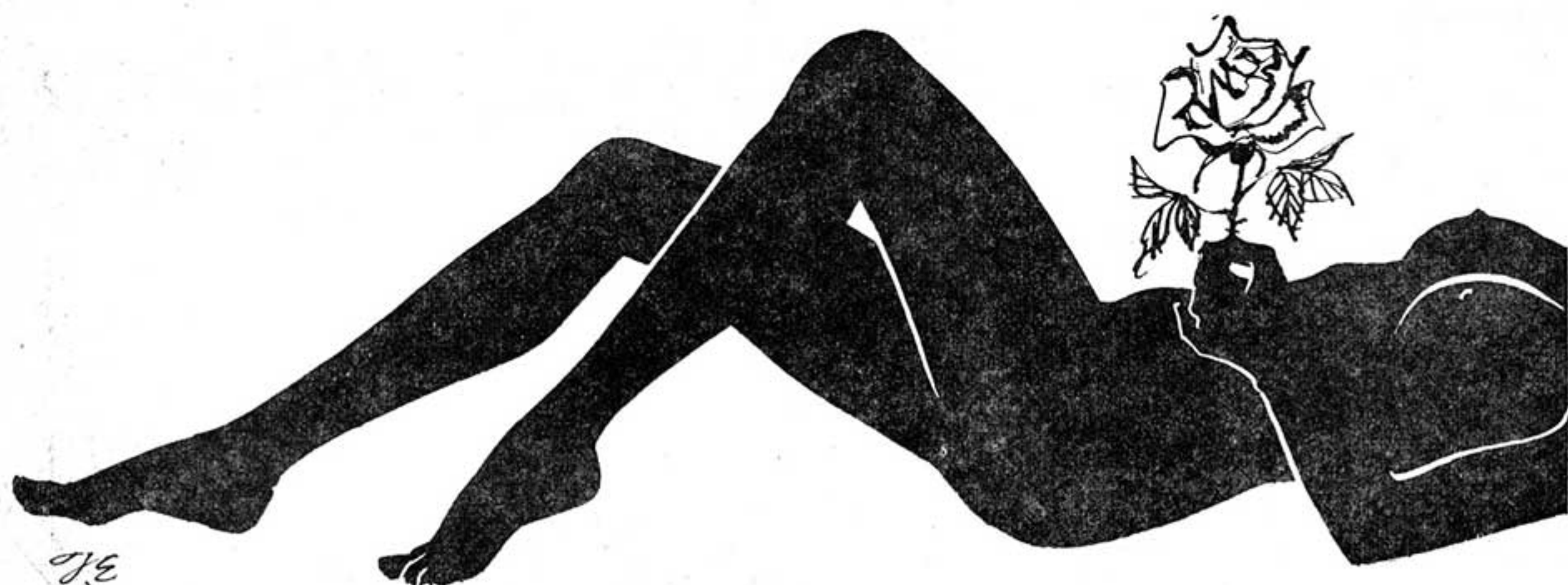
私もかつて、

私が必死になって、ときにはひくつに、惨めにアミの足元にひざまずいて、愛して欲しいと願ったのは、アミとの別離がとりもなおさず全ての人間性への不信につらなるからです。

と、北海道の仲間に書いたことがある。

……それらは、普通のあなた方における男女間の恋愛と少しも異なっていない。むしろ精神の叛逆の故に、真の献身的な愛と結びついたならば、不潔と批難される情欲は、反対に至高なる闘志とも変化し得るのである。

貴女が貴女であるから、好きなのです。レスピアンだとか何だとかは関係なくた



だあなたが好きなのです。(二十三才)
貴女がいまでもレスピアンで居られるなら、一生を共に貴女と暮したい。もちろん私は何もかも捨てて、貴女の所へ飛んで行くだろう。(十九才)
等と仮に浮わついた言葉であつたとしても書いて呉れた人たち……。そしてなおその上に真実のものを追求しているなら、

今の私には、あなただけが頼りになる人なの。これからもううっとそうでしょう。社会に受け入れられないカップルであっても、この世の中ではどうにか生きて行けます。私はそう考えますし自信も持っております。(二十二才 学生)

と、たとへ観念論であるにせよ、悲痛なその決意に到達するのである。愛の形態がたとえ何百となくこの世の中にあるうとも、その一つに異端者の愛があるのだ。
結婚と云うハンディを乗りこえて生まれた愛は、単なる悲劇以上の苦しみに終始しなければならぬ……。

常に安住の場所に飢え、傷つき不安に満ちた毎日を考え続けている哀れな放浪者がそこに居るのだ。それは自己の先天的な何ものか

に対する血の叫びであり、全ての苦悩がそこから生まれて出ている。

☆

あなたは遠い世界と感ずるかも知れない。華やかな銀座の灯の下に、暗黒都市東京が存在するとはどうしても信じられないと同様にこの何万人の女性達の中で、ひそやかに異端者たちがお互いの傷をいたわりあって生きていくという事実には、
“さびしさの泉”はつぎの語向で終っている。

主人公スティブンの神へ向かつて祈る言葉がそれである。

「神よ……」彼女は喘いだ。
「わたくしどもは信じます。信ずると、わたくしどもはすでに申し上げました。
……わたくしどもは、あなたを恨みませぬ。どうぞ立って、わたくしどもをお守り下さい。全世界の前に……。おお神よ！
わたくしどもをお認めになって下さい。
わたくしどもにも生きる権利を与えて下さい！」



—

早朝からはじまった企画会議は、いつ果てるともなくえんえんと続いていた。

時計は正午を少しまわっている。

中央テレビの巨大なビルの一画、会議室のすみで久森研二郎は、さき程から激しく襲い

かかる睡魔とたたかっていた。

チーフ・プロデューサーである彼は、一週間一度のこの編成局企画会議に出席する義務があった。

しかし、会議は何故か早朝に開始される。

普通なら、午後にならなければ出社しない久森にとって、これは何よりの苦痛であった。

■ 新人女優はツライです

瀬沼めぐみの受難

春川光彦

山田彬弘・絵

会議は単調で、おざなりで、しかも、会議室の椅子は大変クッションがいい。暖房もエアコンも快適にはたらいっている。久森はここへ来るたびに眠くならないほうが不思議なのだ、と思う。

編成部長がさき程からナイター開始後の番組移動、及び終了番組について、ながながと説明している。

まだ、何ヵ月も先のことだというのに――

久森は眼を閉じた。

何分かが過ぎた。

「久森君」

第一演出部長の声だ。

「は、はい」

見まわすと、会議はほぼ終わったらしい。あちこちで書類を片付けている。

「君、御苦労だけど、またシリーズ物を持ってくれかいかね。まぼろし姫はもうそろそろ終るんだろう」

「あと、四回の予定です」

編成課長が口をはさんだ。

「それで、ビデオ撮りはいつ頃終る？」

「それが、実は、役者の都合でもう全部出来ちゃってまして、あとは、放送の時に生コマ―シャルを入れるだけで……」

「なんだ。もう出来ているのか。久森君、君

もひどいね。だまっついていて、一ヵ月遊ぶつもりだったんだな」

「ええ、まあ、そんなところで……」

「まあ、いいや、ちょうど良かった。三十分のシリーズ物、一本頼むよ。スポンサーは大阪の大仏製薬。時代ものでも現代ものでもいいそうだけど、狙いはアクの強いもの、女性残酷物語といったのがいいんだそう。君向きだよ」

会議室の何人かが笑い声をたてた。

「スポンサーも知っているんだね。ぜひ、久森君についてお名指しなんだそう。制作費は一本、百五十万。どう、悪い話じゃないだろう」

「ええ、まあね。やりましょうか。代理店はどこです？」

「正直広告」

編成部長が代って答えた。

「スタートは来月の第一週。月曜日の七時の枠だ。あと正味四週間あるけど、製作は間にあいますね」

「何とかしましょう」

それで会議は終了だった。

そろそろと局のお偉方が廊下に出ていく。「ああ、営業さん！あとで、その正直広告の担当を、私のところによこしてくれませんか。

早速打合せをしますから」

長い廊下で久森は大島と黒沢に会った。彼のアシスタント達は、チーフの帰りがおそいので食事に出ようとしていたらしい。

「おい、又一本決まったよ。来月の頭スタートで、残酷物だ」

二人のアシスタント・ディレクターは顔を見合わせて、にやりと笑った。

二

夕方近くなつて、正直広告の担当者がやって来た。

まだ、大学を出て間があるまいと思われる若い男である。

早速、大島、黒沢を加えて打合せ会議が応接室ではじめられた。

「どう、制作費、もう少しなんとかならないの。マゲチョンは金を食うんでねえ」
坐るやいなや、久森が切りだした。

「マゲチョン？」

「つまり、時代ものさ。リャンコ一人について一万円かかるんだ。チョンマゲをつけたお侍を一人テレビに出すためにはだね、役者のギャラを別にして、かつらと衣粧と小道具だけで、一人一万円かかることになるんだ。大仏製薬さんの仕事じゃ、あんまりチャチな

ことは出来ないだろう。ヤア、ヤア、って言う侍を二十人も登場させれば、二十万円はアツと言う間に飛んじゃうという訳だ」

「あの、それでは、制作費のほうは、部長に相談してまいりますから。あと、どの位。十万円もアップになればいいでしょう？」

「まあ、君の一存じゃ返事できないだろうよね。あんたにまかせるから頼むよ。その代りだ、僕が製作すれば、絶対につまらないものはこしらえないよ。視聴率は大いにかせぎましょう。百六十万でも百七十万でも、制作費はちゃんと生かして使ってあげますよ」

若い代理店員は、民間テレビ局の演出家として名声の高い久森研二郎の前では、ただひたすらに小さくなっている。

「それはもう。スポンサーも大変によるこんでいます。久森先生に担当していただければまちがいない、と申しまして……」

「そうねえ、女性残酷物ということだったけれど、こんなのはどうだろう。」

時代は江戸幕府の初期。家光の頃。舞台は日本全国だ。この頃にはいろんな事があったね。まず、九州での切支丹の弾圧、女子供まで残酷な拷問と処刑にあわなければならなかった。徳川幕府は一応安定したけれど、各地に豊臣残党の地下組織ができて機会を狙って

いたと思われる。大阪では商人が力を持ち、江戸にも大きな富を持つ商人がつぎつぎと生まれてきた。彼らは必ず役人と結びつく、そこでは娘の人身御供などはあたりまえの話だったろう。農村はまだ戦国の混乱から立ちなおれず、凶作もあつて極端に苦しんでいた。

どう、この時代にね。一人の若い浪人者を登場させるんだ。関ヶ原の合戦以来、大名や武士たちの毎日のような裏切り行為にすっかり人間が信じられなくなってしまう侍。何も信じる事が出来ず、人生の目的も失ったニヒルな男。この男を狂言まわしに使って、彼が歩きまわる日本各地で展開される、哀れな、か弱い女たちの物語を毎週三十分にとめていくんだ。どう？」

「けっこうです。面白くなりそうですね」

「その侍はニヒリストなんだし、しいたげられている女たちを見ても、別に、手は出さないんだよ。刀を抜いて悪党を斬るわけじゃないし、第一そんなに強くはない。ただ、哀れな女たちを見て、世の中はこんなものなのだと諦め、ちからなく抗議しているだけなんだな。どうかしら、おかしい？」

「いえ、けっこうだと思います。大仏製薬の社長さんは、道修町の小僧からたたきあげた人で、業界では、大変なやり手で通っている

そうです。ですから、アクが強いというか、何事にも、てつていしたものを好まれるようです。特に今度の宣伝は大人むけのホルモン剤の新発売のためだそうでした、その意味でも年配者に歓迎される、すこし、どぎついものにしてほしい、ということでした。いまのお話を早速、企画書にまとめて、大阪へ送ります。多分、問題なくその通りに決まると思います」

「そう、それじゃね。本は誰に頼もうか。毎回完結のオリジナル物だから、やっぱり実力のある人を中心になってもらって、二、三人でグループをつくるとして……。北条折夫さんなんかどう？ 僕が頼めば先生は多分引き受けてくれると思うな。」

それで第一回は百姓ものにしよう」

「チョーサンなんかがいいな」

「チョーサンですか？」

「うん、逃げて散らばっちゃう、逃散ちようさんだね。生活が出来なくなった、困った百姓たちが土地を捨てて逃げてしまうんだな。年貢を取ってたてたい代官は、一人の百姓娘を捕えて、人質にして百姓たちを連れもどそうと責めたて。最後は見せしめの為に娘をはりつけにして殺してしまう、といったところだね」

「なるほど」

「第一回は新聞社も必ず書きたててくれるものだし、少し大がかりにして、色彩の強いものにしたほうがいいと思うね」
「わかりました。では大阪へ連絡しておきます。ひとつ、くれぐれもよろしくお願いします」

代理店員は、大島や黒沢にもていねいに頭を下げてかえって行った。

三

久森は北条折夫氏に台本の依頼をした。彼の考えていたストーリーは北条氏も以前書いてみたい、と言っていたものだった。

その点では簡単に意見が一致した。

正直広告からも直ぐに連絡が入った。

先日の打ち合せの通りでいいから、制作準備をはじめてほしい、というのである。

「さて、と。今度はなにをしようか」

久森は大島と黒沢を集めた。

「北条先生が書いてくるものは大体わかってるんだ。百姓娘に対する代官の責めだからまず、縛って池にでも漬けるかな。水牢をこしらえてもいい」

「今は冬ですよ。それを今やるんですか?」
「そう、冬だから見るほうにも効果的なんだよ。水漬けのあとは、お定まりだけど、やは

り木馬責めだろうね。木馬に坐らせて責めさせて、同時に代官の息子の妾になれと強要するんだな。最後は三尺高い木の上ではりつけ、というだけだ。火あぶりにしようか、それとも槍で刺すかい?」

「それじゃ、又、小道具が大変ですね。木馬とはりつけ柱を作らせなけりゃ」

美術部からは、大道具、小道具の注文をききに連絡係りが、すでに何回か足をはこんで来ていた。しかし、まだ台本待ちである。

北条折夫氏からの第一稿は一週間ほどしてから局にとどいた。

とりあえず印刷にまわして、久森は綿密に内容を検討した。

台本が果してテレビドラマとして制作可能であるかどうか。狭いスタジオの中の、せいぜい六杯か七杯のセットで、三台か四台のカメラで、小人数のスタッフで制作が出来るかどうか。いろいろな角度から検討されなければならない。

そして、第二稿、改訂稿の注文が北条氏に出された。

北条折夫氏の手になった第一回のストーリーは、ほぼ久森研二郎の考えていた通りのものだった。

戦国の末期、人間不信からすっかりニヒル

になった侍、堂守千之介が諸国を流れ歩いて四国の小さな村にやってくる。

荒れ果てた村、凶作に生きる望みを失った百姓たちは村をあげて土地を放棄し山へ逃げ込んでしまっていた。

本来なら百姓を取り締まるはずの名主まで、百姓の苦しみを見かねて彼らに同調し、姿を消してしまっていた。

名主の一人娘こずえは、代官所の若侍、戸浦と将来を約束していた。

しかし、この戸浦は代官におどかされると簡単にこずえを裏切り、名主を捕えるおとりとして、こずえをおびき出すことまで承知してしまった。

戸浦が裏切ったとも知らず、こずえは山から誘い出され、代官に捕えられた。

百姓の行方を求めて情け容赦ない拷問がこずえの肉体に加えられた。

縛りあげられたうえ、丸太を三角に組みあわせた首枷を浮きの代りにして村の池へ漬けられた。こずえを助けにきた村の若者三人がまず捕えられた。

こずえに対する責めは、手をかえ品をかえて続けられ、名主とおもだった百姓数名が代官所に名乗り出た。村人もかえってきた。

みせしめのために名主以下、百姓の首謀者

が村人の眼前で処刑された。

しかし、こずえはゆるされなかった。村人たちが一人残らず年貢を納めるまで、彼女のからだを責めたてると言うのである。

日夜をわかつた、代官屋敷で拷問にかけられるこずえのからだに、代官の息子が目をつけた。

もし、自分のめかけになれば許してやろうと言う。哀れなこずえはまだ戸浦を信じていた。戸浦も又、代官屋敷のどこかに捕えられていると思っていたのである。それに自分が許されれば、又代りに拷問を受ける娘が村から連れてこられると思った。

こずえは首をたてに振らなかった。

凶作の村では年貢は納められない。村の神社の境内でこずえは木馬責めかけられた。

木馬の背に乗りながら、こずえは村人の口から戸浦の裏切りを知った。

もはや、彼女には生きていく希望がなにもなかった。代官の息子を最後までこばみ、村のはずれではりつけにされて殺された。

浪人、堂守千之介はこの全てを見ていた。

そして何も出来なかった。

こずえが死んでだいぶたってから、堂守は戸浦を誘い出し、背中から刺して殺した。

堂守はこずえの墓に花をいけ、旅に出る。



「なかなかいいねえ」

久森は大島と黒沢をふりかえった。

「堂守千之介が、要するにどうもせん男という意味だろうね。」

ところで、このヒロインだけど、新人を使う以外にないだろうな。

名主の娘だから、普通は一応のプライドを持っている。背は高いほうがいい。村人たちのアイドルなんだから、神々しいまでに美しくなくちゃいけない。凶作の村だから、やは

りやせぎす、育ちはいいから色白でおしとやかで上品な感じだな。売り込みに来ている連中のなかにいない？ 何でもやりまస్తుっていうの」

「そうですねえ」

二人は顔を見合わせて考えこんでいる。

「泰映の高尾綾子みたいのに、肉体的に苦痛の多い役ほど好き、なんて女優がいるといいんだけどね」

「久森さん、いますよ。いい娘が」

大島だった。

「二ヵ月ほど前、千山マネージャーが連れて来た娘で、たしか、瀬沼めぐみとか言いまして、華族の家の生れだそうでした。品のいい娘でした。スターになるためなら何でもする、ヌードにでもなる、と言っていましたよ。僕もちょっと誘惑されましたけど」

「誘惑されちゃったってかまわないけどさ、じゃ、その娘に一度会ってみようか」

四

久森は瀬沼めぐみが一目で気に入った。他の出演者たちもほとんど決まっていた。北条折夫氏の第二稿は、四日で出来あがってきた。

これを決定稿にして直ちに印刷。ガリ版刷りだが、きれいに製本された台本が百部、一晚のうちに刷りあがって納められた。

久森研二郎は、早速その台本を手に、演出プランをねりはじめた。

三つの見せ場のうち、池の水責めはスタジオのセットで、木馬責めもセット、最後のはりつけは野外ロケをすることに決めた。

百二十坪の第二スタジオに、ビニール張りで深さ五十センチほどの池をつくらなくては

ならない。

久森と美術部員たちとのあいだで、セット、小道具に対する打合せが、えんえんと続けられた。

「はりつけ柱ですがね。長さ五メートルくらいの白木、角材のやつをつくってほしいんですよ。役者の背の高さが一メートル六十センチくらい、頭の上に四十センチほど柱を突き出すとして、足の下、地面までが約一メートル、三尺高い木の上で、といいますからね、そうして二メートルほどは、地面の中へ埋めるんです」

「ほう、本格的ですね」

「そう、本格的にね。それから、映画なんかじゃ、よく足のところに台をつけるでしょう。あれはやめたいですね。あんなインチキはしたくない。からだをぎっちり縛るだけでも大丈夫だと思うんですが、念のために、足の間のところにね、短かい、外からは見えない程度の横木をつけておいてくれませんか。それにまたがらせましょう」

美術との打合せを終えて、久森が机にもどると、大島は瀬沼めぐみを連れてリハーサル室へ行ったという。

ひとけのない部屋で、大島はめぐみ相手にさかんに講義をしていた。

役者になる以上、精神的にも肉体的にも非常に苦痛を味わうこともあるけど、それに負けてはいけない、どこまでも我慢をして、どんなにつらくても耐えて行かなければならない、と言うようなことを話しているようだ。

「大島君」

久森の姿を見ると、めぐみはピョンと立ちあがった。

新米の彼女には、大ディレクターの久森は神様のように見えるらしい。

「めぐみ君のね、肩から足の間までの寸法をはかって、美術部へ知らせてやってくれ。電話で寸法だけ言えばわかるようになっていくからね」

久森研二郎は、めぐみには声もかけずに出て行った。

はりつけ柱の出来あがるのを待って、いよいよロケである。

久森は台本からロケで撮る部だけを抜き出して、まず最初に撮ってしまう。

はりつけシーンのロケ地には、東京都の東のはずれ、葛飾区にわずかに、残っている農地を使うことにした。

ロケバスの屋根に、恐ろしく大きなはりつけ柱がくくりつけられた。

大島が、なにかとめぐみの世話をやいてい

る。

「君はテレビ初めてだから、最初はあがるかも知れないけど、今日は大丈夫だよ。セリフもないし、ただはりつけにされていればいいんだ。生きることを諦らめてしまったんだからあまり抵抗したり、もがいたりはいらない。ただどまわりのしびに火がついたら、柱のうえて、苦しそうに少しばかりもがいてくださいね」

バスはロケ地についた。

黒沢が、野良着姿の近所の人達を、僅かな金でエキストラにかり集めてくる。

役者たちはバスの中で衣裳をなおし、顔をつくろってから、次ぎ次ぎと降りた。

人の姿がなくなったところで、めぐみの着付けである。

ロケバスの中の小さな鏡の前でめぐみは、初めての衣裳を着せられた。

囚衣のつもりだから、木綿の薄よごれた白地でつくった粗末なものである。

そして、何のためかお尻の部分が、丸く、直径十センチほどに切り抜かれていた。

囚衣の前をあわせ、荒縄で腰を縛り、めぐみはバスを降りた。

寒々とした冬の田の中に白木の巨大なはりつけ柱が倒れている。

田んぼのわきに柱を立てるためであろう、深い穴が堀られていた。

「さあ、こちらへ来て、めぐみさん、はりつけ柱に寝てください」

大島の声に、めぐみは、はりつけ柱の前に立った。

十字架に両手を拡げるようにして寝たとする、そうすると、ちょうど、足の部分に妙な腕木が突き出しているのを見つけた。長さは十センチくらい。

あれにまたがせられる。

囚衣のお尻の穴の意味もわかった。

めぐみの顔は火がついたように見る見る真赤になった。

ドーラン化粧をしていたためにわからないのだろうか、大島は、そんなめぐみの変化に目もとめなかった。

手首をとると、押し倒すようにして、はりつけ柱の上へあおむけに寝かせた。

「そう、両足をちよっとひらいて、腕木を足のところにはさんでください」

大島は、めぐみの足の下にまわると、両の足首をもって、ちからいっぱい下のほうに引き寄せた。

めぐみのからだを、腕木に密着させるように。

めぐみは痛さに顔をしかめた。

遠くで見ている役者連中は、たんぼの中でめぐみが早くも苦痛を味あわされていることなど、全然わからないらしい。

股間の部分で、めぐみのからだの位置は決まってしまった。

今度は縄が次ぎ次ぎとかけられる。

まず、肩から胸へ、たすき十字に何本も細い縄がまわされて締めあげられた。乳房の下、腹、腰、もも、足首、さらにひじ、手首とがんじがらめに縛りあげられていく。両腕は引っ張るようにして左右に拡げられた。

わきの下に喰い込む縄が痛い。

恐らく、胸の縄目には小指一本差し込むことも出来ないだろう。

はりつけ柱を立てるところから、撮影は開始された。

きたならしくボロを着た、非人役の役者が四人、声をあわせて柱をかつぎあげる。

柱の先端を穴の中に落とし、ゆっくりとはりつけ柱を立てていく。

青い空しか見えなかっためぐみの眼に冬枯れの田畑と、恐ろしげに見つめている群衆の姿がうつる。

ずずつ、とせなかが柱をこすって、からだはずり落ちる。

ぎゅーんと全身が縄で絞られあげられた。

呼吸が出来ない。

突きあげられるように全身が痛い。

「うっう……う、うっ……」

からだ中の血管がしめつけられてしまったのだろうか、めぐみは頭が重く、意識がぼーっとかすんできた。

静かな田のあぜに、カメラのクランク音だけが響きをたてている。

非人役が、柱のまわりをふみかためた。

地上から一メートル五十センチほどの空間に、白足袋の足をきちんと揃えて、めぐみからだは、きっちり固定された。

柱から五メートル程はなして、半円形に、

しばがうず高く積みあげられた。

代官役のセリフがある。

群衆の表情をカメラがひとりひとり撮っていく。

腕組みをして立つ堂守千之介、役人のうしろから、青白い顔をはりつけ柱にむけている戸浦。

カメラは、ゆっくりとまわっている。

久森からNGが出る。

又、撮りなおし。

いつまでも火はつけられない。

柱に縛りつけられているめぐみの耐久力が

限界にちかずいた。

「あーっ、あつ、あーっ……」

細い、悲鳴が柱の下に伝わってくる。

待っていたように、苦しみもだえるめぐみの表情を、カメラがアップで捕えた。

「なかなか真に迫っているじゃないか。あれでいいんだ。新人に演技をしろっていったって無理だからね」

久森は満足そうに言った。

「じゃ、火をつけて」

しばに火がつけられる。

白い煙が高くあがり、赤い焰がめぐみの足首のあたりにまで燃えあがる。

実際には、柱としばの山はかなり離れているのでめぐみは火傷をする心配はない。

カメラはこのシーンを、ずっと離れた地点から望遠レンズで撮っているのだ。

望遠を使うと、柱と火の距離がぐっとちぢまって見える。

フィルムには完全に火に囲まれためぐみの姿が記録されていく。

そして、柱の上のめぐみは煙にむせ、大粒の涙を流し、自由にならないからだをよじって、すさまじい呻き声をあげていた。

五



はりつけシーンのロケは無事に終った。
久森研二郎は、すぐに、次のロケにとりかかった。

百姓たちが逃げた山のシーン。堂守が戸浦を刺すラストシーンである。

それが済むと、録音スタジオでロケフィルムにセリフや効果音をかぶせる。

作曲家からとどいた譜面を見て、伴奏音楽の録音もとらなければならない。

その間に、北条氏から第二回、第三回の原稿がとどいてきた。これも目を通し、注文をつけて印刷屋にまわす。

スタジオを予約していいよいよビデオ録画の本番である。

本読みも立ちがいこも、一応出来あがっている。

瀬沼めぐみは、案外すじがいい。

第二スタジオには、池と代官屋敷と牢と村の神社と、大きなセットがところ狭ましと建てこまれた。

本番の日の朝である。正直広告から電話がかかってきた。

「ああ、久森さん。どうもいろいろと……」

実は、第一回のシナリオを、大仏の社長に見せましたところ、大変気に入ってくれましてね、今月のビデオ本番を是非見学したいと



言って大阪から出てきますそうで……。後ほ

ど一緒にまいりますから、どうぞよろしく」

大阪からわざわざ出てくるとは、社長もかなりもの好きな男のようだ。

五十すこし過ぎの、でっぷりとふとったその社長は、十二時ちよつと前に局へ姿を現わした。

「大仏製薬の大仏喜三郎です」

あいさつがすむと、早速、責め場の話である。

「あのはりつけのとは、どないします?」
「ああ、あれはもうロケで撮ってしまいました」

「そうでつか。それあ残念なことをしましたな。で、その、フィルムは……」

「あ、今、お見せしましょう。本番前に僕も見ておく必要がありますから……」

代理店の部長もまじえて、試写室に入る。めぐみの火あぶりシーンは、時間にしてわずか二、三分のものだが、素晴らしい迫力が

あった。

「さすがは久森先生でんな。私もいままで、いろんな映画を見ましたけど、これだけのものはありませんでしたな。先生のものには、いつも、こう、何か熱っぽいムードがある。私はそれが好きでしてね」

大仏社長は、大変に満足している。

第二スタジオでは、午後のカメラリハーサルにそなえて、あわただしく準備が進められていた。

大島がめぐみをつかまえて、首のまわりに

丸太ん棒を押しつけている。

「ああ、久森さん、いいところへ。この首枷ですが、釘で打ちつけちゃうんですか？」

「そうだね、釘でやってくれ」

長さ四十センチほどの、まだ木の皮がついた薪のような棒が三本、三角形に組みあわされた。

めぐみの細い首をその中にはさみ、釘を打

ち込んでとめられていく。

五寸釘とハンマーが持ち出され、めぐみはスタジオの床にひざまづいて首枷を取りつけられた。

「それでいいだろう。その首枷に縄をむすんで池に沈めるとして、池の水は湯気があまり立たない程度にあたたためておいてください。」

まあ、寒いから池に入るのは、本番の時だけにしようね。じゃ、カメラリハ。黒沢君と大島君、めぐみさんを縛って」

水に漬けられるかわりに、池のふちに転がされた姿勢でめぐみはりハースルを受けた。

池のシーンのランスルー（通しげいこ）が終ったところで、昼食ということになった。

「めぐみちゃん、気の毒だけど、その首枷、簡単に取ったりつけたり出来ないから、食事はそのまましてね」

大島は、平気な顔でひどいことを言う。

食堂から、ランチが運ばれてきた。

めぐみは、一人でセットの隅に腰をかけていたが、首枷が大きくて下を見ることが出来ない。

パンを少しばかり口に入れたのがやっとだった。

こんな風景が、大仏社長には大変お気にめしたらしい。

さっきまで縛られていた縄をまだ腰にまきつけ、首枷を嵌められたまま、ぼんやりしているめぐみの姿を、さかんにカメラに収めている。

食事がすむと、すぐにビデオの本番である。

めぐみは再び嚴重に縛り上げられた。

首枷の一角に縄を巻きつけ、池の中にめぐみを放りこんでから、顔が水に沈まないように加減して、その縄のはしを池のほとりの木に結びつける。

「めぐみちゃん、この水はあまりきれいでないから飲まないようにしたほうがいいよ」

「口を閉じて、水が時々鼻の下あたりまでかぶるようにして……」

「苦しそうにもがいてみて……」

「はい、頭までぐーっと水に沈んでみて……」

「大丈夫、首枷が浮くから、すぐ又、顔だけ水の上に出るよ……」

大島と黒沢が、池のふちに立って、次ぎ次ぎと注文を出す。

副調整室でモニターを見ている久森から、レシーバーで矢つぎ早やに伝えられてくる命令なのだ。

池の水は少しあたたためてあったが、冬のさなかのことである。

めぐみの顔は忽ち蒼白になってきた。

くちびるは紫色になり、カチカチと歯が鳴りはじめた。

「あーっ、あーっ……あつ、あーっ」

必死に耐えているめぐみの口から、かすかに呻き声が洩れてくる。

カメラが二台、そんな姿をレンズにとらえ

ていく。

本番は約十分。

めぐみが本当に池の中へ沈んでしまいそうになった時、やっと終わった。

六

一時間ほど休憩。

今度は村の神社の境内である。

セットには、簡単な竹矢来が組まれ、神社の建物は、大きな写真のパネルでごまかしてある。

セットの床には、一面に砂利が敷かれ、代官の席の前に問題の木馬が据えられている。道具係りが、苦心して、作りあげたものである。

二メートルほどの檜の三角材に、四本の脚をつけ、めぐみのまたがる部分だけはくり抜いて中にスプリングを入れ、幾分、落ち込むようにくふうしてある。

「さあ、めぐみちゃん、来てごらん。これに乗ってみて」

乾いた着物にきかえ、いくらか生氣を取りもどしていためぐみだったが、生れてはじめて見る木馬の姿に息をのんだ。

「大丈夫だよ。痛くはないはずだ」

大島と黒沢に手を取られて木馬にまたがっ

た。

ギィッ。スプリングと脚が鳴る。

「着物のすそをたくしあげて。腰をしずかにおろして……」

久森の注文がとぶ。

木馬の背は、犠牲者の血と脂のつもりだろう、黒いしみが一面につき、冷い光をさえ放っている。

その背を両手でしっかりとおさえ、めぐみはゆっくりと腰をおろした。

「うーっ、……」

白いもののあいだに、きりたった木馬の背がえぐるように喰い込んでいる。

「なんとか我慢できるだろう」

久森は、めぐみを抱くようにして木馬からおろした。

「はい」

顔を赤くそめ、荒い息を吐きながら、それでもめぐみは、けなげにうなずいた。

久森は大島を呼んだ。

「スプリングが鳴ってしょうがないから、くり抜きの部分に綿でもつめておいてくれないか。防音のいみでね。たっぷり入れておけよ。本番の直前でいいから」

「けっこうですね。さすがは久森さんだ」

大島はうれしそうに笑う。

「それじゃあ、カメラハ。プロッキング、ランスルーと出来れば一度ずつにして、すぐ本番に入ろう。瀬沼君がつかれるからね」

久森の号令で、スタッフは持ち場に散り、大島と黒沢は再びめぐみを縛りはじめた。

「そう、後ろ手にして、肩に高く吊りあげて首縄にかける。ここはクライマックスだし、きびしくやって。めぐみ君は、牢屋の生活が長いわけだから、メーキャップは、もっと疲れたかんじがいいな。髪をもっとみだして、着物は裂いて、肩をやぶいて、すそを汚して……」

久森は、めぐみにつききりである。

縄が腕の肉に喰い込んでいたいたいしい。

「あっ……」

小さな悲鳴も、次ぎ次ぎと出される久森の注文に消されてしまう。

「腰にも縄をうって。着物のすそをからげて腰の縄にはさんだらいいだろう。」

あ、それから、代官の下役をやる人、瀬沼君を木馬に乗せる時、腰巻をぐいとゆるくして上へ巻きあげるようにして……」

「はい」

「じゃ、行くか。リハーサルの間はめぐみ君の足のところに台を置いてやって」

スタジオの天井、木馬のちょうど上に滑車



がつけられ丸い縄が一本ぶら下げられた。

ドラマでは神社の松の枝にかけられた縄のつもりである。めぐみの後ろ手から胸を縛り、木馬からころげ落ちないように、上体を吊ったかたちで、下役がしっかりと握っている縄である。

リハーサルは順調に進んでいった。

めぐみは、木馬にかつきあげられ、代官がにくにくしげにこれを見守り、責めの手を休める時は、下役が天井にまわした縄を引いてめぐみの上体を吊りあげ、足の間の苦痛を軽くしてやる。

大仏社長は、めぐみのまわりを熊のように

歩きまわって、カメラのシャッターを切っている。

ランスルーが終って十分間の休憩。

大島が、木馬のくりぬきを開けて中に綿やボロ布をつめこむ。

本番。

久森と大仏社長は、副調整室に入った。

「その娘を木馬に乗せい」

代官の一言で、めぐみは縛られたまま、かるがると木馬の上に抱き上げられる。

「ひいーっ」

今度は、めぐみの足の下に、台は置かれてない。

床上、四十センチ程の空間で、かわいい素足が無残に空をける。

しかも、背のくりぬきはほんのわずか落ち込んだだけである。

「あうっ、う、うーっ、あっ、あーっ」

悲鳴は真に迫っている。

腰のあたりまでまくりあげられた真赤な腰巻から白い脚が突き出し、ももを必死に合わせて木馬を狭みあげようとしている。

上体を倒して腰を浮かせようと、全身の力をふりしほり、足首が反対にたかだかと宙に上る。

狂ったように上体をもんで木馬から転げ落

ちそうだ。

下役があわてて縄を引き、めぐみの上体を吊りおこす。

「それ、まだわしの言うことがきけないか」

と代官の息子のセリフ。

「ひでえことをしゃがる」

といった百姓のささやきが、津波のように拡がっていく。

「強情な娘だ。それ、足首に錘をくくりつけろ」

代官のセリフで、大きな鉄の錘が二個持ち出された。

ハリボテの小道具だが、めぐみが苦しきまぎれに足首で持ち上げてしまうと困るので、中に砂利を入れて適当に重くしてある。

海老のようにねあげていためぐみの足首を下役が押え、手荒く錘をくくりつける。

「ぎゃあーっ」

副調整室のミキサーが、あわててマイクの音量を下げた。

ものすごい悲鳴である。

本当にこたえたらしい。

代官が、ちよつとあわてている。

「それ」

台本にはないが下役に合図する。

下役が二人がかりで縄を引き、めぐみのか

■見たもの聞いたもの



▼「週刊現代」十二月十二日号（三十八年度）に掲載された座談会記事『裸より「生理」が演じにくいワ』は、『五番町夕霧楼の』佐久間良子。『につぼん昆虫記』の左幸子。『砂の女』に主演した岸田今日子、それに司会役として作家の吉行淳之介が出席。

▼ショッキングな発言が多くてたのしめるが、そのなかでも——
吉行 さつき裸になるよりも恥ずかしいシーンがあるといったけれど、例えば——。

左「昆虫記」でね、トメ（左幸子）が子宮外妊娠して手術するシーンがあるの。本番前に、産婦人科のお医者さんが来ていろいろ指導するのよ。それがご商売だから、齒に衣をきせないで、ズズズバいうんですよ。仕方なく手術台に乗ることになったら、こん度はカメラが足の方から全部撮っちゃうっていうの。とても我慢ならないのよ。（中略）

岸田 あたしも「砂の女」であった。岡田さん（岡田英次）に、手足を二日もゆわかれていたのを、やっとほどもらうの。トイレに行きたいのよ。セリフなしでトイレに行きたい感じを出せっていうのね。おまけに、岡田さんにトイレだっていうことがわかるように動けっていうんでしょ、困ったわ。勅使河原さん（勅使河原宏監督）が演技つけてくれたわ。柱にじっとつかまって。あんなに困ったことなかった。

左 トイレっていえば「昆虫記」のラスト近くに、雪の中でオシッコすることがあるの。監督さんたら、なんていったと思う。「とても気持ちよくやってる顔してくれ」だって。（笑）

——以上は、ほんの一部だが、若い監督が、斬新な映画、よりふかく人間性をみつめたショットを撮ろうと思うとき、必然的に「裏窓」に接近してくる、これは証拠、といっちはオーバーだろうか。

らだを少し吊りあげた。やっと、腰が木馬から浮く。

「こずえ様、代官の言うことをお聞きなさいませ。戸浦はあなた様を裏切ったのですぞ」

百姓のセリフ。

こずえはうつろな目で役人のかげにかくれて木馬を見つめている戸浦の姿を発見する。

「それ、どうじゃ」

めぐみのからだは、再び木馬の背に落とされた。

「う、あーっ……くっ、くるしい……」

がつくりと、木馬の背にくずれ落ちた。

「カット」

副調整室の久森からインターカムを通じてスタジオのアシスタントディレクターに命令が飛んだ。

「カット。大島、黒沢、すぐめぐみを降ろしてやれ、大分、まいったらしい。傷がないかどうかよくきいて。」

今日はこれでおわりだ。おつかれさま」

スタジオでは、めぐみが縄を解かれ、かつがれるようにして、楽屋へ運び込まれて行った。

「いや、大変、けっこうでした。久森先生、ちょっと外で、お食事でもいかがですか」

大仏社長は、興奮がまださめないといった

表情でひたいの汗をぬぐっている。

「お供しましょう。その前に、ちょっと瀬沼君の様子を……」

めぐみは楽屋で横になっていた。

久森を認めると、よろよろと、立ちあがってから、

「先生、ありがとうございます。私なんともありません、大丈夫ですわ。わざわざいらしていただいたりして、本当に申し訳ありません。私、なれないもんで、あのくらしいのとが我慢出来ないなんて。御心配をおかけしましてすみません。これからも、よろしく、御指導していただけましたら……」

めぐみのあいさつには、そばで聞いていた大仏社長もすっかり感心してしまった。

「なかなかいい娘ですな。いや、今日はいいい経験をしましたよ。ところで、久森さん、ひとつ、うかがいたいんですが、今日のビデオテープですな、あれを、複製してもらえませんかでしょうか。私が家で好きなときに見れるようなら」

「コピーをつくるんですね。いいですよ。キネコといましてね、十六ミリのフィルムに音も一緒に焼きつける方法があります。劇場の映画などにくらべますと、鮮明度はちょっと落ちますがね」

「ああ、けっこうです。それで、いくらぐらい……」

「フィルムの値段は三万円くらいですかね。キネコの手間は局でサービスするでしょう。でも大仏さん、十六ミリの映写機を買わないと。二十万近くしますよ」

「買いましょう。ついでにスクリーンもちやんとね。トーカーつきですか？」

「そうです。きょうのめぐみ君の名演技と迫力のある声を、大阪のお宅で楽しめるというわけですよ」

「それあ、一日も早くお願いしたいものですな。それから、久森先生、うちの番組はこれから、ずっと、このムードでやってください。お願いしますよ。」

それから、差し出たことを言うようじゃが久森先生がこの番組を熱心につくってください、熱心のあまり、何か、社に居にくいような事にでもなりましたら、その時は、わが大仏製薬へおいでになってください。宣伝部長の椅子はいつでも空けてお迎えいたしますから」



現代マゾヒズム文化時評 ②③

森 下 高 茂

悪書追放運動に関して

「週刊読書人」第四九九号

不良図書の追放という、外部からする出版表現の規制行為は、掌に民を愚昧たらしめるためか、愚昧なる民のゆえにこそ行われてきた。米国でさえも、軽蔑のイントネーションをもって言われる矯風会の考えそうなことである。

私は、一九四五年八月二十日以後、国防婦人会や隣組組織といった、徳川時代の五人組みたいなものは世の中から姿をかくしてしまっただけだと思っていた。

ところが数年前、門司市の主婦達が、集まって「悪書」を焼いた。それ以前に赤坂附近の母親たちが、青少年に有害だと「見做した」

書籍を集めて焼いた。これらの女性たちは組織されていた集団であったことは報道によって明きらかとなっている。私達が、とうに死に絶えたと思っていた、この種の偽善的結社は、再びそれらに寄生することによって存在する人々から、息をふき返し始めたのである。

事件は、その実体よりもはるかに重大なもののように煽動され、宣伝された。なんらの公正な調査も、内容に関する検討も行なわれることなしに、という状況のままであった。

ここに至って、一部の識者はあわてざるを得なくなってしまった。私達日本人は、徳川時代の終りまで、反自然的な道徳を強制されつづけ、明治政府以降も、一部の進歩的書籍はまれに見る一方的判断によって、「悪書」として禁じられつづけていた歴史を持ってい

るからである。

現在文化人とか何とかいっている人達にしても、総裁総理の要職にある人々でも、かつて、ひそかに国禁の書によって培われた理念をもって、自分達の主張としているのだからである。

ともかく、一部の人達が、反対意見をはじめはひそかに、しだいに大きな声で発表し始めた。週刊新聞『読書人』の第四九九号紙上で、

“政府機関による規制ムード作りにあわせて、地方統制の動きを大きく報道して来た「朝日」は、ジュニア・リーダー養成という文部省の構想を一面トップで扱った。俗悪排撃の錬成思想は、ついに大日本青年団の復活にゆきつく。”

と、反対意見を述べ、渋谷竜彦氏に一面をさ
いて、この問題について述べさせている。

氏は、サド裁判の被告であるためか、ある
いは元来の思想からか、極めて激越な調子で
小売店の組合が、不良図書を指定したこと、
そして悪書の追放というまさに美德以外の何
物でもないように見える事業が、こんなずさ
んな形で実現出来るものか、時代錯誤の焚書
など（サヴァロオラやナチスの焚書における
それにはそれなりの強い信条があったという
ことを付け加えながら）偽善者のマスターベ
ーシヨンのように汚らしいと書いている。

さらに、

「悪書と良書の区別も本質的には存在しな
い。存在するという幻想を抱いているのは
道徳家ぶった気違いだけである。彼らは、
自分たちの思いあがった道徳家意識がどれ
だけ人間を侮辱しているかということに気
付かないのである。」と書いており、

「要するに焼くことの出来るのは印刷され
た紙であって、そんなことでは悪を絶滅し
た事にはならない。」というのである。
たしかに、世の中には、よくもまあ一人前
の大人がこんな本を出す気になったと思われ

るような本がある。たしかに一面から言って
悪書に違いない。だが、果してこれらの本が
青少年に悪影響があつて、そのために悪害が
生じている率というのは一体どれほどのもの
だろう。

よく新聞に出ている記事を読んでいるうち
に、私はむかむかしてくる。いわく「某には
お話にならない変質者で、アパートのうす汚
い部屋には××というあくどい雑誌などがち
らばっていた。」などという類のものである。

私は暇があつたら出かけていって見たいも
のだ。「お話にならない変質者」の部屋に、
ほかの出版物、たとえば、一流新聞だとか女
性何とかだとか、あるいは週刊某々紙などが
なかったかどうかである。

そして、さらにしつこくいうならば、それ
らの記事の中に、家出娘を五人も叩き売った
男女三人組の記事や、強盗に入った男××と
はこんな男といった類の詳しい記事だとか
いわば知能的に欠けていてもよみやすく、そ
して、真似しやすく、暗示に富んだ記事がな
かったかどうかである。

出版物に関して、その良否を審査する本質
的な権利は常に読者に存在する。と同時に、
一人の共調者がいなくとも、自己の意見を発
表する均等な機会の本来的な持主は、作者に



写真 A



■写真 B

した端緒を作った事自体は、決してよいこととはいえない。

人を裁き、物を判断する事のむずかしさを知らない人達の暴力が、これまで、如何様に人類の利益を妨げ、無駄な流血と破壊とをもたらして来たか、それらの人々が、神の鎚によって打たれる日はないのであるうか。

私は、ふと一冊の「良心的」週刊誌の記事の中に、非常に面白い記事を発見した。これは或る地裁の判事の話である。彼は、息子を鶴見の衝突事故で失った。そして、週刊誌の記者に、こう言っているのである。

「私はいままで、死刑廃止論者かといわれたくらい、死刑の求刑を無期にして来ましたが、それでも、一年に、二つか三つずつは死刑を言い渡してきました。しかしそれもいまとなつては、もっと少くした方がよかったと思います。八中略V息子を失ってみてはじめて人間の尊さが、頭だけでなく心の底まで分つたような気がいたします。

八中略V私は人びとが愛する者を失ったとき、どうして耐えて今まで生きて来たのか、ひとりひとり聞いてみたい。……」

判事にして然り、まして一新聞紙が事の正邪、事の善悪を独断してよいものだろうか。このおろかしい近代の焚書事件のお粗末は、

存在するのである。

改札係が客の品定めをして、乗車を拒むに似た今回の愚挙は、たしかにその経済的理由によつてのみ、自ら、内心、恥ずかしがりながら出版をつづけていた、本当の不良出版者

の或る者に廃刊を余儀なくさせた。それはたしかに私たちにとっては、よい結果であつたともいえようが、しかし、問題は、彼らが金銭のためのみに出版をつづけていたという点にあるのであつて、ジャーナリズムが、こう

私共に多くの示唆をあたえてくれた。

本誌さえも「悪書」に指定した、その同じ組合加盟員の店で、前号より多くの本誌の山が店頭につまれているのを見て、私は新聞の報道や一部の人間たちの増長慢的圧力にもかかわらず、読者がその本来の選択権の行使を効果的にしているという、一つの証拠を見ることができた。

本誌は不良図書でも悪書でも、青少年に悪影響をあたえる図書でもない。少くとも私たちは、一つの真実をまがうところなき事実と主張とを發表しているのだからである。

シネモンド・一九六三年版年鑑

シネモンド誌は伝統的なフランスの映画週刊誌である。この雑誌は毎年、年鑑を出しているのだが、これはイギリスのスクリーン・ワールドなどと並んで大へん権威もあり、また一般的に有名でもある。

ところで、この版の中に二つの興味ある写真が出てくる。第一は、すでに数回本誌で紹介済みの「偽の売国奴」の中の、イングリット・ファン・ベルゲンが扮したハンブルグの

サド娼婦である。(写真A)

第二は、リナ・オルフェイが、ちょっと変わった乗馬姿ですわっている写真である。おそらくは、ロシアものの一扮装ではなからうか。くわしいことが出ていないから、さし絵的なあつかいにもとれる。(写真B)

クビック誌(西独)と

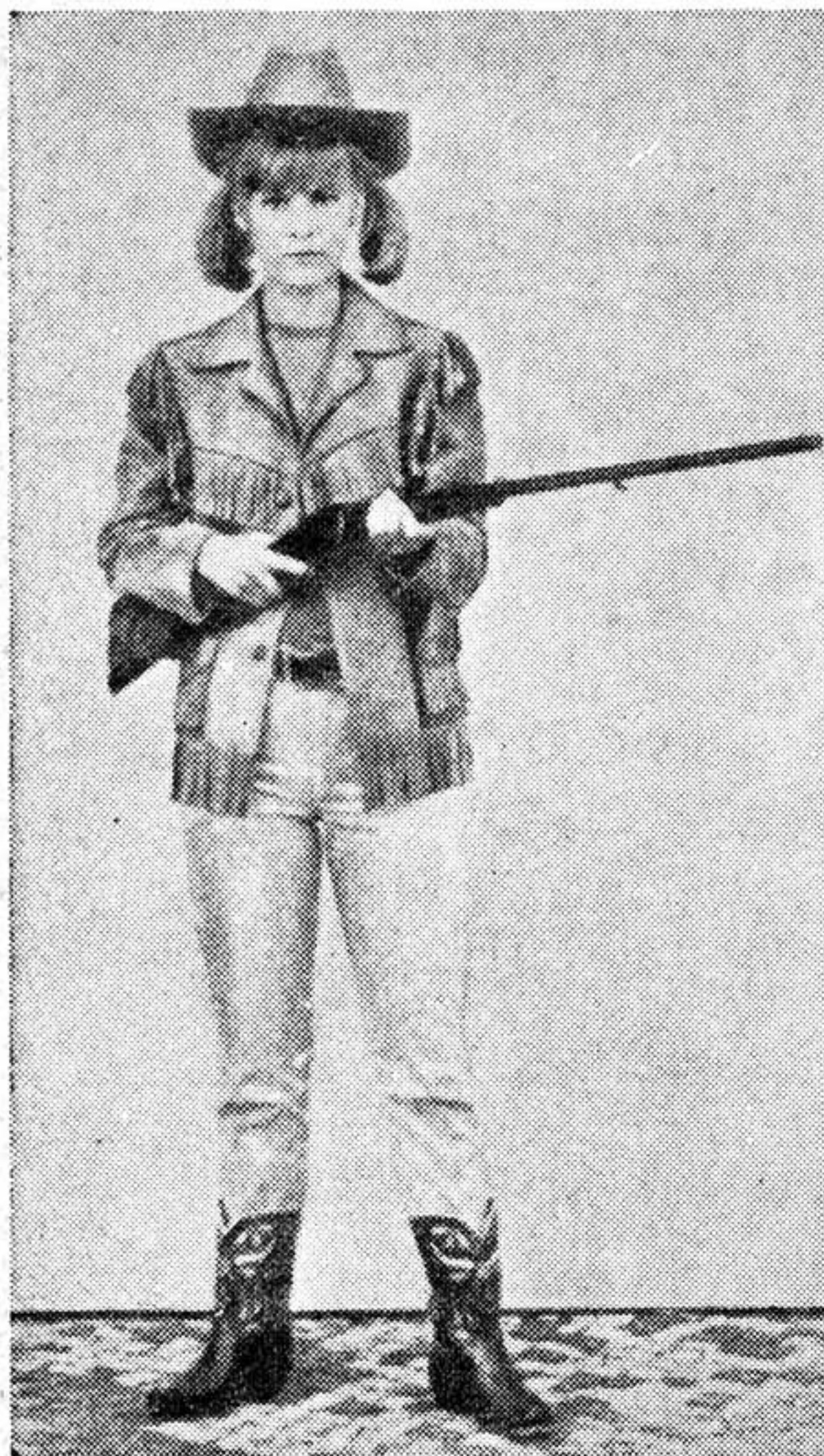
ジュール・ド・フランス誌(仏)

この二誌におもしろい写真が出ているので特に紹介したいと思う。

人物はいずれも西ドイツのテレビ女優、ハイディ。わが国では一向に有名ではないが、このところ西ドイツの娯楽誌や週・旬刊誌によく登場する売れっ子である。

写真(C)は、彼女が演じた『アニー・ヤ銃をとれ』の中のスナップである。このようなカウ・ガールスタイルは、見る人によってウエスタン風の扮装は、かならずしもM派の対象とはならないものようである。その理由は女性的な強調がないということであろう。ところで、これはハイディ自身の感じからけっこう女性的である。それで写真(C)につづいて、ハイディの写真、(D)(E)を紹介するしだいである。

写真(D)と(E)は、彼女を使った幻想



■写真 C



的な写真物語りの中からとったものである。

(D) は、パラソルをさして馬にまたがったハイディ。白のスラックスに折返しつきの乗馬ぐつという、コミカルな扮装だが、捨てがたい一枚である。

原版はカラーグラビアだから、くつの詳し

いディテイルがよく出ており、写真(E)を見るときの予備知識となる。

写真(E)は白黒版である。ここではハイディはロバにまたがっている。この写真の最大のポイントは、ロバという比較的小さな動物に対して、馬にまたがるときと同じ扮装で

乗っているということである。

そして彼女の脚部のポーズのよさにも注目すべきである。

また馬やその他の動物にまたがるときに、ヒザでしめつけるというのは誤った考え方で

■写真 D

ある。

ヒザではなくヒザの上、股を適宜に使って
くらの上部、すなわち動物の首の方へ体がず

り上がってゆくのを防ぐのである。

したがって、いつでもくつで腹をけるとい
う構えは、じつに、この脚のポーズなのであ

る。このポーズはカメラなどでもとらえがた
くまた、忘れられがちなポーズでもある。



■写真 E

ゴルドンの記憶

②

阿麻哲郎
江淵晃夫・絵

陰の女王

まるで白昼夢のような錯覚に襲われた。赤煉瓦造りのその小屋での光景が、あまりにも時代離れたものであったからだ。ゴリラ男や有尾人なんぞの存在自体、まるきり現実離れした話であった。それが現に小屋の中に捕

われていた。それを若い女がけんめいにムチ打っていた。それはあのナゾの女である。そしてもうひとり、目の届かぬ一隅にあって、別の女がそのナゾの女にさしずしていた。サレアの舞台でならばともかく、現実には平和な住宅地の一隅にあって、こういう奇怪な光景が展開されていようとは、いったいだれが信

じよう。

わたし自身、この驚きの最中に、何度自分の目を疑ったか、わからない。ゴリラ男というより、正確には有尾人というべきであるが、それがどうして、何のためにムチ打たれねばならないかということより、有尾人がどうして思いがけず、こういう場所にいるのか、と



■前号まで

わたしは、大阪商船の航海士・上島氏を通じ、ふしぎな娘予言者サレアを知る。上島氏は《ゴルドンの伝説》の古文書をあずけ航海に出る。見送りのさい上島夫人・芙美子を知り、わたしの心はひかれてゆく。

《ゴルドンの伝説》の古文書の本当の持ち主相馬博士に会う機を前に、相馬氏は行方不明となり、腐乱死体として発見される。キューバ近海を航行中、突如上島氏が消えたという報を受ける。また九州・熊本の山中で男の餓死体が発見される。わたしは以前、上島氏に案内された新宿のバー・エテルナに目をつけ、流しの男に探りをたのんであった。彼はホステスの一人にとりことなる。

こうした事件のなかに、わたしは次第に引きこまれてゆくのだが、あずかっていたゴルドンの古文書を留守中に持ちさられ、犯人とおぼしき女に渋谷で偶然出会い尾行した。女はアフリカ学術調査隊・西司郎の留守宅へ消えた。その家で盗み見た出来事……

二つの殺人事件の犯行は女性ではないかと考える坂崎警部。そして一つのカギと思われるクロレラについて調査がおこなわれる。おりからバー・エテルナのホステスによって、常連の記者小林春吾は閉店後、車で拉致される。小林春吾は、西司郎が羽田を出発したとき、見送人のなかに上島芙美子がいた——とわたしに話したことがある。

いうことのほうが、その上の疑問ではあった。美女と野獣、という対比の仕方は、よく事ごとに引用されて言われることであるが、美女が野獣をムチ打つ、いや、女が有尾人をムチ打つこの光景は、異様なショックだった。美女と野獣という対比上の観念が、こうして現実具体的に、生な形で演ぜられるということは、また別種の迫力を生々しく伝えるものであった。もしムチ打つ者が女ではなく、

男であったとしたら、こういう逆なでされるようなショックは受けなかったろうと、わたしは思う。

もうひとり、陰の女がムチ打ちをさしずしていた。澄んで美しいその声には確かに聞きおぼえがあった。しかし、こういうことが錯覚とでもいうのであろうか、そんなはずはとうてい考えられないことであった。

「お前がそれを読まないで、かしこくも女王

さまの激しい怒りに触れることになるぞ」ああ、そこに、有尾人の目の前に広げられていたもの、それはゴルドンの古文書ではなかったか。

美女と野獣

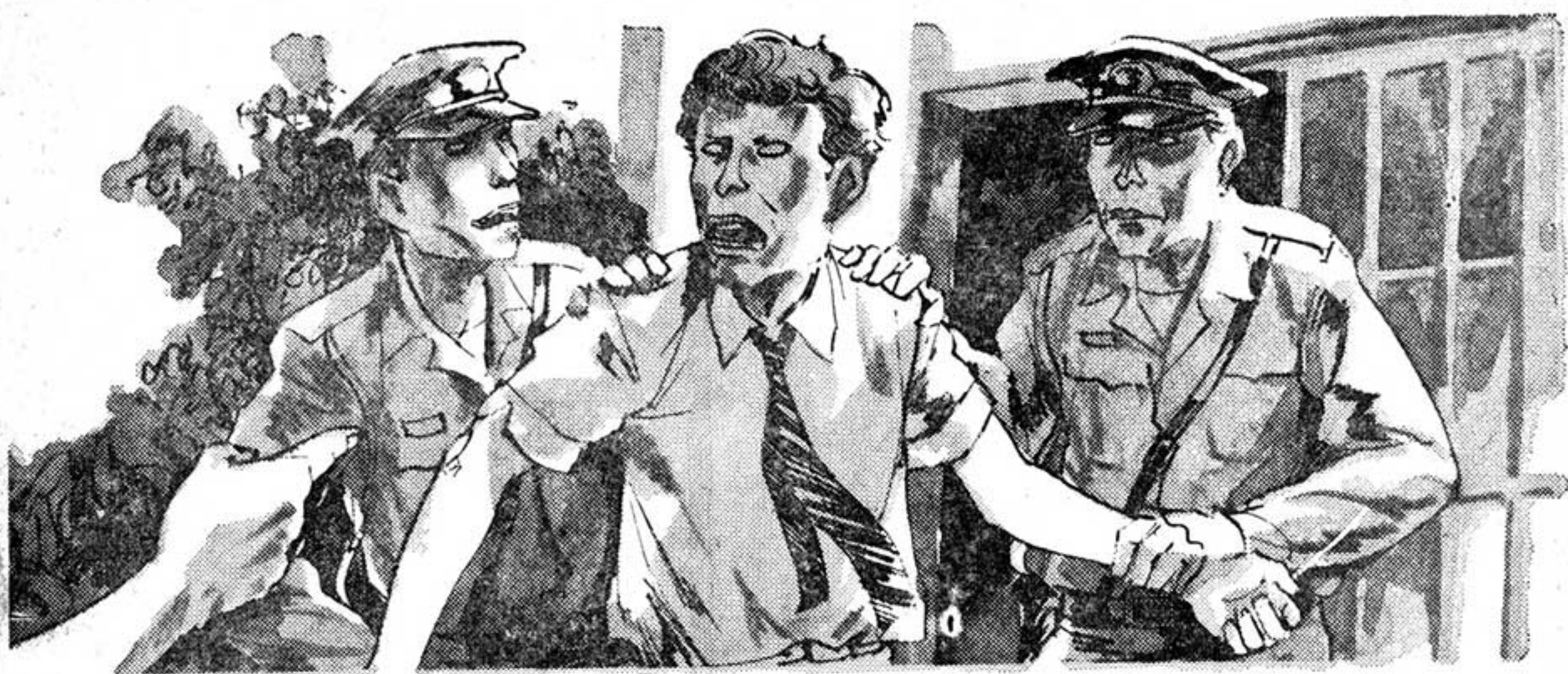
女は、有尾人に、ゴルドンの古文書を読ませようとしていた。打ち殺してでも読ませようとしていた。有尾人は蛇身のように空中にくねるムチの乱舞を、手、顔、胸、ところかまわずに浴びながら身もだえていた。低いひしゃげたハナの穴が、苦痛のためぶるぶるふるえるのが、光線の加減ではっきりわからな

いながら、それでもわたしには感じられた。ゴルドンの古文書を、それほどまでにして有尾人に読ませようという彼女らの真意ははかりかねた。人間でさえ読めないものを、何で未開の有尾人が読み解けるだろう。それはまるつきり無茶というものだ。

わたしは、余程この場合、中に割り込んでいこうかとノド元まで思いながら、結局はとどまった。

「その書類はわたしが人からあずかっている大切なものだ。返してくれ」

と言って顔を出したら、どんなことになるか、予測はつかない。相手はふたりといって



も、たかだか女ばかりである。最悪の事態になってもまさか有尾人のようなことになる氣づかいはないだろう、と一方で思いながら、やはり結果として自重することにした。

わたしは小屋を離れ、木立ちの中から芝生に出た。芝生を横切り、もと来た道をとって返して玄関に回った。そして最初ころみたように、玄関横の呼びリンを押してみた。今度は続けざまに何分間も押し続けた。だが結果は、最初の場合と同じだった。手ごたえはなく人の氣配もなかった。

もし裏手のあの驚くべき小屋での出来事を目撃しなかったら、今留守なんだな、と、簡単に思ってしまっただろう。わたしは採るべき手段について、しばらくその場で思い悩んだ。そして、なおしばらくはそのあたりで様子うかがうことにした。女たちは、見られていたことには気づいていなかった。とすれば、急にほかへ身を隠す心配は今のところなかった。

なお、ゴルドンの古文書の所在も、今やはっきりわかった。この安心が、わたしの氣分を落ち着かせてくれた。

わたしは、何度も邸のあたりを行ったり来たりして、心の攻撃準備を整えた。二時間ほどたったろうか、わたしは再び玄関横の呼び

リンを思いきって押してみた。危険はあまり感じなかった。それより、何食わぬ顔で澄ましこんでいるその女の悪行の現場を、すっかり見てしまったんだという勝利感のほうが強かった。

奥に返事があって女の氣配が立ってきた。

現われた女

玄関横の小窓が開いて女の顔がのぞいた。さっきムチを振るっていたあの女である。そしてわたしのところから、古文書をだましとっていったあの女である。

「どなた」

「阿麻哲郎という者ですが、——」

わたしはためすような目付きで小窓の女を見た。目と目があった。阿麻哲郎ということばに力を入れ、反応をうかがった。わたしの名を知らぬはずはないのだ。留守中訪ねてき、わたしの下宿から古文書を持ち去っていったではないか。

「どんなご用事でしよう。先生でしたら、今アフリカへ行かれてお留守ですけど——」

何食わぬ無表情さを装おっている。わたしは思わずカッと頭に血が上るのをおぼえたが、心の中に押えつけた。

「先生ではなく、あなたに用事があるんです」



いささか切口上のきみであった。

「わたしに？」

いぶかしげに一まばたき、目をしばたたかせ、彼女はこちらの出方を待った。

「ともかく、戸をあけて下さい。これでは話ができせん」

小窓から顔が消え、やがてガチャガチャとカギを鳴らす音があつて、玄関が開いた。すかさずわたしはその内側に身をすべりこませた。式台の上に女は立っていた。取り立てての特徴といつてはないが、十人並みの顔立ちをしていた。この女が、手にムチを持ち、血相変えて、有尾人をなぐりつけていたなどとは、ちよつと信じられないことであつた。

「あなたはわたしを知ってますね」

いきなり浴びせた。がきき目はなかった。

「さあ！」

「といつておぼえがなければ、阿麻哲郎という名は知っているはずだ」

少しことばの調子も荒らくなった。

「存じませんけれど、何か思い違いでは」

「とほけるのはよして下さい。ほくのところから書類を持っていったはずだ。それをまずもどしてもらおう」

女の顔に皮肉な笑いが浮かんだ。

「何のことかさっぱり。あなた、阿麻さんと

かおつしゃつてのようですが、人まちがいと
思うんですけど——」

「こちらには証人があるんだ。下宿のおばさんが確かに君に書類を渡したのだ」

「じゃ、その人に来ていただいて下さい」

まるで子ども扱いのようなあしらいに、わたしはたまりかねて最後の切札を出した。

「よし、それじゃ、小屋に案内してもらおう。庭の奥の赤煉瓦の小屋だ」

「何を言ってるんです。いきなりきて、小屋を案内しろとは、先礼ですわ。あそこは先生の大事なものがしまつてあつて、どなたも入
れてはいないんです」

「なるほど」

わたしは、ようやく落ち着きを取りもどした氣になつて、一呼吸入れた。

「見せられないのも当たり前だ。ほくは見ていたんだ。さっき、君らがあそこで何をして
いたかを——」

「君らですって？」

「そう、君とほかにもうひとりの女だ。それに有尾人——」

「まあ。あなたは、何か夢でもごらんになつたんでしよう。第一、この家に留守番は、今わたしひとり。ほかに女の人はいませんよ。それに、その有尾人とかいうのは何ですか。

あんまり妙なことをおっしゃるもんじゃありませんわよ」

喰いさがる

一一〇番に急報があった。若い女からである。今変な男が、妙な言いがかりをつけて居直っているの、至急来てほしい、というのである。早速指令がとび、担当の今井、中園両係官が急行した。ちょうど玄関で、なるほど電話のとおり、やせた中年の男が盛んに女に向かつて、何やらをまくしたてているところであった。

「ああ、来ていただいて助かりました。何か知らないんですけど、この人がいきなりやって来て、とんだ言いがかりをつけるんです」

「おい、君！」

今井係官が男に向かつて言った。

「わけがあるなら署で聞こうじゃないか」

「ちょっと待って下さい。とにかく、悪いのはこの女です。詳しいことを今言っている暇もなし、言ってもわかって下さらないでしょうが、とにかく一度立ちあつて、小屋を見てくださいませんか。小屋を見ていただくと、わたしの言うことの訳がわかるはずですよ」

「小屋？」

「そうです。この家の裏手のほうに、赤煉瓦

造りの小屋があるんです」

「君は何でそんなことを知っている」

中園係官が口を出した。

「さっきぼくはそれを見たんです。とても想像もできないようなことです」

「君はことわりもなく、人の家の奥まで、勝手に入り込んだのか」

係官の語調が鋭くなった。

「そうなんです。知るはずもない人の家の庭の模様なんかを知っているの、わたし、趣味が悪くなつたんです。何しろ女ひとりで留守をしますので、余計そうです」

女はここぞとばかり、係官の共鳴に訴えた。

応答

今井、中園両係官は、目配せしあつてから男、つまりわたしの肩に手をかけた。真白な手袋をしていた。

「事情は署で聞く。こつちへ来たまえ」

「待って下さい」

わたしも必死であつた。ここで時間をかせがせれば、女はすぐに姿をくらますのはわかりきっていた。チャンスは今を置いてはなかつた。

「こいと言え、署でも警視庁へでも行きませんがね。しかし、その前に念のため、小屋を

のぞいていただくぐらいのことはいいじゃないですか。のぞいてさえいただければ、事情はすぐわかつていただけたと思うんです」

半分は女のほうを見い見い、わたしは務めて平静に主張した。

「なるほど、そうしろというなら、娘さんに頼んで小屋を案内してもらつてもいいが、あんまり余計な手間はかけるんじゃないぞ」

今井係官は、半分うるさそうな顔付だった。「どうでしょう。この男がこんなふうな人ですから、もしよかつたらその小屋というのをちよつと見せていただいけませんか」

女のほうに向き直つて低姿勢に出た。

「それは困ります」

女はキツパリ断つた。これには係官たちも意外な面持ちだった。

「どうしてお困りですか」

「先生の大事な書類が入つてまして、留守中どなたにもお入れしないことになっているのです」

「ほほう、それで先生というのは？」

「アフリカに研究にお出かけです。来年三月までお帰りになりません」

「なるほど。でも、特別にこういう事情ですから、この男のいうことが出たらめである、という証明をするためにも、ちよつとのぞか



せてくれませんか」

係官はふたりとも若かった。頭ごなしの拒否に合うと、いささかムキにならざるを得なかった。

こうして、係官に開き直られると、女は不利をさとしたのか、意外にあっさりと譲歩した。これにはそばで面いたわたしほうが意外なくらいであった。

一歩後退

結果はわたしの敗北に終わった。信じられないことだが、小屋の内部には何の異常もなかった。カビくさいかおりがムッとこもっているだけで、有尾人はおろか、ゴルドンの古文書もなかった。ただ壁に添って、うず高くつまれた書籍やノートのたぐいが、いかにも

学者の書庫らしく見せているだけで、ほかになんらの異常はなかった。

「それでこの男が、そんなはずはない、もっと詳しく調べさせてくれ、といってきかなかったんですが、ひとまず切り上げてしよつびいて来ました」

係官は上司にこう報告した。渋谷署の一室である。そこで取調べが始まったが、もちろ

んわたしに何のやましいところもあるはずはなかった。ここで事情を述べても、納得されないのはわかっていたので、わたしは考えた末、同じ言うなら警視庁の坂崎警部に述べるべきだと思い、その意思を告げた。

坂崎警部なら、つい先日、エテルナに関して、情報提供に出かけたことがあった。相馬博士や流しの男殺害事件を担当していたし、そんな関係で今度の事情ももしかすればのみこめてもらえるかと思った。きつとそれは、一連のつながりのあるものであることは、わたしには確信があった。第一、警部とはその折の面識もできていた。

「よし、わかった。とにかく坂崎警部にはこちらから連絡してみる」

へきえきしたような係官の態度だった。夕食に当てがわれた親子丼を食べ終わったところで、ちょうど坂崎警部と連絡がとれたらしかった。

「そうですか。ご存知なんですか。なんでしたら、こちらから連れていってもいいんですが、——は、そうですか。いらしていただけますか」

そんな電話のやりとりが聞かれた。そして、間もなく、坂崎警部の一行が渋谷署に到着した。たかだか女ひとりの家で言いがかりをつ



けていた、頭の変な男に対して、この扱いは、物々し過ぎる形勢が見られた。

怪談話？

夜も深くなり、ただ取調室のハダカ電球だけが、いやに明かるくさえ返っていた。

一通り事情を聞き終えた警部は、深くうなずいて机に両ひじを立てた。その両側にふたりばかり、これはわたしにも見おぼえのある顔だった。そのひとりが、ノートを出して横で記録をする準備をした。

「あなたのおっしゃることは、あんまりとつびすぎるんで、どうもわれわれとしては——書類が持ち出られ、持ち去った犯人がわかった、そういうことだったとわかるんですが、有尾人がどうのこうのという段になると、にわかには信じられない。そんな怪談話で、家宅搜索をするわけには実際問題としてできないですね」

坂崎警部は静かな口調で、さとすように言った。わたしは失望した。話せばわかってもらえる、と気負いこんでいた気持ち、が、シャボン玉のようにしほんでいった。

「ぼくのいうことはホントなんです。信じてもらえなくとも、まぎれもない事実なんです。あの女は恐い女です。とんでもない秘密を

持っています。ムチを持って、恐い形相をして、有尾人をなぐりつけていたんです」

同じことの繰り返しだった。全身の力が抜け、それは呪文のように口の中だけのつぶやきとなった。

「おい、君。もういいから帰たまえ」

いつのまにか、わたしのそばに刑事が立っていて、背中をたたいた。

「わかりました。どうせわかってもらえないんですからこれで帰ります。でも警部さん、ゴルドンの古文書はどうなるんです。あれだけはぜひ取りもどして下さい。でないと、死んだ相馬博士にも、行方不明になった上島さんにも申し訳がない」

わたしは促されるままに立ち上がった。

「ちょっと待って」

坂崎警部は何思ったのか、不意に目を光らした。

「君、相馬博士と言ったね」

「エエ」

「その書類というのは、相馬博士のものか」

「そうです」

「すわりたまえ」

大きな手が伸びた。

「もっと詳しく話してくれないか」

待機

警視庁では刑事たちが、八木、長沢両刑事の連絡を待ちわびていた。どちらからも、もう長いこと連絡がなかった。ふたりともエテルナの張りこみに出かけて、たつぷり九時間連絡がない。もう間もなく、夜が明けるというのに。

「ヤッコさんたち、どうしたっていうんだろう」

「ヤッコさんもヤッコさんなら、課長も課長だな。渋谷で何があつたっていうんだい」

あくびまじりに、刑事たちがささやきあっていた。ひとり椅子を並べて寝そべっていた。ひとりは机の上にアグラををかいてすわりこんでいた。行儀が悪いといえは悪いが、こんな自由なポーズが、次の行動へ移るそのエネルギーをたくわえるために、最も効果的な待機の姿勢だった。この部屋には、男のおいだけがこもっていた。

とたんにベルが鳴った。まるで強力なバネじかけのように刑事の手が、反射的に送受器をとった。

「ハイ、本部——ああ、八木君か、待ってた。

——課長は渋谷だ。——なに、だめだったって。——ふん、女が三人で男ひとりを誘かい

して、とんでもないことをする女どもだな。それを追って、青梅街道を走った。五日市から秋川へ。——フン、そこで見失った。

——そりや変だ。でも大変だったな。仕方がない。いったん帰ってこいよ」

ほかの刑事たちも一様に聞き耳を立てていた。秋川という地名が、相馬博士事件と瞬間に結びついて考えられた。夜明け近く、こうして何やら本部にも活気づいた空気が漂い始めたころ、坂崎警部の一行は帰ってきた。そのときわたしもいっしょだった。

わたしへの扱いは、打って変わったように丁重をきわめていた。警部が席に着くと、すぐに先ほど電話を受けた刑事が立って来て、八木刑事からの報告を伝えた。警部は熱心に耳を傾け、特に秋川という、相馬事件の現場であった奥多摩の地名を耳にすると、大きくうなずいた。

「よし、詳しいことは、両君が帰署してから聞くとして、こちらでも飛び切りのニュースがあるんだ」

声をひそめ、目顔で皆を呼び集めた。円陣が作られた一座の中心に、わたしが居た。

無人の家

早朝を期して、わたしたちは署を出た。ま

ず電話連絡で、下宿のおばさん呼び出し、証人として来てもらった。女は、おばさんだまして書類を持ち去った。おばさんは、責任上、その顔をおぼえていた。お陰で、わたしは渋谷の人ごみの中で彼女を見つけ、しかも書類の持ち去られた隠れ家まで発見することができた。全く好運というのほかはなかった。

しかし、実はそれからが大変だった。刑事ふたりと、証人のおばさんと、わたしと、それから坂崎警部自ら陣頭に立って、原宿の西司郎邸に車を乗りつけた。わたしはすっかりいきこんで、車のスピードをもどかしがった。こうしているうちにも、女が居なくなってしまうっているのではないかという、いらだたしい不安があった。

しかし、その不安が適中し、車を乗りつけた時、もうすっかり無人の家となつて、女はおろかネズミ一びき見当たらない西教授の留守宅を確認したとき、わたしは、当初から、それを予期していたかのごとく、もうそれほどの衝撃は受けなかった。

「ガックリだな」

刑事ふたり、芝生の上に立ち、広い庭を見渡しながら、残念そうにかぶりを振った。

「残念なことをしましたね」

坂崎警部が寄ってきて、わたしの肩をたたいた。

「確かにその女には阿麻さんのおっしやるとおり、何らかの秘密があることがこれではつきりました。わたしも、相馬、流しの男両殺害事件の背後には、女が居る、とは思ってましたが、カンが当たりました。といつても

——」

警部は考え深そうに腕組みをした。

「有尾人とか言いましたね。小屋の中での残虐行為、それがあんまり作り話めいていて、どうもピンとこないんですよ」

「第一、阿麻さんのお話だと、そんなゴリラみたいな動物に、古文書を読み解かそうと、女たちがムチで責めていたわけでしょうが、おかしいじゃありませんか」

言われるまでおなく、正直、わたしもおかしいと思った。あんなゴリラみたいな有尾人は、サレアの舞台や楽屋でそれを見たことがなければ、そんな生物の存在すら疑ったであろう。

いや、サレアの舞台でだけではない。わたしは知らなかったが、実は殺された流しの男が、キクの計略で穴ぐらに監禁された際、彼は、やはりわたしが見たのと同じような有尾人を見たことがあった。だがそれをだれも知

るはずはなかった。

K B 物質

赤い煉瓦づくりの小屋の中には、ほこりっぽい空気がよどみ、その中にうず高く積まれた書類のたぐいが、もう長いこと人の手に触れたこともない状態で、壁添いに積みあげてあった。そのほかに異常がなかった。

そうして、なんらの収獲がないまま、わたしたちは署に引き返した。

「なんとか言いましたね。そのゴルドンの古文書とか何とか。で、ゴルドンっていうのはいったい何を意味するんですか」

帰りの車の中で、坂崎警部が尋ねた。

「詳しいことはほくも知りません。ただ、ゴルドンというのは、なんでも、南太平洋の島に古くから伝えられている、伝説中の国のことだそうで、そこには不老不死のたぐいまれな美人が女神として君臨し、恐ろしい残虐なことを、ほしいままにしているとかい、——ゴルドンというのとはどんな意味を持つことばなのか、それはわたしも——」

「いや、ちょっと待って下さい」

坂崎警部は、そこでわたしのことをささげって言った。

「有尾人のこと以上に妙な話のようですが、

不老不死の女王、いや、女神ですか、というのはどういふことですか」

坂崎警部には記憶に残ることがあった。部下の岸本刑事が、クロレラについてK女子大の中村教授に、いろいろ教示を乞いに行った際、生体内に培養されたクロレラの中に、ごくまれに、K B 物質を含むことがあるという、そのK B 物質というのは、つまり不老不死の薬だと。

全くばかばかしい連想ではあるが、この中村教授の話と、伝説中の女王が不老不死であるということと、何か関係がないか、とっさに思いついたことであつた。

だが、あんまりその連想が飛躍しすぎるので、自分ながらあきれてしまい、その疑問をすぐに打ち消してしまった。

しかし、車の中で考え続けていたそのことを、もう一度確かめてみたいという気持ちから、署に帰るや否や早速岸本刑事を呼び指示を与えた。

「君、もう一度中村教授のところに行つて、K B 物質のことを聞いてきてくれんか。それと、もし教授がご存知のようであつたら、南太平洋の島々に伝えられているとかいふ、ゴルドンの伝説、つまり、ゴルドンとは何を意味するのか、もしかすれば教授はご存知かも

しれない」

「課長、どうも申し訳ありませんでした」

坂崎警部の指示を聞く岸本刑事の後から、八木、長沢両刑事が顔を出した。

「おかしいことに、女の車を、見失つたもので」

「まあいい、すぐ第二の行動に移るとして」そして警部は尋ねた。

「女が男をさらう。そしてさらわれた男というのは」

「はい。小林春吾といつて、いえ、手帳を拾つたもんでわかつたんです」

黒い表紙の小型の手帳を八木刑事が机の上に差し出した。

「小林春吾というと、あの、東亜日報の——」そばで聞いていたわたしは、小林の名に驚いて、思わず大きな声をあげた。

(つづく)



読

者

コ

ー

ナ

1



★十二月号拝見（中には再読したのもあります）。「深夜のひとりごと」から「編集後記」まで、まったく水ももらさぬ緻密な編集ぶり、まことに良心的です。しかも一つ一つの作品に独自のテーマなり個性があつて出るのは感嘆吐息ばかり。惜しむらくは、その中に私の作品が載らなかったことくらいです。な

ににしてもそんなことは今に始まったはずではないでしょうが「ピンアップだけはやめて」のようなすごい海外サド小説が流麗な訳文によって紹介されたのは今度が最初です。それに「恋人たちのオリ」のごとく、大胆卒直な文、ならびに絵もめずらしく、かつ新奇です。Mの方も

せいぜい読破しました。消極的なエダ・キリコさんのSに業を煮やし、積極的なMの水尾究先生へ同情を意識しながら。私も景品つきで出た舞台で、可憐なストリップ嬢より接吻を逃げられた体験がありますので……。その他、アメリカ絵物語にもやっと見るべきものが登場し観賞芸術誌ということにおいても他誌にくらべて優れている点「裏窓」は永遠に読者にとって明日に生きる希望の源泉と讃えたい。（京都・秋良）

★一月号、潮一樹先生の「鬼神丸秘帖」をのぞいて、時代ものが一編もないのはどういうわけですか。時代ファンの僕にとつて、一月号はまったくがっかりでした。かつて「裏窓」の常連作家であつた矢桐重八、高月大三、万里小路昆、飯田豊吉先生らはいったいどうしておられるのか。あまりえらくなつたので書かないのですか。グラビア写真にしてもまたしかりで、たまには時代ムードのあるものを、載せてほしいと思います。このごろ雑誌のありかたがむずかしいようですが、時代ものだと、たとえば五味康介先生の剣豪ものなんか読むと、ずいぶんつまこんだ描写もありますから、ああいうふうにいっそ時代ものばかりで満載すれば、問題にならないのじゃないでしょうか。生意気かもしれませんが、僕はそれを希望します。

★このらの投稿はハガキで結構ですからお自由にお書きください。

★今月掲載しました方には、3月号および、4月号をお送りします。誌上匿名は自由ですが、住所、氏名はお書きください。（読者コーナー係）

（東京・利根五郎）

★毎月購入していた書店から姿を消した「裏窓」を求めて、わざわざ電車賃をつかつて、やっ

読者コーナー

編集の方たちもますますご苦勞でしようが、どんなに地道でも現情ではやむを得ないところでしょう。どうか「裏窓」の永遠たらんことを祈っております。

(大分 H・O 生)

★いつに変わぬ美しい一月号の表紙をみて、ホッとしました。こんな美しい良心的な雑誌をこの地上から消してはならないと思います。一月号の広告をみてさっそく、直接購読の申し込みをしました。折り返しすばらしいS写真を十二枚も送ってください。御礼を申しあげます。やはりグラフィアでみるより、本物の写真のほうが美しく、第一魅力がありますね。また、一月号の一色オフセットのページがめっちゃくちゃな順序になっていたので、すぐにハガキで文句を送ったところ、すぐに詫言状と刷り直しのページを送ってこられたことは、まったく良心的でさすがに長い歴史のある貴誌と感心した次第です。この良心の灯の消えないうちは、貴誌は安泰だと思えます。さて一月号は百パーセントとはいえないにしても、八十パーセントぐらいの満足感がありました。潮一樹氏の「鬼神丸秘帖」は、力作だと

は思いますが、いかにも情緒不足で、裏窓的な真の味覚にはとほしいと思いました。Sの描写も、ありきたりの使い古された文章ばかりが並べられ、作者の個性的な新しさは感じられませんでした。むずかしいとは思いますが、いかに大衆小説といえども、前に使った語句を、そのまま書いたのでは、読者は満足しません。北園透一郎氏の「アラビアの城」は、けっしてうまい小説だとは思いませんが、作者の執念が感じられる、変わった小説だと思えます。十二月号において、ヒロインの弓子が、や

★一月号の小笠原純子さんの写

(東京・窓野裏夫)

真はかわいい。もっとも、小笠原純子さんの写真をのせてください。小笠原純子さんの顔を、正面からうつしてだしてください。とても新鮮な感じで、大好きです。小笠原純子さん、がんばれ！(東京・QQQ 生)

★健在なり、一月号。表紙をみたときはうれしくて涙のでる思いでした。鬼頭暁先生の画集、「女宇宙士訓練室」は、小生の好きなメカニズムもので、その意図は大いに賛成だ。だが、そのメカニズムの必然性には、大いに疑問がある。メカニズム責めのいいところは、合理的必然性が女体に加えられていることだが、この絵には、そのおもしろみがない。道具のひとつひとつ、縄の一本一本に、さらに確実な連帯性と非情性があったとしても、絵を一目見たところ、あまりにもゴチャゴチャしている。統一的な美に欠けている。たとえ責め絵にしても、絵は絵である。そして、絵は美である。美のないところに「裏窓」は存在しない。(京都・近藤勇三郎)

★「裏窓」一月号を書店でみてさながら恋人をみる思いで買いました。この最愛の恋人を私は

絶対に失いたくありません。いえ、私にとっては恋人以上の本です。本の中身は、これからゆっくりと読むところです。

(大阪・K・T 生)

★直接購読第一号の一月号をうけとりました。今月号の黄色オフセット部分の不手際については、大の、貴社の良心的処置には、大いに敬意を表します。一般の力ストリ雑誌では、そのままだま

(東京 T・O 生)

★お知らせ――

今までこのらんの稿料として二百円お送りしていたのを、前(一月)号掲さいの方から本誌二カ月分お送りすることになった。予約購読の方は、本誌のかわりに相応の写真をお送りいたします。

原稿募集



つぎの要領で、あたらしく原稿の募集をいたします。ふるってご投稿ください。

▼創作（四百字詰め原稿用紙） 25枚まで

S・Mその他を主題とした小説をお寄せください。
新鮮味ある異色小説をお待ちしております。

▼告白体験記…………… 20枚前後

真実の告白、得がたい体験記をもとめます。
だれにも言えない告白を、原稿紙にぶつけてください。

◎掲載させていただいた作品には、相応の稿料を
掲載後二カ月以内にお送りいたします。

◎原稿は第五種郵便になりますから
五十グラムごとに十円の郵券を貼
り、開封にして投函をおねがい
いたします。

▼原稿の送り先は――

東京都中野区松が丘2の21
あまとりあ社
裏窓編集部

編集後記



▼本号の巻頭に一挙掲載いたしました「四作家競作同一題小説」は、いかがでございましたか。

▼これは、ごらんのとおり、同じ題名を同時に四人の作家にあたえ、同じ期間のうちに書かせた作品集です。

▼さし絵をわざとつけず、同じ行数のなかに「花と悪銭」のテーマを織りこませたわけですが、本文でおねがいましたように、読者のみなさま方の「ご投票」を心からお待ちいたします。

▼「ご投票」いただきました読者には、かならず、手札型S写真を一枚お送りいたします。

すから、ご住所とお名前を忘れずに、はつきりお書きください。

▼前ページの読者コーナー欄でも、読者の方が指適されておりますが、既成のSM作家に、ややマンネリズムの見えるちかごろ、昭和三十九年度は、新人の育成に力をそそぎたいと存じます。

▼また新しく「原稿募集」を開始いたしました。採用の分には、むろん、確実に原稿料をお送りいたします。作品の出来に応じて、原稿料に多少の差はありますが、有望な新人には、かなりの稿料をさしあげる方針です。

▼また、文章はへたでも、真実性のある告白文を募集いたします。これは、思いきり、勝手なことを書いて下さい。掲載するときは、当方でうまくなおしますから。（飯田）

海外の公刊誌より



縄と鎖のコメディ







北米・フェニクス商会・特約





奇怪な散歩着



西ドイツ・フェニクス商会・特約

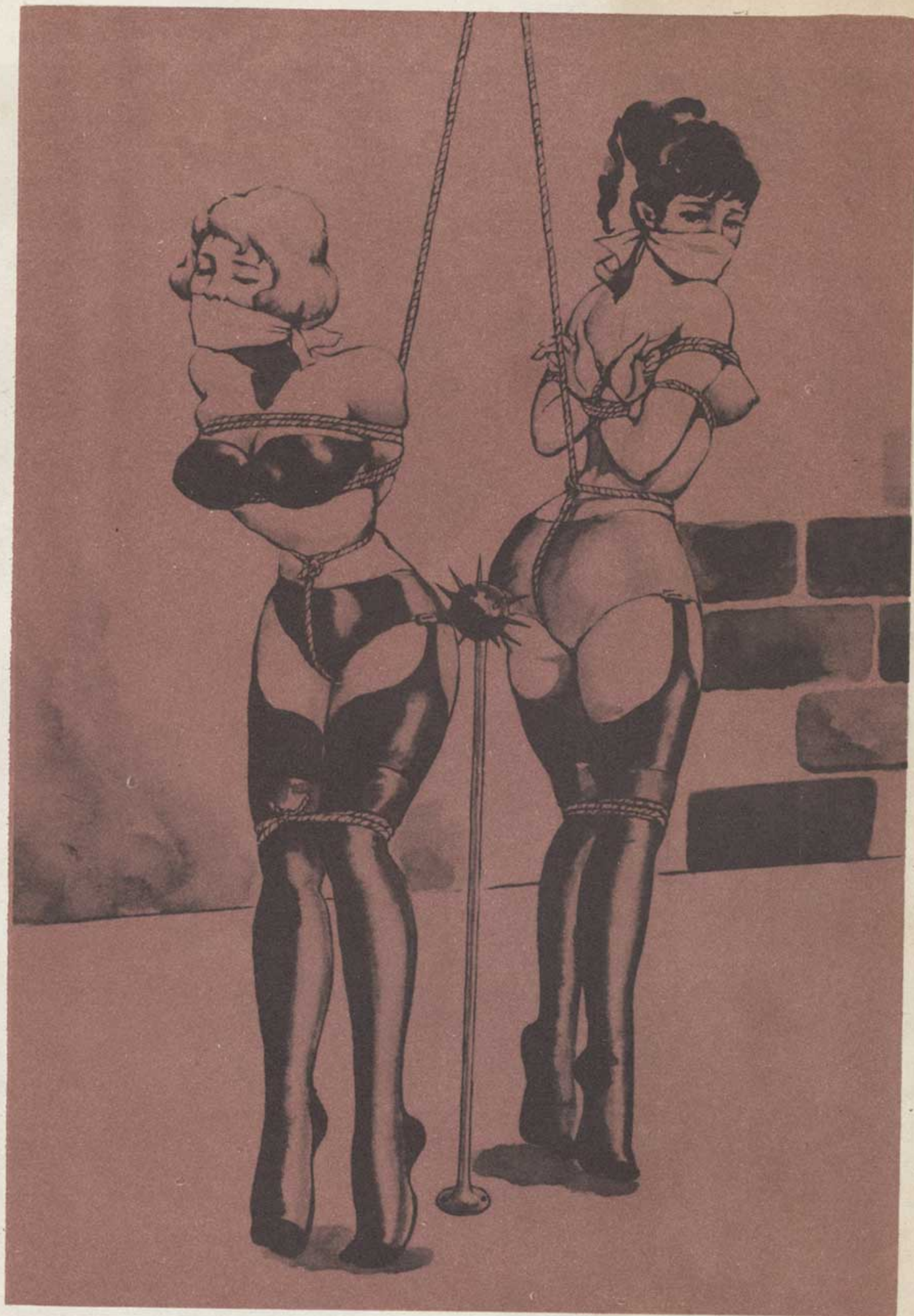


★★ 女の館 ★★









二竜合落・絵

裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる
ことをおすすめします。

★三冊以上御注文の際は送料は不要です。

★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。

★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区松ガ丘2丁目21番 振替東京10756 久保書店宛

39年(一月号) 二五〇円

フォト・ストーリー……文・藤見 郁
魔女狩りパターン……フェニクス商会
絵物語・女戦士のレポート……文・祖父江 新
……絵・落合 竜二

ミノーの貞操帯……文・井村 錠
……絵・中川 彩子

◎装身具とふたりの美女(フォト)……西ドイツ・フェニクス

◎アメリカSM絵物語……北米・フェニクス

★グラビア・かわいい妖精①②……吉田 久

★グラビア・海外SMフォトご紹介……北米・フェニクス

鬼神丸秘帖(小日向一夢・絵)……潮 一樹

アラビアの城⑦(鬼頭暁・絵)……北園透一郎

男色大鑑・若道のほこりたかく(東桂史・絵)……かびや・かずひこ

おつかれさま(山田彬弘・絵)……春川 光彦

■女宇宙士訓練室……絵・鬼頭 暁

空想と狂想のあいだ……森下 高茂

地図にない村(都築峰子・絵)……九十九郎

体当たりマゾヒズム論・19……水尾 究

「馬狂いの女たち」における……森本 愛造

マゾヒズム描写……阿麻 哲郎

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)……阿麻 哲郎

38年(十二月号) 二五〇円

フォト・ストーリー……文・吉永百合夫
深夜のひとりごと……カメラ・吉田 久

絵物語・破魔姫受難……文・島本 春雄
……絵・山田 彬弘

◎フォト・白い炎……吉田 久

◎アメリカSM絵物語……フェニクス商会

グラビア・まるい笹口具……フェニクス商会

カーテンのある風景……吉田 久

・海外SMフォト……フェニクス商会

★特集・マゾヒズム画廊……フェニクス商会

崖の上の墓標(豊田みのる・絵)……佐藤達四郎

ピンアップだけはやめて……ADグラナムール

FとMの行き戻り(落合竜二・絵)……光谷東穂

奇妙な実験(都築峰子・絵)……八巻 令

アラビアの城・6(鬼頭暁・絵)……北園透一郎

私のSM論……重森 東

体当たりマゾヒズム論・15……水尾 究

恋人たちのオリ(山田彬弘・絵)……九十九郎

ほも紳士録(12)……かびや・かずひこ

体当たりマゾヒズム論……エダ・キリコ

灰色の夜(カット・エダキリコ)……水尾 究

現代マゾヒズム文化時評……森下 高茂

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)……阿麻 哲郎

38年(十一月号) 二五〇円

◎犬吠岬の太陽……文・エダ・キリコ
……カメラ・吉田 久

◎暗い画廊……吉田 久

◎フォト作品集……金井 行雄

◎アメリカSM絵物語……フェニクス商会

ウィナスの誕生……森下 高茂

ねむれぬ夜の追憶(鬼頭暁・絵)……北海道雄

悪党半九郎(小日向一夢・絵)……潮 一樹

★グラビア・時代妖美画集……中島 喜美

★グラビア・海外の公刊誌より……フェニクス商会

★グラビア・犬吠岬……吉田 久

ビルマの首枷族……春川 光彦

ある女装者の夜々……かびや・かずひこ

■画集・黒い皮の響宴……鬼頭 暁

大都会の夜の底で(江淵晃夫・絵)……九十九郎

青雲崩れるとき(古正英生・絵)……井村 錠

現代マゾヒズム文化時評・(19)……森下 高茂

体当たりマゾヒズム論・(14)……水尾 究

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)……阿麻 哲郎

○絵物語・鉦山町の女たち……文・宗方 八郎

○絵物語・武士道無残……文・島本 春雄
……絵・東 桂史

38年(十月号) 二五〇円

◎絵物語 龍宮城の反乱……文・祖父江 新
……絵・落合 竜二

◎時代 妖説朽木女忍伝……文・島本 春雄
……絵・鬼頭 暁

◎サド 異端の城……文・三鬼 俊

◎絵物語 異端の城……文・中川 彩子

◎戦国 本能寺炎上……文・井村 錠
……絵・小日向一夢 久

★グラビア・ミッドナイト……吉田 久

★グラビア・海外の公刊誌より……フェニクス商会

○雁形城落城図……小日向一夢

○時代妖美画集……中島 喜美

伊賀の闇の葉(古正英生・絵)……佐藤達四郎

裏切り(秋吉空・絵)……九十九郎

ミッドナイト撮影記……エダ・キリコ

蛇樽女切支丹(東桂史・絵)……義川 源

アラビアの城・5 毒ぐもに巻かれる弓子(鬼頭暁・絵)……北園透一郎

お転婆学園奇襲作戦……郷 保夫

ゴルドンの記憶⑥(江淵晃夫・絵)……阿麻 哲郎

現代マゾヒズム文化時評(18)……森下 高茂

体当たりマゾヒズム論・(13)……水尾 究

寄稿作品ご紹介と短評……編集部・編

裏窓叢書名場面集……編集部・編

38年(九月号)二五〇円

○裏窓草紙「絵本いろはうた」

うた・宮古志満夫

絵・小日向一夢

文・島本 春雄

絵・春日 章

文・井村 錠

古正 英生

○絵物語 海賊虹姫伝奇

○絵物語 変幻白だぬき

○アメリカ絵物語 男爵夫人の拷問博物館

★グラビア・洋画のSMシーン・スチル集

★グラビア・海辺のうた

夜のなげき

吉田 久

★グラビア・海外SM絵物語・ご紹介

小笹姫受難(小日向一夢・絵)……潮 一樹

特製マゾキン(山田彬弘・絵)……嶋岡 晨

魔女アクリリカ(中川彩子・絵)……春川光彦

鬼頭晩画集「美しきものの檻」

絵物語 必殺のデリンジャー……落合竜二

体当たりマゾヒズム論・14……水尾 究

現代マゾヒズム文化時評・18……森下高茂

穴(あな)……(都築峰子・絵)……石山省一

お化粧される弓子(鬼頭晩・絵)……北園透一郎

38年(八月号)二五〇円

○絵物語 東京——神戸十六時間

文・祖父江 新

絵・山田 彬弘

文・矢桐 重八

絵・春日 章

文・黒部 恭治

絵・中川 彩子

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

○絵物語 ぬめ肌女郎……

文・矢桐 重八

絵・山田 彬弘

文・黒部 恭治

絵・中川 彩子

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

○絵物語 密林の美女……

文・矢桐 重八

絵・山田 彬弘

文・黒部 恭治

絵・中川 彩子

文・祖父江 新

絵・落合 竜二

○絵物語 紅のライフル……

38年(七月号)二五〇円

○絵物語 無明怨念記……

文・矢桐 重八

絵・春日 章

文・春川 光彦

絵・中川 彩子

文・北園透一郎

絵・鬼頭 晩

文・吉田 久

○絵物語 静かな山林の午後

文・吉田 久

○絵物語 闇に光る

文・吉田 久

○絵物語 切支丹女牢……

文・喜多 玲子

○絵物語 南北戦争以前……

文・鬼頭 晩

○絵物語 海外SM絵物語……

文・フェニクス商会

○絵物語 切腹殉教記(小日向一夢・絵)……

文・黒部 恭治

○絵物語 妖異水底に沈む(秋吉樹・絵)……

文・信夫 澄夫

○絵物語 お仕置きにぬれる弓子(鬼頭晩・絵)……

文・北園透一郎

38年(六月号)二〇〇円

○鬼頭晩時代妖美画集……

鬼頭 晩

○中島喜美時代妖美画集……

中島 喜美

○絵物語 幽囚の部屋……

文・吉田 久

○絵物語 続・美しき海賊船 フェニクス商会

文・落合 竜二

○絵物語 七つの大罪(中川彩子・絵)……

文・九十九 郎

○絵物語 続・異端の終末……

文・芦田 奈貴

○絵物語 おどろ記珍化論……

文・左 次郎

○絵物語 「ロリータ」における

文・安東 泉

○絵物語 ニンフェッティズム……

文・黒田 史朗

○絵物語 「夜と霧」……

文・河村 童八

○絵物語 放浪と自己恋着の画家……

文・かびや・かずひこ

○絵物語 月光の道で……

文・丸亀 恵子

38年(五月号)二〇〇円

絵物語・白蠟闇若衆……

文・島本 春雄

絵・東 桂史

文・豊田 一狼

絵・山田 彬弘

文・江瀧 晃夫

○絵物語 流星星の美女たち

文・江瀧 晃夫

○絵物語 江瀧晃夫耽美画集……

文・藤沢 修

○絵物語 グラビア・夢幻のへや……

文・フェニクス

○絵物語 美しき海賊船……

文・商会・提供

○絵物語 海外SM画傑作選……

文・井村 錠

○絵物語 茅女物語……

文・潮 一樹

○絵物語 会津の女兵……

文・飯田 豊吉

○絵物語 その夜……

文・阿麻 哲郎

○絵物語 ゴルドンの記憶(2)……

文・村山 省

38年(四月号)二〇〇円

○絵物語 椎名夫人の足……

文・かびや・かずひこ

○絵物語 ほも紳士録……

文・森下 高茂

○絵物語 現代マゾヒズム文化時評(14)……

文・水尾 究

○絵物語 体当たりM論(10)……

文・北野 竜一

○絵物語 私の愛した女優……

文・北園透一郎

○絵物語 アラビアの城……

文・祖父江 新

○絵物語 孤島の復讐鬼……

文・華田 奈貴

○絵物語 異端の終末……

文・夢中 夢夫

○絵物語 背後の脅迫者……

文・郷 保夫

○絵物語 ばんざいッお転婆学園……

文・郷 保夫

○絵物語 ゴルドンの記憶(3)(江瀧晃夫・絵)……

文・阿麻 哲郎

○絵物語 ゴルドンの記憶(4)(江瀧晃夫・絵)……

文・阿麻 哲郎

38年(四月号) 2100円

絵物語・冥府海賊伝奇……………文・島本春雄
 絵・秋吉 樹

・マドリーナと黄金の靴……………文・松平莊司
 絵・中川彩子

・白狐のお新いりさんげ……………絵・東 桂史

小日向一夢妖美画個展……………小日向一夢

グラビア・黒猫と……………毛 卓三

・黒いタイツ……………猪島 昌也

・鏡と女……………藤沢 修

・パウリーネ夫人のピクニック……………フェニク
 海外SM画傑作選……………ス商会・提供

海外SM画傑作選……………提供

ゴルドンの記録 ①……………阿麻 哲郎

処刑の囚……………三鬼 俊

無分別な夜……………海老沢七郎

大阪非情地帯……………豊中 夢夫

内外ミュージックホール・スナップ集 藤沢修

「虹川画伯のアトリエ」演出ウラ話 北野竜一

文芸評論「醜いコメディ」について 安東 泉

ほも紳士録 ④……………かびや・かずひこ

A子の話……………南 ゆり

体当たりマゾヒズム論 ⑨……………水尾 究
 舞踏会の賛……………春川 光彦
 のぞきの大スケ捕物帖……………飯田 豊吉

36年(三月号) 2100円

絵物語・スリーベツト号……………文・豊田一狼
 不時着す……………絵・鬼頭 暁

・銭姫党伝奇……………文・島本春雄
 絵・古正英生

・白峰の女忍者……………文・矢桐重八
 絵・小日向一夢

グラビア・けんらんたる商品……………藤沢 修

・黒猫を捕えた①②……………毛 卓三

海外SMフォト・画傑作選……………泰西出版資料

醜いコメディ……………淡路周五

大根根無頼……………祖父江新

和装恋慕……………宮古志満夫

ほも紳士録 (3)……………かびや・かずひと

体当たりマゾヒズム論 (8)……………水尾 究

猫……………村山 省

犬とギブスと搾衣……………春川 光彦

不死身の女……………海老沢七郎

「蠍たち」にみる……………安東 泉

あるサディスティクのタイプ……………鬼頭 暁

鬼頭時代妖美画展……………左 次郎

うら八捕物帳……………飯田 豊吉

虹川画伯のアトリエ……………編集部
 「裏窓」湯河原へ行く……………編集部

38年(二月号) 2100円

絵物語・姫法師呪文……………文・島本春雄
 絵・小日向一夢

・変化黒髪小僧……………文・京 剣児
 絵・古正英生

秋吉樹妖美画個展……………秋吉 樹

グラビア・黒い皮のスタジオ……………泰西出版

・美の凝結……………金井 行雄

・美の模倣……………金井 行雄

海外SM画傑作展……………泰西出版

島原の子守唄……………春川 光彦

金色の胸毛……………立原 道夫

郡氏の応接室……………豊中 夢夫

代用品じゃつまらない……………九十九郎

フォルリ城の花嫁……………三鬼 俊

おれの名はグニエル……………祖父江新

愛の戦慄と充実……………白木ゆりこ

体当たりマゾヒズム論 (7)……………水尾 究

ほも紳士録 (2)……………かびや・かずひこ

新・森菜莉論……………間野 嶺

新・安岡章太郎論……………安東 泉

女因お蓮の死……………小田桐 爽
 浪人夢想日記……………市原 砂夫
 カブー家の第二夫人……………加木れい子

38年(一月号) 2100円

絵物語・ハレウィンの歌う首……………文・松平莊司
 絵・中川彩子

・赤鯨奇伝……………絵・小日向一夢
 文・島本春雄

・隠密野香猫……………中島 喜美

山田彬弘妖美画個展……………山田 彬弘

グラビア・美の回帰……………毛 卓三

・美の彷徨……………北 好夫

・美の孤立……………金井 行雄

クリスマススイヴに悪魔がくる……………九十九郎

赤い血のうずまき……………関町 妙男

仮面のたわむれ……………溝口 雄太

黒い幻想……………白木ゆりこ

小さな赤い腰巻の記憶……………外村 良

体当たりマゾヒズム論 (6)……………水尾 究

夜の感触……………万里小路 崑

忍者遁走記……………祖父江新

決闘立花屋……………花巻京太郎

女性的情念の三十年……………かびや・かずひこ

「叩き声」を解剖する……………安東 泉

小説「連」のレスピアニズム……………間野 嶺
 婦人機密将校ボーリン……………泰西出版資料
 売られていく玩具たち……………北園透一郎

37年(十二月号) 2100円

絵物語・洞穴の姫と……………文・松平莊司
 片耳の悪魔……………絵・中川彩子

・耳の戦慄……………絵・曾我部 泰

・妖説黒縄盗賊……………絵・小日向一夢

グラビア・犬と女……………毛 卓三

・美の発端……………北 好夫

・美の展開……………毛 卓三

・美の落差……………金井 行雄

かわいい調教師……………北園透一郎

殉国……………中康 弘通

投げ節お駒……………花巻京太郎

締めつける愛情……………春川 光彦

東京午前零時……………豊中 夢夫

日本刑罰史(終回)……………名和 弓雄

ほも・とその周辺(終回)……………かびや・かずひこ

体当たりマゾヒズム論 (5)……………水尾 究

新・三島由紀夫論……………安東 泉

お春さらわれ草紙……………小田桐 爽

千代の青春……………浦戸 宏

赤い城……………三津井弓雄
 ある身の上相談から……………神原 栄知
 イララする夜に……………羽鳥なつ子
 風雲地獄街道(終回)……………鈴宮 英樹

37年(十一月号) 1100円

絵物語・かわいアンヌの文・松平 莊司

ほうけん 絵・中川 彩子

異聞・牛裂きの刑 絵・東 桂史

宝石の血 絵・秋吉 樹

グラビア・美の鋭角 毛 卓三

美の冗舌 金井 行雄

美の傾斜 金井 行雄

美の断面・ほか 金井 行雄

海外SMフォト特選集 泰西出版資料

あわれ雪路 丸亀 恵史

おかつばとおさげの間 間野 嶺

霧笛の町 五所 章

妖美傑作選 沖涉二 都築峰子

火刑幻想 多賀 満

夜の画帳 鳴滝 三郎

足 村山 省

体当たりマゾヒズム論 水尾 究

さまたみろ 春川 光彦

ある恋の物語 山木 節夫

不安と絶望から幸福への道へ 桜井 和子

畜獣デリムソン(終回) 阿麻 哲郎

ほもとその周辺 阿麻 哲郎

風雲地獄街道(6) 鈴宮 英樹

37年(十月号) 1100円

絵物語・ひざまずいて 絵・秋吉 樹

柔肌切支丹 絵・曾我部 泰

江洲兇夫妖美画個展 江洲 晃夫

グラビア・舞台名場面集 金井 行雄

・たわむれのふたり 藤沢 修

・美と醜のあいだ 金井 行雄

ある青年の休暇 金井 行雄

紅の私刑 ゴードン社・提供

女奴隷の浴室 五所 章

妖しい体臭の夜 東島かおる

畜獣デリムソン(II) 市川 菊夫

鬼洞又四郎の煩惱 阿麻 哲郎

ギラルド王の金色奴隷 小田桐 爽

現代女牢記 松平 莊司

江戸の怪談 多賀 満

ほもとその周辺 河西 恒一

海外SM映画ご紹介 美濃村 晃

体当たりM論 水尾 究

盗む 村山 省

おろかな馬のものがたり 馬場 弘二

風雲地獄街道(5) 鈴宮 英樹

37年(九月号) 1100円

絵物語・凄絶めくら忍法 絵・東 桂史

密林の女王ムムタール 絵・中川 彩子

蛇と鞭 絵・山田 彬弘

北原環妖美画個展 北原 環

グラビア・SM式美容鍛練法 毛 卓三

・悪夢 毛 卓三

・女ひとりのへや 毛 卓三

・かわいいくちびる 毛 卓三

お浜の受難 花巻京太郎

山小屋の暴風雨 駒井たまき

戦慄の女体爆弾 綾川 妖司

鈴の泣き声 浦戸 宏

白痴美の女 青柳貫次郎

日本型罰史(3) 名和 弓雄

ほもとその周辺 名和 弓雄

「瘋癲老人日記」を解剖する 安東 泉

タロの恋 八巻 令

体当たりM論 水尾 究

女賊と姫君 霧山 志郎

畜獣デリムソン(10) 阿麻 哲郎

鬼婆のすむ家 三枝喜久治

風雲地獄街道(2) 鈴宮 英樹

37年8月号ぜんぶ

売り切れました

37年(七月号) 1100円

絵物語・最初の火星人 絵・山田 彬弘

〃 鞭に生きる女(5) ウアン・ロッド

〃 海外SMフォト特選集

〇中川彩子妖美画個展 中川 彩子

★グラビア・時代劇のムード 猪島 昌也

〃 石伐り場の女 毛 卓三

〃 沼のほとり 毛 卓三

フォト時代劇・島抜け伝八 海老沢七郎

旗本被虐年譜 島本 春雄

鼻には鼻を 九十九郎

脱走兵とその妻 竹谷 十三

姫に捧げられた人獣の話 白畑 高之

ほもとその周辺(5) 白畑 高之

地獄で泣け 万里小路崑

武后秘話 綾川 妖司

奇縁縁切り榎 小田桐 爽

絵本かぞえうた 喜多 玲子

畜獣デリムソン(8) 阿麻 哲郎

忘念油屋火事 竜崎 聖吾

現代マゾヒズム文化時評 森下 高茂

数塚温泉のおもいで 影 なぎさ

裏窓タウン 編集部・編

風雲地獄街道(2) 鈴宮 英樹